

# 博 士 論 文

## 中国瀋陽回回営の歴史民族誌的研究 —回族の民族教育と商業施設の変遷—

平成 29 年 3 月

中央大学大学院総合政策研究科総合政策専攻博士課程後期課程

金 博 諒

## 目 次

はじめに	1
目的（問題意識）	
課題提起	
論文の構成	
第 I 部 近代回族研究と瀋陽回回営の歴史	4
第 1 章 回族研究の意義	5
第 1 節 現代中国の「少数民族」をとりまく状況	
第 2 節 回族をめぐる解釈と定義	
第 1 項 1949 年から文化大革命終了まで	
第 2 項 改革開放期の民族理論と回族	
第 3 項 日本の学術界における回族の解釈と定義	
第 4 項 回族とは（まとめ）	
第 3 節 回族研究の動向	
第 1 項 総論的研究	
1. ジャマーアティをめぐる	
2. 馬強による研究	
第 2 項 個別研究	
1. 中国における研究	
2. 欧米における研究	
3. 日本における研究	
第 3 項 本論で注目する歴史資料	
1. 『瀋陽文史資料第八輯』	
2. 『瀋陽回族志』	
3. 『満鉄調査資料（第 26 編）』	
4. 「奉天の回教寺（上、下）」と「満洲回教寺建築史の研究」	
第 2 章 瀋陽回回営の形成と発展	36
第 1 節 回族の居住形態	
第 2 節 瀋陽について	
第 3 節 瀋陽回回営	
第 1 項 瀋陽回回営の地域構造	
1. 「西関二十五条街道」	
2. 回回営の現在	
3. 家族・親族関係	
第 2 項 瀋陽の清真寺	

1. 清真寺内の人員構成	
2. 南清真寺	
3. 北清真寺	
4. 東清真寺	
5. 他の清真寺	
第4節 瀋陽回回営の歴史	
第1項 元代から清末まで	
1. 瀋陽回回営の形成期	
2. 瀋陽回回営の発展期（左宝貴時代）	
第2項 中華民国期	
第3項 満洲国期	
第4項 内戦期	
第5項 中華人民共和国期	
1. 文化大革命開始期まで	
2. 文化大革命期（1966年～1976年）	
3. 改革開放期	
4. 2000年から現在	
第6項 近代における回回営の人口変化	
章結	

## 第Ⅱ部 瀋陽回回営における民族教育と商業施設 104

第3章 瀋陽における回族の教育	105
第1節 経堂教育	
第2節 回民小学	
第1項 私立時代	
第2項 公立時代	
第3項 現状	
第3節 回民中学	
第1項 張子文の回民中学	
第2項 瀋陽市回民中学	
第4節 瀋陽伊斯蘭教経学院	
第5節 回族の女学	
章結	

第4章 瀋陽市回回営の商業	140
第1節 瀋陽回回営の商業活動	
第2節 興遊園と奉天第一商場	
第1項 研究の背景	
第2項 奉天回回営内における商業施設の実像	

1. 『奉天經濟事情』(1940)と『奉天産業經濟事情』(1942)について	
2. 奉天第一商場の記録	
3. 興遊園と「第一商場市場(第一露天市場)」	
第3項 興遊園と奉天第一商場の成立過程	
1. 1915年成立説	
2. 興遊園1925年(と奉天第一商場1926年)成立説	
3. 興遊園と奉天第一商場の成立年代	
第4項 まとめ	
第3節 「回民商店」、「二店」、「職工商店」、「南寺商店」	
第1項 「回民商店」に関する記録	
第2項 「回民商店」、「二店」、「職工商店」、「南寺商店」の実状	
第4節 「西関回民市場」と「清真美食街」	
第1項 「西関回民市場」	
第2項 清真美食街	
章結	
おわりに	183
参考資料(文献部分)	190
参考資料(付録部分)	194

## はじめに

### <目的（問題意識）>

第2次世界大戦後に始まった冷戦は、1980年代末に終息し、長い緊張を強いられてきた人間社会も一息ついたかに思われた。しかし、続く1990年代からアメリカが主導する「西洋の価値観」とユーラシア大陸の西側を中心とする「イスラーム文明」とが衝突し、大きな波乱を起こしている。一方、近年のユーラシア大陸の東側において、「中華世界」は、急速な経済成長とともに、再び世界の注目を集めるようになった。こうして、今日の世界で繰り広げられている紛争と転換に着眼すれば、「西洋文明とイスラーム文明との軋轢」と、「急激に成長する中国の都市社会」という2つの課題を挙げられる。

イスラーム世界と中華文明との間には、「交差点」が存在している。それは回民である。中国におけるイスラームの歴史として、唐永徽2年（西暦651年）のアラブ使節団の訪問以後、アラブ商人やペルシア商人を中心とするムスリムたちが海路や陸路で中国と往来し始めた。その後、宋代を経て元代になると、西アジアや中央アジアからの外来ムスリムがさらに増加し、明代以後になると、回民というイスラーム系の集団を形成するようになった。1949年の中華人民共和国成立後、回民の子孫は、回族やサラル族など、中国のいくつかの少数民族を形成している。こうしてみると、回民は、中華世界とイスラームという2つの文明間の産物であると言える。イスラーム文明が中華文明に出会って以来、両文明は最初の衝突、ついで摩擦を起こしたものの、次第に相互理解へと向かい、さらに共存へと進みつつある。

現在、中国のイスラーム系少数民族の中で、最も人口が多いのは回族である。また、回族は中国のイスラーム系少数民族の中だけではなく、55の少数民族の中でも最も分布が広い民族である。そのため、回族は、中国のイスラーム社会を代表すると同時に、中国の各地域に散在し、それぞれの地で独自の文化を形成している。このように回族は、少数民族の生活状況の実態を反映するとともに、中国少数民族問題の根本的な所在を示す存在でもある。

無論、中国のマジョリティである漢族とその他の少数民族の間には、様々な確執や不理解が存在する。しかし、これまでの中国史を俯瞰すれば、それは乗り越えられない壁ではなく、異文化間の交流のプロセスであると言える。公平・公正を旨とする政策や指導のもとで、問題が改善方向へ向かうことができれば、有意義な将来が開けるだろう。しかし、ユーラシア大陸の東側から、上述した「西洋とイスラームとの軋轢」を見ると、その様子は、泥船に乗っていると例えられるほど不安定である。以上のような大きな文明の間の紛議を、根本から振り落とすことは簡単なことではない。だが、本論では回族の研究を通じて、その歴史や自己存在の要素を見直すことで、異文化間の齟齬を鎮める有効な方法を考える契機を探りたい。

回族は中国少数民族の中で、都市に居住する人口が最も多い<sup>1</sup>民族でもある。そのため、

---

<sup>1</sup> 中華人民共和国第6回人口調査によると、都市に居住する中国少数民族の人口数は17,732,874人であ

近年、急速に経済発展する中国の都市社会の中で、都市に居住する回族にも多くの問題が生じている。これは中国の都市化問題の1つの縮図であると言える。都市生活の経験が長い回族の生存の態様を検討すれば、その結果は、中国少数民族の都市生活に有効な視座を提供することになるであろう。

このように、本論は、中国のイスラーム系の少数民族、特に都市部に在住する回族に着眼し、その歴史、現在の生活要素を解明し、アイデンティティのあり方を検討しようとするものである。具体的には、事例としての都市を、瀋陽と特定したうえで、その住民の歴史をふまえた民族誌の叙述を目指すことになる。

### 〈課題提起〉

これまでの回族研究においては、ムスリムが比較的集中する中国中部・西北部の都市社会に着眼する傾向が強かったため、漢族人口が比較的多い中国東部・沿海部に関する研究は乏しい状態にある。近年、広州、西安や北京などの都市における回族のコミュニティの研究が増えてきたが、中国東北地域に関する回族の学術研究は、空白状態に留まったままである。少し視野を広げて、グローバルな視点から見ると、アジアの東北部におけるイスラーム研究についても、資料や経験がそれほど蓄積されてこなかったことは事実である。しかしこれからは、世界におけるイスラーム研究の一部として、登場する必要がある。また、中国イスラーム研究の一部という観点からすれば、中国東北地域における回族の学術研究を、より一層深くする必要があり、さらに、多民族国家である中国を定義する際にも、東北地域の回族は、不可欠な要素の1つであるに違いない。

こうして、本論は、中国東北地域に居住する回族に着目し、近現代中国東北における回族に関する研究の基盤とその方向性を構築したいと考える。また本論は、中国東北地域における回族研究という分野を開拓するため、回族の歴史が長く、回族のコミュニティも存在する瀋陽市を中国東北の回族の中心地域であると考え、特に注目していくことにする。

### 〈論文の構成〉

さて、本論が主眼とする対象は、近年の中国イスラームに関する研究で顕著になりつつある傾向——都市に暮らす回族のコミュニティ<sup>2</sup>——である。後述するように、中国東北地域のイスラームに関する研究は、中国でも日本でも殆ど取り組まれていないテーマであるといえる。そこで本稿は、遼寧省瀋陽市における回族の集住地区（現地では「回回営」と呼ばれていることを尊重して、以下「回回営」と称する）を中心に考察を進めたい。

ここで、本論分の構成について説明しておきたい。これまで瀋陽における回族研究が寡少であることから、第Ⅰ部では、「近代回族研究と瀋陽回回営の歴史」と題し、瀋陽における回族研究の方向性を中心に、最新の回族研究理論およびその動向を整理する。歴史学や

---

り、そのうち回族人口は最も多く、3,606,760人である。それは、都市に在住する少数民族人口数の20.34%を占め、回族総人口の34.07%を占める。（国家統計局人口和就業統計司・国家民族事務委員会経済発展司2013: 4, 25-26）

<sup>2</sup> このコミュニティは、地域的な「ローカル・コミュニティ」と、清真寺を中心とした回民の伝統的なコミュニティは「清真寺共同体」、あるいは「モスク・コミュニティ」という2つの要素を指す場合がある。

民族学などの方法論を用いつつ、瀋陽回族のコミュニティの地域構造や人的関係、またコミュニティの根幹にある清真寺の意味を検討・分析することで、瀋陽回族のコミュニティの形成、発展やその存在意義を明らかにする。回族の教育と商業構造が、瀋陽回族のコミュニティを伝承・維持するために必須の要素であったことが導き出されるであろう。

第Ⅱ部「瀋陽回回営における民族教育と商業施設」では、歴史学を中心として民族学、社会学の方法論を援用しながら、瀋陽の回族のコミュニティの存在意義や今後発展の方向性を探索する。具体的には、まず、瀋陽の回族の教育について考察する。最初に回族の伝統的な教育システムの存在を探り、既存の回族学校を中心として考察する。次に、官制の「伊斯蘭教経学院」を検討し、最後に民間イスラーム教育を省察する。そこで、イスラームおよび回族教育を伝承することと、回族のコミュニティの関係を明らかにしたい。

瀋陽回族のコミュニティの商業施設については、過去・現在のコミュニティ内に存在する各施設の歴史と現状を考証し、また、これらの商業施設がもたらす文化の多様性と都市住民経済への貢献および、回回営の存在意義を検討する。さらに、商業施設と回族のコミュニティの存在関係を吟味する。

本論の最後に、現代中国において、将来にわたる回族社会の生存と発展のために必要な要素は何かを展望してみたい。

本稿でいう回民は、中華人民共和国の民族識別政策以前の中国ムスリムを指すが、ときには現在も民間で一般に使用する呼称を指すこともある。特に必要な時は識別後の少数民族名である回族 [Hui ethnic nationalities] を用いる。

## 第Ⅰ部 近代回族研究と瀋陽回回營の歴史



## 第1章 回族研究の意義

### 第1節 現代中国の「少数民族」をとりまく状況

1949年に中華人民共和国が成立した後、「反右派闘争」、「四清運動」や「文化大革命」などの一連の「革命」運動を経て、多くの文献資料が破壊され、多くの知識人が弾圧された。そのため、中国の学術研究は大きな打撃を受け、分野によっては中華人民共和国が成立する前と比べて、大きな成長を見ることができないものもあった。1978年に「改革開放政策」が実施されて以来、現在の中国では、政治、経済、教育、生活、文化などあらゆる側面において、その状況が改善されつつある。学術研究についても、まだまだ多くの課題を抱えつつも、確かな前進傾向が見られるようになった。

本稿の研究対象ともいえる中華人民共和国の少数民族に関して見ると、その研究認識および研究理論の形成は、中華人民共和国の成立後に実施された「民族識別工作」に遡ると言える。中国共産党は国民党政府の「三民主義」や「五族共和」などの政策と異なり、全国各地で「民族識別工作」を実施し、漢族と少数民族を明確に区別し、56の「民族」（政府公認の民族）を戸籍に登録させる制度を採用した<sup>3</sup>。中国共産党の民族識別工作の基本的な理論は、スターリンの「民族」理論を利用している。その理論について、スターリンの1913年の論文「マルクス主義と民族問題」において、「Н а ц и я（ナーツィヤ/民族）」とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人間の堅固な共同体である。」<sup>4</sup>と述べている。中国の民族識別過程は、以上の理論を利用し、4つの段階を経て変化した。第一段階は民族識別の発端段階で、1949年から1954年まで、第二段階は民族識別の高潮段階で、1954年から1964年まで、第三段階は民族識別が妨害された段階で、1965年から1978年まで（文化大革命期）、第四段階は民族識別の回復段階で、1978年から1990年まで（改

---

<sup>3</sup> 1949年中華人民共和国成立以来，通过识别并经中央政府确认，中国共有民族56个，即漢、蒙古、回、藏、维吾尔、苗、彝、壮、布依、朝鮮、滿、侗、瑶、白、土家、哈尼、哈萨克、傣、黎、僳僳、佤、畚、高山、拉祜、水、东乡、纳西、景颇、柯尔克孜、土、达斡尔、仫佬、羌、布朗、撒拉、毛南、仡佬、锡伯、阿昌、普米、塔吉克、怒、乌孜别克、俄罗斯、鄂温克、德昂、保安、裕固、京、塔塔尔、独龙、鄂伦春、赫哲、门巴、珞巴和基诺族。其中，汉族人口占绝大多数，其他55个民族人口相对较少，习惯上称为“少数民族”。

在中国，各民族一律平等包括三层含义：一是各民族不论人口多少，历史长短，居住地域大小，经济发展程度如何，语言文字、宗教信仰和风俗习惯是否相同，政治地位一律平等；二是各民族不仅在政治、法律上平等，而且在经济、文化、社会生活等所有领域平等；三是各民族公民在法律面前一律平等，享有相同的权利，承担相同的义务。

中華人民共和国國務院新聞辦公室 2009年9月『中国的民族政策与各民族共同繁荣發展白皮書』From：新華社 ([http://news.xinhuanet.com/politics/2009-09/27/content\\_12117333.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2009-09/27/content_12117333.htm)) (Accessed：13：21，28 May 2010)

<sup>4</sup> 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局 1953，p. 291。（「民族是人们在历史上形成的一个有共同语言，共同地域，共同经济生活以及表现于共同文化上的共同心理素质的稳定的共同体」）。スターリン全集刊行会 1952，p. 329。

革開放期)と黄光学は定義した<sup>5</sup>。だが、「スターリンの民族定義は基本的に継承されたが、すべての民族に適用することができなかった<sup>6</sup>」という点も注意しなければならない。

各民族の環境と現実には多様な相違があるものの、総じて言えば、現在の中国の学術従事者は上記のような中華人民共和国の「民族理論」の原則を確認した上で、識別された民族ごとに個別の民族研究を展開している。

## 第2節 回族をめぐる解釈と定義

「民族識別」を通じて、中国西北部に数多く居住する中国ムスリムの人々は「少数民族」と認められ、その結果、回族、ウイグル族、カザック族、東郷族、キルギス族、サラル族、タジック族、ウズベク族、保安族、タタール族という10個のイスラームを信仰する「民族」に分類された。本節は、回族をめぐる解釈と定義を中心として、まずは改革開放以前の回族における定義と改革開放以後の回族における定義を比較し、そこで、日本における回族の解釈を検討し、最後に、本稿における回族の定義をまとめたい。

### 第1項 1949年から文化大革命終了まで

1978年からはじまる改革開放以前の回族について、中国内外で中心的であった解釈とは、「中国各地に散居して、イスラム教を信仰している民族で、中国語すなわち漢語を日常語としている。トルコ、イラン、アラブ等の外来民族の子孫を中核としているが、これに漢民族その他の諸民族の血が混入され、歴史的に形成された民族である」<sup>7</sup>というものであった。

中国政府を代表する回族・中国史学に関する研究者である白寿彝は、『回回民族底新生』<sup>8</sup>の第2章「回回民族和回回教」の中で、回族（回回民族）は完全に中国の民族識別理論に対応していると述べる。その内容を要約すると、以下のようになる。

(1) 言語。回族は漢語を使っているが、独自の言語も持っているという。それは「小児錦」と商人の「行話（商人の仲間同士の隠語のこと）」である。このような「言語」は方言ではないし、言語の一種である。

(2) 地域。回族は「大分散、小集中（中国全土に大きく分散しているが、地域ごとに小さい集住地域がある。）」という生活形態であるが、生活範囲は「面」ではなく、「点」と「線」である。そこから見ると、回族は各地に独立した共通地域がある。

(3) 経済生活。回族は「ある程度」の共通的な経済を持っている。また、「天課（ザカート）」という共通経済を持っている。

(4) 心理状態。回族の心理状態は宗教の大きな影響を受けているが、回族の心理状態の最も顕著な特徴は、回回民族人民の団結互助と勇敢奮闘である。それを決定するのは、回族の歴史であり、生活条件である。

---

<sup>5</sup> 黄光学 1995, pp. 147—159。

<sup>6</sup> 黄光学 1995, pp. 164—173。

<sup>7</sup> 中田吉信 1971, p. 9。

<sup>8</sup> 白寿彝 1951。

白寿彝の説に対して、中田は、以下のように批判した<sup>9</sup>。まず言語に対して、「白氏は『基本』上は漢語であるが、回回語はすなわち漢語ではない』と主張しているが、その根拠は薄弱の感がある。……『小児錦』という「隠語」は確かに一部の回民の間で使用されていたらしい。しかし、恐らくはアホン（宗教指導者）達の間で使用されたにすぎず、回回民族の共通語と見なすことはできない。」という。実際に、筆者（金博諒）のフィールドワーク<sup>10</sup>によると、「小児錦」は「方言」レベルのものにも達していないと見られる。つまり、主な「小児錦」は、アラビア語から漢語の「字訳」・「音訳」であり、すなわち「transliteration」というものであると考えられるのだ。また、回民商人に使われていた「行話」自体も統一されていない物である。各地域の回族、回族内部の各業界・教派、各年代の「行話」は、全く違うものである。白自身も「隠語（行話）」は、商人同士しか使わないものであると自ら説明している。こうしたことから、「小児錦」と商人の「行話」を回族の「共通言語」と主張することは非常に難しい。

このように、中田は「共通の言語」については詳しく議論したが、「共通の居住地域」と「共通の経済生活」の部分についての批判は極めて簡略的である。そのように言う理由は、「白の理論はどう判断しても、ここで極論としか見えない」と本稿は考えるからである。本稿の意見として、まず、「回族の居住方式である『大分散、小集中』は『面』ではなく、『点』と『線』である」という説について、どのようなものを指しているのか不明であるし、結果的に見ると、「回族の共通地域は中国である」という概念も生まれるだろう。さらに、「共通の経済は、天課（ザカート）である」という説は、あまりにも唐突で乱暴である。「天課」は、イスラーム教の宗教上の責任や義務であり、また、「喜捨」であるから、物事を売買する経済活動とはいえない。共通の経済ではなく、むしろ共通の心理状態に近い。

最後に、心理状態について、中田は「ただ第四の『心理状態』の共同性という点から見ると、そうはいえない（筆者注：以上の3つの観点と違って、この部分は回族に当てはまる）。その民族としての基礎はむしろ強いといった方がよい。……白氏は回回民族の心理状態に及ぼした宗教信仰の影響を全面的に否定しているわけではないが、努めて過小に評価し、宗教信仰以外のものにその決定要因を求めようと論理を進めている。しかし、回族の心理状態の共通性はすべて信仰から出発したといっても過言ではない。……血液的にもほとんど漢化され、言語も漢語を日用語としている今日、イスラームという宗教信仰が共同体を結びつける唯一の紐帯であると言えよう。この宗教信仰を取り除いたならば、彼らに民族としての特徴がはたして残るであろうか。」<sup>11</sup>と問題提起をした。

白と中田の観点から、回族の心理状態を総括してみると、前者は民族間の団結互助と民族的勇敢奮闘を強調する「政治的な」見解であり、後者は理論的証拠や一般的常識に従う客観的、論理的な分析である。民族識別政策に戻って考えてみると、回族が識別された際に、最も重要な要素は、「共通の心理素質」だったのではないかと本稿は考えた。この「共

<sup>9</sup> 中田吉信 1971, pp. 149–150。

<sup>10</sup> 2009年7月～2015年3月の間に、上海、瀋陽、長春や西安などの地域で行った調査による。

<sup>11</sup> 中田吉信 1971, pp. 152–154。

通の心理素質」は「イスラーム」であり、「イスラーム」こそは、回族のアイデンティティである。最も平たく言えば、共通の心理素質によって構成された民族である回族という「集団」を定義するとすれば、それは一種の「心のコミュニティ」や「心の共同体」とも言えるであろう。この「心のコミュニティ」をつなぐ「絆」が、イスラームである。回族に最も重要なアイデンティティ、「心のコミュニティ」の「絆」を伝承する際に、イスラームに関する知識の習得は重要であり、それを伝承することの重要性もはっきりしている。

改革開放以前の回族に関する定義を総括的に見ると、その定義は、「イスラーム教への信仰」と「歴史的に形成された民族」という2つの要素に収斂される。

## 第2項 改革開放期の民族理論と回族

改革開放以後の現在において、回族の定義に関する議論はある程度安定してきたものと思われる。ここでは、中国改革開放以後の回族に関する理論を検討する前に、中国改革開放以後の民族理論全体の変化を考察しておく。

文化大革命を経て、一時的に完全停止していた中国の民族理論は「十年動乱」の影から回復に向かい、「文革」後の10年目にあたる1988年に、中華人民共和国の民族理論に最も大きな影響を与えることになる理論が登場した。費孝通の「中華民族多元一体構造（中華民族多元一体格局）」というものである。中国の人類学者・社会学者である費孝通は1988年に香港中文大学で「中華民族多元一体構造」に関する理論を発表し、その後の1989年に「中華民族多元一体構造」<sup>12</sup>というタイトルの論集を出版した。タイトルだけを見ると、「多元」と「一体」が同時に存在していることが矛盾と感じられるが、彼の理論を総括すると、以下ようになる。

自覚的な民族の実態としての中華民族は、この100年来、中国が西方列強と対抗していくなかで出現したものであるが、自然発生的な民族の実体としては、数千年の歴史過程によって形成されたものである。（中略）

その主な流れは、多く分散したり孤立して存在した民族単位が、接触や雑居、結合と融合、あるいは分裂と消滅という過程を経て、一方が来れば一方が退いたり、一方の中に他方を包み込むなど、それぞれ個性を持った多元的な統一体を形成してきた。（中略）

相当早い時期、今から3000年前、黄河中流域に、民族集団の集まりが出現し、徐々に融合して一つのコアとなった。彼らは華夏と呼ばれ、雪だるま式に、周囲の異民族を吸収し、このコアに加えていった。彼らは、黄河と長江の中流域の東アジア平原に拡大して以降、他の民族によって、漢族と称された。漢族は、その後も不断に他の民族を吸収し、日増しに拡大したばかりでなく、異民族の居住地域にも浸透して、集結と連携のためのネットワークを構成し、境域内の多くの民族が連合してできた、分割不可能な統一体の基礎を築いた。こうして自然発生的な民族実体が形成され、後に民族としての自覚を経て、中華民族と称されるようになった<sup>13</sup>。

以上の理論は「漢族を中心として、周辺各民族は相互に影響し（多元）、その結果、中華

---

<sup>12</sup> 費孝通 1989。

<sup>13</sup> 費孝通編、西澤治彦訳 2008。

民族（一体）が形成された」と「多元一体」を定義したものである。

中華人民共和国にとって、費孝通の理論は、多民族国家である中華人民共和国内の各民族の歴史的・政治的統合性に学術的な理論を与えるものであり、現在でも最も重要かつ積極的な理論であると看做されている。しかし、この理論には政治的な要因や多くの問題が存在する。まず、費孝通は中華人民共和国の第七、八回全国人民代表大会常務委員会副委員長(1988－1998)であり、中国人民政治協商会議第六回全国委員会副主席(1983－1988)である。彼の理論は多民族国家である中華人民共和国内の各民族の歴史的・政治的統合性に学術的な理論を与えており、現在の中国の民族政策研究、および民族研究のための基本路線を規定している。また、費孝通の理論が発表された当時、彼の研究地域は中国の西南部の雲南や貴州などの地域であった。彼の理論はそれらの地域の状況を反映したとは言えても、例えば新疆地域のウイグル人やチベット地域のチベット人などの民族集団について、必ずしも適切であるとは言えないであろう。

以上、改革開放以後の中華人民共和国の民族理論の方向性を踏まえた上で、改革開放以後の回族に関する民族定義やその解釈の概況を探ってみる。

中国で、改革開放以後に著された回族の定義についての研究は、改革開放以前のものとは比べて、「イスラーム教への信仰」や「歴史的に形成された民族」など、回族の宗教性や民族性を強調した研究が少なく、一方で、回族の歴史、伝統文化、教育や商業などの要素を回族認識の定義やその解釈に加えたものが増加している。『中国回族史』<sup>14</sup>はそうした傾向を持つ著作の1つである。中国国家体制の一貫として、5年ごとに基本的政策を計画・実施してきたが（いわゆる五ヶ年計画）、この『中国回族史』は中国国家「八五計画（第八番目の五ヶ年計画、1991－1995）」の重要な官撰文献とされ、国家科学基金の援助を受けた。この文献の「内的」な意味を探ってみれば、『中国回族史』の中で強調される回族理論の研究方向である回族の歴史、伝統文化、教育や商業などの諸要素は、中国国家が望む回族定義やその解釈の研究方向であることは明らかである。<sup>15</sup>だが、改革開放以前も以後も、中国の回族に関する定義やその解釈は、「政策」あるいは「政治」的な要素が強かったことに違いはなく、それゆえ客観性が足りないところもあった。以上を考慮すれば、回族の民族定義やその解釈を見る際には、中国以外の研究理論を援用する必要があると考えなければならない。

### 第3項 日本の学術界における回族の解釈と定義

中国以外にも、回族に関する研究は多く存在しているが、欧米での回族研究はごく短期間を対象とした研究、あるいは断片的な研究が多かった<sup>16</sup>。それに対して、日本の回族研究は高い水準にあり、資料も豊富である。その理由は、近代日本で高い水準の学術研究が進められたというだけではなく、欧米と比べると、地理的な親近性が研究に有利であった

---

<sup>14</sup> 邱樹森編 1996。

<sup>15</sup> 例えば『中国回族史』の「序」では、該書の方針性について、「中華民族多元一体化の立場から、回族の共性、個性、文化の内実やイスラーム文化の中国化などの問題を探索する。（從中華民族多元一体化格局的角度，探索回族的共性与个性、文化的內涵以及伊斯蘭文化的中国化問題。）」と紹介している。

<sup>16</sup> 本章第3節第2項の2を参照。

ということができる。また、近代以後に、日本は多くの調査を実施し、資料が多く収集・整理されたという事情もある。これらの資料によって、中華人民共和国成立後から改革開放までの間に破壊された資料の空白を埋めることもある程度可能となるだろう。

日本における回族研究としてはまず、中国ムスリムの歴史動向を全面的に整理した『支那における回教の伝来とその弘通』<sup>17</sup>を挙げなければならない。1700 ページ以上のこの大著は、1964 年に田坂興道によって刊行されたもので、上下二巻に分けられる。上巻は第一章から第三章までで、主に唐代から元代までの「回教史」が論じられている。具体的な内容としては、「回教」という名称の由来、「回教」の中国伝来の過程や中国周辺地域の「回教」と中国との往来などの課題が深く考察されている。下巻は第四章から第六章までであり、主に明代の「回教史」と、「回教文化」について検討されている。具体的には、中国における回教の発展（思想的、社会的）を中心として、中国人の回教徒観（漢回の相互関係）、歴代王朝の回教徒に対する態度、回教徒の分布、回教徒の生活状態や回教文化など、5 つの分野が分析されている。この研究は、日本だけではなく、中国イスラーム研究の歴史上でも、重要な地位を占めることは間違いない。だが、この著作が取り扱う範囲は、明代をもって終わったため、清代という「中国最後の王朝」時代を残すこととなり、中国王朝時代の回教像を総合的に考察することができなかったことは残念である。

近年、中国の回族を総合的に概観した書物の 1 つは 2012 年に、日本の中国ムスリム研究会によって編纂された『中国ムスリムを知るための 60 章』<sup>18</sup>である。この書物では回族の民族理論について、松本ますみによって以下のように述べられている。

回族は、過去に漢回、回回、回民、東干と自称したり、他称されたりした民族集団である。漢語を母語とするムスリムで、顔つきは漢族と見分けがつかないケースが多い。人口は、2000 年の公式統計で 981 万人であったが、2010 年の統計では 1058 万人となった。中国少数民族のなかで、壮族について第 2 位の人口を持つ。回族は集居地域がほぼ定まっている他少数民族とは様子が異なる。「大拡散小聚居」という表現が使われるように、回族は 1 自治区（寧夏回族自治区）、2 自治州、13 自治県を中心に、北は東北三省から南は海南省、西は新疆ウイグル自治区から東は山東省まで中国全土に散らばって住んでいる。中国でイスラームを信仰する 10 の少数民族のうち、回族の中国における政治的、経済的、社会的影響力を見逃すことはできない。

社会主義圏でよく使われたスターリンの「(国家を作ることができる) 民族を形成する 4 条件」というものがある。言語、経済、領域、心理のすべてを満たすという条件だ。回族は 4 条件のうち、前三者については漢族とほぼ共通だ。しかし、心理だけは独自といえるかもしれない。イスラームを信仰し、それに基づく生活様式（冠婚葬祭、食生活など）を守っているからだ。しかし、福建省には回族身分を持ちつつも伝統的に豚を食べ、イスラームは信仰していない、という人々もいるし、イスラームの内容は何も知らない、という無神論者の回族も都市を中心にあまいたる。回族の統一指標は、身分証明書に記された「回族」という民族欄のみかもしれない。

彼らは唐、元時代のムスリム移民の子孫と漢人の改宗者によって歴史的に形成された。明代には（中略）

<sup>17</sup> 田坂興道 1964。

<sup>18</sup> 中国ムスリム研究会編 2012。

一方、1921年に結党した中国共産党は、当初民族自決権を中国領域内の諸民族に与え、連邦制国家建設の方向を示していた。テュルク系の纏回は右記のスターリンの4条件がすべて当てはまり、「民族」として独立できる、という考えであった。ところが、国民党の追撃をかわし中国西北地方を進軍した長征期に、中国共産党軍は多くの回民に出会い、従来の民族政策の再考を余儀なくされる。共産党は1936年の「中華ソビエト中央政府回族人民的宣言」で、漢語を話す回民を「回族」と認定した。さらに、根拠地を築いた延安では1941年に『回回民族問題』という小冊子を発行した。そこでは、回族の独立権を否定する代わりに文化・宗教保護や、区域自治を主軸とした少数民族政策を打ち出した。共産党勢力下の回民は「民族」認定されるとともに、抗日戦争にも参加した。当時、中国ムスリムを中国から分離独立させ、親日・防共政権をつくろうという日本軍部の策略があったが、それは回民の本意でないことを研究したうえの共産党の政策だった。

1949年成立の「統一した多民族国家」中華人民共和国では、連邦制と少数民族の独立権は完全に否認された。「回族のように」独立を望まず中国への愛国心を持つのが理想的少数民族像とされた。逆に言えば、愛国主義と引き換えに、漢語を話す回民は「回族」と認定され、無神論を標榜する体制下でイスラーム信仰と独自習慣の保持が許されたといえる。<sup>19</sup>

以上、先行研究をもとにした記述から見ると、現在の日本における回族についての認識は、中国の認識と比べると、明代以後から清末に至るまでの回族史を細かく検討して、ある程度の深まりに達し、また客観的な一面がある。上の記述では、中国で回族が民族として識別される上で、中国共産党による回族認定という「力学」の関係や、回族にとって、スターリンによる民族定義が不完全であることなどの問題に触れられている。逆に中国で民族理論を研究する際の限界が「民族識別」という政策実行の段階に留まった理由として、学術水準や識別にあたっての客観的基準の不足などの外に、政治的意図が表面立っていたこともその1つの要因となっていたと言ってよいであろう。

#### 第4項 回族とは（まとめ）

以上をとりまとめてみるならば、本論においては、歴史上の回族とは、中国で生活してきたムスリムであり、回教徒あるいは回回、あるいは回民と呼ばれてきたが、彼らは、「中国各地に散居し、イスラーム教を信仰し、漢語を日常語とし、外来民族の子孫を中核としつつ歴史的に形成された民族である」（白寿彝）と考えたい。一方、現在の回族は以上の回民のような一般的呼称である一面を持つが、政治的な民族政策の観点から見れば、民族の独自性を擁護するといった人権主義的な必要から区分される民族の1つというより、むしろ「身分証明書の民族欄記入の必要を満たすための種別的一种」に過ぎないとも極論できるであろう。こうして、本論における回族に関する民族理論の検討をしめくくり、次には回族研究の現状を考察したい。

#### 第3節 回族研究の動向

中国へイスラームが伝播したのは、唐代（651年）の頃だというのが通説である。中国の歴史書の『旧唐書』第四卷「高宗本紀永徽二年八月乙丑（八月四日、西暦651年8月25

<sup>19</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 36-40。

日、ヒジュラ歴 31 年 1 月 2 日)」に、「大食国、始遣使朝献」と記録されており、「大食国」（タージャー、当時はアラブ人に対する呼称である）の使節団の来訪をきっかけとして、現在の中東からアラブ人やペルシア人を中心とするムスリムが海路や陸路で中国へ往来し始め、首都の長安や広州や泉州などの貿易都市に定住するようになった。その後、宋代を経て元代には、西アジアや中央アジアから来訪する外来ムスリムが飛躍的に増加し、ついで明代になると、回民（後に回族）と呼ばれるようになる母体が形成されたと考えられている。

中国国内・国外（日本や欧米など）を問わず、従来の回族研究の動向を見ると、中国西部（西北、西南）や中部の少数民族地域が主な研究対象となっている。その理由としてまずは、歴史の側面から考えてみると、中国西北地域はかつて世界東西交流の重要なルートの 1 つであるシルクロードの一部であり、15 世紀から中央アジアのスーフィー主義が西北地区に浸透、定着していったということがある<sup>20</sup>。清朝末期に入ると、西北地区では、雲南地域以上に回民叛乱が頻発したため、多くの研究者の目が回民の動向に集中した。西北地域に研究が集中するもう 1 つの大きな理由として、西北地域には中国のほかの地域と較べて、回民がかなり集中して居住していることがあげられる。つまり、この地域には回族のコミュニティが多く存在し、宗教の発展、民族の構成、民族内部の組織関係や文化などの要素について、考察すべきテーマが豊富に存在するため、多くの研究者が注目してきたのである<sup>21</sup>。

こうして、西北地区に広がったイスラームの研究は、歴史学や民族研究などの分野を中心に進んできたのであるが、近年の中国が置かれている実際の社会状況は、「改革開放政策」が実施されて以来、政治、経済、教育、生活、文化などあらゆる側面において大きな変化が発生し、上海、広州などの沿海大都市だけではなく、北京、重慶や西安などの内陸都市も急速な発展を遂げている。この状況に応じて、近年の回族研究においては西北地区を含みつつ、中部・東部の都市部に暮らす回族の集住地区にも目が向けられるようになった。特に、「都市部にくらす少数民族の人々が都市化にともなって直面するさまざまな問題」が、多くの研究者に注目されている。

しかし、中国東北地区の回民に関する研究はそれほど積極的に実施されていない。それにはいくつかの理由が考えられる。まず、東北地区は西北地区に比べて、回民が集住する場の数や人口が少なく、また、回民の実際の社会を考察するのに有益な歴史記録が少ないことが挙げられる。次に、事実として、下に示す事例のように、中国国内の研究者にとって、近代史上「不名誉」な「満洲国」に関連する研究は敬遠される傾向にあるということがある。

ここで、中国の研究者が満洲国時代について触れにくいことを示す事例をひとつ示しておきたい。1936 年、イスラーム教育家・宗教指導者であった張子文（1875－1966）<sup>22</sup>は奉天

<sup>20</sup> 佐藤次高（監修）・嶋田襄平・板垣雄三・日本イスラム協会 2002, p. 507。

<sup>21</sup> 例えば、梅村坦・新免康 2011。片岡一忠 1993。など。

<sup>22</sup> 張子文は、現在の遼寧省本溪市火連寨で生まれ、16 歳で清の秀才になった。アラビア語、ペルシア語、ロシア語やドイツ語に精通し、瀋陽回民のコミュニティの人々から、「德国（ドイツ国）張」と呼ばれた（2012 年 3 月、2013 年 8 月に、遼寧省本溪市火連寨で筆者が清真寺の関係者に聞き取り調査による）。



(現瀋陽)で「奉天私立回教文化学院(現瀋陽市回民高校)」を創立した。しかし、1925年1月頃に日本で宣教した経験を持つ張子文は、文化大革命期に、歴史を遡って「偽満洲国の協力者」の「回奸」とされた<sup>23</sup>。改革開放期(1978年)以後、中国政府は張氏の名誉を「回復」したが、瀋陽市宗教事務局が出版した『瀋陽宗教志』(2014年)では、「奉天私立回教文化学院」の初代校長を別人の名で記録しているように、事実上名誉回復はされていないと言える。張子文の息子(元光明日報社記者)の言によれば、『満洲国』で生活した者は『裏切り者(あるいは漢奸、回奸)』と見なされることが多い。しかしながら、視点を換えてみると、我々が『裏切り者』となるより前に中華民国政府が統治を放棄したのだからむしろ民国政府に裏切られたと言える」ということになる<sup>24</sup>。世代をまたいで、こうした歴史への認識があることに留意しておくべきであろう。

現在の中国では、満洲国関連の史料へのアクセスが難しいことに対し、日本では、満洲国に関する資料を比較的豊富に見ることができ、しかも特に最近になって研究叙述上の制約は少なくなった<sup>25</sup>。これに加え筆者は幸い、旧満洲国時代の経験者に中国現地で接近する機会を多く持っている。日本で研究を進める中国東北地区出身の筆者は、そうした条件を生かし、中国東北回民の研究を一步すすめたいと考えている。具体的には回族の集住地区、特に商業施設の形成過程に検討を加えることによって、満洲国時代に遡る東北イスラームの実状を明らかにし、その歴史の中から、現存する小さなムスリム社会生存のために生かされるべき要素を探ってみたい。

## 第1項 総論的研究

中国の回族のコミュニティ(アラビア語では「ジャマーアティ」)に関する諸見解を整理し、中国の回族コミュニティ研究の基礎となりうる総括的研究ともいえるのは、2006年に馬強が中国で発表した研究である。馬強の『流動的精神社区—人類学視野下の広州穆斯林哲瑪提研究(流動する精神コミュニティ—人類学から見た広州ムスリム・ジャマーアティ研究)』<sup>26</sup>は、広州市におけるムスリムのジャマーアティを一事例として、ジャマーアティの理論を整理し、中国におけるその研究の基盤を構築した。馬強のジャマーアティの理論を考察する前に、まず、ジャマーアティに関する基礎的な論点を説明しておきたい。

### 1. ジャマーアティをめぐって

回族の民衆は、イスラーム(宗教)を信仰しているとされる。各地域の回族の民衆は、地域によって、独自の慣習、文化、経済生活を持っているが、どの地域の回族にも共通しているのは、宗教信仰や生活の便宜を維持するために、集中居住する傾向があることである。回族はこのような集中居住の地域コミュニティを、「ジャマーアティ(哲麦提、哲瑪提 Zhemaiti)」と呼んでいる。

<sup>23</sup> 例えば、孟国祥 1996, pp. 99–107。

<sup>24</sup> 2012年3月、2013年8月に、筆者は張氏への聞き取り調査を行った。

<sup>25</sup> 例えば、山本武利・田中耕司・杉山伸也・末廣昭・山室信一・岸本美緒・藤井省三・酒井哲哉編集 2006。殖民地文化学会編 2014。など。

<sup>26</sup> 馬強 2006。

語義としてのジャマアティについて、中国のアラビア語辞書『穆吉徳』<sup>27</sup>は「一群の人間あるいは動物」と訳している。2003年に刊行された別のアラビア語辞書である『新阿拉伯語漢語大辞典』<sup>28</sup>も「ジャマアティを集団（集団 Jituan、集体 Jiti）」と訳している。一方、『中国伊斯蘭百科全書』ではこの語を、「イスラーム教の用語である。アラビア語 Jamā‘at の音訳であり、集団（集体 Jiti）を意味し、漢文では教坊、寺坊と意識される。清真寺（モスク）を中心とするムスリムの集中居住地（聚居区 Jujuqu）を指す。」<sup>29</sup>と解説している。このように、ジャマアティはいずれも基本的な語彙として用いられるものである。

中国以外の人類的な研究を見ると、澤井充生（首都大学東京）がその博士論文である『中国西北部における清真寺と住民自治』<sup>30</sup>の中で、ジャマアティを「おもに清真寺を中心とした地域コミュニティであり、宗教指導者、寄宿学生、管理委員会、一般信徒らによって構成され、清真寺に所属するムスリムの多目的な社会生活を保障するためのコミュニティ」と定義している。また、マレーシアの W・H・Abdul は簡単にそれを「Community」<sup>31</sup>だと述べている。さらに、中国ムスリム研究会が編纂した『中国のムスリムを知るための60章』の中では、ジャマアティは、以下のように説明されている<sup>32</sup>。

現在、中国各地にはモスクや聖者廟が数多くある。ムスリムの少数民族はモスクや聖者廟の周囲に集住し、独自のコミュニティを形成してきた。原則、モスクや聖者廟のあるところには必ずコミュニティがある。漢語を日常生活で頻繁に使用する回族、東郷族、保安族などはそのようなコミュニティを「哲瑪提」、「者瑪提」（アラビア語起源の語彙で発音は「ジャマア」または「ジャマアティ」）、ウイグル族やカザフ族などのテュルク系の民族は「ジャマツ」と呼んでいる。地域によるが、「寺坊」、「教坊」、「回坊」、「坊上」などの漢語の語彙が使用されることもある。便宜上、本章では「ジャマア」と表記する。

.....

このように、ジャマアは清真寺を中心として形成されるため、清真寺の宗教指導者（「開学アホン」、「教長」）や管理責任者（地元有力者）がジャマアの実権を掌握する。清真寺では一般信徒（「高目」、「哈宛徳」、「教民」、「坊民」など）が管理責任者を投票や話し合いで選出する。管理責任者は「郷老」、そのなかの最高責任者は「学董」（あるいは「大郷老」）と呼ばれる。一般に、清真寺で敬虔なムスリムで人徳者と見なされた者、清真寺の建設・修復や財務管理を担当できる者、事務処理能力に長けた者たちが選出されることが多い。西北部では、清真寺の暗然の了解として共産党員が管理責任者になることは禁止されている。なお、建国後、清真寺の管理責任者たちは「清真寺民主管理委員会」として再編され、最高責任者は主任、その補佐役は副主任と呼ばれている。

<sup>27</sup> 黎巴嫩貝魯特（レバノン・ベイルート）東方出版社 2003, p. 101。

<sup>28</sup> 王培文 2003, p. 301。

<sup>29</sup> 中国伊斯蘭百科全書編輯委員会 1994, p. 735。

<sup>30</sup> 澤井充生 2009。

<sup>31</sup> Abdul Wahid Hamid 1999, p. 107。

<sup>32</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 102-106。

以上の各理論を総括し、日本語で解釈すれば、「ジャマーアティはムスリムの地域コミュニティ」という解釈が最も簡潔な語義となるだろう。ジャマーアティの検討を踏まえ、以下、馬強の理論を考察する。

## 2. 馬強による研究

陝西師範大学の文化人類学者馬強（回族）は、主に『流動的精神社区—人類学視野下的広州穆斯林哲瑪提研究』<sup>33</sup>と『回坊内外—城市現代化進程中的西安伊斯蘭教研究』<sup>34</sup>という2つの研究書によって、現代の回族のコミュニティに関する理論の基盤を構築した。

まず、馬強は『流動的精神社区』の中で、ムスリムのコミュニティである「ジャマーアティ」に関する理論を設定し、ついでそれを「精神社区」である「ウンマ」に結びつけて討論した。具体的には、著者は広州のムスリムコミュニティに着眼し、歴史学の資料整理および人類学のフィールドワークという方法論によって、その地区の社会構造の変化の過程などを多面的に調査し、歴史と地域に関する基礎情報を収集・整理した。

馬強は、ムスリムのコミュニティと中国社会の中の一般的なコミュニティ（筆者注：中国原文では社区という）について、「ジャマーアティと一般的なコミュニティ（社区）の区別は、それを構成する要素ではなく、コミュニティ内の行為規範と社区意識であり、即ち、社区の人的文化の『維係力』の変化によりその力が変わる」<sup>35</sup>と強調した。特に、ここでいう「維係力」は、具体的に説明すると、「絆を維持する力」と解釈することができる。「以上の主張を通じて、コミュニティの境界、宗教の儀式、宗教の民俗、コミュニティの権力構造やエスニックアイデンティティに対する自己認識などの要素を含むコミュニティ（社区）の歴史的変遷の過程を考察し、『流動的精神社区』と解釈することができるという観点を出すことができた。さらに、この『精神社区』および社区の管理に対して、有意義な意見を出すことができる」<sup>36</sup>との主張に至っている。

彼の主旨をとりまとめると、中国の回族のジャマーアティは、単なる地域社会や集合居住地域というだけのものではなく、イスラームという絆、および意識によって、規範化され、維持されるコミュニティである。さらに、歴史の変遷とともに、このようなコミュニティの範囲、風習、権力構造や自己認識などの要素は変化することから、「流動的な」あるいは「思弁的な」一面を持つという。従って中国政府は、以上のような回族のコミュニティを管理したり、一連の政策を出したりする時には、一地域コミュニティとしてではなく、ジャマーアティとしてみる必要があり、即ち、内的精神構造や思想的な部分を無視してはいけない。これが馬強の主張である。

結論として、馬強のジャマーアティに関する主張は、主に4つの要点に集約される。すなわち、「文化抗拒与社区归属感：哲瑪提的意義及表達」、「从地域概念到精神概念：都市穆斯林社区的解構与建構」、「尋找失落的社区精神：哲瑪提与陌生人的文化適應」および「回

---

<sup>33</sup> 馬強 2006。

<sup>34</sup> 馬強 2011。

<sup>35</sup> 馬強 2006, p. 14。

<sup>36</sup> 馬強 2006, p. 14。

帰与復興、衝突与融合：現代化整合下的社区走向」である。

第一の主張である「文化抗拒与社区归属感：哲瑪提的意義及表達【[中華]文化に対する抵抗・拒否とコミュニティに対する帰属意識：ジャマーアティの意義と表現】」は、ジャマーアティには精神的なコミュニティとして、2つの作用があると考ええる。1つ目の作用は、内側に対するものである。家庭とジャマーアティ内のイスラーム教育を通じて、信仰の伝承、文化の交流やムスリムの団結をもたらすことができる。2つ目の作用は、外部に対するものである。ムスリムの内的団結による力は、国家からの認可を得ることができ、この認可のもとで、回族の生存環境は保証され、中華にとって異質的なイスラームの発言力を保つこともできる。即ち、ジャマーアティを通じて、中国国内にとって小文化であるイスラームは、大文化である中華に社会的に「力学的な」効果を与え、文化を伝承することができるという結論である。

馬強が述べる第二の結論は、「从地域概念到精神概念：都市穆斯林社区的解構与建構」、すなわちジャマーアティとは「地域概念から精神的な概念まで：都市のムスリムコミュニティにおいて、コミュニティを解体する構造と再建設する構造である」とするものである。かつてのジャマーアティには、中国の農村部・都市部にかかわらず、ある程度の安定性と社会的権力があつた。だが、清代以後、ジャマーアティの構造は、主にスーフィー主義の教派により分節化された。さらに、清朝末期の「回民叛乱」以後、回民社会全体の構造まで分節化された。中華人民共和国成立後、文化大革命を経て、現在の「市場経済」期に至るまで、ジャマーアティの変化速度は、大きく変わらなかった。だが、改革開放後に実施された宗教民族政策、急速に発展する市場経済、大規模な都市開発や中国国外のイスラーム文化の流入などといった様々な要素が、ジャマーアティに大きな衝撃を与え、特に社会の都市化が及ぼす急速な変化は、ジャマーアティを複雑化しつつある。そうした動きの要因となっているのは例えば、中国国外のイスラーム潮流にともなう、漢族ムスリムの発生、ムスリムのインターネット・ソサイエティ（中国語では網絡社会）の形成や、回族内部からの自己アイデンティティに対する再認識といった現象であろう。また、ウンマによる精神的なコミュニティを建設する構想も台頭しつつある。馬強の研究対象地域である広州の回族のジャマーアティは、以上のような変動因子を持つ典型である。こうして、馬強はこのような回族を含むムスリムの都市社会の素因について総括した。中国国内のそれぞれの回族は、集住する地域の歴史的背景が違っている。しかし馬強は、「ある程度のムスリム人口、宗教活動空間とムスリム間の交流と活動の数量は、精神的な場を提供することができた」と強調し、以上の3つの要素が揃えば、イスラーム文化という中国の都市内の「異質文化」は生き延びることができるであろうというのが馬強の主張である。

換言するなら、都市のムスリムは、伝統と現代、世俗と神聖、離脱と信仰の両極から何を選択しなければならない面がある。「国際的なイスラーム復興」は、一般的に都市のムスリムにアイデンティティの強化や文化の強化を与えるが、中国の回族に対しては、「イスラーム復興」は伝統の滅亡と信仰の回帰を同時に与えることになるかもしれないと馬強は言うのである。

第三の結論は、「尋找失落的社区精神：哲瑪提与陌生人的文化適應」すなわち、「失われたコミュニティ精神の探索：ジャマーアティと見知らぬ人の文化的適應」である。中国の都市社会の中で、人々の間には、「無形の壁」が常に存在する。当然、都市のムスリムにも、

この「壁」が存在する。この「壁」は漢族との間に存在するだけではなく、同じムスリムの間にも存在する。例えば、回族とウイグル族間の「民族間の壁」や、「老教」、「新教」や「スーフィー（門宦）」間の「教派間の壁」、現地ムスリム、外来ムスリムや外国ムスリム間の「地域文化間の壁」などの「壁」を挙げることができる。馬強は、蘇えりつつあるムスリムの「精神的社区（コミュニティ）」が、以上の「壁」を超え、共同の発展に向かえると強調する。

最後の第四の結論は、「回歸与復興、衝突与融合：現代化整合下的社区走向」、すなわち「回歸と復興、衝突と融合：現代化の方向へ統合する中国都市内のコミュニティの行き先」である。急速な都市化を追求する中国社会の中で、ムスリムのコミュニティは、「どのように生き延びるのか？」、「どうやって、都市内のムスリムに積極的な意義を与えるのか？」、「どのように、中国の都市に多元化の色を与えるのか？」、「回族の伝統と現代の中国都市社会の接点はどこにあるのか？」、「さらに、このようなムスリムの精神的コミュニティの行き先はどこにあるのか？」といった問題に解答しようとしてきた。馬強は、急速な都市発展、および20世紀末期から強まった西洋思想を主体とする国際社会の下で、「かつて存在していた伝統的なムスリムコミュニティは、流動的な精神的コミュニティ（ウンマ）へ転換すべきである」と考えている。

『流動的精神社区』に示された最も画期的な成果は、中国におけるムスリムのコミュニティ（すなわちジャマーアティ）を理解する理論体系を構築し、ジャマーアティを「精神社区」としてのウンマに比定したところにある。だが、馬強自身も述べているように、中国各地域のムスリムコミュニティにはそれぞれの社会背景と特徴が存在する。彼の研究対象である広州は、古いムスリムのコミュニティが存在するが、そのコミュニティも都市自身のように強い流動性があり、物理的なコミュニティ構造よりむしろ「精神的な」コミュニティを強調する面がある。即ち彼は、広州のような地域では、ムスリムのコミュニティは、ジャマーアティではなくウンマへの傾向が強いという解釈に至る。

しかし、中国国内では、広州のような極めて急速に発展・変化する都市は多くはない。かつ、以上の馬強の研究はムスリムのコミュニティ、すなわちジャマーアティの基礎理論を中心として指摘しているが、ウンマに関する系統的な分析には至っていない。それゆえ、ジャマーアティの実際の問題について、考察や分析がまだ十分に深まったものとなっていない。

『流動的精神社区』の後に示された馬強の『回坊内外—城市現代化進程中的西安伊斯蘭教研究』という研究は、彼の最初の研究で出されたジャマーアティに関する理論を応用し、西安のムスリムコミュニティという実在（非精神的な）するコミュニティに関する問題を考察、分析したものである。

馬強は『回坊内外』の中でまず、前著のジャマーアティに関する理論を再検討した上で、続いて「時代による回族のコミュニティの構造の変化」、「文化遺産としての回族のコミュニティ、およびその地域の保護について」、「ムスリムの宗教教育」、「清真女寺（ムスリム女学）」、「清真飲食」といった諸問題を考察した。これらの問題の中で、「都市の土地開発が、ジャマーアティに与える影響」、「ムスリムの宗教教育」、「清真飲食」という3つの問題は、現存する伝統的なムスリムコミュニティの維持に最も重要な要素を明らかにしたものである。すなわち、歴史背景と実際の状況を把握し、これからの現地住民の生活に提案

することができるような研究であり、一種の政治・政策の提案ともいえる。

馬強の方法論について結論を述べれば、彼の研究は本研究の研究対象地域である瀋陽研究にとっても大きな意味を持つが、やはり、広州・西安と瀋陽との地域差は大きい。まず、瀋陽および瀋陽周辺のムスリムの数は、広州・西安と比べることができないほど少ないため、多くの教派や複雑なコミュニティというものが存在しない。また、経済力も両地域に及ばず、都市の発展する速度もそこまで速くないため、土地開発と精神的なコミュニティの形成の規模も大きくない。

このような背景の中で、馬強の理論を援用ことができるとすれば、瀋陽回族のコミュニティの一般的要素として、「回族の教育」と「清真飲食」という2つの問題を挙げるができるだろう。瀋陽の実際の状況から見ると、この2つの問題点こそ、瀋陽回族のコミュニティの特徴とも言える。瀋陽伊斯蘭教経学院は、中国国内で中国政府が許可した9つのイスラーム教教育機関の1つであり、中国東北地域で唯一のイスラーム教教育機関である（その他は、中国伊斯蘭教経学院、北京伊斯蘭教経学院、寧夏伊斯蘭教経学院、蘭州伊斯蘭教経学院、青海伊斯蘭教経学院、鄭州伊斯蘭教経学院、新疆伊斯蘭教経学院と昆明伊斯蘭教経学院である）。こうしたことから、政府側からの観点でも、瀋陽は中国の重点的イスラーム地域の1つであると言うことができる。もう1つ瀋陽の「清真飲食（ハラール食品）」について言えば、かつてから清真飲食店を中心として形成された市場は、瀋陽の回民の生計を維持する生命線である（第四章に参照）。

瀋陽回族におけるこれら2つの特徴は、中国の他の地域のムスリムコミュニティと異なるものではない。だが、瀋陽回族のコミュニティの際だった特徴、あるいはこれまでの回族研究で扱われた地域と大きく違うところは、「瀋陽はかつて満洲国的一部分であった」ということである。この特殊な歴史的要素を分析要素に加えることによって、本研究では他に類をみない、独自の見解を導き出せるのではないかと考える。

## 第2項 個別研究

馬強のような中国ムスリムのコミュニティの研究理論を引き起こした総論的研究のほか、回族のコミュニティに関して、多くの個別研究、あるいは事例研究が存在する。しかし、回族のコミュニティの歴史、社会構造、風習などの諸要素は、地域によって大きく違異なっている<sup>37</sup>。以下では、近年の回族のコミュニティに関するいくつかの研究を見ることによって、現在の回族研究の実態および方向性を検討しておきたい。

### 1. 中国における研究

まずは、北京の回族を調査した周伝斌と馬雪峰<sup>38</sup>の研究を取り上げよう。彼らの著作である「都市回族社会结构的范式问题探讨——以北京回族社区的结构变迁为例」の中で、回族を「中国の都市化された少数民族である」と位置づけている。また、「これまでの都市の回族に関する研究は、主に個別の事例研究にとどまっていた」と強調した。彼らは、都市に在住する回族社会の構造、およびその存続状況を調査するため、北京回族コミュニティの

<sup>37</sup> 馬平 1995。

<sup>38</sup> 周伝斌・馬雪峰 2004。

変遷を一つの事例として取り上げ、北京のような変化の激しい社会の中で、回族の伝統的な集住地区はどうすれば生き残れるのかという問題を考察した。彼らは、「文化は一種のスーパー有機体であり、文化は自分の辿ってきた軌跡とともに、進んでいく方向もある。文化は消滅することもあるし、復興することもある」という観点から、「回族のコミュニティは都市化の進行（時代の発展に順応）とともに、消滅することであろう」と結論した。

白友涛と李晓雨<sup>39</sup>も「我国城市流動穆斯林社会適應問題研究—以南京和西安為例」の中で、都市内で急速に流動するムスリムに着眼する。彼らは南京と西安の2つの都市の回族のコミュニティを比較して、回族の経済生活、社会日常生活、宗教文化生活、心理状況という4つの側面を考察した。両地域において、回族のコミュニティは自民族の飲食や文化伝承などの問題を解決する役割を果たしているだけではなく、都市の多元化、グローバル化にとっても積極的な意義をもっていること、また都市開発に伴う回族都市人口の減少などの問題は、回族のコミュニティの機能に大きな影響を与えていることを指摘する。そして、南京と西安の回族の区別は、社会の構成、コミュニティの実態や地域の文化などの要素によるものだと主張した。最後に、この研究は、馬強の理論を援用し、結論として、南京は流動的回族のコミュニティと看做し、西安は伝統的回族のコミュニティと看做したと述べている。

白凱<sup>40</sup>の「城市民族旅遊社区的な外部認同研究—以西安回坊伊斯蘭傳統社区為例」は、西安の回族のコミュニティを中心として、「西安を訪れる海外の観光客は、回族の民族アイデンティティおよび、回族のコミュニティを、どのように認識するか」という問題設定をして、回族のコミュニティのあり方を探索した。結論として、現在の西安の回族のコミュニティは、長い歴史を持つため、多くの「物質的文化遺産」や「非物質的文化遺産」が存在し、西安市にとっては、欠かせない「観光地域」、あるいは「ランドマーク」となっている。このように都市においては、回族の「文化遺産」の重要性が高くなるとともに、外部からの承認の度合いも強くなる。

張鴻雁と白友涛<sup>41</sup>の「大城市回族社区的な社会文化功能—南京七家湾回族社区研究」の中で、「回族のコミュニティは、中国の大都市においてどのような社会的・文化的な機能を果たしているのか」という問題を考察した。彼らは、「回族の清真食品（ハラールフード）やイスラーム文化などの要素は、中国の都市に現代化と国際化の観点から文化資本を提供し、回族および他の中国ムスリムに発展と進歩の基地、外国と繋がる『橋』を与えた」と考えた。だが結果として、都市内の回族人口の減少、イスラーム文化の継承者の不足や都市の土地開発などの問題で、都市内の回族のコミュニティは、本来の機能を果たすことができず、将来性を見ることもできないという。

高占福<sup>42</sup>の「大都市回族社区的な歴史変遷—北京牛街今昔談」は、北京の回族のコミュニティである牛街を中心として、その歴史、近代における教育史と文化を語った。彼は中国政府の回族研究者という立場から、都市化の回族のコミュニティを解釈している。結論と

---

<sup>39</sup> 白友涛・李晓雨 2009。

<sup>40</sup> 白凱 2009。

<sup>41</sup> 張鴻雁・白友涛 2004。

<sup>42</sup> 高占福 2007。

して彼は、「政策により、現代化にされた牛街は回族のコミュニティの未来であり、このような回族のコミュニティで生活する回族こそ幸せである」と主張した。

張成と米寿江<sup>43</sup>の「南京回族社区的消失与回族文化传承的思考」は、「南京地域内で最大の回族のコミュニティである『七家湾回族社区』の土地開発による解体」という事例から、回族文化の伝承問題に考察した。彼らは、『七家湾回族社区』の解体は、政府の政策という外部の要因だけではなく、コミュニティ内部の経済生活、コミュニティ構造、婚姻状況、教育の形式や内容の変化とも関係があった」と考え、「回族のコミュニティの存在と回族イスラーム文化の伝承は、政府側からの支援と回族自身の『文化的自覚』が必要である」と主張した。結論として、回族の文化は中国社会にとって、中華民族文化多元性の一部であるから、中国政府は都市政策の中で、回族のコミュニティを保護すべきである。また、回族自身にとって、イスラーム文化は単になるアラ伯（アラビア）文化ではなく、ペルシア、トルコ、インドなどの民族文化と、キリスト教やユダヤ教などの宗教文化も含まれている。従って、回族は自分の文化を思索して、改善と発展を図る必要があると説く。

李健彪<sup>44</sup>の論文である「民族歴史街区保護的意義和價值——以西安『回坊』改造為例」は、西安の回族のコミュニティに着眼し、「回族のコミュニティは、自分の民族のアイデンティティを保持したままで、都市化社会に対応することができた」と結論づけた。彼は「多元文化の共存は都市のグローバル化の表現である。歴史を持つコミュニティは都市の文化的特色である。回族の伝統文化を保護することは、回族の経済発展を実現する前提である」と強調した。近年、中国の都市化の発展とともに、多くの回族のコミュニティが解体された。この現実の問題は、民族学の課題だけではなく、政府の責任の1つでもあると、彼は主張している。

楊文炯<sup>45</sup>の研究である「明清時期国家与社会關係轉型境遇下的回族社区——以歷史上西安回族社区文化變遷為視點」は、明清時代の西安回族のコミュニティの社会構造を考察した。彼は、「西安における回族のコミュニティの歴史調査で、明、清時代という『絶対主義国家』の時代に、儒教、道教と仏教を中心とした中国の『覇権文化』は、回族のコミュニティに強い影響を与えたが、その存在自体は許された」という観点を示した。

回族のコミュニティに関するその他の研究としては、良警宇<sup>46</sup>が、中国で初めて系統的に文化人類学および中国の民族学理論に基づいて、北京牛街でフィールドワークを行い、近代の牛街における清真寺、教育、生計や婚姻家庭などの変化をまとめた。束錫紅<sup>47</sup>は、近代における回族のコミュニティの変化に着眼して調査した結果、これら伝統的な「聚居区」は解体されつつあるが、精神的なコミュニティは存続すると主張した。

これらの研究の背景には、急速な経済発展のもとで、変化しつつある中国都市部の実態に対応する回族のコミュニティへの関心の高まりがある。歴史的経緯に目を向けると、回民は清真寺（モスク）を中心として集住地区を形成したが、都市部においては飲食店や小

<sup>43</sup> 張成・米寿江 2006。

<sup>44</sup> 李健彪 2010。

<sup>45</sup> 楊文炯 2006。

<sup>46</sup> 良警宇 2006。

<sup>47</sup> 束錫紅 2004, pp. 221—222, p. 231。



売業などの商業が集住地区を維持する重要な要素となってきた。清真寺と商業という2つの要素はコミュニティの権力構造に与えた影響は大きかった。これまでの主な研究結論をまとめることができるとすれば、回族のコミュニティは、都市化社会の衝撃の影響で、伝統的なコミュニティ構造や社会構造が消滅に向かうであろうという予測である。また、多くの研究の共通する観点、あるいは今後の中国国内の回族研究の方向については、今後の回族のコミュニティは、ウンマのような精神的なコミュニティを変換することが予測されていると言えよう。

## 2. 欧米における研究

近年、欧米において実施された中国ムスリムコミュニティの研究が対象とする地域については、従来の回族研究の動向をそのまま反映しており、中国西部（西北、西南）や中部の少数民族地域に集中している。例えば、Dru Gladney<sup>48</sup>の *“Ethnic Identity in China : The Making of a Muslim Minority Nationalism”* は、寧夏永寧納家戸、北京長営、牛街および福建泉州市陳埭鎮の4つの回族のコミュニティの比較を通じて、各コミュニティ内の回族における自己アイデンティティに対する認識を考察したものであった。また彼は、回族の多元性と自己アイデンティティが抱える危機感は、中国の国家権力および中国の民族理論概念の影響によるものであると主張した。さらに彼は、地域比較を通じて、「中国の民族政策は、それぞれの地域の少数民族に対して、『地方性の差』をもたらす」と述べる。

その後、Dru Gladney が刊行した *“Dislocating China : Reflections on Muslims, Minorities, and Other Subaltern Subject”* は、人類学的方法論に依拠して、現代中国の民族文化に対する観念、民族政策やアイデンティティに対する回族の意識などの問題を考察した。彼は中国の民族政策の4つの要素(第1章第1節を参照)に否定的な態度を持ち、急速に発展する中国社会内に生存し、移動性が高い回族は、「文化変容」と「アイデンティティ」という2つの側面で顕在化するだろうという。

この他、アメリカの文化人類学者である Maris Boyd Gillette<sup>49</sup>は、西安市の回族のコミュニティに注目し、長期間のフィールドワークに基づき、都市部に生活する回族の消費の問題を具体的に考察した。

以上、西洋という「他者」の視点から回族を検討しているケースを見た。しかし、本章の最初で述べたように、欧米の研究は文化人類学研究を中心とし、すなわち、1つの地域に対して、「(地域全)面」と「(歴史の流れの)線」というレベルの考察が少なく、主に一時的な「点」に注目したものが多い。それは、外部から現在の中国に入って調査を行う限界を示しているといえるだろう。

## 3. 日本における研究

日本における回族研究の範例は、上述した田坂興道<sup>50</sup>の『支那における回教の伝来とそ

---

<sup>48</sup> Dru Gladney 1998 ; 2004.

<sup>49</sup> Gillette, Maris Boyd 2000.

<sup>50</sup> 田坂興道 1964.

の弘通』(1964)の外に、岩村忍<sup>51</sup>の『中国回教社会の構造』(1949, 1950)もあげられる。田坂が歴史学の立場から、非常に詳しく、アラブの伝来や回族社会構造などの様々な方面について論じたことに対して、岩村は現地調査をまじえて、近代までの「回民社会」について議論している。つまり、岩村は社会学あるいは人類学の方法を利用し、多くのフィールドワークを行った上で、『中国回教社会の構造』を著したのであり、本論における回族研究の調査方法にとって、非常に重要なものである。だが、現代、特に中国の改革開放期以降の「回民社会」に関しては、本論が類推比較できるような事象はそれほど多くない。それでも回民社会の把握のための方法論として大いに参考になる。また、上述した中田の『回回民族の諸問題』<sup>52</sup>(1971)も、現代回族研究にとって不可欠な先行研究である。中田の研究は主に歴史と文化に関する研究であるが、中国政府への批判も含まれている。本論はその批判の客観性を利用し、改革開放以前の回族問題を再認識することができた。その中でも、「回族の唯一のアイデンティティはイスラームである」という中田の主張を、本論でも受け入れたい。

田坂、岩村と中田の著作はそれぞれ回族の歴史、文化、「教派」(いわゆる宗派の下位分派)や生活など様々な分野について詳しく議論してきたが、これらの研究に共通するのは中華人民共和国期の回族に関する情報が乏しいという点である。また、この3つの先行研究を俯瞰すると、日本と中国の学者による回族に関する大きな研究は、主に歴史から出発し、回族の全体像を把握しようとしてきたとすることができる。

その後、日本においては、中華人民共和国成立以降の回族を扱った研究もなされているが、いずれも中国西北部地域に暮らす回族のコミュニティを主な対象としている。例えば、澤井充生の博士論文である『中国西北部における清真寺と住民自治——回族のジャマアティの民族誌』<sup>53</sup>は、2000年から2002年にかけて中国西北部の寧夏回族自治区銀川市において実施された人類学的フィールドワークに基づいて、清真寺(モスク)を中心とする回族のコミュニティの組織原理や権力構造の実態、およびその問題点を詳細に検討したものである。日本の研究者という客観性、およびコミュニティ構造に対する繊細な分析は、中華人民共和国の改革開放期以後の中国の回族研究を凌駕するものである。

今永清二の「中国イスラム教とその社会」<sup>54</sup>は中国ムスリムの歴史と現状について概説し、回族研究の基礎を形成する役割を果たした。

2008年に松本光太郎が編集した『中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究』<sup>55</sup>は、2005年から2007年にかけて採択・実施された日本学術振興会科学研究費補助金による共同研究プロジェクトの成果報告書である。この報告書は、中国の西北部、西南部、新疆、東南アジアなどの異なる地域を調査対象地域として、それぞれのムスリム社会の実状が報告され、現代における中国および中国周辺のイスラーム社会変化の動向を把握することができる点で意味をもつ。

---

<sup>51</sup> 岩村忍 1949, 1950。

<sup>52</sup> 中田吉信 1971。

<sup>53</sup> 澤井充生 2009。

<sup>54</sup> 今永清二 1992, pp. 131–168。

<sup>55</sup> 松本光太郎編 2008。

新保敦子の「少数民族地区における社会変動と人間形成—寧夏回族自治区をめぐる」<sup>56</sup>は、人類学と社会学の方法論を利用して、中国西北部地域の回族人口流動性を論じ、その後の回族研究に、現代回族の特徴の1つである人口流動性という有意義な視点を加えることになった。

王建新と新免康の「中国ムスリムの女性教育——1980年代以後の状況を中心に」<sup>57</sup>は、主に改革開放以降における中国西北部地域の女性ムスリムの教育問題を巡って、回族とウイグル族におけるそれぞれの女性教育の様態が、地域による政策執行の偏差やそれぞれの歴史的背景によって条件付けられていると論じた。この研究は、中華人民共和国成立後におけるイスラーム女学に関する数少ない重要な研究であり、特に、同じイスラームを信仰する民族の比較を通じて、中国民族政策の執行の偏差を検討したものである。

最後に、回族女学研究の新たな動向として、松本ますみの『イスラームへの回帰—中国のムスリマたち』<sup>58</sup>を紹介したい。女性のためのイスラーム宗教学校（本書では「女学」と略す）出身のムスリムの女性たちは、現代中国社会が抱えるジェンダー、エスニシティ、伝統や貧困などの様々な問題に直面しているが、本書の中で松本はそれらを乗り越える力がイスラームではないのかと論じた。つまり、イスラーム女学を通じて西北出身のムスリム女性の生活全体が改善されたという考えは、これまでの回族研究に新しい観点を与え、また、中国の都市とくに東部都市に関する回族研究も重要になりつつあることを示している。

日本における以上の研究は、本論が限定してとり扱う地域とは直接の関係がないが、近年の中国回族における社会、文化、教育、商業、日常生活などを詳細に検討している点で注目すべき研究である。これらの研究は回族のジャマーアティ（地域コミュニティ）を考察した高水準の研究そのもの、あるいはそうした論文を含んだものであるが、その一方では、日本、欧米における従来の回族研究の動向をそのまま反映しており、主に中国西部（西北、西南）や中部の少数民族地域を主な研究対象としており、中国東北地域の回族を対象とする新しい試みは、ほとんど見受けられない。その理由について、本論最初の「回族研究について」で述べたように、西北が中心的に取り上げられてきたのは、中国へイスラームが伝来した経路という歴史的要素と、西北でムスリムが集中的に居住しているという地域要素が、中国西北部地域において聖（教派内の連絡網）・俗（経済流通網）にわたる回族独自のネットワークを成り立たせ、そこから民族全体について、多くの研究者が注目するようになってきたという、当然の帰結なのであろう。だが、欧米や日本の研究に見られる、中国と離れた客観的な「国際的な視点」は必要であろうと本論はとらえ、その客観性を西北以外の地域、つまり東北地域にも応用したい。

以上、中国、そして欧米、日本の回族研究を振り返ってみて、中国の西北地域に関する回族研究の理論やフィールド調査の方法論は、本論で応用することが可能であると考えますが、本論の主旨に直結するような素材として直接に利用できるものは多くない。すなわち、現段階に至るまで中国東北地域の都市回族コミュニティに関する研究は極めて乏しいとい

<sup>56</sup> 新保敦子 1996, pp. 52–63。

<sup>57</sup> 王建新・新免康 2005, pp. 127–151。

<sup>58</sup> 松本ますみ 2010。

う問題は残されたままであり、「満洲国」時代、つまり日中戦争期をふくめて、東北地域の中心地域の1つであった瀋陽およびその周辺都市についても、都市回族コミュニティの研究は必ずしも体系的に蓄積されてこなかった。

要するに、本論の限定した地域である瀋陽に関する研究は極めて少ないと言わざるをえないが、本論は、この地域に関する研究空白を補足し、中国全土に広く分布する回族ムスリム社会の知られてこなかった実態の一部、東北部のムスリムコミュニティに光を当てたいという目的をもつ。このような観点をさらに絞り込み、本論の狙いところは、中国改革開放後に出版された民族歴史資料や、日本の満鉄資料を中心として、瀋陽の回族の歴史を考察・検討しようとするところにある。

### 第3項 本論で注目する歴史資料

ここで、本論のテーマにとって、根本資料ともいうべき『瀋陽文史資料（第八輯——瀋陽回回民族專輯）』（1985）<sup>59</sup>、『瀋陽回族志』（1996）<sup>60</sup>、そして『満鉄調査資料（第26編）』の中に含まれる「満洲における回々教」<sup>61</sup>と『満州建築協会雑誌』の中の回教に関する部分（「奉天の回教寺（上）（満洲回教寺建築の研究七）」<sup>62</sup>、「奉天の回教寺（下）（満洲回教寺建築の研究八）」<sup>63</sup>と、「満洲回教寺建築史の研究」<sup>64</sup>）という資料の性格について、検討しておく。

#### 1. 『瀋陽文史資料第八輯』

『瀋陽文史資料第八輯』（1985）は、中華人民共和国遼寧省瀋陽市の市政府直轄である瀋陽民族事務委員会<sup>65</sup>の下に民族志編纂辦公室が編纂した資料集『瀋陽文史資料』の回族巻である。「本書は31篇の文書を収録し、分量は約13万字である。内容は回族の史話、風俗、経済、文教（文化と教育）や人物略伝である」<sup>66</sup>とある。その主な内容を目次で示すと、以下のとおりである。

瀋陽的回回民族（瀋陽の回族について）、編纂者哈増華。

回族的語言（回族の言語）、編纂者哈増華。

瀋陽回回民族風俗（瀋陽の回族の風習）

---

<sup>59</sup> 楊耀恩 1985。

<sup>60</sup> 楊耀恩・王俊 1996。

<sup>61</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編 1924（大正13），pp.173-212（同書、満洲に於ける回々教部分 pp.1-39）。

<sup>62</sup> 村田治郎 1928。

<sup>63</sup> 村田治郎 1928。

<sup>64</sup> 村田治郎 1930。

<sup>65</sup> 瀋陽市民族事務委員会（別称は瀋陽市宗教事務局）は政府の常設機関として、少数民族の管理や各民族間関係の処理などの仕事を中心である。瀋陽民族宗教 HP <http://www.symzzj.gov.cn/symzzj/>（最終チェック 2013年8月11日）

<sup>66</sup> 楊耀恩 1985, p.1。

回族的姓氏（回族の名前について）、編纂者馬林。

回族「小曆」之由来（回族曆の由来について）、編纂者楊程遠。

服飾、飲食、婚姻、編纂者楊帆。

炸「油香」（揚げ「油香」）、編纂者張楊。

湯平牌児与睹娃易（ムスリム食品・料理店の標識とイスラームを示す札）、編纂者常樂。

古尔邦献牛（犠牲祭、あるいはイード・アル＝アドハーについて）、編纂者維仁。

割礼—回族傳統的衛生習慣（回族の割礼について）、編纂者楊隆書。

談回回民族的土葬（回族の土葬について）、編纂者王紹曇。

禁猪的風波（禁豚をめぐる事件）、編纂者為人。

清代爱国将領左宝貴（清朝愛国將軍の左宝貴）、編纂者耀恩、增華。

尹神武革命事迹片断（尹神武の革命事蹟について）、編纂者尹文超。

瀋陽清真寺（瀋陽のモスク）、編纂者楊耀恩、項陽。

趙銘周阿訇生平簡介（宗教指導者の趙銘周について）、編纂者亜布拉罕・約瑟夫。

祠堂里的伝説（「祠堂里」の伝説）、編纂者耀恩、関方。

記奉天第一商場（奉天第一商場に関する記録）、編纂者楊程遠。

三「興」一「鋪」（瀋陽回民のお菓子屋について）、編纂者楊白棟。

回民小学七十年、編纂者「回民小学校史編写組」。

回族教育界名人趙方古（回族教育家の趙方古について）、編纂者金堂棋、林楓。

興学漫筆（回民小学の成立について）、編纂者仰嘯。

瀋陽回族医藥衛生事業的發展

楊家吉慶堂（楊氏の吉慶堂薬局について）、編纂者楊書義。

華西大藥房（華西薬局について）、編纂者白万富。

憶姑媽馬曇馨大夫（叔母の馬曇馨医師について）、編纂者馬汝英。

回民保健所和楊瑞生大夫（回民クリニックと楊瑞生医師）、編纂者于富斌、楊保芬。

記白祺三老人（白祺三なる老人について）、編纂者仰岳岱。

憶回族查拳名師劉宝瑞（查拳なる回族武術家、劉宝瑞について）、編纂者孫世奇。

「相撲大会」常二巴摔鬼子（満洲国時代の「相撲大会」について）、編纂者金堂棋。

浅談清真宴—全羊席（回族料理の全羊席について）、編纂者鉄大周。

回族清真菜考（回族料理に対する考察）、編纂者鉄大周。

総体的に見ると、『瀋陽文史資料第八輯』は一次史料というより、主として近代の瀋陽回族に関する概要ないし紹介の域を出ないものである。つまり、史料収集や文章整理などの不備が目立ち、例えば、瀋陽回族に関する歴史を整理したものはまったく存在しない。互いの関係も不明確な項目を羅列的にごく簡略に執筆したという傾向をもつものである。それには理由がある。『瀋陽文史資料第八輯』が作成されたときに、実は、『瀋陽回族志』の編纂準備も開始されていたのだ<sup>67</sup>。

## 2. 『瀋陽回族志』

<sup>67</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 383。

『瀋陽回族志』の「後記」（後書き）には、以下のような記述がある。

「瀋委発[1983]21号文件」（瀋陽民族事務委員会 1983 年の第 21 号ファイル）によると、瀋陽民族事務委員会は、1983 年 5 月に民族志編纂辦公室を設置し、同時にこの機関は『瀋陽満族志』、『瀋陽回族志』、『瀋陽朝鮮志』、『瀋陽錫伯族志』、『瀋陽蒙古族志』という 5 冊の少数民族志を編纂することを決定した。

瀋陽市民委民族志編纂辦公室的主任は鉄毓智となり、副主任は楊耀恩、王俊となる。

『瀋陽回族志』を編纂するため、1983 年 8 月に、瀋陽市の回族の専門家、学者、有名人や情報提供者を聘し、『瀋陽回族志』編纂組を成立させた。1984 年から編纂が始まり、1985 年に、『瀋陽文史資料第八輯』—瀋陽回回民族專輯が出版された。その後、さらに歴史文献資料や統計資料を探り、現地調査も実施した。大量の先行資料を占有（原文のまま）した上で、グループを分けて、編纂し始めた。1990 年 12 月に『瀋陽回族志』の初期製作が完成した。中心となった編纂者は、楊耀恩、王俊、趙吉武、常維仁、索貴山、林楓、侯德才、常桂武、楊隆書であり、哈增華、鉄大哲、曹愛蓮、金英相、張巨成、崔魏の協力も援用した。その後、初稿は楊耀恩と王俊の修正を加え、鉄毓智（シリーズ総編集者）と肇樂群の審査を経て、1991 年 12 月に完成した。

まず、『瀋陽回族志』の編纂について、その編纂者は回族が中心となる。また、回民中学、回民小学、回民幼稚園、南清真寺、回民綜合商店、回民食品廠、民族大飯店や回民病院などの機関も、資料を提供した。最後に、編纂過程の中で、遼寧省民族事務委員会、瀋陽市地方志編纂辦公室、遼寧民族出版社や瀋陽市民族事務委員会などの指導に感謝する。

『瀋陽回族志』の編纂作業は非常に困難であった。特に経費不足のため、かつ各編纂者も本来の仕事があり、編纂の速度が遅くなった。だが、編纂の水準は有限であるため、ご指導を願う。

瀋陽市民委民族志編纂辦公室

1991 年 12 月

以上の記録からみると、『瀋陽文史資料第八輯』は、後に出版された『瀋陽回族志』を出版するための準備であるにちがいないが、あえて積極的に評価するならば、かなり羅列的ではあっても資料のとりまとめに向かう素材の提供という意味で、重要なプロセスといえることができるかもしれない。特に、『瀋陽文史資料第八輯』は、中華人民共和国成立後に瀋陽回族について、編纂された初めての書物であり、その意味で、現在の瀋陽回族研究、さらに中国東北地域の回族研究にとって、最初の一里塚であったと言えるであろう。

上述したように、『瀋陽文史資料第八輯』の出版後に『瀋陽回族志』が出版された。まず、瀋陽における回族研究の中で、『瀋陽回族志』が占める位置を考えてみよう。『瀋陽回族志』の「後記」部分で述べられているように、『瀋陽回族志』は瀋陽民族事務委員会の決定に基づき、瀋陽民族事務委員会民族志編纂辦公室という公的機関が出版した正式の歴史・文化資料である。時の政府と党の意志、政策や政治指導の状況に応じて、学校（回民中学、回民小学、回民幼稚園）、清真寺（南清真寺）、企業（回民綜合商店、回民食品廠、民族大飯店）や病院（回民病院）などの機関が積極的に協力した一面がある。したがって、資料整理や編集という側面から見ると、個人研究が及ばない力を持つ。だが一方で、政府の公式資料であるから、民衆心理の機微までもを反映する「民間資料」の収集という点では不十分との感を免れないともいえる。また、現在の中国国内外の進んだ回族研究の水準から見

ると、『瀋陽回族志』における資料収集の方法と史料整理は不完全であるが、『瀋陽回族志』が中華人民共和国成立後の瀋陽、さらに全東北地域にとって、先駆的な資料集であったことは間違いない。要するに、1949年から1990年までの東北における回族研究の空白を埋めた点から見ると、この書の重要性を否定することは出来ない。

次に、『瀋陽回族志』の構成を詳細に見ていこう。この本は、瀋陽回族の歴史背景や社会構造などのデータを探り出す資料として、非常に有効である。本書は全15章から構成され、「概況」「回族の来源」「人口分布」「姓氏（姓）族譜」「風俗習慣（民族の慣習）」「宗教信仰」「民族政治」「民族経済」「文化芸術」「民族教育」「科学技術」「民族体育」「医療衛生」「文物古跡」「人物」に分けられる。

第1章「概況」では、7世紀中国へのアラブ到来の史料紹介もあるが、主として1980年代の瀋陽回族人口の分布、回族の習慣や改革開放以後（1978～）の瀋陽回族概況について紹介する。

第2章「回族の来源」では、第1節で中国回族の形成について紹介をし、第2節は瀋陽回族の由来を元代、明代、清代に分けて、考察する。

第3章「人口分布」では、まず1953年から1982年までの瀋陽回族人口の増加率を示し、次に節ごとに1910年、1953年、1964年、1971年、1982年、1986年、1990年の瀋陽回族の人口データを詳しく掲載する。

第4章「姓氏（姓）族譜」では、第1節に1980年時点で瀋陽に在住している119家回族の姓氏が紹介されている。第2節では、回族苗字由来の歴史が述べられ、最後の節で、上記119家回族の中の11家（族）の家譜、宗譜の原文が掲載されている。

第5章「風俗習慣（民族の慣習）」では、回族言語（アラビア語とペルシア語の単語、特定漢語、古詞、徽宗語、商業暗語）について示すほか、子供の出産、飲食、婚姻（とその儀式）、葬式、禁忌、記念日（節日）、呼称と礼儀、回族の標識と売店の看板という9つの方面から、それぞれ瀋陽回族の慣習について、紹介する。

第6章「宗教信仰」では、第1節は、回族が信仰するイスラーム教とその教義について、簡単な説明のあと、瀋陽および瀋陽周辺のいくつかの清真寺に関する歴史・現状を紹介している。その後、満洲国時代における瀋陽ムスリム社会の実態を簡単に述べ、さらに、文化大革命時代および共産党第十一期第三回中国全体会議<sup>68</sup>（1978年12月18～1978年12月22日）以後の瀋陽イスラーム社会について、簡単に報告がある。

第7章「民族政治」では、元代から、明代、清代、軍閥統治時期、日偽統治（満洲国）時期、解

---

<sup>68</sup> 『日本大百科全書』は、第11期第3回中国全体会議(1978)について、「中国共産党大会（5年に一度開催）で選出された中央委員と中央委員候補らによる3回目の党中央委員会全体会議。経済運営方針などについて話しあう。中央委員らの1期5年の任期中には、計7回の中央総会が開かれるのが一般的である。一中全会と二中全会は、それぞれ党と政府の人事を決めることを目的とし、三中全会で、新指導部の中長期的な国家運営の基本方針が決められるため、中国の針路を決めるもっとも重要な会議の1つとして注目されている。1978年の第11期三中全会では、鄧小平(とうしょうへい)が主導して改革開放路線を決定した。」と説明している。また、この会議で文化大革命期の誤りを清算し、改革開放という政策を制定し、現在の中国の特色を持つ社会主義市場経済の建設を導いた。（小学館1994『日本大百科全書』[改訂版]小学館。）

放戦争時期そして解放後という7つの時代別に、それぞれの社会・政治状況について概説される。

第8章「民族経済」では、第1節は瀋陽における回族の農業経済、すなわち牛の販売実態の考察。第2節は、清末から1949年までの瀋陽回族都市商業の実態紹介と1980年代における清真飲食業の考察、及び1990年時点の瀋陽回族飲食店のリスト。最後の第3節は中華人民共和国成立後の少数民族経済発展に関する政府側の政策を簡単に説明する。

第9章「文化芸術」では、第1節は瀋陽回族における文化の場と文化機構の紹介（奉天第一商場—興遊園、回民文化館）。第2節で、民国期に発行された回族新聞である『醒時報』の経緯を紹介し、つづいて20篇の民間文学（伝説）を提示する。第3節には瀋陽回族の民間文化と芸術についての説明がある。第4節は、瀋陽回族の芸術文化界への貢献に関する詳しい記録と紹介。

第10章「民族教育」では、瀋陽および瀋陽周辺における民族教育を経堂教育（経小学、奉天回教文化学院、瀋陽伊斯蘭教経学院）、小学校教育（瀋河区回民小学、新民県回族小学、遼中県腰街子回族小学、瀋陽市回族振興教育基金会私立小学、基金会附属幼稚園）、中学校教育（瀋陽回民中学）という3つの部分に分けて、その歴史と現状を紹介する。

第11章「科学技術」では、改革開放以後における瀋陽回族による瀋陽の各科学分野への貢献に関する簡単な紹介。

第12章「民族体育」では、瀋陽における回族武術、摔跤（モンゴル相撲に似たもの）、屯子（中国武術の訓練の一種）の系統・名人・事件について、また、砂袋（摔跤の訓練の一種）、将棋、中国ゴマと羽根けりなどを紹介。

第13章「医薬衛生」では、回族の中国漢方医学に対する貢献を踏まえ、第1節で中華人民共和国成立前の、回族医薬衛生の機関とその状況について紹介がある。また、第2節には1949年以後の回族医療衛生の発展についての簡略な記述がある。

第14章「文物古跡」では、第1節で瀋陽市内にある3つの清真寺（南寺、北寺、東寺）の背景についての非常に簡略な紹介。第2節は南寺と北寺の扁額の文字について考察があり、第3節では、瀋陽及び周辺清真寺内にあるいくつかの碑文、または回族と関連する清代の文化財のデータを提示する。

第15章「人物」では、最初の節は瀋陽における各社会分野で活躍した回族18名の人物誌についての詳しい紹介。第2節は、瀋陽市政協回族委員リスト、瀋陽市第九、十次回族委員のリスト、瀋陽市第十、十一次人民代表大会回族代表その他の人物のリスト、瀋陽市回族幹部基本状況調査統計表が掲載されている。

かつて筆者は、拙著「瀋陽回族コミュニティ（ジャマーアティ）研究序論」<sup>69</sup>の中で、『瀋陽回族志』の資料批判を行った。その結果、『瀋陽回族志』は現段階までの瀋陽地域における回族研究にとって、最も詳細な公式資料であることに間違いはないが、具体的にみると、この資料は構成の学術性と史料提供の信頼性や密度が低く、すなわち史料の出所が不明なものが多く、大きく改善改訂する余地があることがわかった。

原則的な問題とすれば、民族誌は、民族の存在に対してなによりも事実にもとづく客観的な歴史を提供するという原点に立つことが必要である。具体的な方法に関しては、瀋陽回族に関する文史資料を今後新たに作成する際には、現地の民間資料を利用すると

<sup>69</sup> 金博諒 2013, pp. 19—34。



もに、かつての新聞記事や関連する地域の文史資料を援用することが必要とされる。さらに、人類学的方法論を利用し、インタビュー調査によって十分に吟味されたライフヒストリーなども活用すべきである。要するに、『瀋陽回族志』は1990年当時の時代を背景とした編纂者の限界をもつものであったとすることができる。したがって、今後の瀋陽における回族文史史料を構築する際には、歴史を伝承する責任をもって、歴史を多方面から説明する必要がある。さらに、『瀋陽回族志』では考えられていないが、イスラーム関係の文史資料として、記録すべきものがある。例えば、イスラーム宗教信仰、宗教機関の状況（瀋陽イスラーム教協会）や瀋陽市内および周辺地域の清真寺に関する記録は、それらの一部を構成するであろう。

なお、『瀋陽文史資料第八輯』（1985）と『瀋陽回族志』（1996）のほかに、1980年に政府公認で設立されたムスリム団体である瀋陽伊斯蘭（イスラーム）教協会<sup>70</sup>が2012年に出版した『瀋陽伊斯蘭教志』（意見回収版）がある。この資料は、上記二書と違って、民族誌資料ではなく、イスラーム宗教誌である。こうして、この資料は、イスラームから瀋陽の回族を考察する際に有益なので、ここに少し詳しく、紹介しておく。本書の編輯説明によると、本書出刊の目的は次のようなものであった。

文史資料の作成は、単に歴史的記録をすることだけではなく、文明の伝承に重要な意味も持つ。1980年代に、中国国内においては、文史資料を作成する潮流があった。瀋陽伊斯蘭教協会も例外ではない。成立して3年目の協会は1984年3月の第二次代表大会の報告で、「これから、資料を収集して、瀋陽市伊斯蘭教教志を整理・編纂する」という意見を提出した。それは、その2年後の1986年7月に完成したが、なんらかの原因で出版することが出来なかった。その24年後の瀋陽伊斯蘭教協会成立30周年の際に、協会は新しい『瀋陽市伊斯蘭教志』を出版する決意をした。まず、本書を作成する目的は、瀋陽市伊斯蘭教教志がないという空白を補足することである。または瀋陽に関するイスラームの歴史を記録・伝承する目的も持つ。<sup>71</sup>

これを見ると、瀋陽のイスラーム教協会は強い意識をもって自分史をまとめようとする意図を持っていたと思われる。政府系の色合いの強い出版物であった『瀋陽文史資料第八輯』が、章ごとの関連も薄い、項目の羅列だったのに比べて、『瀋陽市伊斯蘭教志』では、次のように、かなり系統だった整理がされている。すなわち、第1章「イスラーム教の瀋陽への伝播」、第2章「瀋陽ムスリムの信仰と修行」、第3章「瀋陽ムスリムの礼俗と習俗」、第4章「清真寺（モスク）」、第5章「瀋陽市イスラーム教協会」、第6章「文物古迹、大事記、文件輯存」である。

これでわかるように、『瀋陽市伊斯蘭教志』は『瀋陽回族志』とも違って、主に宗教に関する記録が中心となっている。アラブ使節の唐到来やイスラーム伝播を紹介するだけでは

<sup>70</sup> 1980年11月13日、瀋陽市のムスリム代表は政府の「関心」をひく中で、瀋陽市南寺清真寺で「第一次瀋陽伊斯蘭代表会議」を開催した。会議を通じて、「瀋陽市伊斯蘭教協会」の設立に関する問題を討論し、即日成立と決定した。（瀋陽市伊斯蘭教志編写小組『瀋陽伊斯蘭教志』（征求意见稿）瀋陽市伊斯蘭教協会、2012、72ページ。）

<sup>71</sup> 瀋陽市伊斯蘭教志編写小組 2012、p. 1。

なく、瀋陽イスラーム教協会の内部情況、瀋陽及び周辺清真寺の歴史と現状、さらに文物まで記録されている。また、政府公認の政策実行という意味で、収集の強制力を持った「公的資料」という一面があるため、新しい人口統計や地域構成に関する資料の便利さや信頼性は個人研究が到底及ばないところがある。例えば、『瀋陽回族志』では結果的に記録されることのなかった1990年代、2000年以後の瀋陽ムスリム全体に関する新しい資料も大量に含まれている。

しかし、『瀋陽伊斯蘭教志』（意見回収版）は、筆者が2012年に入手した時点でも、公式出版になる前の段階、すなわち政府や編纂関係者の意見を収集する段階におかれていた。そのことからわかるように、筆者が見るかぎりでも本書には、欠点や不足部分が非常に多く存在している。特に、歴史資料に関する構成・引用や民間資料の有効利用は非常に乏しい。さらに、編纂者の文章構成力や内容の偏りなどの問題もある。

その後の2015年に、筆者はこの『瀋陽市伊斯蘭教志』の正式版を手に入れた。しかし、手に入ったのは独立した「瀋陽イスラームに関する宗教志」としての『瀋陽市伊斯蘭教志』ではなく、『瀋陽宗教志』（2013）の一部分として出版されたものである。その具体的な原因について、現段階まで筆者は解明していないが、今後の研究資料として、留意しておきたい。また、『瀋陽市伊斯蘭教志』の出版過程を通じて、イスラーム教という宗教の歴史についての書物が30年以上かけても正式出版に至らないという事実は確認しておくべきであろう。

### 3. 『満鉄調査資料（第26編）』

以上、『瀋陽文史資料（第八輯——瀋陽回回民族專輯）』（1985）と『瀋陽回族志』（1996）を本論の基礎資料として、その性格を検討した。この2つと『瀋陽市伊斯蘭教志』という資料の外に、遼寧省人民政府に属する遼寧省地方志の編纂機関が公開した遼寧省の書誌の目録<sup>72</sup>を見ると、清朝以後の地方志は日本語の書誌を中心としている。こうして、筆者はこれらの「日本語の書誌」、あるいは満鉄資料を検討し、その時代の奉天（現瀋陽）のイスラームに関する乏しい資料の中で、当時の奉天の回教徒に直接に関する記録を発見した。その資料は『満鉄調査資料（第26編）』の中の「満洲における回々教」（1924）<sup>73</sup>である。

日本の南満洲鉄道株式会社（満鉄）は、満洲を含む中国について、最も幅広い研究活動を実施した組織である。しかし、当時の奉天（現瀋陽）回教に関して、日本側による調査や研究は非常に不足していたように思われる。筆者は、遼寧省の図書館、遼寧省檔案館、日本国会図書館や東洋文庫などの諸学術機関において、莫大な満鉄資料を検索した上で、この『満鉄調査資料（第26編）』を掘り起こした。まず、この資料の性格について、検討してみる。「満洲における回々教」の凡例には、この書の刊行の経緯が次のように説明されている。

#### 凡例

一、満洲に於ける回教に就ては今迄に形を成して研究されておるものはない、其れ位回教てう立場

<sup>72</sup> 「遼寧省中文旧志目録」 [http://www.lnsdfz.gov.cn/lmjfz/lnsjfzml/201111/t20111130\\_764651.html](http://www.lnsdfz.gov.cn/lmjfz/lnsjfzml/201111/t20111130_764651.html)

<sup>73</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編 1924。

から見る時は特別に取立つる程のものでない。只満洲でう地理的見地から見る時今後日本人との關係に於て輕視し得ざるものがあるので此處に特別に調査し發表した次第である。

二、始め此の冊は單行の冊として出版する積りで着手したものだが公にし得ざる處が生じ其の一部を別刷りにしたので頁數の關係上餘りに小冊子になるので便宜上太宰氏の支那回教徒研究の後部に添附する事にしたが初の着手目的が異なるので同氏のものと幾分重複する處も生じ體裁上おかしき處あるも以上の理を御含みを乞ふ。

以上の説明から見ると、この研究は 20 世紀初頭の満洲の回教研究の空白を埋めるための調査であることがわかる。一方、この調査は満鉄による満洲の回教徒（現回族）に関する初めての基盤調査であるかもしれないが、そこまで多くの資料を集めることができなくて、独立の研究調査書として發表することができなかった。しかし、瀋陽の回族研究の一部として、その意義は大きかった。なぜなら、本書は単に満鉄資料を通じて、その時代における瀋陽の回族史を補足することだけではなく、政権、時代や社会などの要素を超えて、イスラームの瀋陽回族コミュニティに対する意義を検討することができるからである。本稿は、この資料を利用し、これまで中国側資料の中で、20 世紀初頭の満洲の回民・回教の歴史に関する疑問や空白などの問題を検討したい。

#### 4. 「奉天の回教寺(上、下)」と「満洲回教寺建築史の研究」

以上の満洲におけるイスラーム研究と違って、本論筆者は、『満洲建築協会雑誌』という建築学の資料を発見した。だが結論から言うと、この資料はこれまでの瀋陽回回営内の清真寺に関して、最も詳細な資料と評価することが出来る。その内容具体的な要素から見ると、まずこの資料は、これまでの満洲の回教に関する研究においては、使われたことの無い資料であり、また、これらの資料は、中華人民共和国成立前の瀋陽の清真寺に関する空白を埋めるし、当時の回回営の実態の一部を解明することができるようになる。さらに、文化大革命によって消滅した清真寺の復元にとって、最も重要な根拠となるだろう。

まず、『満洲建築協会雑誌』の性格について、日本建築学会図書館のホームページには以下のように概述されている。

『満洲建築協会雑誌』（後に『満洲建築雑誌』と改題）は、1920 年に関東都督府技師の松室重光を初代会長として設立した満洲建築協会が、1921 年に創刊した雑誌である。内容は、『建築雑誌』に類似し、満洲の建築に関する話題だけでなく、材料、積算、設備、工法、災害報告など、多様な内容を集めた当時の貴重な情報源となっている<sup>74</sup>。

このように、主に建築技術を総括する『満洲建築協会雑誌』の中で、瀋陽の回回営内の清真寺について記録したのは、「奉天の回教寺(上)（満洲回教寺建築の研究七）」<sup>75</sup>、「奉天の回教寺(下)（満洲回教寺建築の研究八）」<sup>76</sup>と、「満洲回教寺建築史の研究」<sup>77</sup>という 3 つ

<sup>74</sup> <http://strage.aij.or.jp/dal/senzen/mansyukenchiku.html> (最終閲覧: 2016 年 10 月)

<sup>75</sup> 村田治郎 1928。

<sup>76</sup> 村田治郎 1928。

の資料である。

3つの資料とも、その作者は、村田治郎という日本の建築家である。また、「満洲回教寺建築史の研究」(1930)という論文の内容から見ると、「満洲回教寺建築史の研究」は、これまで掲載された満洲地域内の各回教寺建築を総括して再編集されたものである。その中で、瀋陽の回回営内の清真寺と関連する内容は、1928年に掲載された「奉天の回教寺(上)(満洲回教寺建築の研究七)」と「奉天の回教寺(下)(満洲回教寺建築の研究八)」から縮略されたものである。そのため、内容が重複しないように、本論は「奉天の回教寺(上)(下)」を中心として利用したい。しかし、「奉天の回教寺(上)(下)」の資料の概要を把握するために、縮略版である「満洲回教寺建築史の研究」の「概要」<sup>78</sup>の内容を見ておく。

## 概 要

本篇は南満を中心とせる回数寺實例二十五を實地調査して得た総合的結論である。第一章序論では、先づ回々なる文字の説明をなし、次いで支那本土に於ける回教寺普及史を一瞥して、寺名、特に清真寺とする所以を搜ぐり、満洲に於ける回教寺所在地竝に數を概略示した。第二章史論の中の満洲回教寺沿革表は調査せる各寺の沿革を表示したもので、全調査の史的考察を壓縮したものとも言ふべく、爾後の節は何れも回教寺の文化史的綜合考察で、本篇の中最も特色あるものと考えへる。満洲の回教が清朝初期よりの支那移住民と共に傳へられたことそれは奉天、吉林、寧古塔の如き政治的中心より漸次周邊に擴まつたこと、そして回教寺の設立が時代の下ると共に益々増加したこと、寺の建築重修は三十年前後毎に行はれ、各地の教徒が相互補助を行ふこと等を説き、最後に功勞者左寶貴氏を擧げた。第三章では建築配置について論じ、方位が偏する傾向あることを指摘し、第四章では八種の建築物に關する通性を考へたのであるが、就中、大殿と塔とについて他建築に見ない諸點を擧げて考察した。第五章建築細部特性論は二十一項に別れてゐるが、多くのものは他の建築に類似し、ミハラブ、ミンバル、色彩の三項に特色が濃く、中でも前二項は回教寺にのみ見得るものであるから多少系統史的所感をも述べた。第六章では雜然として無系統のやうに見える満洲回教寺にも、多少同一系統と思はれるものが存在することを指摘した。以上考察の要點を列擧して所感を述べたのが第七章結論である。

以上の内容からみると、この一連の調査は建築調査を中心としたものであるが、満洲地域内の各地の清真寺の歴史沿革に關する資料も同時に整理している。そこで、「満洲回教寺建築史の研究」の「目次」<sup>79</sup>で、本資料全体の内容を見ておく。

## 目次

### 第一章 序論

#### 一 回々教と回回

#### 二 支那に於ける回教寺史略

##### A 普及史

---

<sup>77</sup> 村田治郎 1930。

<sup>78</sup> 村田治郎 1930, p. 1。

<sup>79</sup> 村田治郎 1930, p. 2。

B 寺名、清真寺	
三 満洲に於ける回教寺所在地	
第二章 史論	
一 緒言	
二 満洲回教寺沿革表	
三 移住民と回教寺建設	
四 普及経路	
五 回教寺の伸展期	
六 回教寺の重修	
七 功績者、左賓貴	
第三章 建築配置論	
一 均齊的配置	
二 近似均的配置	
三 非均齊的配置	
四 特殊非均齊的配置	
五 方位	
六 水房、客廳の位置	
七 講堂の位置	
第四章 各種建築特性論	
一 大門、二 大殿、三 塔（高樓）、四 水房（沐浴室）、五 井亭、六 講堂、七 客廳、八 廁所	
第五章 建築細部特性論	
一 立面、二 平面、三 屋蓋、四 小屋組、天井、五 屋瓦、六 屋上の瓦製品、七 軒廻り、八 捶、九 斗栱、十 柱、十一 柱上持送り、十二 柱礎、十三 壁、十四 開口 十五 扉、十六 窓 十七 床 十八 ミハラブ(Mihrab)、十九 ミンバル(Minbar)、二十 裝飾法、二一 色彩	
第六章 建築系統の一考察	
一 建築配置による系統	
二 大殿、塔による系統	
三 總括	
第七章 結論	

以上の「目次」から見ると、本資料の主な内容は、確かに「概要」で述べたように、建築構造を中心としたものであるが、第一章と第二章の内容から見ると、回民の歴史と満洲地域内の清真寺の歴史を論じている。そのため、本稿、特に本項で清真寺を考察する際に、「奉天の回教寺(上)(満洲回教寺建築の研究七)」と「奉天の回教寺(下)(満洲回教寺建築の研究八)」の中の清真寺の歴史沿革について、主に利用することになる。

また、1930年の「満洲回教寺建築史の研究」と1928年の「奉天の回教寺(上)(下)」の

関係について、前者の「序」<sup>80</sup>の部分で、以下のように述べている。

## 序

支那回教建築史を攷究せんとして先づ當面する難は、信賴すべき記録文獻類の稀少又は絶無のために、到底系統史的考察を下し得ないことであらう。特に満洲に至つては、殆んど全く暗黒界である。此の難關を突破するには、唯一の方法あるのみと思はれる。それは徒らに勞多くして功擧らないものであるが、個々の回教寺を精密に探査して根本資料を蒐集し、それによつて綜合的研究を行ふ方法である。本篇は斯る態度によつて得た貧しい收穫である。

その結果たるや、もとより未完成品の一語に盡きるのであるが、しかし僅少なながらも、満洲に於ける回教寺建築史のみでなく、回教史の一面が始めて世の中に浮び出たやうに思はれる。此の時に當つて益々遺憾とするのは、支那各地の調査が出来てゐないことであり、その爲に支那全般から見た建築の系統史的考察は遂に後日の問題とせざるを得なかつた。

本調査は、大正十五年の夏着手したまゝ一時中止してゐたのを、翌昭和二年の夏から同三年春にかけて大綱を完成し、昭和四年再調査及び補遺を試み、茲に第五年を迎へて漸くこれだけの結論を得たのである。個々の回教寺實例は既に過半を本誌上で發表したから、今改めて繰り返し又は追補することを止めた。

しかし、何と言つても筆者の調査は、公務の餘暇、生活費の剩餘を以て行ふものであるから、遅々として進まず、且つ調査範圍も略々満鐵沿線に限られ、結局満洲全般に及ばない不満足なものとなつてしまつた。只顧みて多少慰安を覚えるのは、明治三十八年、工學博士伊東忠太先生の一行が調査せられて以後、久しく捨てゝあつた問題を取り上げて、とにかく綜合的考察を行なひ得た點である。

執筆を了るに當り、回教に關して教示を賜る所多かつた北平の川村狂堂老師に盡きせぬ謝意を表したい。尚挿入の寫眞は大半、筆者の撮影にかゝること勿論であるが、その中の若干は宇野木眞二君の助力によつたものである。記して感謝の意を表する。

既に本誌で發表したものは、今から見れば總て訂正増補の必要を感じずるもののみであるが、發表順序に従つて題名を列記すれば

吉林の回教寺	(満洲建築協會雜誌第七卷第十號)
安東、鳳凰城の回教寺	(同右、第十一號)
本溪湖、火連寨の回教寺	(同右、第十二號)
熊岳城、蓋平、海城の回教寺	(同右、第八卷第二號)
營口の回教寺	(同右、第三號)
遼陽の回教寺	(同右、第六號)
奉天の回教寺(上、下)	(同右、第七卷第八號)
鐵嶺清真寺	(同右、第十二號)
開原、長春の清真寺	(同右、第九卷第二號)

以上は、『満洲建築協會雜誌』の中に發表された、回教建築すなわち清真寺を考察する主

<sup>80</sup> 村田治郎 1930, p. 3。

な考察過程と、奉天（瀋陽）の「回教寺」に関する3つの資料の間の関係を説明したものである。この資料は、これまで奉天（瀋陽）における回族研究において、全く利用されなかった『満洲建築協会雑誌』の性格、考察過程や主な内容は以上のとおりである。本論は、瀋陽の回回営内の清真寺の歴史を考察する際に、積極的に利用してよいと考える。

以上本章は、回族研究の意義、先行研究、本論で利用する先行資料を検討した。次章では、回回営の歴史を中心として考察する。

## 第2章 瀋陽回回營の形成と発展

先行研究をあえて振り返るまでもなく、回族は中国の中で最も分布が広い少数民族であり、それぞれの地域で回族文化を形成している。また、第1章第3節第1項において述べたように、回族社会の研究で中心的な課題として選択されているのは、ジャマアティ、すなわち回族が集住するコミュニティをとりあげ、その実態を明らかにすることである。特色を抽出し、コミュニティの本質を探るため、かつ回族文化を地域密着文化として捉える立場から、本章では、瀋陽という地に焦点を合わせ、現地における回族のコミュニティの歴史、すなわちイスラーム文化と中国文化の衝突、摩擦から理解、共存へのプロセスについて述べることで、本論における研究対象の具体像を提起し、回族のコミュニティの詳細な姿に迫りたい。

以下、本章の第1節および第2節では、回族の居住形態および瀋陽に関する基礎情報を概観する。次に、第3節の最初は、現在の瀋陽回族のコミュニティの構造、特色を考察し、続いて、コミュニティの中心である清真寺（モスク）に関する歴史を整理する。第4節では、元代から現在に至るまでの瀋陽の回族のコミュニティの歴史を整理・検証・記録し、年表および人口変化の図表を作成して、できる限り正確な歴史を叙述したい。

### 第1節 回族の居住形態

本節は、中国における回族の分布状況や居住形態の特色について検証し、一般状況を掌握しておこう。中華人民共和国が成立する前に、中国共産党は連邦制国家を構想したことがあったが、この構想は、中華人民共和国成立後に採用されることはなかった。その代わりに、「民族区域自治」という概念が導入された。この民族区域自治政策に関しては、「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」<sup>81</sup>（1952）および「中華人民共和国憲法」（1954）の中の一部の規定に基づいている。その主な内容をまとめると、国家統合の目的に基づき、少数民族の集住地域と中国の一般的地域とを区分し、言語、風俗習慣や宗教などに関してある程度の自治権を与えるというものである。また、漢族は中国共産党の主体であるが、少数民族地区の地方政府の官員は少数民族から採用することと、少数民族学校内の少数民族言語教育などの条例も制定した。

「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」は1952年から実施された。その30年後の1984年5月31日に、中華人民共和国第六回人民代表大会常務委員会第二次会議で、かつての「綱要」を修訂した「中華人民共和国民族区域自治法」が通過し、同年10月1日から、施行された。さらに、その後の2001年2月28日に、国内情勢、政治や環境問題などの変化に従って、全国人民代表大会常務委員会第二十次会議で、「中華人民共和国民族区域自治法」が修訂・公布・施行された。

こうして、1984年から、中華人民共和国民族区域自治に関する規定は、「綱要」から法律へ変化したことに留意すべきである。その本質を解釈すると、「中華人民共和国民族区域自治法」は、「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」からの転換により、法律としての約

---

<sup>81</sup> 中華人民共和国民族区域自治実施綱要は、1952年2月22日政務院第125次政務会議で通過し、1952年8月8日中央人民政府委員会第18次会議が許可し、1952年8月9日に、中央人民政府は公布・実施し始めた。（『人民日報』1952年8月13日。）



束性が高くなり、政策としての強制性も高くなったのである。

次に、少数民族地域に関する政策作成の状況の実態を考察してみる。現在、中国の省レベルの民族自治地域、いわゆる自治区は、内モンゴル自治区（1947 年成立）、新疆ウイグル自治区（1955 年成立）、広西チワン族自治区（1958 年成立）、寧夏回族自治区（1958 年成立）、チベット自治区（1965 年成立）の 5 つである。省の下位の行政地域として、30 個の自治州が存在し、さらに下位の県（内モンゴルは自治旗）の自治地域は 120 個以上である。

この中、回族の自治地域は 14 カ所ある。つまり、省級（日本の県にあたる地域）の寧夏回族自治区のほか、州級（市にあたる行政単位）の自治地域は、甘肅省臨夏回族自治区と新疆ウイグル自治区昌吉回族自治区の 2 つ、県級（市以下、村以上）の自治地域は、河北省孟村回族自治区と大廠回族自治区、甘肅省の張家川回族自治区、青海省の門源回族自治区、化隆回族自治区、民和回族土族自治県、大通回族土族自治県、新疆ウイグル自治区の焉耆回族自治区、雲南省の巍山彝族回族自治県、貴州省威寧彝族回族苗族自治県の 11 カ所である [図 1 参照]。



図 1 「回族自治地域分布図」 (Google map に基づき、筆者作成)

上述したように、回族はいくつかの自治地域を持つが、「大分散、小聚居」、あるいは「大分散、小集中」という居住スタイルを取っている。すなわち、回族民衆が中国の中に広く分散し、そして、各地で集中して生活するという意味である。

回族の「大分散」という居住スタイルには、「散居」という表現の仕方も存在する<sup>82</sup>。アメリカの学者である Dudley L. Poston, Jr. および中国人学者の Shujing (舒静) は、社

<sup>82</sup> 王正偉 1991, pp. 263-290。

会統計学の方法 (diversification index) を利用し、中国少数民族の分布状況を分析した<sup>83</sup>。その結果、回族は中国の 55 種類の少数民族の中でも、最も広範囲に分散して居住するとした。また、中国の第五次人口調査資料で、各行政区分の少数民族人口統計を計算すると、回族は、中国本土（調査は、台湾の原住民の一部を中国「高山族」と考えた）の少数民族の中で、最も広い範囲に分布する少数民族であることがわかる。また、回族の「大分散」という居住スタイルにおいて、田坂<sup>84</sup>と白寿彝<sup>85</sup>の歴史学的な分析からみると、このような形態がとられるようになった理由として、イスラーム伝来の経路の多様性、元代の「色目人」軍隊の広域展開やスーフィー主義の広い宣教活動があげられる。

「大分散」に対する「小聚居（小集中）」について説明する。回族は、イスラームに従う民族の 1 つであり、一般的にイスラームの宗教的タブーに十分な注意を払って生活している。そのため、ムスリムではない漢族や他の少数民族と生活をともにすると、不便が生じる場合があると考えられる。こうして、非ムスリムの生活と距離を持ち、自律的で落ち着いた日常生活を送るために、清真寺を中心とするコミュニティを形成するという傾向がある。第 1 章第 3 節の回族に関する先行研究の研究総論の初頭で、「ジャマーアティ」の意味について検討した。中国の中で、主なジャマーアティは、各地域内に集住する回族のコミュニティを指した。この集住する生活様式を、「小聚居（小集中）」とすることができる<sup>86</sup>。

以上、中国における回族の分布、および集住地域内の居住様式の概要を述べた。とりわけ重要なのは、各地域において回族が集中して居住するコミュニティを形成するという歴史的現象である。次節では、瀋陽の回族のコミュニティを考察する前提として、瀋陽の歴史背景および社会状況について見ておきたい。

## 第 2 節 瀋陽について

瀋陽の地域誌である『奉天通志』（1983）と『瀋陽県志川』（1989）<sup>87</sup>によると、1625 年に清太祖は首都を遼陽から瀋陽へ移した。1634 年、清太宗皇太極（ホンタイジ）は瀋陽を盛京という名称に改めた。1644 年、首都が北京に移された後、瀋陽は「陪都」と改められた。1657 年、清朝は「奉天承運」の意味を込めて、瀋陽に奉天府を設置した。それ以後、瀋陽は奉天と呼ばれるようになった。近代になり、中華民国の「軍閥混戦」時代には、瀋陽は大軍閥である張作霖の活動拠点であった。新中国の成立後も、瀋陽は東北地域の政治、軍事の中心都市であった。このような歴史的経緯から、瀋陽は中国東北地域の文化、政治の中心といえる都市であり、現在は遼寧省<sup>88</sup>の「省会」（省の行政府の所在地）である。

<sup>83</sup> Dudley L. Poston, Jr. & Shujing 1992, pp. 573–600.

<sup>84</sup> 田坂興道 1948。

<sup>85</sup> 白寿彝 1982。

<sup>86</sup> 澤井は「小聚居」を「ジャマーアティ・モデル」（小地域共同体）と表現している（澤井:2009）。

<sup>87</sup> 丁世良・趙放 1989, pp. 4–46, pp. 46–49。

<sup>88</sup> 中国外交部の対外公布資料の遼寧省部分によると、遼寧の面積は 14 万 5900km<sup>2</sup>、人口は 4315 万人、人口密度は 295.75 人/ km<sup>2</sup> である。平均寿命は 75.36 歳で、地域総生産（GRP）は 1 兆 3461 億 6000 万元にのぼる。主要な農産物は米、小麦、トウモロコシ、大豆で、耕地面積は 820 万 1000 ヘクタールである。主要な工業は航空機、自動車、鋼鉄、プラント製造で、鉄道総距離は 4200.8km、道路総距離 9 万 8101km

近代の瀋陽は、満洲国時代（当時は奉天）から、東北三省の経済、および工業の中心地であり、中華人民共和国成立後も、中国重工業都市の代表として発展しつつあった。1978年から始まる改革開放後、中国は計画経済から市場経済へ変換し、かつ1990年代の重工業企業構造の改造の影響で、重工業を中心とした中国東北地域の都市は大きな衝撃を受けた。この状況を改善するため、中国政府は、2006年の第十一回の「五年計画（日本語では五ヶ年計画）」から「振興東北老工業基地」という計画政策を出した。この「五年計画」は、中国政府にとって、最も重要な計画の1つであり、中華人民共和国成立後、中国政府はソビエト連邦にならって、1950年代から「五年ごとの国民経済と社会発展計画」を導入したものであり、これがすなわち「五年計画（2006年第十一回からは『五年規画』に変更）」である。瀋陽市統計局の2008年データ<sup>89</sup>によると、瀋陽にある5226の工業企業のうち、3609が重工業企業であり、工業総生産額65,295,162万元のうち、重工業の生産額は48,527,497万元を占めた。こうしてみれば、瀋陽は一貫して「東北老工業基地」であることに変わりはない。

また、2011年の「第十二回五年計画（略称十二五）」の都市に関する部分では、2、3線級都市の発展が強調された<sup>90</sup>。その時、瀋陽も、この2、3線級都市に分類されていた。2010年の瀋陽市統計局の資料<sup>91</sup>によると、瀋陽市の総世帯数は2,839,413戸、総人口は8,106,171人となっている。全市（周辺地域の人口も含む）の人口密度は554人/km<sup>2</sup>、そのうち、市内の人口密度は1,467人/km<sup>2</sup>、周辺地域では217人/km<sup>2</sup>である。近年、都市開発が拡大されつつあり、周辺の撫順市や鉄嶺市が瀋陽市に区として編入された。

「振興東北老工業基地」を含めて中国の「五年」政策計画を見ると、中国東北地域の中心である瀋陽は、これから注目されるものとされ、中国東北地域における2、3線級都市発展のモデルとなることと考えられる。さらに、瀋陽は2013年に開かれた第十二回の「全運会」（中華人民共和国体育大会）の中心都市となり、瀋陽の都市全体が土地開発、都市建設や社会行政など様々な問題に直面した。これらの問題は、主として都市化過程の中の問題であり、発展途上国である中国にとって、地域を選ばずどこにでも起きる問題である。また、少数民族問題を考える際にも、現在の瀋陽の状況は有意義な研究対象の1つとなることについては、次に記すごとくである。

2000年と2010年の中国における人口のセンサスで、瀋陽の回族の人口状況を概観してみる。2000年の中国第5次センサスによると、中国総人口は1,242,612,226人、このうち漢族は1,137,386,112人、回族は9,816,805人である。瀋陽市の少数民族人口は統計

---

となる。主な鉱産物は鉄、マンガン、石油、天然ガスで、輸出額は420億6000万ドルである。人口10万人当たりの大学生数は2498人である。外国人旅行者数241万9000人に達した（2009年）。

<sup>89</sup> 瀋陽市統計局ホームページ 工業部分<http://www.sysinet.gov.cn/web/tjnianjian/2009sy/04gy1.htm>（最終閲覧：2010年12月）

<sup>90</sup> [http://www.gov.cn/2011lh/content\\_1825838.htm](http://www.gov.cn/2011lh/content_1825838.htm)（最終閲覧：2011年9月4日）2線級都市は省会都市を指す。3線級都市は一般的な市を指す。

<sup>91</sup> 瀋陽市2010年第6次全国人口普查主要数値公報：<http://www.sysinet.gov.cn/news.aspx?id=5706>（最終チェック2011年7月19日）

705,044人で、全市人口の9.79%を占める。瀋陽には41<sup>92</sup>の少数民族が住んでいる。その内分けは、満洲族が383,376人(54.38%)、朝鮮族が94,600人(13.42%)、モンゴル族が94,530人(13.41%)、回族が72,811人(10.33%)、シボ族が54,628人(7.75%)、その他の少数民族が5,099人(0.72%)である。また、2010年の第6次人口センサスによると、中国総人口は1,332,810,869人、そのうち漢族は1,220,844,520人、回族は10,586,087人である。遼寧省の総人口は43,746,323人、その内分けは、漢族が37,103,174人(84.8%)、満洲族が5,336,895人(12.2%)、朝鮮族が239,537人(0.5%)、モンゴル族が657,869人(1.5%)、回族が245,798人(0.6%)、シボ族が132,431人(0.3%)である。瀋陽市の総人口は8,106,171人、その内分けは、漢族人口7,340,343人(90.1%)、満洲族430,565人(5.3%)、朝鮮族92,114人(1.1%)、モンゴル族108,413人(1.3%)、回族71,403人(0.9%)、シボ族55,759人(0.7%)である。

2010年のセンサスのデータは、2000年のセンサスのデータと比べると、回族人口数および人口の比率に大きな変化はなかった。以上のデータを具体的に見ると、中国の少数民族人口は、約総人口の10%弱を占め、瀋陽市の少数民族人口も、約総人口の10%弱を占める。瀋陽の回族人口の比率は、中国全国の回族人口の比率および遼寧省内の回族人口の比率と比べると、殆ど同じであり、そこから見ると、瀋陽における回族研究は、中国国内の回族社会の縮図とも言えよう。

瀋陽市市内には、8つの少数民族コミュニティ(都市内の集住地区)、8つの民族郷(農村にある村より大きい、市より小さい行政地域)、268の民族村(農村にある村レベルの行政地域)が存在している。瀋陽の市民のあいだで特に知られている少数民族コミュニティは、満族の「満洲族村」、朝鮮族の「韓国城」と「朝鮮街」、回族の「回回営」である。さらに、1990年代に瀋陽市政府は当時の観光地である棋盤山に、「華夏民族村」という多民族観光地域を設置した<sup>93</sup>。こうして見ると、現在の瀋陽は、経済、工業や都市発展の外に、多民族の一面ももつことは明らかで、中国東北地域の都市内の少数民族を検討する際に、有効な地域と見られる。

一方、瀋陽は中国でも重要な「軍事重地」(軍事の中心地域)として位置付けられており、瀋陽軍区<sup>94</sup>の中心都市である。瀋陽市内外には、現在も多くの「軍区」(軍管区)と国家安全組織が設置されている。瀋陽軍区は、遼寧、吉林、黒龍江(東北三省)および内モンゴルの一部地域も管理下に置いている。

瀋陽の地理位置をここであらためて確認しておく、図2~4のとおりである。

---

<sup>92</sup> 満洲族、朝鮮族、モンゴル族、回族、シボ族、トゥチャ族、チワン族、イ族、ミャオ族、ウイグル族、チベット族、ダフル族、プイ族、トン族、白族、リー族、シャ族、ヤオ族、トゥー族、カオシャン族、羌族、エヴェンキ族、ハニ族、コーラオ族、オロス族、ホジェン族、タイ族、カザフ族、ムーラオ族、オロチョン族、水族、ナシ族、ロツバ族、マオナン族、チンポー族、サラール族、キルギス族、キン族、ラフ族、塔吉克族、トンシャン族。

<sup>93</sup> 瀋陽民族宗教(瀋陽市民族事務委員会、瀋陽市宗教事務局)

<http://www.symzzj.gov.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=14> (最終閲覧: 2011年7月14日)

<sup>94</sup> 中国の軍事行政区画は、北京軍区、瀋陽軍区、南京軍区、広州軍区、済南軍区、蘭州軍区、成都軍区に分かれている。



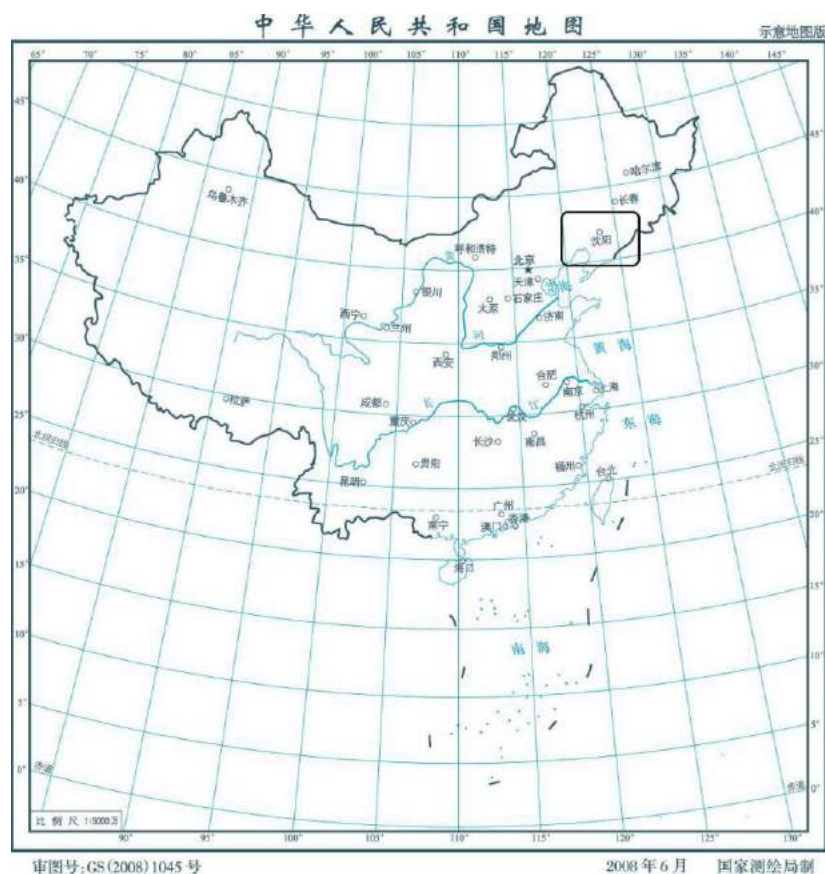


図2「中华人民共和国地図」<sup>95</sup>（筆者注：□内は瀋陽）



図3「遼寧省地図」<sup>96</sup>（「天地図」<sup>97</sup>より筆者作成）

<sup>95</sup> 国家測絵局 2008 「中华人民共和国地図」（1:5000万 省会示意地図版），国家測絵局。

<sup>96</sup> 主辦単位：遼寧省測絵地理信息局、技術支持：遼寧省基礎地理信息中心「天地図・遼寧（2015）」（甲測資字21002027）（遼ICP備05004383号）遼S（2013）35号。

<sup>97</sup> 天地図は、中華人民共和国国家測量局（国家測絵局）により提供されている、一般ユーザー向けの世界



図4「2016年瀋陽市行政区分図」<sup>98</sup> (wikipedia行政区分図<sup>99</sup>より筆者作成)

このように、瀋陽は中国東北地域、遼寧省の中心部であり、主な行政区としては、和平区、瀋河区、大東区、和平区、皇姑区、鉄西区、東陵区、于洪区、蘇家屯区、新城子区、新民県、遼中県がある。

要するに、瀋陽は重工業産業の都市、地域の軍事中心であり、中国東北の都市発展を考察する際に、注目すべき対象である。さらに本論で重要なことは、中国東北地区の民族事情を反映する多種類の少数民族が瀋陽に暮らし、少数民族コミュニティが形成されていることである。特に瀋陽には回族の「回回営」という集住地区があることを強調しておきたい。

その瀋陽回回営について、次節では集中して議論していくことにする。

### 第3節 瀋陽回回営

地図を利用した地理情報検索サービス。英語名は MAPWORLD。

<sup>98</sup> 以上の図6は、現在(2016年)の瀋陽市政府に属する各行政区である。まず、中華人民共和国成立後、瀋陽市内の行政区の変化について、1956年8月4日、北郊区は大東区の一部となり、西郊区と南郊区は蘇家屯区の一部となった。また、1959年2月18日、南市区は瀋河区の一部となり、北市区は和平区の一部となった。さらに、2006年10月8日、新城子区は瀋北新区に改称した。

<sup>99</sup> <https://zh.wikipedia.org/wiki/Template:沈阳市行政区划图>

本稿の第1章の部分で述べたように、先行研究と先行資料を総体的に見ると、瀋陽だけではなく、中国東北地域の回族に関する研究や資料は、ほかの地域に比して極めて少ない。本論は、この地域における回族研究の空白を補足するだけではなく、あまり取り上げられてこなかった回族の生活実態を整理・紹介し、地域における回族の存在のしかたの多元性について考察しようとする。

本節ではまず、瀋陽回族のコミュニティの構成のされ方——これをさしあたり地域構造と呼んでおく——を考察し、その次に、清真寺（モスク）に注目して地域コミュニティの特色を検討する。

## 第1項 瀋陽回回営の地域構造

遼寧省瀋陽市（旧奉天市）は、中国東北三省（旧満洲国を中心とする地区）における他の中心都市である長春（旧新京）、ハルビンと異なり、唯一現在に至るまで回族の集住地区を維持してきた珍しい都市である。また、中華人民共和国成立後に地方史や地域ごとの民族誌（例えば『瀋陽回族志』<sup>100</sup>や『吉林回族』<sup>101</sup>）、又民族ごとの民族誌（例えば『瀋陽朝鮮族志』<sup>102</sup>や『瀋陽蒙古族志』<sup>103</sup>）が編纂される中で、瀋陽の回民に関する文献が旧満洲国地域の他の都市に関する叙述の手本となったこと<sup>104</sup>は、その意味の大きさを示しているといえる。

これまで瀋陽回族に関する出版物の中で、瀋陽回回営の地域構造に関するものは見当たらなかった。例えば、本稿で使用する『瀋陽文史資料第八輯』や『瀋陽回族志』などの資料の中でも、瀋陽回回営内の町構造については、ごくわずかな記録しか見いだせない。中華人民共和国成立前の瀋陽回回営について、満鉄資料もその地域を奉天市の一部分としてのみ記録し、具体的な説明は十分でない。中華人民共和国成立後においては、農村、都市を問わず、町に関する観測、整理や記録のすべては、政府機関を中心として管理されており、筆者としては現段階までに、かつての瀋陽回回営に関する官公資料すら入手することができなかった。したがって、本稿においては、筆者自身のフィールドワークや筆者の収集による民間資料を中心として、回回営の地域構造を検討するものである。

### 1. 「西関二十五条街道」

2000年前後、瀋陽回回営は一連の土地開発を経て、コミュニティの範囲面積が半分以下になった。上述したように、瀋陽回回営の地域構造に関する先行研究材料は見当たらず、かつ政府側の行政的な資料も入手することができない状況であったが、筆者は、フィールドワーク<sup>105</sup>を通じて貴重な民間資料を手に入れ、また、現地の情報に詳しい経験豊かなイ

---

<sup>100</sup> 楊耀恩・王俊 1996。

<sup>101</sup> 馬鴻超・田志和 1989。

<sup>102</sup> 瀋陽市民委族志編纂辦公室 1989。

<sup>103</sup> 瀋陽市民委族志編纂辦公室 1988。

<sup>104</sup> 例えば、吉林省政府が編纂した民族誌『吉林回族』（1989）は、吉林の回民の歴史を記述する前に、『瀋陽文史資料』から大幅に瀋陽の歴史を引用している。

<sup>105</sup> 2010年3月と9月、2011年3月と8月、2012年3月と8月、2013年3月と9月、2014年3月、2015

ンフォーマントを見つける努力を重ねた。その結果、少なくとも 1900 年代から 2000 年までの瀋陽回回営内は、25 の街道(胡同)を中心に構成されていたことを把握した。この情報を具体的に分析する前に、まずは、「西関二十五条街道」という 25 の街道を記録した文書の入手の経緯について述べたい。

瀋陽回回営で調査に従事した時に、回民のコミュニティ内のインフォーマントの 99%から、そしてたまに耳にする一般人の声からも、「昔の西関（瀋陽回民のコミュニティ、つまり回回営を指す）のことなら、金堂博に聞いてください。彼は回族芸術家であり、瀋陽回族のことについて何でも知っているし、瀋陽回族に関する写真も多く持っている」という案内に出会った。こうして、筆者は金堂博氏について、現地で聞き取り調査を行った。すると、金氏は瀋陽回民のコミュニティ内だけではなく、瀋陽市全域でも有名な龍踊りの大道芸人で、瀋陽市において民間伝統文化の「人間国宝」と言えるほどの人であり、また、絵描きとしても名を馳せていた。回族料理店や肉屋などの店のほとんどは、イスラームの標識、牛羊の描写や「清真（ハラール）」の書道などの看板を作成するが、改革開放以後、金堂博氏の描く看板は、瀋陽だけではなく、南は山東省、北はハルビンにまで及んでいる。

以上の状況から見ると、恐らく金堂博氏は、瀋陽回回営の様々な情報について非常に重要な情報源になると思われた。こうして、筆者は 2 回ぐらい金氏に会ったが、2 回とも、金氏は「今は無理だ、また次に」と断られた。深く金氏と接触するために、彼の親族十数人からも、彼について話を伺った。その結果は意外なものであった。彼の親族の話をまとめると、次のようである。

彼は優秀な芸人であり、名誉や名声を大きくするのが好きである。彼は 7 人兄弟の 6 人目。一番年上の兄は、知識人であり、出版社の編集者でもあった。この兄は、回回営に関する資料を多く収集した。2 番目の兄は、人脈が広い人であり、満洲国時代の憲兵隊隊員であったため、回回営および周辺の地域の人や事などについて、非常に詳しかった。3 人目の兄は、非常に賢い人で、ロシア語や英語などいくつかの言語ができる人であった。以上の兄たちのおかげで、回回営の人から『彼は何でも知っているよ』と思われることは不思議ではないが、現在 70 歳代の彼は、1940 年代以前のことを知るはずもない。

ほかに、「彼の性格が変わったので、彼が知らないことを深く聞くと、酷い目にあうよ」とか、「彼の長兄はすでに無常（瀋陽の回族は、死亡ということばを口にせず、無常という）となったが、2 番目の兄は、元気で生きている。満洲国時代のような昔の回回営のことなら、そちらに聞いたほうがいいと思う」といった裏情報にも触れた。

こうして、筆者は金堂博氏の 2 番目の兄である金堂賓氏を訪ねることにした。金堂賓氏は、かなり年をとっていたが、健康や精神状況は非常によい。結果を先に言うならば、この金堂賓氏の説明を元にして、満洲国時代に回回営で存在した回民商業施設である興遊園と第一商場の成立過程を解明し[後述: 第 3 章第 2 節]、「興遊園と奉天第一商場復原図」を作成することができた。さらに、金堂賓氏は長兄である金堂祺氏が作成した「西関二十五条街道」という名付けられた文章を筆者に渡し、「この資料は回回営の地域構造について、

---

年 3 月に実施したインタビュー調査にもとづく。



最も客観的な区分だ」と説明した。「西関二十五条街」は、西関（瀋陽回回営の別称の1つである）の25条の通り（胡同）という意味である。筆者が入手したこの資料は、中国語で手書きした文章であり、恐らく金堂祺氏が編纂した原文である。以下、資料の信頼性の検討も含めて、この資料の著者である金堂祺という人物について考察してみる。

金堂祺という人物は、『瀋陽回族志』にも記録されている。それによると彼は、中華人民共和国成立後、瀋陽市回回営の民衆から選ばれた少数民族のリーダーであった。また、本稿で利用する『瀋陽回族文史資料第八輯』の中のある部分を編纂したのも彼である。さらに、2000年9月18日に、『瀋陽日報』は彼にインタビューをし、「十二年整理挖掘回族文化七旬老人完成一部『瀋陽回民史』（十二年にかけて回族文化を掘り起こす—70歳代の老人が『瀋陽回民史』を完成した—）」というタイトルの記事を掲載した。記事は、「金堂祺氏は12年にかけて、文史資料として現在から300年間の瀋陽回回営の生活変遷を編纂した。かつて出版社の編集者であった金堂祺氏は、瀋陽回回営に関する大量の写真資料を収集し、それに基づいて、瀋陽回回営の歴史変遷、民俗、民間技術、瀋陽回族有名人の伝記、礼儀や禁忌などのことについて約20万字の文字資料を整理した」<sup>106</sup>と述べる。現在、金堂祺氏は逝去されたが、「西関二十五条街」という資料は、金堂祺の遺品の中から発見されたものであり、同じ箱の中に、瀋陽市民委族志編纂办公室の印鑑が捺された「『瀋陽回族志』編纂委員主編の任命書」（写真1）もあった。ここからみると、この「西関二十五条街」の作成時代は、新聞記事にみえる2000年前後に完成した『瀋陽回民史』の一部ではなく、恐らく『瀋陽回族文史資料第八輯』か『瀋陽回族志』の中の一部として出版しようとしたものであったが、何らかの理由で出版されなかったものであろうというのが、現在の推測である。



写真1 『瀋陽回族志』編纂委員主編の任命書（2015年筆者収集）

<sup>106</sup> 香港文匯報記事：<http://paper.wenweipo.com/2000/10/10/CH0010100027.htm>（最終アクセス日：2014年5月5日）人民網：<http://people.com.cn/BIG5/channel4/973/20000918/237517.html>（最終アクセス：2016年8月）

以上の検討から、「西関二十五条街」は、瀋陽回回営の中の知識人が編纂したものであり、政府に提供するために作成された歴史資料であるため、信頼できる資料であると考えてよいであろう。以下、作成者の弟である金堂賓氏が筆者に手渡したこの「西関二十五条街」の具体的内容から、瀋陽回回営の地域構造を復元してみる。

「西関二十五条街」に記された 25 の町、街路(胡同)の名称は、教軍場胡同、西教場胡同、屠教場胡同、澤工胡同、撫工胡同、北寺胡同（後に商場西胡同と称す）、北寺西胡同、商場東胡同（学校西胡同）、于進士胡同、元宝石胡同、長發園胡同、世隆棧胡同、東寺胡同、李裕子鋪胡同、馬泡沿胡同、馮家塘子胡同、地藏庵胡同、莫家塘子胡同、十間房胡同、南寺胡同、圈神廟胡同、劉上崗胡同、馮大門胡同、硝房胡同、それに馮上崗胡同といい、すべて回回営内にあった。また、いくつかの町の場所、名称の由来や町内で起きた事件についても記録されている。例えば、最初の教軍場胡同については、「民国 12 年（1923 年）、東北軍閥張作霖は、瀋陽城（後に奉天城）城内の西北部に「瀋陽五三工場」という軍事工場を建てた。その隣接する城外で、訓練場（当時の中国語では、「軍隊を教育する場所」として、「教軍場」という言い方もする）として東北軍を訓練した。回回営は、東北軍の訓練場、すなわち「教軍場」の隣であり、こうして、そこの約 500 メートルの街路は「教軍場胡同」と名づけられた」という。

しかし、この 25 の街路（胡同）の殆どは、瀋陽の土地開発とともに解体され、現存しなくなった。だが幸いなことに、金堂祺氏の遺品から見つかった多くの写真の中に、1970 年代末期から 90 年代初期までの胡同の写真が残されていた。これらの写真 2～23 は、かつての回回営の中の大半の胡同の風景を再現したものである。キャプションはすべて金堂祺氏が写真裏に記したものである。



写真 2「教軍場胡同西口」（撮影者：金堂祺）



写真 3「教軍場胡同三角地」（撮影者：金堂祺）





写真4「西教場胡同」(撮影者:金堂祺)



写真5「屠教場胡同北口」(撮影者:金堂祺)



写真6「澤工胡同」(撮影者:金堂祺)



写真7「撫工胡同南口」(撮影者:金堂祺)



写真8「北寺西胡同」(撮影者:金堂祺)



写真9「于進士胡同(亜洲電影院後胡同)」(撮影者:金堂祺)



写真10「元宝石胡同」(撮影者:金堂祺)



写真11「長發園胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 12「世隆棧胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 13「東寺胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 14「李裕子鋪胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 15「馬泡沿胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 16「馮家塘子胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 17「地藏庵胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 18「莫家塘子胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 19「十間房胡同」(撮影者:金堂祺)





写真 20「南寺胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 21「圈神廟胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 22「硝房胡同」(撮影者:金堂祺)



写真 23「馮上崗胡同」(撮影者:金堂祺)

以上の写真資料は、2000 年前後の都市開発によって土地面積が半分くらいに減る前の、1970 年代から 90 年代の回回営の町並みであった。この写真に基づく限り、その当時の回回営の姿は、数多くの街路（胡同）が入り組み、人々が居住し、小売り店があり、生き生きとした生活の場であった。

しかし、これまでの回回営に関する資料では、コミュニティ内の街路や胡同について記録したものは殆どなかったし、その場所を特定することはできなかった。

そこで筆者はフィールドワーク<sup>107</sup>を実施し、文献学と人類学の調査方法で、下の図 5 のように、その地区の様子を復元することができた。

<sup>107</sup> 2016 年 12 月に実施。



図5「2000年以前における回回営内の胡同復元」（「奉天附屬地番地入図」<sup>108</sup>（1934）に基づき、筆者作成。）

図5に関する考察過程および地図の作成について説明したい。まず、筆者は1934年（満洲国時代）に出版された「奉天附属地番地入図」という地図資料（第3章第2節参照）に情報を書き入れることにした。この地図のなかには、10ヵ所程度、胡同の名称が書き込まれている。その中には、上述した金堂祺氏の「25の胡同」という文字資料に載っているものも若干含まれていた。それぞれの胡同がどこにあったのかについて利用できたのは、回回営に在住している回族の老人である鉄広潤（91歳、南清真寺の鉄一族の者）や王典（88歳）を中心とする十何人かのインフォーマント（老人）への聞き取り結果である。こうして、「25の胡同」のうち撫工胡同以外の24個の胡同を確認することができた。図5は、以上のようにして判明したすべての胡同を囲い文字で示したものである。この地図の初の復元は、近代における回回営の地域構造を再現するものであり、瀋陽回回営の近代史について、最も有効、かつ有意義な復元資料であると筆者は考える。

以上の写真資料と、図5の回回営の姿とをつなげてみれば、近代における回回営の肖像を再現することができるし、また、写真に映っている店舗などを読み取ると、回回営の構成には、コミュニティ内の飲食店や小売店が重要な要素となっていたと考えることができる。

## 2. 回回營の現在

ここでは、都市開発も一段落した現在(2015年前後)の回回営について、図6を中心として、考察してみる。ちなみに、図5に対照してみると、かつての回回営は、図6内の④、⑤と⑥の部分である。

<sup>108</sup> 地図資料編纂会 1986. 5.



図6「瀋陽回回營の広域図」(google mapに基づき筆者作成)

今まで述べてきたのは、2000年前後の都市開発よりも前の瀋陽回回營のことであり、現在よりその面積範囲は格段に大きかった（図6参照）。現在、回回營と呼ばれているのは、図6の⑤の範囲に過ぎない。この現在の瀋陽回回營（⑤）について詳しく説明する前に、周辺の地区について述べる。

現在①の区域には瀋陽市政府（旧満洲国奉天市公署）があり、隣の②は瀋陽市政府広場である。図6の南東側の③は旧奉天城の西北角にあたる。1990年代末期2000年初期、④、⑤と⑥とが指す元々の瀋陽回回營が、大規模な都市開発に遭ったわけである。そして、⑤の地区が現在（2015年時点）の回回營、すなわち今も使われる歴史的な呼称「西関」の範囲であり、かつて回回營の民衆から「後街」と呼ばれた区画である。これに対して「前街」と呼ばれたのが④の区域は、土地開発とともに高層ビルの住宅地となった。⑥は遼寧大劇場と遼寧博物館となっている。

さて、現在の回回營すなわち⑤の地区の現状に関して、政府側の文字資料は公表されていないため、より具体的な地域の実情を知る目的をもって、筆者はこの地区を管理する「回民社区」<sup>109</sup>に聞き取り調査に出かけた。「回民社区」の書記によると、「現瀋陽回民社区の総人口は約16,980人、5,273家族であり、そのうち回族の比率は53%である。1999年6月2日に、この行政区画としての『回民社区』が南清真寺<sup>110</sup>を中心として設定され、同時に、様々な回民の商業活動が振興された。こうして、現在、この社区は51軒の回民の商店を中心とする商業・住宅地区となった。西は遼寧大劇場、南は小西路、北は市府大路に囲まれて、総面積は0.5平方キロメートルである。特に注意すべきは、現在の回民社区を代表する『清真美食街』（写真24）のアーチである。その高さ13.52メートルは、1352年から

<sup>109</sup> 本来、中国の「社区」は行政区分であるが、この回民社区は「歴史を持つ少数民族の社区」と解釈され、管理する範囲がやや大きく、隣接する社区の少数民族を管理する機能や民族管理事務の権限も持つ。まさしく回回營を行政的に管理している役所といってよい。

<sup>110</sup> この清真寺（図6の⑤内の口部分）が、1633年に建設されたことは、上述の『瀋陽回族志』にあったとおり。



回民がここに住み始めたことを象徴する」という<sup>111</sup>。



写真 24「清真美食街」(2011 年 9 月)図 7「あ」



写真 25「西関回民市場」(2014 年 12 月)図 7「い」

図 6 の⑤の部分の現状を、筆者による現地観察調査に基づき、次の図 7 を用いてより詳しく描写しておきたい。参考としたのは、上記、書記への聞き取り調査、および『瀋陽回族志』などの現地に関する文献資料そして上述した金堂賓も含む、現地の一般住民への聞き取り調査<sup>112</sup>である。

<sup>111</sup> 2015 年 3 月 25 日、「回民社区」の書記への聞き取り調査。

<sup>112</sup> 情報提供者一覧

名前	性別	年齢	仕事
李氏 1	女性	83 歳	街道管理職 (工社)
哈氏	女性	66 歳	毛糸場檔案管理員
馬氏 1	男性	43 歳	清真美食街内の店の経営者
馬氏 2	女性	77 歳	
王氏	男性	59 歳	清真美食街内の店の経営者
楊氏	男性	61 歳	
馬氏 3	男性	83 歳	興遊園内経営者 (満洲国), 瀋陽市交通局 (定年まで)
馬氏 4	男性	72 歳	荷役工 (満洲国), 肉販売 (現在)
年配婦人グループ	女性		注: 西関回民市場前 (8, 9 人)
金氏 1	男性	88 歳	日本憲兵隊隊員 (満洲国)
年配男性グループ	男性		注: 南清真寺前 (約 10 人)





図7「瀋陽回回營の詳図」(Google mapに基づき筆者作成)

図7は現在(2016年)の瀋陽回回營の詳図(図6の⑤の部分)である。☆印は、回回營の中心清真寺(モスク)である南清真寺を指す。十七世紀中頃に成立したこの南清真寺は現在瀋陽の回回營で、唯一運営されている清真寺である。その具体的な歴史については、本節第2項の2の部分で検討する。南清真寺の北方300メートルほどに位置する△印は、現在では機能していない東清真寺である。『瀋陽回族志』(1996)によると、東清真寺は1803年に、馬成遠という人物のサダカ<sup>113</sup>(喜捨)によって創建された清真寺であったが、文革時代に破壊されたという。現地での聞き取りによると、1990年代以後に少し修復作業が行われたが、現在は清真寺として機能しておらず、現地民衆の言葉を借りれば「インチキ美術家の展覧室」として運営されている<sup>114</sup>。

△印の南側に「あ」と示す地区は、上述した清真美食街である。清真美食街内のいくつかの飲食店店長からの聞き取りによると、「この町はかつて『東寺胡同』と呼ばれ、1990年代末期の回回營の土地開発に先立って、『前街』(図6の④の部分)の回民が移住してきて、一部の店がここに再建された。それらがこの商店街を構成するきっかけと主体となった」という。1990年代の中国では、全土で大型工場の改革が行われ、その結果として、1998年から2000年の間だけで2137万の労働者が解雇された<sup>115</sup>。工業都市であった瀋陽市も非常に大きな影響を受け、リストラされた回民たちが、自民族集住地区で飲食店を経営し始めたのであった。前述のように、この地に、瀋陽への回民居住が始まったとされる1352年に因んだ数字(高さ)のモニュメントが作られたことは、興味深い。

一方、図7の「い」の位置にある「西関回民市場」(写真25)という現在の商業施設は、

<sup>113</sup> イスラームにおける喜捨は、ザカートとサダカと分かれている。ザカートとは、イスラム教の五行の1つで、困窮者を助けるための義務的な喜捨、あるいは制度的な喜捨で、イスラーム国家の税金の一種にあたる。一方、サダカとは、各個人が自発的に行う自由喜捨である。

<sup>114</sup> 筆者が2012年3月、12月、2013年2月、7月、2015年3月に実施した聞き取り調査による。現地で現場を見たところ、「瀋陽市伊斯蘭文化展覧中心」の看板を掲げているが、内部はイスラームと全く関係のない普通の水墨画展示会場である。

<sup>115</sup> 中国労働力市場情報網監測中心のデータによる。(2013年8月に閲覧)

『瀋陽回族志』<sup>116</sup>によると、1980 年前後は「小西関回民市場」(写真 26) という露天市場であった。その後の 1988 年、政府は、この地区の回民住宅地と露天市場を改造し、そこに新たに建設されたのが「西関回民市場」だった。新しくできた市場は 2 階建ての建物である (写真 25)。その土地面積は 3393.15m<sup>2</sup> であり、建築延べ面積は 6786.30m<sup>2</sup> である。南北の距離は 99.07m、東西の距離は 34.25m である。その中に 67 軒の店舗と常設屋台 131 がある。経営者は全員が回族である<sup>117</sup>。その経営は、清真 (ハラール) 肉類、野菜、ムスリム日用品、回民点心やお茶を扱う店などの外に、大規模な飲食店もいくつかあり、そこは瀋陽市内の回族を中心とするムスリムが葬式や結婚式、様々な記念日の宴会をするための場所となっている。「あ」「い」を比べてみると、「あ」(清真美食街) が民族を問わず、市民一般、観光客にも開かれた飲食店街であるのに対して、「い」(西関回民市場) はどちらかというと市内の回民の日常生活のための市場といえることができる。



写真 26 「80 年代の小西関回民市場」(撮影者: 金堂祺)

こうしてみれば、現在の瀋陽回回営内商業施設の大きな特色は、小売業にあると言える。実は、『瀋陽回族志』に含まれる政府調査資料によると、中華人民共和国成立初期(1950 年代)、瀋陽回民の小売業人口は回民全人口の 74% を占めていた (p. 157)。これは、そのときに突然起こった現象とは考えにくい。当然、その直前までの奉天 (瀋陽) の回民も小売業に多く依存して生活していたと考えてよいだろう。それゆえ、回民と小売業との結びつきは、少なくとも 20 世紀から現在に至るまでを通して一般的な現象であると言える。

### 3. 家族・親族関係

以上、過去および現在の回回営の地域構造について、検討した。しかし、以上に見てきたものは回回営の地域の外形部分である。上述した金一族の事例のように、コミュニティ内における家族・親族関係も地域構成にとって重要な要素である。

回民はムスリムであるという点で、古くから、中国のマイノリティであり、そのため、親族関係を非常に大切にしている傾向がある。「一人っ子政策」以前は、一家庭に複数の子ども

<sup>116</sup> 楊耀恩 1985, p. 151, p. 171。

<sup>117</sup> 楊耀恩 1985, p. 381。

があり、同一世代間で、コミュニティ内部の者、外部の回族、外部の異民族との通婚が行なわれ、その結果、広大な親族ネットワークが形成されていた。地域コミュニティとしてのジャマーアティから多少離れた場所に居を構えていたとしても、この親族ネットワークから離れることはできない。また、時代が変わっても、このネットワーク内の血縁を忘れることはない。

中国ムスリム研究会が編纂した『中国のムスリムを知るための60章』では、回族の「家族と親族のつながり」<sup>118</sup>が以下のように解説されている。

回族が、理想とする家族のあり方は傍系拡大家族である。基本的には出自規則は父系制で夫方居住婚を行う。1980年代以降の「一人っ子政策」では、回族は都市部では二人、農村部では三人の子どもを持つことができる。近年、漢族とおなじく核家族化が進んでいる。ただし、核家族化が顕著になり、親と別々に住んでいても、身近な家族・親族同士の付き合いは絶やさない。こうした家族・親族間の親密さはイスラーム倫理規範としてしばしば説明される。

回族のことわざに「回回的親、摺不断的根（回民の親戚関係は、引き裂けない根のようなもの）」という言い回しがあるように、回族の集住地域では、回族は同じ回族と結婚することが理想的な慣行と考えられてきた。そのような地域で民族内婚を繰り返した結果、回族の親戚関係は非常に複雑になっており、面識のない異なる家族・親族集団がじつは親戚関係にあるといった事例は少なくない。このほか、義理の親子関係のような擬制的親戚関係が結ばれることもある。

ここで、回族の親族語彙に目を向けてみよう。寧夏の回族は父親を「大大」あるいは「爹爹」、母親を「媽媽」、父方祖父を「爺爺」、父方祖母を「奶奶」と呼ぶが、広東の回族は父親を「爸爸」あるいは「阿爸」、母親を「媽媽」あるいは「亜媽」、父方祖父を「阿爺」あるいは「亜公」、父方祖母を「亜婆」あるいは「太太」と呼ぶ。回族の母語は漢語であり、回族の親族呼称は漢語方言に基づくため、大きな地域差が見られる。ただし、回族の親族語彙と漢族のそれとは非常に似ているが、若干の差異があることにも注意する必要がある。たとえば、北京の回族は父方祖父を「巴巴」と呼ぶが、この呼称はテュルク語を語源とする語彙であり、回族が外来ムスリムの末裔であることを想起させる。（藤井正二郎、砂井紫里）

以上の記述のように、瀋陽回回営内の回族にも、瀋陽回族の独特の呼称がある。瀋陽の回族は同族内の紐帯、あるいは血縁関係を重視するため、自分の父と同じ世代で、父より若い男性を「シュウバ」（叔爸 ShuBa）と呼んでいる。中国語の「シュウ（叔 Shu）」は、主に「おじさん」を意味し、「バ（爸）」は、基本的に「父」を意味する。瀋陽回回営の回族は、「シュウ（叔）」と「バ（爸）」（父）という血縁を表す言葉とを結合させて、親しさを同族として表現しているのだと考えられる。一方、「シュウバ」の妻に対しては、「シンマ（姉媽 ShenMa）」という呼称を用いている。

こうした独特の呼称以外に、長い時代、漢族の社会と交わってきた回族は、家族内の順位を示す「輩分」を重視する。「輩分」とは、英語で訳すと「Seniority in the Family tree」である。日本語なら、「親族内の世代の順番」を意味する。中国において、輩分は本来、

<sup>118</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 112—113。

漢族の中でよく使われる用語である。漢族は家譜を作る際に、親族内の順位を配列し、「輩分」を作ることが多い。漢族の影響が強い回族にとっても非常に重要な役割を果たしている。

『中国のムスリムを知るための60章』はこの現象について、前引の部分につづけて、以下のように述べている。

こうしたカテゴリーを付与された人々が動員される顕著な場面は死者礼儀であろう。一般に、回族は漢族のように祖先祭祀を行うことはなく、族譜を記録したり、死者の平安をアッラーに祈念するだけである。しかし、東北地方や東南地方には清朝期や民国期に編纂された回族の族譜が残っており、また、1990年以降、新たな族譜が編纂されている。たとえば、福建省の丁姓や郭姓の回族は族譜と祠堂を所有し、父系出自集団を組織する。毎年の断食明けの祭には、回族ムスリムやそのほかのムスリム系民族、外国人のムスリムが清真寺で行う集団礼拝とは別に、地元回族の老人会や宗族のメンバーたちが祠堂で講話会を開いて祭日を祝う。これは特殊な事例であり、他省（とくに西北地方）の回族は「漢化」であるとして揶揄するが、多様な歴史的背景を持つ回族の親族のひとつのあり方ともいえよう<sup>119</sup>。

瀋陽の回回営内の「輩分」は、恐らく漢族の輩分に倣ったものである。その規則として、「輩分」は、2文字ある名前の第一字目が輩分を表す「輩字」となるという原則に基づく。それさえ分かれば、自らの輩分を知ることが出来る。年齢を把握しているよりも、輩分を知ることがより重要である。1つの例をあげてみる。

瀋陽の「金一族」と「韓一族」の実例をみると、現在の金一族は主に「.....堂、曾、福、寿.....」と「輩の字」が並んでいる。それに対して、韓一族は「.....同、来、景、喜.....」と並んでいるとする。金一族の曾字輩（輩の字）の人と韓一族の来字輩の人と婚姻関係を構築すると、両族の輩分の関係は以下ようになる。

金一族：堂（祖父世代）、曾（親世代）、福（本人の世代）、寿（子世代）

韓一族：同（祖父世代）、来（親世代）、景（本人の世代）、喜（子世代）

こうして、姻族の間にも長幼の順がある親しい親族関係も同時に構築される。たとえば、ある場所で面識のない金曾○と韓景△が出会うと、二人は親族（姻族）関係があることがわかるし、金曾○は韓景△のオジ世代であることも判明する。ちなみに、名前が一文字で輩字が含まれない場合でも、輩分適応することが出来る。例えば、金堂□の子世代である人の名前が、金\*になる場合、彼は必ず、自分の輩分が「曾」であることを親から教えてもらう。すなわち、彼は家族内に、金曾\*という意識が存在する。こうして、金\*は韓一族の人と会う際に、相手の「輩の字」さえわかれば、世代の順もわかるようになる。

「輩分」により形成された回族のネットワークは、回回営のようなコミュニティ内の人間関係を親しく構築することができるだけでなく、他の地域との連携も促進することができるとも考えられる。例えば、AとBが瀋陽で輩分関係にあり、Aには上海に血族Cがいるとする。Bは上海に行って、Cと会うと、BとCは輩分があるという擬制的親族関係を持

<sup>119</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 113-114.

つことになる。こうして、回族のことわざである「天下回回是一家（すべての回回は1つの家庭である）」のように、回族そのものが1つの家族・親族ネットワークともなりうるであろう。

瀋陽の回回営内の回族は、輩分によって構成された擬制的親族関係を活発に、積極的に利用している。例えば、瀋陽の「清真美食店街」内の料理店の中で、よく耳にしたのが、客から店員への、「君の名前は何ですか?」、「君の店長の名前は何ですか?」という質問や、「輩分によると、僕は君のおじさん（あるいはおじいさんや兄弟など）にあたる」というような会話であった。このような言動は、瀋陽の回族の一種独特な親族紐帶的イデオロギーの存在を証明するものである。

## 第2項 瀋陽の清真寺

以上、瀋陽回回営に暮らす回民の親族関係の特徴を検討した。こうした人間関係の存在を確認したところで本題に戻り、回回営の地域構成にとって、最も重要な部分である清真寺（モスク）について、考察しよう。瀋陽の清真寺を考察する前に、まずは中国の清真寺に関する一般の社会構造、すなわち清真寺を中心とする回族の人間集団の概要を簡単に説明しておこう。

### 1. 清真寺内の人員構成

回族のコミュニティ、あるいはジャマーアティは、澤井の定義に基づけば、「宗教指導者」、「寄宿学生」、「管理委員会」、「一般信徒ら」で構成され、この人員構成が一般的で伝統的であるといわれる<sup>120</sup>。ここでは澤井の定義に従い、瀋陽回回営の清真寺内における各人間集団の実態について、フィールドワーク結果に基づいて報告したい。

#### ＜宗教指導者（アホン）＞

回族は宗教指導者を「アホン」（阿訇、Ahong）と呼んでいる。アホンは主に宗教事務に従事する。現在、中国都市部の清真寺で、アホンとして「働く」には、政府公認である中国伊斯蘭（イスラーム）教協会の審査や試験に合格して、「アホン証明書」（阿訇証 AhongZheng）を取得しなければならない。

現在、瀋陽回回営の中心清真寺である南清真寺には、13人のアホンがいる。彼らが従事する宗教事務は、主に毎日の礼拝や「走坟」<sup>121</sup>などである。

#### ＜寄宿学生（満拉、マンラー）＞

本来マンラーとは、清真寺内に寄宿して、コーラン、ハディースその他の様々な宗教知識を学習する学生を指す。だが90年代の瀋陽の場合は、回回営内の寄宿学生と宗教指導者とを区別せず、ともに「アホン」と呼んでいる場合が多かったという。多くの寄宿学生も、自らを「アホン」と同じ立場にあるという意識で生活していることが多い。現在の瀋陽回回営の中心清真寺である南寺には、マンラーがいない。だが、回回営内の瀋陽伊斯蘭経学

<sup>120</sup> 澤井充生 2002, pp. 23-49。

<sup>121</sup> 主に死者のため、コーランを読むことである。

院（かつての東清真寺の一部）は、東北三省から学生を募集し、短大学歴を与えている。この学院の学生は、瀋陽回回営のマンラーと言えられる。

### ＜管理委員会（清真寺民主管理委員会）＞

管理委員会は清真寺民主管理委員会の略称である。管理委員会は、主に共産党党员を中心に構成され、清真寺を管理する「政府の組織」（有給）となっている。上述したアホンが主に宗教内部の事案を処理することに対して、管理委員会は、宗教以外の事案、主に政府からの指示に関する事柄を処理することが多い。特に管理委員会の主任は、ほとんどの場合、政府から直接に任命される。

瀋陽回回営の南清真寺の場合、筆者が調査した時点（2010年）では、7人の清真寺民主管理委員会委員がいた。その委員たちは主に、瀋陽市宗教事務局と瀋陽市瀋河区民委（民族事務委員会）から選ばれた人々であった。その意味は、瀋陽市宗教事務局などの政府機関が清真寺の運営を把握していることを意味する。

### ＜一般信徒＞

瀋陽の回回営において、一般信徒は、主に2つのグループに分けられる。1つは、清真寺を生活の中心とする一般信徒であり、もう1つは、親族の葬式以外にはほとんど清真寺に來ない一般信徒である。

清真寺を生活の中心とする一般信徒の多くは、「郷老」とも呼ばれる人々である。一般に、多くの回族住民は、定年とともに死について考え始める。フィールドワークを通じて最も多く見受けられたのは、死に対する理解や「死後の世界」を探求するために自らの宗教を再認識するケースであった。近年、自分の民族所属という理由から宗教へ関心をもつようになる若い世代の人々も増えつつある。一方で、清真寺を生活の中心としていない一般信徒は、主に葬式の場においてのみ、清真寺と宗教を認識している。

瀋陽では従来、瀋陽の清真寺（モスク）に関する記録や記事などの中では、『瀋陽回族志』の記述がそのまま引用されることが多かった<sup>122</sup>。しかし、かつて筆者は『瀋陽回族志』（1996）について資料批判を行った結果<sup>123</sup>、該書が中華人民共和国成立後から1990年代までの瀋陽回回営に関する政府の公的歴史資料であり、少数民族地区にとって重要な統計資料であるが、それと同時に当時の政治的な制約のため、事実と矛盾する部分も少なからず存在していることに気付いた。特に、古い時代の歴史に関する資料の場合、一次資料の出典の説明が非常に曖昧である。

そこで、本稿は瀋陽回回営の最も中心的な部分である清真寺の成立過程を認識するため、以下、瀋陽の清真寺の歴史を独自に検討してみる。

## 2. 南清真寺

本節の最初に述べたように、南清真寺は現在、瀋陽の回回営の中で唯一本来の機能をもって運営されている清真寺である。この南清真寺の成立の経緯については、いくつかの資

<sup>122</sup> たとえば、馬兆政著 楊豊陌編 2009。

<sup>123</sup> 金博諒 2013, pp. 19–34。

料がある。

まず南清真寺内に現存する清乾隆三十六年（1771 年）建立の石碑の碑文には、「盛京南清真寺の建設年数は、百年以上経った」として、「皇清定鼎之初有鉄率吾公建清真寺（清国成立初期に、鉄率吾がこの清真寺を建設した）」と刻んでいる。この記録は南清真寺創立に関して、説得力のある実物証拠と考えられる。

また文献資料として、南清真寺内所蔵の『清真寺史料』<sup>124</sup>には、「本寺経鉄公率吾建於崇徳元年（この清真寺は鉄率吾が清の崇徳元年[1635/1636 年] に建設した）」という記述と、「明崇禎九年 [1636 年]、南清真寺は既に存在したが、建築面積が非常に小さかった」という記録があった。

さらに、『瀋陽県志』<sup>125</sup>には「南寺、清初教民鉄率吾建」という簡略な記録が残されている。すなわち、南清真寺は「清の初期に、回民の鉄率吾が建設した」ということである。この記録は『清真寺史料』と殆ど一致しており、南清真寺は鉄率吾によって明末清初の 1636 年に建設されたことに間違いないだろう。

これに加えて、満洲国時代の刊行ではあるが、清末から民国期の史料編纂専門家たちが編纂した史料である『奉天通志』<sup>126</sup>は、瀋陽（当時奉天）の回民に関して、やはり南清真寺は清の初期に回民鉄氏が建設したとし、次のように記述している。

瀋陽内に、4 つ清真寺が存在し、その中の 3 つは回回営内にある。南清真寺は、清の初期に、回教

---

<sup>124</sup> 編纂者・作成年代不詳。

<sup>125</sup> 趙恭寅 1917。

<sup>126</sup> 奉天通志館 1934（昭和 9），pp. 八—十（神教—回教）。日本国立図書館近代デジタルライブラリー URL (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1912681>) 回民に関する部分：（前略）参酌猶太基督二教別創新教曰回回教專拜造物主不信他神不拜偶像其經典曰可蘭經穆罕默德左手持經右手執利劍以武力傳教四方遂奄有阿剌伯地建大食國神權政治以教主爲元首穆罕默德率繼其後爲教者稱哈刺發神嗣之義哈刺發欲廣傳新教於域外西略非州東侵波斯統一西亞細亞遣使通好於唐時中亞細亞及天山南路之地以次轉入回教勢力範圍厥後漸入中國其至遼東或謂由政府移殖今居奉省者曰東干派各縣城鄉多有之其所居之地皆建禮拜堂曰清真寺省城共有四寺其三皆在外攘門外回回營南寺清初教民鐵氏建北寺乾隆間楊氏馮氏脫氏建東寺嘉慶季趙氏馬氏建近又親建一寺在懷遠門關外馬路灣其教長曰（筆者注：現代にはない漢字であるため、「ロ亦」で表示する）嗎目亦作依瑪木教師阿訇亦作阿轟或譯阿衡其教程敬服五功以建天道敦崇五典以盡人道五功者念禮齋課朝五典者君臣父子夫婦昆弟朋友念者時念眞宰靜存動察心不妄馳禮者日禮五時七日一聚所以洗心滌慮日新其德齋者歲齋一月節食色制嗜慾凡耳目身心所生之一切妄念統由此齋防止之課者歲捐課財既有博施濟衆之益且防富而不仁之弊朝者終身一觀天闕以實志誠所向其教律以眞宰爲嚮往以聖人爲依歸禁崇拜偶像禁詆毀節譽禁陰謀害人禁鬻利禁姦淫禁賭博禁酒禁豕戒奢侈戒妄語絕嬖倖勿鬻良人勿事異端勿聽邪說勿信一切巫覡勿市諸所禁物其會期每七日值牛婁鬼亢四宿一聚禮爲主麻日屆期衆教徒咸入寺沐浴拜主誦經祈禱一年二次會禮一爲開齋會禮一爲禋祀會禮一年二紀念日兩大主麻節一爲穆罕默德誕辰一爲聖女誕辰其婚喪禮儀亦與他族異婚禮結婚於寺由教主主婚書禮乃成喪禮延阿訇誦經祈禱沿尸畢以白布裹之三日啟殯不具棺槨昇置壙中謂之土葬封如馬鬣形（婚喪禮詳見條婚嫁喪葬各下）食多禁忌禽有蹠獸反芻乃食之義取潔也入其教者限於回族且因飲食儀節之攸殊與他族不通婚媾由教義之狹隘致生計之日蹙若不設法改良回族前途致足憂也近有回教俱進會之組織有識之士倘亦知所革進歟

民鉄氏により建設された清真寺であり、北清真寺は、清の乾隆帝の時代に、楊氏、馮氏と脱氏により建設された清真寺であり、東清真寺は清の嘉慶帝の時代に、趙氏と馬氏により建設された清真寺である。最近、奉天城外馬路湾というところに、新しい清真寺が建設された。

ところで、後代の官撰資料である『瀋陽回族志』(1996)<sup>127</sup>は、南清真寺の成立について、結局のところは『奉天通志』を要約し、「清初、教徒鉄氏が、南清真寺を建設した」と総括している。ただ、この他に出所不明の2つの記録を引用して、近代の南清真寺の歴史について、細かな記録を載せている。それによると、南清真寺では、「26年後の康熙元年(1662年)に清真寺の面積を拡大した」とか、「清光緒二十八年(1902年)と民国十八年(1929年)の2回の改築後に、女寺や水房などの施設を増設した」とか、「民国18年(1929年)に、南、北各三間、講堂五間を増設し、民国26年(1937年)に、女礼拝殿、沐浴所や亡人室(靈安室)を増設した」と、細かな、あるいは新しい事実の補足などを記録した点で、価値がある。

さらに清真寺の運営について、『瀋陽回族志』は「清真寺成立初期、鉄一族はイスラーム知識や教義を学習するため、北京から余元山というアホンを要請した。当時の鉄一族家長であった鉄奎の四番目の息子は、余元山の弟子になり、後に南清真寺の最初のイマームとなった。その時から中華人民共和国が南清真寺を接収するまで、鉄一族は11代にわたって南清真寺のイマームを世襲し続けた。最後の11代目イマームである鉄子章は、1956年に任職し、1986年1月に離任した。現在のイマームは李鴻賓、楊冠英や楊紹実などである」という歴史を記録している。

上に述べたように、『瀋陽回族志』が用いたという資料には出典について曖昧なところがあるが、政府の編纂であるため、史料の収集・利用能力が非常に高かったことは間違いない。『瀋陽回族志』が記録した近代の南清真寺の改築事情や、鉄一族の運営に関する記述は、恐らく、現地でインタビューを通じて収集したものと、外部に公開されることのない鉄一族の家譜資料(ただし、鉄一族の家譜資料の一部は、『瀋陽回族志』と『遼寧回族家譜選編』<sup>128</sup>で公開されているが、鉄一族の内部には非常に詳細な家譜資料がある)の一部分であると言って差し支えないと筆者は考えている。

第1章第3節第3項の4の部分で、本論の特色とも言えるところについて、本論筆者は、『満洲建築協会雑誌』という満鉄資料の中から、これまで使ってこなかった瀋陽回回営内の清真寺に関する非常に詳細な3つの建築学の資料を発見した。その中の『満洲建築協会雑誌(第八卷第七號)』の「奉天の回教寺(上)(満洲回教寺建築の研究七)」は、南清真寺を中心に、調査・考察した記録である。まず、奉天の南清真寺の所在地について、該資料は、以下のように述べている<sup>129</sup>。

所在地

小西邊門を入り、電車線路を傳つて少し行けば、東清真寺迄行かない間に、南方(向つて右)に

<sup>127</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 111-112。

<sup>128</sup> 劉侗 1992。

<sup>129</sup> 村田治郎 1928, p. 22。



塔が見えるから忽ちそれと知ることが出来る。又は小西邊門から小西大街に沿ふて五六丁進んだ時、左折しても行くことが出来るが、前の道の方が始めての人にはよくわかる。三寺のなかでは最もわかり難い場所にある。地名は南寺胡同。

以上の紹介は、清真寺の所在地について、非常に詳細かつ生々しく記録したものであり、また、2種類の南清真寺の行き方を通じて、南清真寺の周辺の道路に関する情報の一部分もわかる。

当時(1928年)の南清真寺の主な配置については、以下のようにある。

#### 配置概要

前面にはかなりの廣場があり廣場と人家と接する所、大門の正面に當る所に照壁が置かれてある。大門の両側には牆壁が左右に延び、牆壁を穿つて掖門を設けてゐる。入れば院子、大門の中心線上に中門があり、左右に三間房子一棟宛。是と中門、大門の四棟に依つて一廓をなしてゐる。中門を入れば更に左右に三間房子が一棟宛あり、正面に大殿が建つて此所でも牆壁で圍んで一廓をなしてゐる。水房は此所より更に向つて右に入つた所に大殿と平行して建てられ、此の院子には木造の門が設けられて外の路から石炭等の荷車が入り得るようにしてある。

大門、大殿を結ぶ中心線は略々東西に走り、少しく東南より西北に傾き、従つて大門、中門、大殿は約十度東南に傾き東面してゐる事になる。

大殿の南方には廣い空地があり、三間房子（講堂）の南側には池のような凹地が出来てゐる。所々に楡の大木があり、閑寂愛すべき境を呈してゐる。<sup>130</sup>

建築学の研究でもあるため、本資料は南清真寺内の建築物の配置を詳細に述べている。さらに、文字記録の外に、資料は以下のように、南清真寺の主な建築構造図を提供している（図8参照）。

---

<sup>130</sup> 村田治郎 1928, p. 24。

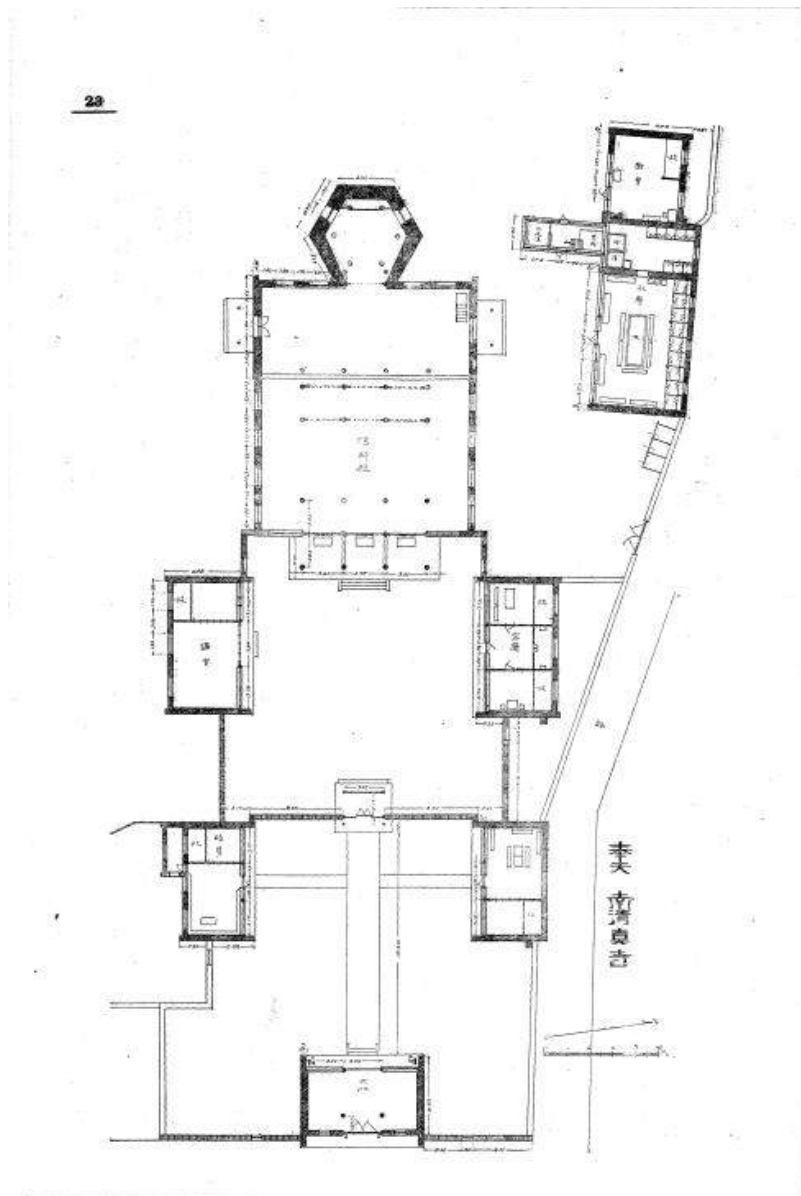


図8「奉天南清真寺建築構造図（1928）」<sup>131</sup>

これまで瀋陽における回族研究の中で、筆者は図8のように、南清真寺を具体的かつ詳細に描いた構造図を見たことがなかった。この記録は、1928年代の奉天（瀋陽）の南清真寺の具体的な建築構造を提供するという歴史的な重要性を持つだけでなく、今後南清真寺の修復や改築を実施する際においても、非常に重要な資料となると考えられる。

さらに「奉天の回教寺（上）（下）」を検討すると、現在の中国の東北地域、すなわち旧満洲国にあたる地域では、満洲国時代という特別な歴史研究を行う際に日本との学術資料交流が必要であるだけでなく、歴史遺跡、古い建築物さらにこれからの土地開発の時にも、日本との協力が必要であろう。

一方、南清真寺内の主な建築配置を検討した本資料は、南清真寺の大門、掖門、中門外の三間房子二棟、中門、中門内の三間房子二棟、水房子や大殿等の建築構造を具体的に考察している。だが、本論の研究との関係からして、これ以上の詳細な紹介は省略する。

<sup>131</sup> 村田治郎 1928, p. 23。

「奉天の回教寺(上)(下)」の最も重要な貢献の1つは、当時の清真寺の写真資料を残していることである。以下、この資料の中で、南清真寺内の主な建築物の写真資料を紹介したい。



写真 27「南清真寺大門」出典:「奉天の回教寺(上)」

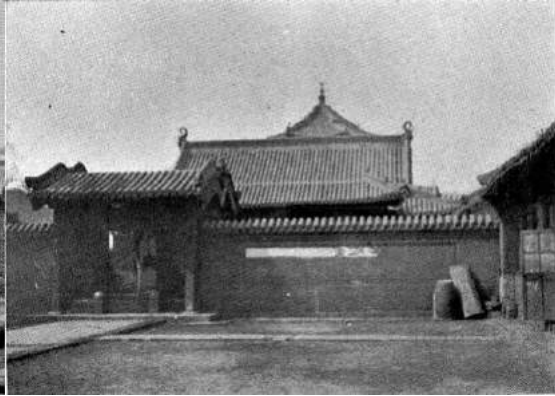


写真 28「南清真寺中門」出典:同上



写真 29「南寺水房」出典:同上

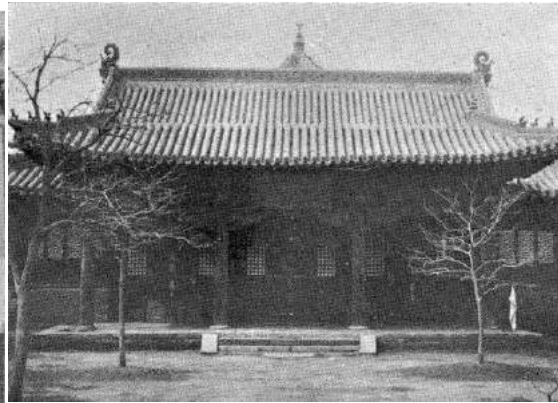


写真 30「南寺大殿」出典:同上



写真 31「南寺大殿内部」出典:同上

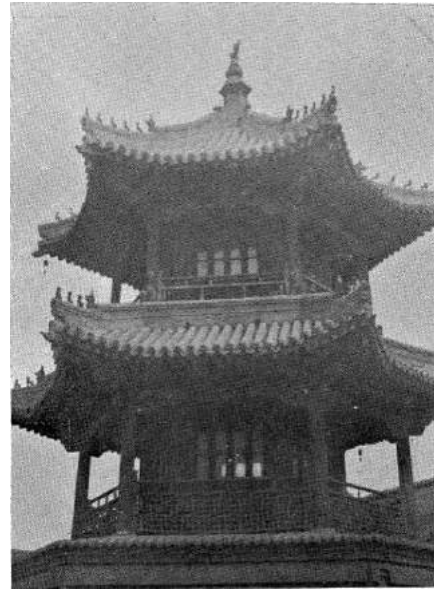


写真 32「南寺塔 (筆者注:望月楼)」出典:同上

以の写真 27～32 は、1920 年代～1930 年代の奉天(瀋陽)の南清真寺の様子を表す貴重な

写真資料である。この写真資料を詳細に検証することは、これまでの瀋陽回族研究に対して、大きな補足となることは間違いないし、瀋陽における回族研究、あるいはイスラーム研究の基盤の1つの柱ともなりうるだろう。

村田の3つの論文の中で、本項にとって最も重要な証拠、あるいは利用すべき部分は、清真寺の歴史の考察に関するものである。以下、「奉天の回教寺(上)」の中の南清真寺における「史的考察」の部分を検討してみる。

まず、南清真寺の創設年代について、「奉天の回教寺(上)」には、「本寺には古記録の信ずべきものがないから、創立年時を明確にすることを得ない」<sup>132</sup>と記されている。しかしそれと同時に、村田は清真寺内の石碑や匾額などを調査して、清真寺の創設年代と様々な修繕の年代に関する記録を見つけ、以下のような年表を推測している。

表1「奉天南清真寺変遷表」

建築年代	西暦紀元	功労者
創立…清初、順治末か康熙の初	十七世紀中頃以後	鐵率吾
？		？
重修…嘉慶四年	一七九九	？
重修…道光十一年	一八三一	王振祥 任永祿 鐵永春 張德昇 馬孔維 黒佩玉 傅 鋁 韓興仁 馬文英 鐵永鴻 張 亮 馬 俊 于 尚 莫 鋁 于 和
重修…道光二十八年	一八四八	步庠生 劉成義 其他郷老
重修…光緒二十九年	一九〇三	張阿訇 掌教 老郷

石碑、匾額等の年代表

乾隆三十六年（西紀一七七一）	石碑(A)
同 四十七年	同(B)
同 五十六年	匾額(10)(11)
嘉慶六 年（西紀一八〇一）	同(4)(5)(6)
道光十一 年（ 一八三一）	同(12)
同 二十八年（ 一八四八）	同(13)(14)
咸豐元 年？	同(7)
光緒元 年	同(8)

<sup>132</sup> 村田治郎 1928, p. 27。

同 二 年	同(9)
同 十 五 年？	同(15)
同 二十八年	同(17)
同 二十九年（一九〇三）	同(16)
宣統元 年（一九〇九）	同(18)

さらに村田はより具体的に南清真寺の歴史を検討するために、南清真寺境内にあった各石碑や匾額などの歴史的証拠を調査し、以下のように挙げている<sup>133</sup>。

#### 石碑

##### (A) 大門背面、南方

##### 賜進士出身

勅授文林郎護理奉天府治堂理事督糧堂印務署承德縣正堂事加三級紀錄九次瑞 貴<sup>134</sup>夫道一也故不紛二則岐矣岐則必離不紛不岐而教立焉清真正教肇自西域衍於東土由唐迄今多歷年所獨關東闕而未講自「皇清定鼎之初有鐵率吾公念不遺品類至教不隔方隅開久曠之蒙繼不絕之緒倡義舉行捐資興事遠徵學師建清真寺同志者望風景從服教者聞聲湧躍蓋以」道統承先聖之德教化遵古昔之制宏綱鉅節燦然相陳細目微言凜然不紊凡冠婚喪祭則古不忝詭習齊拜儀郎稱先岡用師心雖以道事諸一不以岐且離者分」其教也惟其一而造化之幾微隱顯之體用性命之玄旨以及條律教戒之文聖智凡愚之分萬物精粗之理不容誣也而世之人人百其心心百其用必涉臆臆見則流」於岐道而不覺所謂叛以毫釐失之千里者往往然也盛京南寺建之百餘年矣其中服教遵行者不下數百家要皆遵古制則先型不稍涉近習焉第他方遊歷之客行習多忝時超本地服習之漸染或流新行日則大有」碍立教之原來建寺之初制惟傳道者巨細準前規服者大小胥凜舊典庶至教不紛大道協一所謂岐且離者不致淆惑於其間爰紀迹刻銘永以爲戒相傳

馬雪龍 鐵明祖

乾隆參拾六年歲次辛卯捌月吉旦 會首 鐵繼祖 鐵良祖 等同立

白如鳳 周世臣

##### (B) 大門背面、北方のもの

##### 篆額『皇帝寶訓』

乾隆四十七年六月十八日奉上諭……(略)

##### 匾額

##### (1) 以下三者共に白地上に黒書

順天府尹國子監祭酒 臣 孫嘉涂謹

(略)

嘉慶六年 敬

##### (2)

雍正捌年伍月初拾日奉

<sup>133</sup> 村田治郎 1928 「奉天の回教寺(上)」『満洲建築協会雑誌(第八卷第七號)』, 満洲建築協会発行, pp. 29-33。

<sup>134</sup> 文中の鍵括弧(「」)は、原文からそのまま引用したものである。石碑や匾額などを文書化する時に、改行したところをこの記号で示したと見られる。

(上諭略)

嘉慶辛酉年 敬

(3)

乾隆四十六年六月十四日

(上諭略)

嘉慶六年六月 敬

(4) 黒字に金字

(5) 黒地に金字

(6) 黒地に金字

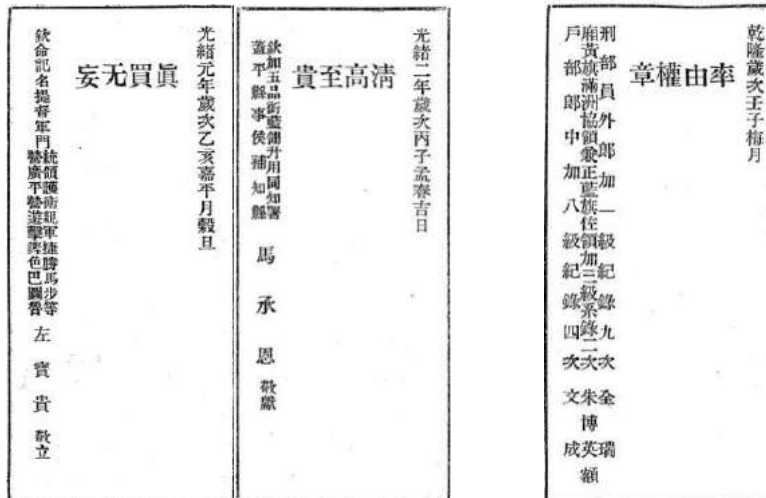
(7) 藍地に黒褐色字



(8) 黒地に金字

(9) 黒地に金字

(10) 大門内額、朱地に黒褐色字、壬子は乾隆五十六年

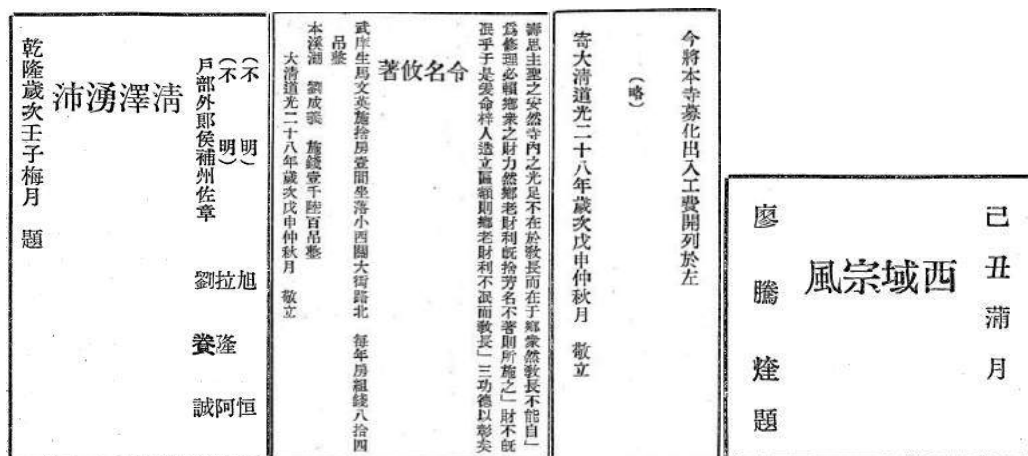


(11) 大門、黒地に白字

(13) 大門内

(14) 大門

(15) 大門 己丑は光緒十五年



(12) 大門、板に墨書

大清道光拾壹年

原夫清真寺 之設其由來也久矣懷昔先世建造之功茲「於嘉慶四年當日首事者相其地勢定其方位心力兼勞刻」修功成規模廓大殿宇巍峩點綴粧飾極盡華麗堪為教」主所憑依此亦先人念水源木本之美意焉茲曰歷年久」遠風雨催殘鄉老等不忍坐視其頽敗出為倡率以？[筆者注:原文のまま]作」之大家各戶克續先人之遺意齊心協力一勇躍桑從願出」資材功程難浩大眾擎自易舉條爾殿宇復整堂？(筆者注:原文のまま)」新美？(筆者注:原文のまま)美煥燦爛如初古人云莫為之前難美弗？[筆者注:原文のまま]」莫為之後盛弗傳其斯之謂與今將造事各戶開」列於左以誌永垂不朽云

一入錢糧步	二千三百八十八吊柒百文	一入馬行步	八十五吊柒百三十文
一入口口錢	八十四吊整	一入月轉步	一百八十二吊肆百文
一入皮行步	四十一吊七百三十文	一入房步	七十八吊五百文
一人步糧	五兩		
一除木料錢	五百四拾五吊整	一除磚瓦灰錢	陸佰參拾肆吊四百文
一除石頭土錢	壹百五拾壹吊	一除釘鐵錢	壹百捌拾五吊
一除泥作大小工錢	參百二十八吊五十五文	一除木工錢	肆佰玖拾五吊肆百五文
一除油畫工錢	肆百八拾二吊	一除藤刀錢	三十一吊柒百四十文
一除泥木工喜錢	三十一吊五百文	一除車腳錢	二十二吊八百文
一除釉畫扁錢	三十五吊	一除請客錢	八十八吊三百六十文
一除外来客費用錢	九十吊零六十九文	一除日用雜相錢	五十一吊一百六十文
一除門簾子錢	四十一吊柒百三十文	一除更夫錢	八吊
共入步	二千八百九十九吊九百六十文		
共出步	三千二百二十二吊三百三十文		
以上除存下見步	三百二十二吊三百七十文		

建造工程鄉老 王振祥、任永祿、鐵永春、張德昇、馬孔維、黑佩玉、傅鋸、韓興仁、馬文英、鐵永鴻、張亮、馬俊、于尚、莫鋸、于和

歲次辛卯 麥月題

(16) 中門額、白地に墨書

張阿訇董修南寺樓殿

且吾南寺之樓殿丹青剥落棟宇欹斜」也垂數十年來鯁鯁焉為重修計者屢」矣然而事機之不遇即人力之不齊」光緒初年會二三權貴及強有力者欲」為之操辦其事不遇一舉手之勞一投」足之煩乃成此善舉耳

惜乎遲之已久」遂不果行也庚子兵燹之餘有

阿訇張公印桂林字香圃者天津滄州人也」由吉林辭任旋里道次省門時值齋月吾」寺阿訇尚在虛席 公因受贊就聘焉」公博學有碩望見義而勇

爲每於功課之」暇散趾流觀觀殿宇之摧殘傷黝堊之頽」敗緣謀諸掌教鄉老憊憑重修幸均樂從」其議也越明年歲辛丑公與掌教等四方」勸募積有數千金公於溽暑之天不憚辛」勞蓋爲教門起見務期事底於成而後已壬」寅秋需料足備癸卯春大興土木鳩工庀材」越九月而告藏嗚呼昔之事機不遇者而」今遇矣人力不齊者而今齊矣善舉未成者」而今成矣然所以遇此事機齊此人力成此」善舉者公一人耳然則登壽域近天堂」非幸也宜也公之善不可湮故書事」蹟於版木垂諸久遠用示不忘也云爾」

於是乎記

掌教鄉老等 敬立

光緒二十九年歲次癸卯嘉平月穀旦

(17) 中門

義塋遷葬記

(本文、北寸と略同一なれば略す)

今將義地進錢項暨圓經置房花銷各數目開列於左

一本寺分進市錢 肆萬貳仟玖百肆拾柒吊陸百玖拾文

一圓經花銷市錢 柒百五拾吊

一除花淨剩市錢 肆萬貳仟壹百玖拾柒吊陸百捌拾文

一置買市房花錢 伍萬貳仟壹百陸拾陸吊陸百陸拾文

一本寺淨添市錢 玖仟玖百陸拾捌吊玖百捌拾文

一每年應進房租錢 伍仟參百肆拾壹吊陸百陸拾文

南清真寺執事人公立

大清光緒二十八年歲次壬寅荷月下浣穀旦

(18) 水房入口額 墨地に金字



以上は、「奉天の回教寺(上)」の中に示されている、かつての南清真寺に存在した石碑や匾額などの記録である。南清真寺に関して中国側に残されている資料のうち、これまでに発見されているものに限って言えば、これほど詳細な記録は残されていない。村田の論文の中に収められた資料は、これまでの中国側資料に対して、主に2つの疑問に対する解答を与えている。まず、写真資料によって、1920年代から1930年代までの南清真寺の実態が明らかになった。また、これまでの中国側資料には、南清真寺の石碑や匾額などのことについて、一部分しか記録されていないし、その記録された内容も実物そのままの内容とは言いがたかった。それに対して、村田が残した資料は、南清真寺が所有していた殆どの石碑と匾額の内容を記録し、さらにこれらの記録から、南清真寺の修繕の歴史をまとめてあ



る。

南清真寺は、瀋陽回回営の基礎であり、瀋陽回回営の研究に重要な施設である。さらに、文化大革命を経て、中国国内の殆どの宗教施設は破壊されたため、現在の中国側の資料は断片的か、不完全である。その空白を埋めるために、以上の記録は非常に貴重な一次資料に違いない。

ここまで本項は、瀋陽の南清真寺を中心として、その創立と歴史変遷を、新たに利用した日本側資料を加えながら考察した。その結果、清初、鉄一族の鉄率吾による建設された南清真寺は、瀋陽回回営の最初の清真寺であるだけでなく、現在の南清真寺は、回回営の唯一宗教機能を果している清真寺であることが明らかになった。

### 3. 北清真寺

以上、「後街」の中心である南清真寺に対して、次に、かつて回回営の「前街（図 6④）」の中心であった北清真寺を検討する。北清真寺は文化大革命中に完全破壊されたため、北清真寺自身の所蔵資料は今のところ見つかっていない。南清真寺内所蔵の『清真寺史料』を見てみると、北清真寺については、「教長劉景元は、康熙元年（1662 年）六月五日に北清真寺を建設した。当時は 3 つの草屋しかなかった」と、「乾隆五十年（1785 年）、教長楊鳴亮と經理楊書臣は草屋から瓦葺き家へ改装した」という簡略な記録があるだけだ。

これに対して、『瀋陽県志』（1917）には、北清真寺について次のような記述がある。

北清真寺は、乾隆年間に楊氏、馮氏、脱氏に出資により、建設されたものであった。

道光三十年（1850 年）に、教長楊九泉、經理楊贊勛や馮元は北清真寺を修整し、そのことを刻む石碑も建てた。この石碑は『北清真寺は、南北 34 丈、東西寛 22 丈。北側は方氏と从氏の家まで、南は街道（官街）まで、西は楊氏の家まで、東は街道（官街）まで。乾隆五十年（1785 年）乙巳五月吉日、郷老楊建中、楊秉瑞、馮国、劉景先、馮士智、脱相安、楊光仁、楊名士、馮敬、馮秀同子、侄武拳国士、国榮同敬手立、承德県生員剛萬玉敬手書。』と刻んだ。

咸豐元年（1851 年）に、教長楊増や經理馮元などは、遥殿を増設した。

光緒十八年（1892 年）に、教長趙瑞恒や掌教金元などは、9 部屋を修整した。光緒二十六年（1900 年）に、教長丁徳樹、掌教楊廷遠、經理王信や馮君徳などは、寺内を総修整した（土地使用面積 5228 平方メートル、建築面積 1593 平方メートル）。

創設年に関しては、以上の 2 種類の資料に決め手はない。北清真寺は既に存在しないためもあって、その時代は康熙から乾隆の間であると言えないし、その創建者も、イマームの劉景元か、楊氏、馮氏、脱氏の 3 人であるだろうと推測できるのみである。

官撰資料である『瀋陽回族志』（1996）では、北清真寺に関する記録は基本的に『瀋陽県志』（1917）を利用しているので、創設状況を知るための有効な資料とはいえない。しかし、近代の事情について、若干の矛盾する記述がありながらも見ておく価値はある。『瀋陽回族志』には、北清真寺について、次のような記録がある。

民国 8 年（1919 年）4 月、教長楊觀元、經理左伯倫や脱広録等は、15 間の礼拝殿を修繕した。この時、清真寺には 69 部屋があった。回回営の回民は北清真寺について『規模宏大、建築精華為我東

北極莊嚴之寺院』(規模が大きく、建築が優れ、東北で極めて荘嚴さを持つ清真寺である)と評価した。

1973年に、この清真寺は文革により、完全に破壊された。<sup>135</sup>

しかし、若干の矛盾を含む記述も紹介しておく、『瀋陽回族志』の「宗教信仰」の部分では、北清真寺について以下のように書かれている。

民国8年(1919年)、教長李書芳や經理石煥章等は、5間の部屋を修整した。1935年、教長楊慕勤、經理馮永厚、脱朋九や馮繼珍などは、北清真寺に沐浴室と靈安室を建設した。1938年に、牛羊業組合の2500元の送金で、5間の講堂を増設した。1974年に、北清真寺は完全に破壊された<sup>136</sup>。

以上の資料から、かつて回回営の「前街」の中心であった北清真寺の成立年代については不明確であるが、中華民国期以降、修復を重ねながら維持・運営されてきた事実は明らかである。ただ、文化大革命の最中に完全に破壊されて清真寺としての姿を消した。それゆえ、政治運動における清真寺の破壊に関する当局のタブーが、記述に若干の齟齬を生んでいることも留意すべきである。

次に3種類の日本側資料を見ると、当時の北清真寺の所在地について、「奉天の回教寺(下)(満洲回教寺建築の研究八)」<sup>137</sup>では、以下のように述べられている。

#### 所在地

小西邊門より小西門へ通ずる電車線路に沿ふて行けば、約五六町位の所の左手に凹地(大低水が溜つてゐる)のある廣場を見る。此の廣場の北側にある一廓の建物がそれであつて、道路からでも北寺經學とある小學校の門や、向つて右端に掖門が見える。

これで、北清真寺の場所を把握することができた。資料は、北清真寺における内部の構造について、以下のように記録している。

#### 配置概要

本寺は東、南、西の三方の殆んど全部が道路に接し、北のみ隣家を控えて可なり廣い地域を占めてゐる。その中、寺の建築が占めてゐる地域は「」形になり、門を南の東隅に開き、やがて入つて行くと大殿は東西に走つてゐるといふ風に、九十度折れ曲つた配置である。

先づ東南に當つて、大門、兩掖門があるが、この大門に當る建物には前方に院子があつて更に小さい門を備へてゐる。此の様な山門は満洲には他に比類がない。門を入つた所が院子であり、何物もない。やがて中門から中へ入ると其の向つて左に大殿があり、右に耳房のついた三層樓が建つて、更に一寸した回廊風の壇が二者を「」形に結びつけてゐる。従つて大殿を拜するには今迄の方向を九十度左に廻つて西向きにならなければならぬ。中門内の院子には塙が一面に敷き渡してあり、通路

<sup>135</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 308。

<sup>136</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 113。

<sup>137</sup> 村田治郎 1928, pp. 28-41。

の部分だけ一段高い。

中門を入つて一直線に北へ行けば、大殿に平行して北境界線を劃する客廳講堂、その西に水房。三層樓と客廳との間に、東境界線に沿ふて一棟南北に走つてゐる。客廳と大殿との中間に一間の井亭が建つ。大殿は周圍に空地を控えてゐるが、その南空地の西側に門房の如きものがあり、南側には清真寺學校（北寺經學）がある。

以上述べた如く建物は北、東、南に於て敷地の境界線に沿ふて建ちならび、中央に大殿が東西に走つてゐるのである。大殿の縦の中心線は東西よりも東南、西北に十度ほど傾いてゐる。其の他の建物は必しも大殿に對して平行又は垂直でなく、それ敷地に伴つて多少角度を異にしてゐる。

本寺は配置の整正は南寺に及ばないが、建物の種類に富み且つ壮大な點に於て、滿洲回教寺院の中で最も特色ある寺院の一つである。

この記録によって、中国側資料には記録されていない北清真寺の内部の構造や建築物の状況について、その空白を埋めることができた。特に、文書の最後で、北清真寺の建物の種類と壮大さは奉天だけではなく、滿洲の中でも特別な存在であると強調しているが、本論の筆者も実際に瀋陽で現地調査を行っている時に、「かつての北清真寺は瀋陽の清真寺の中で、最もいい建物を持つ清真寺であつた」という話をよく耳にした。これは上の記録と一致するものである。

しかし、「奉天の回教寺(下)」の北清真寺に関する部分では、「奉天の回教寺(上)」の南清真寺の部分と違って、平面図が添付されていない。だが、村田は建築学の観点から、北清真寺内の大門、掖門、中門、回廊、大殿、三層樓、耳房、五間房子、客廳兼講堂、水房、井亭、附属室二棟などの建築物について、考察している。ここでは、北清真寺の当時の写真資料を紹介するにとどめる。

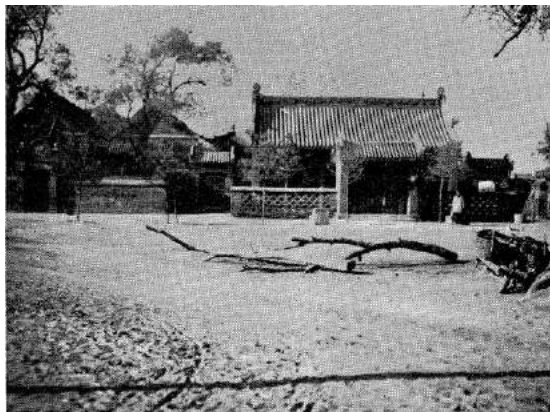


写真 33 「北寺大門」 出典：「奉天の回教寺(下)」

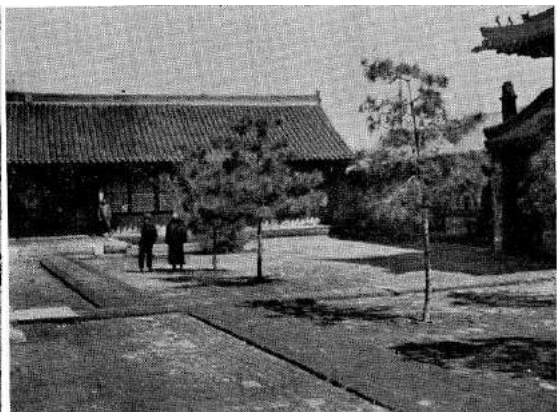


写真 34 「中門より客廳講堂等を望む」 出典：同上

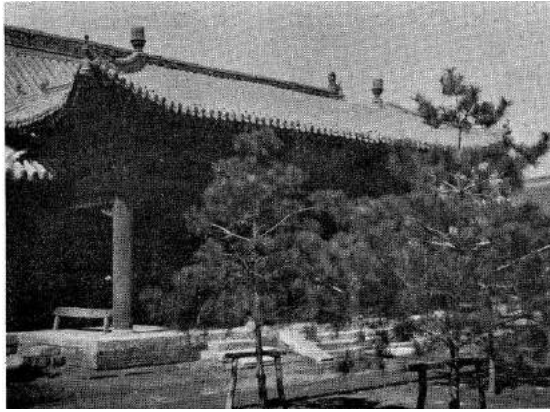


写真 35「北寺大殿」出典:同上



写真 36「北寺大殿（側面）」出典:同上

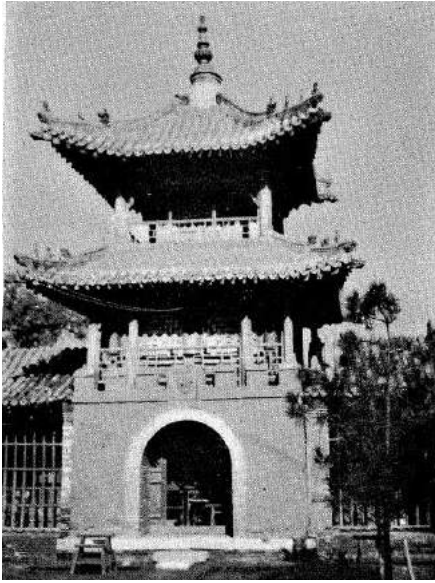


写真 37「北寺望月樓」出典:同上

以上の瀋陽の北清真寺に関する写真資料（写真 33～37）は、中国側資料には殆ど見当たらない質のものであり、日本の満鉄資料の中でも稀少なものである。これらの写真資料も、瀋陽の回族研究の空白を補足するものである。

だが、「奉天の回教寺(下)」でも、北清真寺の成立過程は明らかにされず。ただ、「北寺の創建に關しては瀋陽縣志の乾隆年間に楊氏脱氏馮氏が建てたといふ記事以外に、何等手にしてゐない」と記されているだけである。

それでも村田は、清真寺内の石碑や匾額の調査を通じて、北清真寺の修繕の過程を以下のようにまとめている。

表 2「奉天北清真寺変遷表」

	年代	西暦紀元	功勞者
創建	乾隆二十年頃以前？	一七五五以前	楊氏脱氏馮氏
重修	乾隆五十年	一七八五	
重修	嘉慶十年頃？	一八〇五？	

重修	道光八年頃？	一八二八？	
西洋樓建	道光十五年より以前	一八三五前	
重修	道光二十八年	一八四八	楊九全
重修西洋樓	咸豐六年	一八五六	李斌 王平 馮殿魁
彩畫大殿	光緒二十八年	一九〇二	掌教鄉老
重修大殿樓殿	民國八年	一九一九	

その他

大門…乾隆二十年匾額、乾隆五十年石碑

中門…道光二十九年匾額

三層樓…道光三十年、咸豐六年石碑

大殿…嘉慶十年以後の匾額

講堂…乾隆二十一年、嘉慶二十一年匾額等

膳房…光緒十四年

これによって、北清真寺成立初期から 1919 年までにおける清真寺内の建築物の変化を概観することができる。この変化の過程から、同時期の回回宮の変化の面も探索することができるであろう。以下は、村田が「奉天の回教寺(下)」で紹介した、北清真寺内の建築物の変化を示す石碑と匾額である。

石碑

(A) 西洋樓南のもの

蓋聞覆載造化之謂功道貫古今之謂聖教大賢秉天命首言性道之教」 眞主法經典分闢邪正之由歷歷遵訓由來尙矣茲緣小西關舊有清真寺三座皆係崇正禮拜之所其原」設規範無非歸正化一無奈相傳久遠源本失沒以訛傳訛改爲新教洵集耆老無由稽考吾儕恐入異」端誤墜苦海默然虔祝願逢師範識其本源返撲爲眞乃吾儕不幸中之幸也久慕」馬老阿訇道高德宏博文約禮化行五嶽輒述四洲雖起景仰之思其如幣聘無緣忽於甲寅秋實蒙」

眞主恩惠暗中指引 老阿訇辱臨敝邑聆其威儀不啻駕從天降吾儕欣感之下心同志合具緘相邀」不我遐棄談經論典闢邪歸眞清源遏流歸正化一不料有未諳世事愚昧之人不遵古教反行歐師改」教被馬云從呈按傳案蒙承德縣奎公祖訊明眞情嚴加敕示仍照古教先賢經典行事母得改舊從新」並著南北東三寺一樣行事不意結案之後愚昧之人如開茅塞滌慮洗心追悔前愆誠乃」馬老阿訇正教之所化耳奈北清真寺原有馮元建立西洋樓一座至今二十餘年被風雨摧殘灘塌滲」漏不忍坐視意欲鼎新而革故委是獨力而難成吾非布施安得錢財黃葉鋪亭不當金青苔繡壁難成」 畫空囊如水無米難炊偏告於十方庶成功於一旦於是馬云從王平楊春隆叩懇一貴官善士代募善緣遂心捐資福修於上澤被於下道法無親惟德是依理固然也今而工程告竣不敢」忘惠另設匾額懸於寺內於是時也負者息於斯行者歌於斯文人雅士莫不流連於斯無不仰藉盛助以瞻樓寺之煥然耳爲此以垂不朽云爾

大清咸豐六年歲次丙辰孟秋之月 穀旦

(B) 西洋樓北側のもの

重修盛京外讓門外北清真寺碑記

盛京在京師之東千五百里白山拱峙海水朝宗爲我朝龍興之地從龍入關者自滿洲蒙古漢軍而外有回民數千戶

聚族而居沐浴」聖天子之教化生息體養鼓舞振興列在仕藉者實繁有徒即其編氓耕鑿相安不忘西土之舊俗動遵先祖之遺規其意良」可風也蓋回回教發原西域天方國自」貴聖穆罕默德生於梁武帝時聰明誠篤衆望攸歸及長臣服西域諸國虔奉」眞主之天經遠紹列聖之道統知太極本於無極體認獨一之大原重五紀而修五功效徵七日之來復當隨開皇時始命先賢塞爾德宛囑」述奉經入貢建懷聖寺於廣東唐眞觀時入貢未歸者四千餘人詔分隸各省賜宅授田勸建寺宇迄今一千三百餘年」率由舊章不忘本始亦可見」聖教之入人者深不特西來之民間而興起即東土之王公卿士大夫知吾教崇正闢邪實與儒術相爲表裏故能服膺食」德歷數十百世而弗衰正道之感乎如此其遠也奉天外讓門外北清真寺爲回民朝拜之地道光二十八年重修規模」宏整殿宇崇隆寺之司鐸者爲本郡楊九全老師能述經訓以啓愚蒙寺之司事者爲本邑李斌」王平馮殿魁諸卿老亦能踴躍急公不辭勞瘁其至誠足以感動卿相維時穆鶴舫相國前任盛京禮部侍郎春」少宗伯前任盛京刑部侍郎毓少司冠前任奉天府承德縣知縣興老公祖聞而嘉之知其尊」主讚聖有關於正人心厚風俗者咸敬立匾額詣寺懸挂以誌欽崇居斯寺者顧名思義保守根本不感異端庶不負前人」創造之深意而爲今後世吉慶之完人也是爲記

大清道光三十年歲次庚戌夏五月既望 吉日

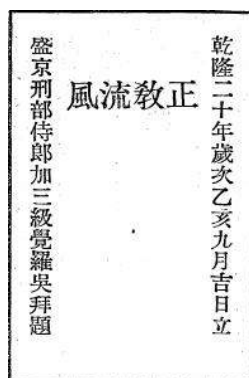
例授文林郎甲辰科舉人揀選知縣儀徵

楊贊勳謹撰揚州荻甫陳沐書丹并篆

匾額

(1)大門正面にある群青地に金文字

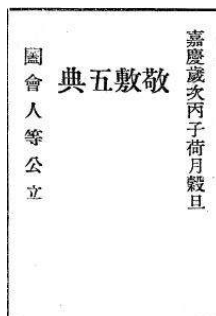
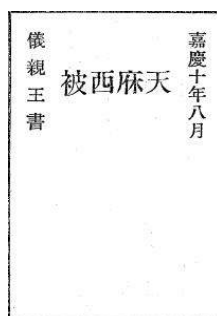
(2)講堂阿訇室入口 白地に緑文字。丙子は乾隆二十一年



(3)大殿 藍地に金文字

(4)大殿 藍地に金文字 (5)講堂内 丙子は二十一年

(6)大殿 藍地に金文字



(7)講堂入口の匾額 黒地に金文字

蓋聞爲善者福之基也故君子好善終日乾乾因鄉前輩諸君子」樂善捐子創建北清真寺壹座殿宇輝煌樓庭金彩當今之時莫」此之盛也昔有馬君宏圖於 乾隆二十七年十月二十六日將小西關大街路北」門市房兩間施捨北清真寺壹間租價公中之用隨代紅契壹紙」今有馮君凱元昆仲二公恩念 先人心意孝思所感三次將千金之產業」施捨於寺中爲開大學作常年之經費爲恐日久有殆彼時稅契」更名過格雖見行教門未有若此心眞意誠是千萬人之所難及」也此心可與天地同久我輩同流愧感無極遂糾合同志造匾壹」額懸垂不朽云爾 今將所施房園開列於後

瑪君凱元於 嘉慶十九年九月初二日因 先父五十週之期將自」置北寺路東正仰瓦房拾貳間原買價銀壹仟零貳拾陸兩隨代」紅契壹紙爲証

馮君凱元於 嘉慶二十三年十一月初一日 先母三十週之期又」將西菜園壹處內有正仰瓦房參間井壹眼南北長肆拾丈東西寬貳」拾丈原買價銀貳百兩整隨代紅契壹紙爲証

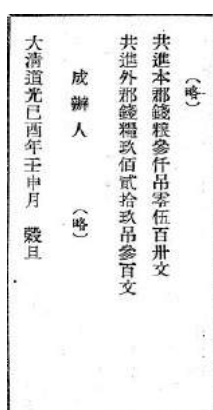
馮君凱元又將東菜園壹所內有正仰瓦房貳間井壹眼南北長貳拾陸」丈東西寬貳拾伍丈原買價銀壹百兩隨代紅契壹紙爲証三次因」

先父母週年之期將千金之產施拾於寺中租價爲開經大學作常年」之經費不准掌教教老私取私用並紅契參紙在寺中存放永遠証

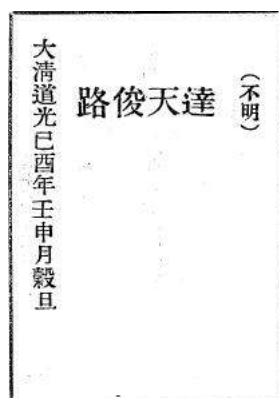
## 實善名揚

道光拾壹年歲次辛卯菊月吉日教末等公立

(8)大殿 (9)大殿 乙酉は二十九年 (10)大殿 藍地に金文字 (11)大殿 藍地に金文字



(12)大殿 乙酉は道光二十九年 (13)中門正面入口上部にある (15)大殿 黒地に金文字。戊寅は光緒四年



(14)賬房入口の匾額。黄色地に緑文字

蓋聞五功之義天課爲首課者以其財貨用於主也緣寺中西北墻院窄狹不敷作用其墻外尙有從姓地基早欲售出而此地正恰寺中之用苦於地利貧乏幸蒙

翼憲左老軍門好善樂施給銀五拾兩以資價置前項地基衆教末合衷感戴因思上年

翼憲令昆玉三大人暨令愛相繼歿世茲土衆教末願於大小開齋以及按月三十日延請師尊二位上墳修經仰邀

主慈天堂是爲報德懸誌匾額用垂久遠云爾

感戴不已

光緒十四年清和月吉日衆教末公立

(16)大殿前

光緒二十八年藏次壬寅 穀旦

## 清真寺彩畫工程記

蕭聞宏規大啓前人之締造良難舊貫重新後人之經營宜丞誠以善始必湏「善經善作尤賴善成也瀋陽清真北寺自翬建重修以來歷有年所土木之工」迄今猶極堅固不必改作矣惟道光已酉重經彩畫後至是已五十三年霜風剝蝕黝堊漸銷雨雪浸瑤丹青盡落苟非及時潤恐土木之堅固者因以

有摧殘之勢矣北寺掌教鄉老愀然慮及此遂糾合同志籌款損資爰將大「殿樓亭抱厦對廳講堂山門估工油畫煥然一新加以薙鴛瓦之苔彌縫完固」塞花甃之罅塗抹堅強需費一千四百餘金歷工五月之久而董其事者尤能「不憚勞動昕夕監視務期工堅料實極於美備而後已斯古先之所締造於是」乎有基勿壞矣所謂善經善成者非也工藏日屬予爲文以誌其事予既爲之「略書概概矣尤願後之起者承此意而歲時修之重新葺之緜緜翼翼鳩工俾」功庶斯寺之不朽也

工部主事都水濟吏司行走楊乃廣撰文

(以下略)

### (17) 大殿前

光緒二十八年歲次壬寅 穀旦

(前略)

今將彩畫大殿工程進項花銷開列後

文華堂畫工錢捌仟零壹拾玖吊捌百肆拾文 共襍項錢壹仟零參拾肆吊貳百壹拾文

四盛德共大小工飯貨錢壹仟玖百陸拾吊零伍百文 共牛肉錢肆百貳拾肆吊正

王木做共木工錢捌百零貳吊正 共粳米錢捌拾陸吊壹百文

全勝北共灰磚錢玖百玖拾柒吊正 共圓經乜帖錢肆拾五吊陸百肆拾文

永和木局共木料錢肆百吊正 共畫工顏料匾錢壹百伍拾五吊肆百陸拾文

尹錫匠手工鉛錢壹百肆拾五吊捌百貳拾文 共補數錢貳拾肆吊陸百參拾文

共進錢糧錢玖仟參百捌拾伍吊伍百陸拾文

共化銷錢壹萬肆仟零玖拾肆吊柒百五拾文 公中共墊錢肆仟柒百零玖吊壹百九拾文

北清真寺教長 脫廣祿 楊庭元 丁樹德 馮起祥 脫金

承辦人 馬廷元 馮德順 馬成魁 楊廷智 石忠德 于湧順 王信 洪玉升 馬成驛 張恒順 馮越德  
馮永祥 王義 金殿安 趙德貴 金凱瑞 于湧泉 脫廣林 楊廣德 張起隆 脫廣英 楊朝翰

### (18) 大殿前

#### 義塋遷葬記

省城西偏有回民義塋地區查鄉前輩捐資之所置也凡吾教之客店是邦與土著之無力買阡者不賴此爲殯葬之壤自其初置以迄於今歷年既多荒塚纍久矣相安如故矣而孰知滄海桑田時事之變更竟有出人意外者光緒壬寅夏外人改修鐵路逼近省城之西以此義塋適當其衝商令遷移議既允外人乃與另購新阡於瓦房之村每墳給銀拾兩爲改殯之費三寺掌教鄉老公同經理其事爰於是年六月二十八日卜吉遷葬有主之墳由其家得銀自遷其無主之墳三寺合領葬銀本寺應分之○除起墳改葬需用外餘四千多金掌教鄉老公議將餘款購買○產以所進租錢於每年六月二十八日爲改葬新阡者以及○○開齋遊墳念經並隨時修理墳墓楚義塋雖經變遷而措置如○亦復何憾哉或者曰遷葬之說吾教費貴今縱出於不得已終○歿者其無怨恫乎抑知不然夫此無主墳塋其在舊義地也野祭不至壤土不修狐貉穴藏牛羊踐履衰草年年徒嘆荒邱之敗落耳今以遷葬之故賴有餘資封以厚土矣以時修歲請阿訇掌教如期上塚敬誦天經普爲超度而北寺掌教鄉老亦於是日作齋飯之大會致祈禱之虔誠如斯措置彼泉壤有知當亦欣然想慰而幸遷之地爲良矣尚何怨恫之有因脫其事以垂久遠云

工部主事楊乃廣 操文



## 泉府重新

奉天北清真寺教長 脫廣祿 楊庭元 馮永普 脫廣祥

鄉耆 張文清 楊發全 左虎臣 楊貴 劉天恩 馮永金 馮起廣 楊占春 左文才 周起鳳 王信  
王國璽 楊殿祥 馮繼昌 馮起德 楊朝清 楊登勳 李廣瑞 王天魁 金鴻升 王海利 馮永和 楊廣  
德 張起隆 馮起泰 常順和 馳德功 馬玉生 等公立

民國六年中秋吉日立

## (19) 大殿前

### 奉天北清真寺興工辦事職員規章序

從來辦大事興大工經營庶務極重且繁固非一人之力所能操縱自如勝任而愉快也然職有專司責無旁貸竊恐言之非難行之維艱耳本寺展修樓殿各工業經成議興工之宗旨既明而理事之人員宜定如銀錢之出入文牘之往還稽核採買之良窳土木工作之監修及勤捐催款諸大端在在需人均關重要若非實事求是是不避勞怨者」又怎能辦理完全有條而不紊即茲擬定各項理事人員分任其事合將姓名臚列左方均盡」純粹義務涓滴不苟如各負責任一秉大公和衷共濟俾底於成將來大工告藏不惟名垂貞珉」定遠

主恩永無涯涘矣

正經理 楊世魁 對本寺工程及一切豫算規模代表取決之權

副經理 脫廣祿 協助正經理辦理一切事務偏正經理別有事故而

左承恩 副經理有代表正經理一切之職權

協理員 馮起德 單瀛 馬寶山 王信 馬子良 協理者兼理工程全部之事務

催款員 闔永宏 楊芳 丁福春 馮越寶 楊永林 楊永德 趙連寶 楊朝翰 莫文魁 趙不貴(略)

催款者分班任事發給各班長聯單手截務要根據相符各班應負完全責任以竟全功

會計員 (姓名略) 管理一切出入款項各員完全責任

文牘員 (姓名略) 文牘者管理公函書件一切出入帳目事宜

庶務員 (姓名略) 庶務者購買修工應需一切材料

監工 監工者管理工程一切事宜各員認真辦理以 荒工如工程有不相當之處與庶務互相負擔  
完全責任

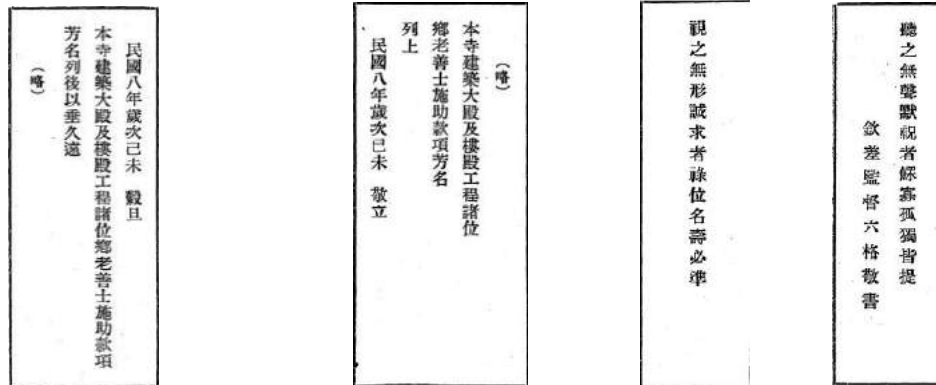
調查員 (姓名略) 調查寺內工程寺外收款一切事宜偏有弊端直接報告正副經理隨時評議以做效无

評議員 (姓名略) 評議本寺工程以及各職員應任之事務以杜流弊

統共化銷洋壹萬陸仟貳百參拾陸圓零壹

民國八年歲次己未 敬立

(20) 大殿 白地に墨書 (21) 大殿 白地に墨書 聯 大殿の前殿の柱にかゝれるもの



本項の2の「南清真寺」では、以上の満鉄資料で、石碑や匾額によって南清真寺の歴史変遷の一部分を、そして写真資料によって1920年代から1930年代の実態を明らかにしたものである。ここにおいて、この満鉄資料を利用する意義は、さらに大きい。『瀋陽回族志』は、北清真寺という清真寺について、「規模が大きく、建築が優れ、東北で極めて荘厳さを持つ清真寺である」という非常に高い評価をしていた。これと同じく、上述の満鉄資料も「建物の種類に富み且つ壮大な點に於て、満洲回教寺院の中で最も特色ある寺院の一つである」としている。だが、北清真寺は文化大革命を経て、完全消滅したし、これまでの中国側資料では、北清真寺に関する当時の記録や写真資料は見当たらなかった。そこで、以上の満鉄資料で、北清真寺の空白を埋めたことは、歴史学上の意義があることと考える。具体的に言うと、まず、以上の写真資料は、北清真寺そのものの運営実態、様々なスタイルや規模の建築物を再現している。つぎに、石碑や匾額の記録を通じて、北清真寺の修繕の過程が検証され、北清真寺の歴史の一部分が復元される。

次に、北清真寺と同じように文革の影響で一時的に破壊されたが、90年代に現地の回族の集金で復原した東清真寺の創設期を中心として、検討してみる。

#### 4. 東清真寺

中国国内で執筆された資料のうち、東清真寺に関する情報を含むものは、現在のところ『瀋陽回族志』(1996)のみである。この書によると、「東清真寺は清嘉慶八年(1803年)に建設された。土地面積は2571平方メートルであり、建築面積は1094平方メートルである。最初に、劉太元アホン、郷老馬成遠や趙廷功が、東清真寺の建設を提案した。回民の募金で、馬興の住宅を買い、そこで礼拝殿、南北講堂と沐浴室を建設した。劉太元は第一任アホンであった。清光緒十六年(1890年)に、清軍統領である耿鳳鳴は奉天に移住し、東清真寺の拡張を提案した。こうして、東清真寺は、20個の部屋と8個の沐浴室までに拡大した。民国10年(1921年)、南、北の講堂を増設し、民国35年(1946年)に、東清真寺の南側に、教義室と図書室を増設した。東清真寺内は57部屋になった。1958年に『社教運動(四清運動)』により、当局によって占用された。1980年に返還された後、瀋陽市工商聯が一時的に使用した。1988年から、東清真寺は東北三省の伊斯蘭教経学院の所在地である」ということであつた。

一方、村田は『満洲建築協会雑誌(第八卷第八號)』「奉天の回教寺(下)(満洲回教寺建

築の研究八)」<sup>138</sup>の中で、南清真寺と北清真寺と同じように、当時の東清真寺についても記録している。それによると、その所在地は、「小西邊門から小西門へ通ずる電車線路に沿ふて東行けば、街路の南側に沿ふてゐるのを見出す。此の間五六町」であり、「電車で行けば清真寺と稱する停留所で下車すればよい」ところであった。ここから、当時の東清真寺の大体の位置と、「清真寺」という電車の駅が存在した事実がわかる。

村田はさらに東清真寺という清真寺の構造について、以下のように具体的に紹介している。

#### 配置概要

本寺の敷地は北東南の三方が道路に面し、西のみは隣家に接してゐる。北は広い電車街路であるから、低い煉瓦牆を越して寺の配置が總て見られる。

大門は東側の小路に面し、両側に屋根瓦を葺いた牆壁を走らせ、牆壁には夫々小門を穿つてゐる。大門の中心線上に大殿（禮拜殿）があり、大門と大殿との中間の左右に客廳、講堂を配し、此の四棟が中央の院子をはさんで一廓をなしてゐる。講堂の西に大殿と平行して水房子がある。是に通ずる爲には、大殿側壁前端の両側から出た牆壁に穿つた圓形の門によらねばならない。その他の附屬室としては客廳の西方に二間房子の厨房があり、講堂の東方にも二間房子がある。従つて本寺は大殿、客廳、講堂、水房、大門を主建築とし他には二間房子が二棟あるのみ。

大殿は略々東面し、少しく南に偏してゐる。他の建築も亦皆然りである。

下に転載する写真 38～43 を参照されたい。詳細な平面図は、次の通り。

---

<sup>138</sup> 村田治郎 1928, pp. 42—46。

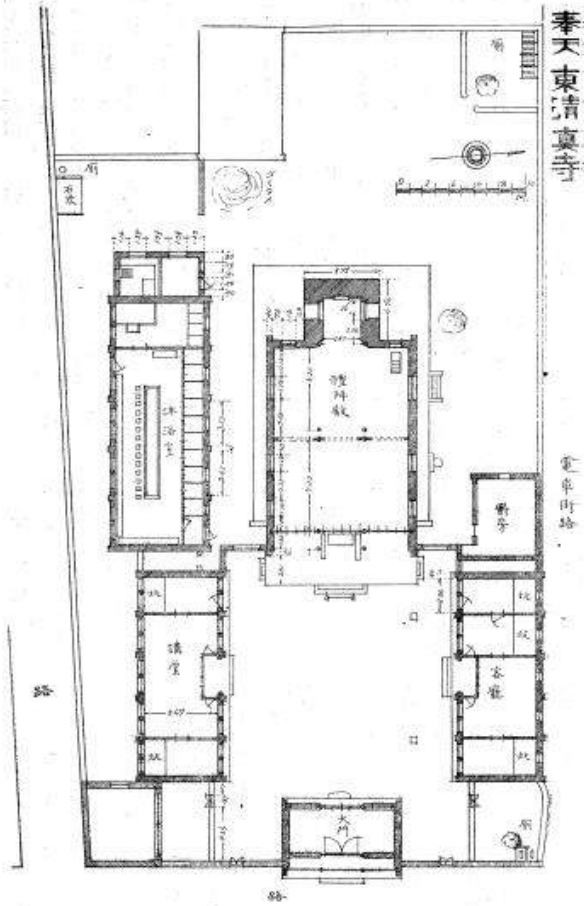


図9「奉天東清真寺建築構造図（1928）」<sup>139</sup>

文化大革命を経て、現在の東清真寺においては、上図の「禮拜殿」という建物しか残されたいないし、清真寺の機能も果していない。以下は、其の写真資料の一部分である。

<sup>139</sup> 村田治郎 1928, p. 29。

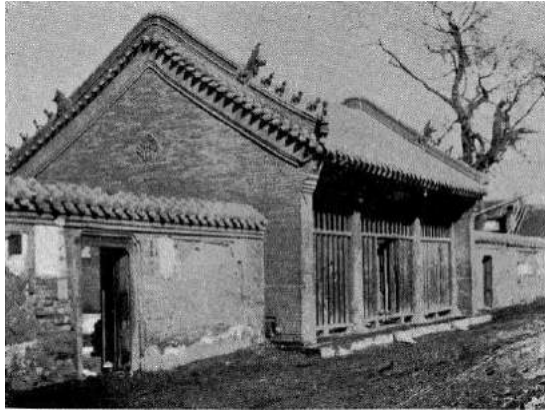


写真 38「東寺大門」 出典：「奉天の回教寺(下)」

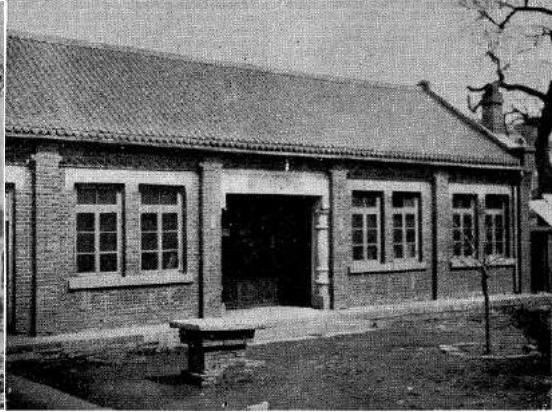


写真 39「東寺客廳」 (出典:同上)



写真 40「東寺大殿」 (出典:同上)



写真 41「東寺大殿内部」 (出典:同上)

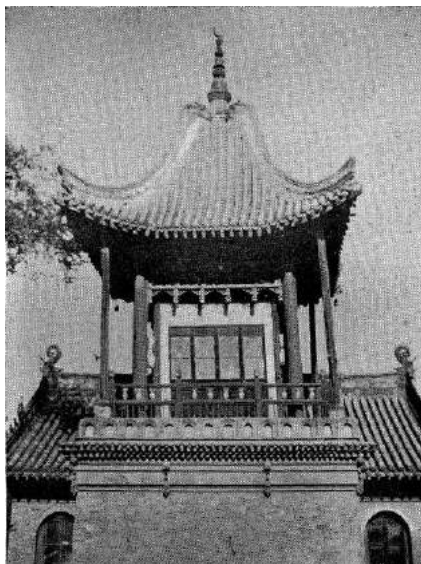


写真 42「東寺塔 (筆者注:望月楼)」 (出典:同上)



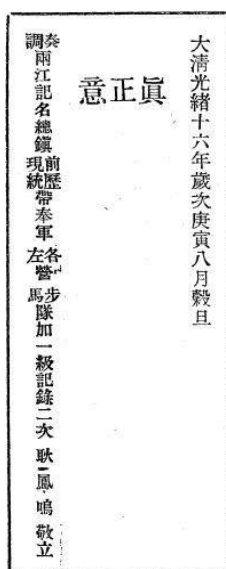
写真 43「東寺内井亭」 (出典:同上)

先に挙げた 2 つの清真寺と同じように、以上の写真資料から、東清真寺の姿を再現することができる。

しかし、南清真寺と北清真寺の考察と違って、「奉天の回教寺（下）」は、東清真寺の歴史について、深く考察していない。東清真寺における歴史については、「本寺には古記録の依るべきものを所蔵してゐない。」とし、北清真寺の碑文の「1856年に3つ清真寺が存在する」という記録をもとに、「東清真寺の成立は1856年の以前」と推論するのみであった。

また、東清真寺には、南清真寺と北清真寺と違って、石碑が存在しないため、3つの匾額に基づいて、修繕について紹介しているのみである。1つ目の匾額の内容は以下の通りである。

(1) 朱地に黒字



この匾額の中の内容から見ると、この匾額の作成は1890年であり、左宝貴の奉軍との関係があった。また、2つ目の匾額には以下のように記録されている。

(2) 黒字に白文字刻

據實登記爲旌彰事情因

林君富財於民國三年十二月十三日即甲寅十月二十七日逝世 以生前乏嗣於民國三年四月二十五號」即甲寅三月十九に日也將自置正仰瓦房五間原買價銀壹百兩整隨帶紅契」一紙施舍興東清真寺永遠爲業每年應進房租銀玖拾餘圓茲擬除修理該」房化銷外其餘作爲伊先考及本身與其妻逢期開圓經之費用再有贏餘即」歸作寺中公費爲此聲明用昭善舉籍垂不朽云

本寺公立

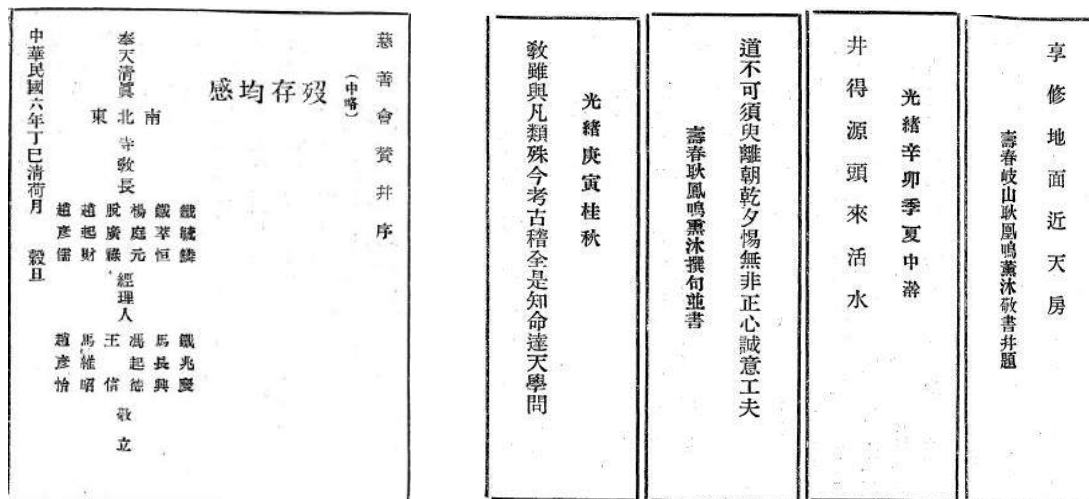
中華民國四年壹月十五號即甲寅十二月初一日

この記録は、中華民国時代に、東清真寺は回民の喜捨を受けたことを述べている。このことは、東清真寺運営の実態を表している。

最後の匾額群は、光緒期、民国期の東清真寺の修繕状況について、紹介している。

(3) 板に墨書

聯(a) 大殿正面にある—1 —2 (b) 水房にある—1 —2



以上、これまでの中国側資料で検証することができなかった東清真寺の歴史を再現することができた。

## 5. 他の清真寺

以上の3つの清真寺は、回回営内に存在する清真寺であった。以下、瀋陽市に属する、回回営以外の地に存在するいくつかの清真寺を概観し、回回営と関連する瀋陽回族社会の全体を認識する一助としたい。

### 〈文化清真寺〉

馬路湾（満洲国時代の日本人居住地に属する町）にある。文化清真寺の創健者である張子文アホンの息子へのインタビュー<sup>140</sup>によると、文化清真寺は1926年に、張子文アホン、郷老左叔倫や張兆麟らにより、創建されたという。『瀋陽回族志』によると、文化清真寺は1958年に接収され、1985年に土地開発された<sup>141</sup>。

### 〈鉄西清真寺〉

『瀋陽回族志』<sup>142</sup>によると、瀋陽の西北部工業区にある鉄西清真寺は、1940年に建設されたが、1958年の「社教運動（四清運動）」の影響で、房産局によってその土地を接収された。1991年に回族の募金で、新しい鉄西清真寺が建設された。

### 〈趙家沟清真〉

瀋陽の回族の墓の大部分は、瀋陽市東北農村部の趙家沟にあり、そこには瀋陽回民の葬式のための清真寺とも言える趙家沟清真寺がある。趙家沟清真寺は郷老白曇昇や賽樹昌な

<sup>140</sup> 2014年8月、北京。

<sup>141</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 114。

<sup>142</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 115。

どの人々の募金で建設された清真寺である<sup>143</sup>。

#### 〈沙子沟清真寺/皇姑清真寺〉

回回営外の瀋陽市内で最も留意すべき清真寺は、皇姑区にある沙子沟清真寺である。『瀋陽回族志』によると、1924年に熱河省督統は、瀋陽皇姑区の沙子沟という場所で砂生産に関する業務を行った。沙子沟で働いた勞工は、主に関内（山海関以内）から逃げて来た回民であり、多くの回民は生活の安定に伴い、清真寺の建設を考え始めた。こうして、1926年に、牛商人である趙子恒や王振山などの回民が、東北三省の各地の回族集住地域に募金し、その金で1927年に沙子沟清真寺が建立され、張博文という人が第一任のアホンとなった。沙子沟清真寺は、正房15部屋、礼拝殿14部屋、沐浴室6部屋、講經堂7部屋、靈安室などから成る。また、1951年に、李子真、馬貴や楊松令などの郷老が集金を行い、沙子沟清真寺に女子用の沐浴室、女子用の礼拝殿や正門などを増築した。しかし1957年に、沙子沟清真寺は強制的に接収され、さらに、中国政府の「整風運動」に従って始まった1960年の「回民整風運動」の影響で、清真寺は聯合病院に改造された。そして、接収から35年後の1992年に、政府は沙子沟清真寺の一部分を現地の回族に返還した。現地の回族は清真寺を一時的に修繕したが、1993年の土地開発で、沙子沟清真寺に終止符が打たれた。

1993年の土地開発後、現地回族は沙子沟清真寺の近くに新しい清真寺を建設した。この新しい清真寺は皇姑区に存在するため、皇姑清真寺と名付けられた。ちなみに、沙子沟清真寺第一任のアホン張博文は13年間在任した。第二任アホンは楊保林であり、彼は11年間に在任した。最後のアホン鉄慎恒は、6年間在任した。以上の記録を見ると、かつての沙子沟清真寺を中心として、小さい回族のコミュニティが回回営の外側にも存在したことがわかる<sup>144</sup>。

#### 〈新民清真寺〉

次に、瀋陽市の外縁部の清真寺も見ておこう。瀋陽市に属する瀋陽市周辺の都市に、いくつかの清真寺が存在する。まずは、新民県城内の南営子にある新民清真寺である。『瀋陽回族志』に、新民清真寺は清の乾隆三十年（1765年）建設であり、その土地使用面積は2673平方メートル、建築面積は838平方メートルであると記録された。また、新民清真寺は、嘉慶、道光、光緒や民国などの時代に、多くの修繕、増築を行い、特に、民国17年（1928年）の改築は最も大きかった。文革時代に、新民清真寺は殆どに破壊されたが、1989年に、政府が全面的に修繕にした<sup>145</sup>。

#### 〈新民県北街清真寺、新民県白旗堡清真寺、大民屯清真寺〉

その他、新民県北街にある新民県北街清真寺は、道光十五年（1835年）に建設、新民県白旗堡清真寺は光緒三十年（1904年）に建設、大民屯清真寺は、清代中期に建設された<sup>146</sup>。

---

<sup>143</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 115。

<sup>144</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 115－116。

<sup>145</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 116。

<sup>146</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 117。



## 〈老大房清真寺〉

同じく瀋陽市に属する県である遼中県の老大房に、老大房清真寺という清光緒十年(1884年)建設の清真寺があった。しかしこの清真寺は、文革期に完全に破壊された。その後1983年に、回族の募金で200平方メートルの面積を持つ老大房清真寺が復活した<sup>147</sup>。

以上の清真寺以外に、瀋陽市の周辺の新台子、清水台、蘇家屯、沙嶺や平羅堡などの地域にも清真寺は存在する。これらの清真寺は、50年から百年以上の歴史を持つとされる。

本節では最初に、かつておよび現在の瀋陽回回営の地域構造を考察し、そこから回回営内の清真寺を中心とする人間社会の構成のされ方を検討した。その結果、回回営の地域構造の変化の中で、回回営内における家族・親族関係は極めて重要なコミュニティの要素であることが明確になったと言ってよい。また、回回営の構成、構造の中で絶対に欠かすことのできない要素である清真寺の成立過程を中心として、瀋陽市に属する清真寺の歴史を考察し、回回営形成の動態を探索した。その結果、まずは澤井の定義に基づき、清真寺の社会階層を「宗教指導者」、「寄宿学生」、「管理委員会」、「一般信徒」に区分し、かれらが相互に形成する互酬的な社会関係の特徴が明らかになったと考える。また、中国の文献資料と日本の満鉄資料を効果的に利用することによって、これまで詳細に検討されていなかった南清真寺、北清真寺と東清真寺の三清真寺の歴史や遺構の事実を掘り起こすことができた。これらの清真寺こそは瀋陽回回営を結成させたものであり、地域の地理的な構造を定め、ムスリム社会の人的な関係とともに瀋陽回回営の根幹にあると考えてよいであろう。すなわち、それぞれの清真寺の周囲に集住した回民の人びとが回回営の形成・拡大をもたらしたことを振り返れば、清真寺が回回営の根幹をなしていることが具体的な姿として明らかになる。

## 第4節 瀋陽回回営の歴史

以上、瀋陽回回営の概像、および回族コミュニティの構成要素を分析、考察したが、次節は、本稿にとって、最も重要なテーマの1つである瀋陽回回営の変遷を検討したいと考える。本節は、主に6つの部分に分かれている。まず、第1項から第5項まで、元代から現在までの瀋陽回回営(回民のコミュニティ)の歴史事実を整理することによって、回回営の特色を明らかにしたい。最後の第6項では、現在の実態を理解するため、1900年代から現在までの人口変化図を整理・作成する。

### 第1項 元代から清末まで

#### 1. 瀋陽回回営の形成期

瀋陽の回回営の存在に関する最初の記録は、瀋陽故宮博物館に現存する『瀋陽路城隍廟石碑陰文』(あるいは『瀋陽路城隍廟功德官員題名記』)であり、その碑には、「元朝至正十二年」と「本廟營造……東至回回五哥院牆」の文字が見える。

元朝の至正十二年は、1352年である。瀋陽路にある城隍廟の東端は、現地のムスリム(回

<sup>147</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 117。

回五哥) の家の塀に接していたことを指している。要するに瀋陽における回回、すなわち瀋陽回民(と呼べるムスリムすなわち現在の回族の源)の歴史は少なくとも、1352 年(元代の至正十二年)にさかのぼることができる。また、瀋陽市に暮らす回族の一大家族である脱一族の家譜資料である『脱氏家譜』<sup>148</sup>によると、彼らは元朝の宰相の 1 人であった脱脱(トクト、1314-1355)の末裔であり、14 世紀初期に瀋陽に移住したという。

以上により、今でいうところの回民は、元の時代から現在の瀋陽にあたる地域に居住するようになったことに間違いはない。

明の時代に関しては、いくつかの史料がある。瀋陽市に暮らす回民の大家族の 1 つ、馮一族の家譜資料である『馮氏家譜』によれば、「馮一族の祖先は馮勝という人物である。明洪武十二年(1387 年)朱元璋は宋国公である馮勝に征虜大將軍を封じ、蘭玉に右副將軍を封じ、二十万兵士とともに納哈出に北伐を命じた。馮、蘭は回民であり、戦後彼らの親族や部下は瀋陽および周辺地区に住むようになった」とある。その他、哈一族と白一族のそれぞれの家譜資料では、彼らの祖先は明代から、錦州、瀋陽や鞍山などの地に住み始めたと記録されている<sup>149</sup>。

このように、明代に回民が多く瀋陽へ移住するようになったことは明らかで、次第に集住するコミュニティも形成されていったものと考えて間違いはない。なぜなら、第一章の先行研究の部分で考察したように、回民は「圉寺而居」(清真寺を中心として、その周囲に居住する)という居住形態をとることが殆どであるからだ。前節で考察したように、瀋陽市の最初の清真寺は、1636 年に建設された南清真寺である。となれば、現在の瀋陽の回回営が形成され始めた時期は、明末清初の時代であるとしておかなければならない。

## 2. 瀋陽回回営の発展期(左宝貴時代)

明末清初期は、回回営の形成期である。それに対して、清朝末期は瀋陽回回営の発展期ともいえる。その理由は、左宝貴という人物の関係は非常に深い。

『辞海』(1979 年版)<sup>150</sup>には左宝貴について、「左宝貴(1837-1894)、字冠廷。甲午中日戦争(日清戦争)の朝鮮平壤戦役で犠牲となった。当時 57 歳」という簡略な記録がある。『瀋陽回族志』は左宝貴について、以下のように記録している<sup>151</sup>。

左宝貴(1837-1849 [筆者注:此处は印刷のミス、1894 年が正しい])、祖先は「天方教徒[筆者注:即ちイスラーム教徒]」である。彼の原籍は山東省齊河縣である。乾隆年間の災害のため、祖父である左鳳友は家族を連れて、山東費縣地方鎮に逃げた。彼の父の名前は、左世榮(字)居長であり、母は楊氏である。家族の長男が左宝貴、次男は宝賢、末子は宝清である。1856 年に両親は病死した。その後、兄弟三人は、靴職人である叔父(父の弟)の所で生活し始めた。同年、左宝貴は 2 人の弟を連れ、南京で従軍し始めた。左宝貴は勇猛な武人で、様々な農民反乱の弾圧を経て、1876 年の時、一気に奉字軍の翼長となった。また、六品軍功や巴圖魯勇号(満洲勇者の名誉)などを受賞し、更

<sup>148</sup> 劉侗 1992, pp. 49-94。

<sup>149</sup> 劉侗 1992, pp. 181-199。

<sup>150</sup> 上海辞書出版社 1979。

<sup>151</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 12-13, pp. 322-331。

に、黄馬褂や双眼花翎など清朝最高の賞を貰った。彼は農民反乱を弾圧したにもかかわらず、民衆との距離はそれほど大きく乖離しなかった。彼の原籍や盛京(奉天)等の地域で生活する彼は、「左將軍」という呼び方をあまり好まず。綽名である「左爺」や「左三爺」という呼び方を民衆に求めた。また、彼は民衆の生活に関心を払い、奉天に進駐以来、營口海神廟、瀋陽練軍所や南北清真寺などの場所で、教育を振興した。また、福祉機関である「奉天同善堂」を設立した。「奉天同善堂」の中に、病院、牛痘局、救貧院(中で粥を提供する)、孤児院や小学校などを設置した。

1894年に、日清戦争(中国では中日甲午戦争)が始まり、左宝貴は奉天から5000人の兵隊を率い平壤へ進軍した。しかし、当時の清軍の総統である葉志超は卑しい者で、できるだけ戦わず、「守備中心」の方針を実施した。9月15日、日本軍が平壤城の前に到着したとき、葉志超総統は逃げようとした。彼に抗して、左宝貴は自ら戦場に入った。だが、日本軍の人数や装備の優勢、かつ清軍総統の卑怯な行為により、4日後に彼は平壤城玄武門上で軍隊を指揮中に銃弾を受け、犠牲となった。[下線は引用者による教育と民生の振興に関する描写]

この資料から、左宝貴は1876年から1894年まで、主に瀋陽で生活したことがわかり、回民のコミュニティである回回營にも関心を払って、回回營に「奉天同善堂」という福祉機関を設立したこともわかる。奉天同善堂について、中国側の資料はほかに見当たらないが、満洲国時代に編纂された満鉄資料からその記述を発見した。

満鉄資料である『奉天同善堂要覧』<sup>152</sup>の最初の「本堂創始者左寶貴氏ノ略歴」は、左宝貴および奉天同善堂について、以下のように記録している。

左公ハ道光十四年山東省費縣坨坊村ニ生レ、字ハ冠廷ト號シ、伊斯蘭教ヲ信仰幼ニシテ父母ヲ喪ヒ、清ノ咸豐初年寶賢、寶清ノ両弟ト共ニ、湖南省司令曾國荃ノ民軍ニ入り、楊子江南北ノ討匪ニ功ヲ著ハシ、遂ニ山東遊撃隊長ノ職ニ補セラレ尚花翎ト稱スル勳章ヲ賜ハリ又金牌一面ヲ授興セラル、同治四年直隸固關營ノ守備隊長ニ任セラレ、河北直隸兩省ノ匪賊ヲ討伐シ、功ヲ以テ參謀兼副將ニ擢ンセラル、更ニ全十三年熱河一帯討匪ノ總指揮官トナリ……

時ニ匪首哈力套改ハ一群ノ馬賊ヲ率ヒ、朝陽建昌ヲ窺ヒ蠢動ス、左公之ヲ勦撫シ巨魁赴西來ヲ捕縛ス、左公ノ操縱其當ヲ得旦ツ統兵ノオアルヲ推奨シ、統領奉軍參謀長ニ任命セラル、次テ十五年高州鎮總兵ニ補セラレ、後尚奉天ニ留マリ練軍講武ノ傍ラ、城廓ヲ補修防備ヲ整ヘ以テ治安ヲ確保シ、道路ヲ開キ交通ノ利便ヲ圖リ更ニ教育ノ振興ヲ想ヒ營口海神廟及瀋陽軍公所、南北寺等ニ、大小義務學校ヲ創設餘暇親シク學舎ヲ訪レ、循々トシテ課程ヲ尋ネテ倦マス誠ニ儒士ノ風格ヲ有シ、斯ク内政ヲ整備スルト同時ニ社會公共ノ救濟事業ニ念ヲ致シ施粥廠ヲ設ケテ天災事變ノ罹災者並ニ貧民救恤ニ孜々怠ルトコロナシ。

光緒七年現在ノ本堂構内ニ天然痘豫防疫製造所、育嬰所、養老所ヲ開設シ省内天然痘豫防、育兒保護、難民救濟ニ努力シ、尚教育交通産業ノ開發其ノ他宗教ニ意ヲ用ヒ、寺院社祠ヲ建立シ、民心ノ教化ニ努メ更ニ奉天省以西ノ數州縣ハ土地低ク屢々水害ヲ蒙ル、左公練軍ヲ督シ堤防ヲ築キ洪水ニ備フ。……

同二十年皇太后萬壽七旬ニ當リ、更ニ雙眼花翎ノ勳章ヲ賜ハリ東三省歩騎營ノ總統ト爲ル此ノ年五月朝鮮事變起リ左公人ヲ派シ形勢ヲ探查進兵ノ計ヲナサシメ更ニ「朝鮮ハ中國ノ門戸ニシテ奉天

<sup>152</sup> 奉天同善堂 1939。

省ハ其ノ要扼ノ地タリ依ツテ海江防衛ヲ嚴ニシ各要所ニ兵ヲ屯シ警備ヲ堅カラシメンコト」ヲ上奏スルヤ、直ニ奉軍ヲ率ヒ朝鮮ニ出陣スヘキ詔命アリ、茲ニ於テ軍ヲ督シ平壤ニ進撃セリ。……十三日拂曉手兵ヲ率ヒ自ラ臨山北礮台ニ督戰シ、左右挾撃ヲ受ケ砲聲耳ヲ聾シ烟彈漲ルノ激戰三晝夜彈藥將ニ盡キテ援兵既ニ空シ、此ノ時……十四日諸將會議ヲ開キ葉氏提議シテ曰ク事既ニ爰處ニ至ル手兵ヲ殺サンヨリ一旦城ヲ棄テ退却シ功ヲ後日ニ圖ルニ若カスト、諸將言フ者ナシ、左公獨リ憤然トシテ之ヲ排シ今吾レ大軍ヲ擁シテ此ノ天險ノ地ヲ扼ス、戰末タ半バニシテ退却セントハ奚ンソヤ和若シ戰ヒ利アラサランカ只一死アルノミ葉再ヒ答フル能ハス、左公尚葉ノ卑怯ニシテ或ハ遁逃センコトヲ疑ヒ、自己ノ親兵ヲシテ之レヲ監守セシメ葉ニ代ッテ提督指揮官タルノ實權ヲ握リ、死ヲ決シテ皇帝恩賜ノ戎衣ニ身ヲ正シ手兵ヲ提ケテ自ラ軍ノ先頭ニ白馬ヲ進メ一氣ニ日軍ノ右翼陳地ヲ抜クヘク勇猛反撃彈丸盡キテハ刀ヲ振ヒ奮鬪力戰是レ努メタルモ武運ノ窮極スル處遂ニ咽喉ニ砲彈ヲ受ケ六十一歳ニシテ、亂軍ノ裡七星門ノ戰場ニ忠烈ナル戰死ヲ遂ク日本帝國大同館主管兼平安道地方司令官陸軍大佐水野勝毅氏之ヲ稱ヘ左公ノ古戰場七星門外ニ、三千年來燦タル東洋ニ流ル、誠忠武士ノ龜鑑トシテ、左寶貴統領ノ表忠碑ヲ建テ、碑面ニ大書シテ曰ク

勇冠三軍忠顯千古

明治三十七年九月十五日戰死

日本陸軍大佐 水野勝毅建之

而シテ朝廷ヲ始メ萬民左公ノ英靈忠體異域ニ淪ムヲ哭悼シ、太子少保（爵位）ノ恩賜アリ。……

伊斯蘭教ヲ信仰郷土ニ清真寺ヲ建立私財ヲ以テ永久維持ノ資ト爲ス、又出生地費縣城内ノ崇文書院ニ基金トシテ銀千両ヲ寄贈ス後世ノ學者ニシテ之ノ恩德ヲ蒙ル者、亦尠シトセス、且ツ縣内道路橋梁等殆ント左公ノ資財ヲ以テセラレ、里人今尚其ノ德ヲ稱ヘ篤志ヲ録碑セルモノ數箇處ニ存ス。

〔下線は引用者による治安、産業、教育と民生の振興に関する描写〕

この『奉天同善堂要覽』の中の左寶貴に関する記録は、上に紹介した『瀋陽回族志』の記録と殆ど一致しているが、『奉天同善堂要覽』の方が『瀋陽回族志』より具体的な部分も多い。両資料とも、清朝の回民将軍であつた左寶貴の尽力で、瀋陽の回回營が少なくとも一時的に安定、繁栄したことを述べている。また、現地でのインタビュー<sup>153</sup>によれば、回回營という言い方も、かつて西関（奉天城西門地域）という門番のような名称から、この時期に「兵營」の「營」を用いて「回回營」へと改めて呼ばれるようになったという伝承があつた。

清末には、回回營の安定により、瀋陽回民の文化事業も少しずつ発展していった。たとえば張巨齡によると、「1909年（宣統元年）に、張兆麟（字子岐）という回民が、鉄萃恒（字榮久）というアホンの保証、および政府に対する500元の保証金により、瀋陽で新聞社を創設し、『醒時白話報』という新聞を創刊した。最初の販売範囲は、瀋陽、營口、鉄嶺、開原や大連を中心としたが、後に東北三省、さらに北京まで拡大するようになった。当時、奉天の新聞社は、日本人の『盛京時報』以外に、『東三省日報』しかなかった」<sup>154</sup>という。また、『瀋陽回族志』は、「張兆麟は回族の福祉にも関心を払った。1911年、奉天ではペストが流行した。彼は東清真寺と相談した上で、東清真寺内で「精神防疫所」を設立した。

<sup>153</sup> 2010年3月。

<sup>154</sup> 張巨齡 2006。

その結果、奉天のペストで亡くなった 2500 人の中、回民はわずかに 10 人だった」<sup>155</sup>と記録した。

以上、瀋陽の回回営は、清の時代から形成され始めたことが確定される。また、清の末期、あるいは左宝貴将軍が瀋陽に在住した時が、瀋陽の回回営にとって 1 つの重要な発展期であったことが明らかになった。

## 第 2 項 中華民国期

清朝末期、あるいは民国初期、中国東北部は日清、日露戦争により戦乱の地となった。左宝貴将軍のおかげで瀋陽回回営内の回民は一時的に安定したが、肉商売や飲食店など小売業を生計とする人々が殆どであった。そしてこれらの小売業は、「西門臉雑巴地」という回回営の隣接地域で営まれた。「西門臉」とは、奉天城の西城門城壁地域を指し、また、この店は小屋掛けや屋台などの商売で、統一されていないため、「雑巴地」という名を与えられていた。『瀋陽回族志』<sup>156</sup>によると、西門臉雑巴地は、主に「白茶館」、「張茶館」と「馬茶館」という 3 つの回民の茶館を中心として、市場のような繁華地域に形成されていった。その後、回民料理の于家館、回民餃子の馬家館、中医眼科「王回回」診所、查拳（回民伝統武術）の劉宝瑞や張家、米家の回民点心などの小商売に加え、「医」、「卜」、「星」、「相」、「風」、「馬」、「燕」や「缺」などの「八大生意（商売）」を持つ「江湖（ここでは商業社会、あるいは市場と訳すことがある）」となった。しかし、この地域周辺は混雑しており、官兵や「チンピラ（白眼狼、地頭蛇）」から「慰謝料」を求められることが非常に多かった。

この問題の解決に関して、上述した「白茶館」という茶館の貢献が大きかった。当時、「白茶館」二代目の主人である白祺三氏は、回回営の回民の中で有名な武術家であり、地域周辺の「チンピラ」を追い出し、「雑巴地」の安定を取り戻した。また、查拳という回民伝統武術の武術家である劉宝瑞は、「慰謝料」を求める官兵と衝突し、多くの官兵を倒したため大事件となり、一時的に他の地域へ流亡することになった。

1924 年に、張作霖政府は、都市開発と電車建設の政令を出した。この政令に応じて、当時の瀋陽市市長である曾有発は、奉天城および周辺地域を開発するため、すべての商業を取り締まった。無論、奉天城に隣接する「西門臉雑巴地」は、重要な開発対象となった。このことは、此处で商業経営する者、特に回民に大きな衝撃を与えた。回民の生計を維持するため、革商人の李恒久、清代武弁の劉冠青、奉天軍旅長の楊沛および王相若、王福庭などの回民は、同じ回民商人である馬如麟氏に、彼の所有地に市場を建設するようを説得した。その後、回回営の東北側に「興遊園」という名前の露天市場が設立された。興遊園設立後、回回営内の小売業を生計とした回民および西門臉雑巴地の商人は、すぐにこの新しい市場で出店し、興遊園は一瞬にして瀋陽（当時は奉天）の重要な市場の一つとなった。

繁栄した興遊園では、後に場所が足りなくなるという問題が起こった。この問題を解決するため、馬如麟氏は北清真寺と相談した上で、北清真寺が所有する興遊園の隣接地に、「奉天第一商場」という近代的勸商場を創立した（第 4 章第 2 節を参照）。ちなみに、1940 年代に、火事のため、興遊園と奉天第一商場のほとんどは焼き尽くされた。

<sup>155</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 138。

<sup>156</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 135－140。

以上、この時期の回回営の維持は、当初、主に回民将軍などのような統治側の回民の有力者に任せられた。その後、政府側に回民の有力者が存在せず、清末民初の回回営は、西門臉雑巴地、興遊園や奉天第一商場のような回民自身の商業集合体によって、運営・維持されたとみてよい。

### 第3項 満洲国期

中国国内における満洲国時代の研究を行う際に、中国の研究者は十分に現代政治に配慮する。そのため、中国国内の「偽満洲国」研究は、政治的客観性を欠落させる部分も見受けられる。こうした研究上の背景を理解した上で、まずは中国国内の研究から、満洲国時代の瀋陽回回営の概像を探ってみる。

『瀋陽回族志』<sup>157</sup>によると、1931年「九・一八事変（筆者注：日本は満洲事変という）」以後、川村狂堂という日本の大陸浪人が瀋陽の南清真寺で活躍するようになった。当時の回民は、瀋陽周辺のムスリムの墓に自由に行くことができず、「通行証明書」が必要であった。川村狂堂はなぜか、回民に「通行証明書」を提供することが可能であったため、回回営の中の有力者となった。こうして彼は1932年に瀋陽で「協和会」を設立し、7月に「伊斯蘭教協会」を立てた。同じ記録によると、川村狂堂は会長としての職務権限を利用し、回民の補助金を横領したという。さらに、川村狂堂は「回教勤労奉公隊」を創設し、回回営の回民に対して、毎月3回飛行場で苦役をやらせたほか、回民の若い青年を集め、回教軍であるところの「洪啓部隊」を作った。

また、川村狂堂は瀋陽でのスパイ活動に成功した後、長春（新京）へ移動し、1934年7月3日に長春で「満洲伊斯蘭回教協会」を創立し、総裁に就任した。1936年に、満洲伊斯蘭回教協会は「満洲回教協会」と改名した。七七事変（別称、盧溝橋事変、1937年7月7日）後、彼は満洲国内の377座の清真寺内で、138の「満洲伊斯蘭回教協会分会」を立てた。

ちなみに、当時、回回営地域は、小西警察署に属した。だが、警察署は「牛羊業」を違法商業と定めていた。日本人警察の偵察隊は、多くの「牛羊業」を生計とする回民を逮捕し、罰金を手に入れた。

以上の事実を示す中華人民共和国政府編纂の資料は、近現代の中国側から見た「偽満洲国」時代の回回営を描いているということになる。歴史に対する記録は、往々にして各時代の権力者、あるいは権力コントロール機関により編纂される。満洲国時代を見る際に、中国と日本の観点は、一致しない部分が多いことは事実である。客観的にこの特別な時代を観察するため、これまで、ほとんど使われてこなかった満鉄資料を援用し、満洲国時代の瀋陽回回営の理解を少し深めたいと考える。

本稿の第1章第3節第3項の3の部分で、『満洲における回々教（『満鉄調査資料26』）』の主旨部分を紹介した。ここで、この資料の構成も含めて、かつての満洲の回回営を検討してみる。以下は、少し長くなるが、『満洲における回々教』からの抜粋である。

#### 一、回教の満洲に傳衍する迄

<sup>157</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 140-142。

イ、支那に入る迄<sup>158</sup>

ロ、満洲に傳衍する迄

唐の僖宗の乾符四年（西暦八七七年）流賊杭州を陥るや瞰浦にありし回教徒基督教徒及び猶太、波斯の諸教徒十二萬人を屠殺するに至りて、これより大に衰へたるも波斯地方より中央アジアに入り北支那に傳はりしものは猶存續し、後數年明代に至りて大に興るに至れり。今其の傳衍跡を見る先づ天山南路より新疆省に入り甘肅を経漸次陝西、四川、雲南、諸省に平和的民族傳教を行ひ又其の一部が陝西直隸を経て満洲に始めて入りしものである其の年代に至りては何等證とする可き記録なき故に之を確知する能はずと雖も、満洲に於ける各地の清真寺の設立が殆ど百二、三十年前頃にあるを見れば其の漸く回教徒の團體的表現を見るに到りしは清の乾隆の後半頃よりと見る可きものである、康熙帝の回教徒に對する優遇勅諭（後に記す）發布後一層傳教に便を得、従て満洲にも流れ入り乾隆の從半に到りて漸く團體的表現を見るに到りしとするは妥當なりと信ず。

満洲に入りしものは其の土地廣く地味膏腴なるにより此處に留まるに到り其の中心は尚清朝發祥の地奉天に自然に形ち造らるゝに至りしは當然なり。其後漸次發展し今日の如く全満洲に散布し、其の教徒數約七八萬人内外達せしものである。……

二、在満洲回教徒の宗教生活<sup>159</sup>

三、在満洲回教徒の社會的地位及び職業

イ、阿訇の學識<sup>160</sup>

ロ、清真小學校<sup>161</sup>

ハ、名地有力者の職業財産

智的方面は大體に於て先述の如く未だ低級の域を脱せず、然らば力の方面は如何と見るに之は各地の回教徒の有力者なるものを見るに、營口に於ける夏瑤臣、張思五、等海城の韓興周、遼陽の張子精、楊子玉、等十里河の張子仙、奉天の干<sup>162</sup>子洲、干子伐、孫鳳周、新台子の楊遵三、鐵嶺の劉福庭、扈德周、開原の十福堂、王子正、丁乙青、長春の沙鳳樓、韓雨卿、馬獻圖、火連寨の張德銀、李東甲、張聚川、本溪湖の金雲飛、張聚財、劉占元、鳳凰城の劉雅賢、宗先生、安東の馬占一、洪肇庚、錢三把等の如き人人指摘さるるもその職業財力或は其の權力等特別に擧ぐ可き程のものなし。

二、一般教徒の職業

職業と云へば多種多様之を各々に就き統計的に述ぶる事は現在に於て不能なる事は戸籍及び一市の人口統計不完の極にある支那を知るもの肯く所であらう。回教徒に於ては殊に然り故に今述べんとするものは只比較的に回教徒にして數の多き職業を擧ぐるのみである。

先に宗教生活に於て述へし如く彼等は豚を最惡のものとし之を食せず羊を純徳を備ふるものとし之を愛食するも、一般的に於て支那人は之と反對にして豚を尤も愛食するが故に、特別に羊肉を賣

<sup>158</sup> 本稿筆者注：主に中国へのイスラーム伝入についての説明であるので、ここでは省略する。

<sup>159</sup> 本稿筆者注：主に一般的なイスラームの宗教生活を紹介する（礼拝の仕方、喜捨や断食などのことについて）。ここでは省略する。

<sup>160</sup> 本稿筆者注：アホンの職業について、説明をした部分で、ここでは省略する。

<sup>161</sup> 本稿第2章に参照、ここでは省略する。

<sup>162</sup> 本文では「干」であるが、現地には「干」という姓が存在しない。フィールドワーク及び中国側の資料によると、現地の有力家族について、「鉄（鐵）」、「馮」や「張」などの家族が挙げられる。かつ、鉄子洲という人が鉄一族の有力者であった。ここでは、恐らく「鐵」である。

る爲には彼等の間に之を販るもの又多し、即ち此の羊馬を中心とし其の皮其肉等に干する營業を営む者は回徒に於て特別に多き所である。

此の外車馬業者等大體に於て賤業の部に属する者多く、特別に有力有望なる産業的に眼を注ぐ可きものを未だ見出さず。

#### 四、在滿洲回教徒の團體的勢力

清真小學校及び生徒數は前章に記せしにより此處に記する社會教育學校は□全然別にして之には阿文の學課なし

表3「大正13年の滿洲の回教に関するデータ」

地名	清真寺	阿訇	教徒數	社會教育學校	學生
大連	一座	穆阿訇	六百人		
金州	一座	馬阿訇	二百人		
熊岳	一座	李阿訇	千百人		
蓋平	一座	石阿訇	千三百人		
營口	二座	張阿訇・劉阿訇	五千五百人	一所	百二十人
海城	一座	趙阿訇	一千人		
立山	一座	白阿訇	三百人		
沙河	一座	楊阿訇	二百人		
遼陽	一座	劉阿訇	四千二百人	一所	百五十人
十里河	一座	白阿訇	五百人		
奉天	三座	張阿訇・馬阿訇・鐵阿訇	一萬六千人	一所	四百人
新子	一座	王阿訇	五百人		
懿路	一座	陳阿訇	一百人		
鐵嶺	一座	藍阿訇	二千人	一所	八十人
山頭堡	一座	陳阿訇	百二十人		
孫家臺	一座	馬阿訇	二百人		
開原	一座	王阿訇	三千一百人	一所	百四十人
昌圖	一座	穆阿訇	一百人		
四平街			二十人		
公主嶺	一座	劉阿訇	三百人		
長春	一座	于阿訇	三千五百人	一所	一百人
吉林	三座		一千人		
火連寨	一座	張阿訇	一千八百人	一所	四十人
本溪湖	一座	王阿訇	三千二百人	一所	百二十人
鳳凰城	一座	趙阿訇	三千四百人	二所	百四十人
安東	二座	安阿訇・錢阿訇	三千六百人	一所	百二十人

清真寺數合計三十一座

教徒數合計五萬三千八百四十人 沿線以外に散在するものを合せ七八萬内外

社會教育學校數合計一千四百十人

清真小學校數合計二十二所



學生數合計七百三十八人

此の外特別に團體組織或は言論發表機關等はなし。

即ち右の如き對内對外的團結力を有する回教徒が滿洲に於てとにかく以上の如き勢力を有しおる事實は假令其の職業比較的賤業にして、尚中心ともなる可き特別優秀勢力者なきを以つて直に之を蔑視し能はざる處である。殊に近來上海に於て前山東鎮守使馬良。上海回教同志會協理哈馨。上海回教各團總理事にして江蘇交渉公司商務諮議旅滬商幫協會正會長馬桐、上海清真寺董事會長金子雲。廣西陸軍旅長（陸榮廷部下）馬濟。上海中報繙譯主任伍特公五昌恒號總理金興祥、永昌義號經理達世安。上海海洋社相談役佐久間貞次郎氏等により發起されたる中華回教俱樂部なるものと連絡し、又奉天の阿訇張徳純氏の活躍により教徒間に新智識の輸入と勢力繁榮とが可成の成績を現はしつつある時に於てをやである。

然りと雖一般支那人が回教徒を蔑視する事は尚滿洲に於ても同じく、殊に張作霖如きも回教徒團體勢力向上に従ひ着目する處大なれば、其の發展の限りなきを示す時は遂に彼の壓迫の手を免れざる可く、果して何處迄延び得るかは疑問とする處である。

##### 五、結論<sup>163</sup>

以上の『滿鉄調査資料 26』の「滿洲における回々教」は興味深い多くの觀察が述べられているので長く引用したが、本論で注目したい最も中心的な部分は、「大正 13 年の滿洲の回教に関するデータ（筆者注）」という表である。この表は、これまで中国側が参考・利用してこなかった回教徒に関する第一次的な滿鉄資料であり、その時代の回回營に関する空白を埋めることができる日本側資料である。

まず、奉天に関する部分の内容を見ると、1924 年の奉天の清真寺は 3 座であり、それぞれの宗教指導者は張阿訇、馬阿訇と鐵阿訇であり、回教徒の総人口は一万六千人であり、社会教育学校は 1 つであり、在学する学生数は 400 人である。ここで挙げた 3 つの清真寺は、恐らく南清真寺、北清真寺と東清真寺のことである。また、鐵阿訇は、鉄一族の影響力が大きい南清真寺の宗教指導者であると予測できる。それに対して、張阿訇と馬阿訇は、北清真寺と東清真寺それぞれの宗教指導者であろう。この表が当時の奉天における回教徒の人口数は 16,000 人であることを示した点は、このみで知られる事実として貴重なもので、注目しておきたい。この表で挙げられた社会教育学校とその学生数などについては、第 3 章第 3 節で具体的に検証する。

あらためて、本資料の各部分を検討してみると、最初の「回教の滿洲に傳衍する迄」の「イ、支那に入る迄」の部分では、「中国におけるアラブ伝来」を中心として紹介されている。この部分は、一般的な中国イスラームの伝来史であるため、ここで深く議論しない。「ロ、滿洲に傳衍する迄」という部分は、滿洲地域内における回教の伝来過程について総括し、その後、大体の人口を予測している。この部分の記録は、詳細な統計資料と言えないが、莫大な滿鉄資料の中で滿洲地域内の回教徒に対する極めて少数の記録とも言えるし、貴重なものである。

資料の第二部の「在滿洲回教徒の宗教生活」は、一般的なムスリムの生活様式を紹介している。一方、第三部の「在滿洲回教徒の社會的地位及び職業」という調査結果を見ると、

<sup>163</sup> 本稿筆者注：主に当時のイスラームと国際状況を説明したところだが、ここでは省略。

満洲の回民にとって、教育と商業が最も重要な生活要素であることがよくわかる。

さらに、資料の第四部の「在満洲回教徒の團體的勢力」の内容を検討すると、満洲地域内の回民は、宗教団体から宗教教育団体へ役割を拡大し、宗教教育と現代的社會教育との将来性を追求せんとしていると見られる。

以上のように、満洲国を中心とする時代の回民社會を少し深く認識することができる日本側の満鉄資料は、ある種の統治準備と関連するが、資料の収集、整理などの活動は緻細であり、高く評価することができる。

#### 第4項 内戦期

1945年に日本は敗戦し、瀋陽は国民党の南京政府に属するようになった。ここから始まる中国内戦期ともいえる時代は、非常に短い。この時代の回回營に関して、『瀋陽回族志』は、主に2つの事項を中心として記録している。すなわち共産党について、そして国民党についてである。

まず、『瀋陽回族志』は、以下のように、回民の共産黨員である鉄漢と国民党の作戦について記す。

1947年3月、鉄漢（回民）は遼寧省伊斯蘭教協會理事長となった。鉄漢（鉄鼎恒）という人物は、瀋陽回回營の鉄一族に属し、黄埔軍校を卒業した国民党軍人であった。だが、彼は国民党政権に不満を持ち、共産党の協力者となった。その後、瀋陽の回回營の回民は、鉄漢を中心として、国民党政府と対抗した。

恐らくこの部分は、この時期の回回營は、国民党と比べると共産党への傾斜が強かったと表現しようとするものである。

国民党は、回回營の回民の支持を得るため、瀋陽の伊斯蘭教協會から回族の知識人である趙延久を選出し、小西区の区長に任命した。だが、当時の政府の秘書長である徐希農という人物は、回回營の回民に対して、差別的な質問を連発した。そのため、区長の趙延久氏は激怒し、同じく憤怒した回回營の回民とともに、デモ活動を行った。

当時の国民党政府が回回營に対して、差別的な行為を行ったことを、具体的に述べている。この時期は短かったし、内戦のため、記録は少い。現地でのインタビュー調査によっても、この特別の時代について、具体的に紹介してくれる人は少なかった。現段階で、わずか何人かの80歳代の老人<sup>164</sup>の話によると、この時代の国民党政府は、回回營の回民に対して、満洲国時代の「偽」政府より差別が強かったことは確かなようである。そこで、この時期のまとめとして、共産党と国民党の激しい対立競争の中で回民を含む住民は、奔弄されたことと言える。

#### 第5項 中華人民共和国期

---

<sup>164</sup> 調査時間は、2012年から2015年までの間である。

『瀋陽回族志』の述述によって、現在の中華人民共和国期は、近現代の瀋陽回回営にとって、最も長い時期になる。中華人民共和国成立後から現在に至るまで、最も大きな政治的激動期は、文化大革命といえるであろう。また、中華人民共和国成立後の瀋陽回回営にとって、最も大きな社会的変化は、2000 年前後の土地開発であると筆者はとらえている。以下、文化大革命と 2000 年の土地開発を 2 つの重要な転換期とし、4 つの時代に分けて検討したい。

## 1. 文化大革命開始期まで

『瀋陽回族志』は以下のように、中華人民共和国成立後から文化大革命開始までの瀋陽回回営を叙述している。

1948 年 11 月 2 日、瀋陽は共産党政府に属するようになった。政府は民族事務機関を設立し、馬世芬を回回営が属する区[筆者注:小西区]の区長に任命した。また、現地の回族有力者である馬鳴珂、楊選青と街長の馬誠徳、何鳳啓は、金堂祺を回族代表に選出し、顧海香を婦聯主任に選出した。1949 年 1 月に、政府は瀋陽で初めての回民保健所を設立した。

1948 年 11 月 20 日、瀋陽市政府は地域の行政調整のため、市内の 22 区から 8 区へ統合した。回回営が属する小西区は、北市区になった。その区長には回族馬世芬が任命され、副区長には楊選青が任命された。

1958 年に、中国全域では「大躍進」と「反右派」の活動が急激化した。「極左」思想と「遼寧無宗教」のスローガンの影響下、瀋陽駅附近の 2 つのホテルの中で、批判闘争活動が開催された。会議上の党内人事で、楊選青（副区長）、馬衡文（回民福利院院長）に「右派」の帽子が被せられた。また、回民文化館館長である脱文朝や幹部馬季などは「反党小集団」と指摘されたほか、殆どのアホンは「右派」にされた。会議後、瀋陽の回民に対する「整風運動」が始まった。まず、「反特殊」のスローガンの下、回族の伝統や宗教生活などのすべては、「特殊」とされた。また、回民商店や回民文化館などの施設の名前は、変更しなければならないことにされた。さらに、各機関、企業や学校などの社会施設内の回民の食堂が取り壊された。若い世代の回民幹部は「特殊」の打撃を受け、清真寺の中の古跡や石碑が破壊された。

60 年代に入り、商業経済は統一管理、統一購買、統一販売が実施された。そのため、多くの回族料理の伝統技術は伝承することができなくなった。

この資料を総体的に見ると、1980 年代から 1990 年代までに中国遼寧省瀋陽市政府の編纂組が編纂した『瀋陽回族志』であっても、文革前の回回営および瀋陽市の回民に対して行われた差別を、真正面から論評しようとしていることがわかる。このような批判は、当時にとって、度合が少し強いものであり、ある程度異例とされる可能性がある。また、ここから見ると、中国政府が当時の「極左思想」と「整風運動」は 1 つの誤りであると考えていた可能性もあるし、もしくは、当時の被害が大きかったため、隠そうとしても無理であると判断した可能性もある。

内容を細かく見てみよう。まず、中華人民共和国成立後の回回営の民衆から選ばれたリーダーは、本章の第 3 節でも述べた出版社の編纂者である金堂祺という人物であった。この内容も、現地での調査と一致する。しかし、『瀋陽回族志』の記録より、さらに深い事

件があったことがわかる。金堂祺および、金氏の親族へのインタビューによると、金氏の回回営リーダーへの任命は、あくまでも操り人形のようなものであった。中華人民共和国成立後、共産党政府から任命された馬世芬氏と、回回営から選ばれた金氏との間で、地域のリーダーをめぐる競争があった。前述したように、金氏は回族の知識人であり、出版社の編纂者でもある。特に、彼の性格は極めて小心であり、まったく政治に向いていない人間ともいえる。このような金氏と馬世芬氏との競争は、最初から勝敗は決まっていた。競争事件後、金氏はずっと馬世芬を怖がって、顔を合わせないように逃げつづけた。この裏話は、金氏自身の立場から見ると、単なる失敗の人生経験であるが、中華人民共和国成立後における最初の回回営の回族リーダーという立場からみると、深い政治・政策的問題と考えてもよいであろう。

また、この資料から、もう1つの問題を見出す事ができる。上に引用した叙述の末尾にあるように、この時期、回族の商業は統一化され、回族の伝統技術が消えた。前述した中華民国期と満洲国期の回回営の部分で検討したように、商業は回回営の維持にとって、重要な柱となっている。商業の統一的な運営は、独自性を持つ回回営に衝撃を与えるし、伝統技術を失うことは、その後の回回営の発展にとって、大きく影響したことであろう。早くもこの時期から回回営の伝統や独自性に限定的な作用が及びはじめたのである。

## 2. 文化大革命期（1966年～1976年）

1966年から1976年までの時期は、中華人民共和国成立後の中国にとって、最も深刻な10年であり、特に、中国の少数民族、各宗教の教徒や知識人などにとって、様々に深刻な影響や被害を受けたことで、忘れられない時代である。

しかし『瀋陽回族志』は、前段と違って、文革期については非常に簡略、かつ冷静である。

1966年から、中国の「十年動乱」が始まった。アホン達は清真寺から追い出され、集中的に批判を受けた。回族の土葬が禁止されたため、民族委員会副主任、かつ民主的人物である馬鳴珂は火葬された。その他、何件も火葬事件が起こった。回族の葬式は、「地下運動」となり、多くの葬式は従来の方法でこっそり深夜に行われた。

一方、約千戸、4、5千人の回族が、農村に「下放」された。さらに1973年に、300年以上の歴史を持つ北清真寺が完全破壊された。

以上は、現段階まで、中国文化大革命期の瀋陽回回営に関するすべての文献記録である。この記録を載せた『瀋陽回族志』は1996年に出版されたが、本論の資料紹介で述べたように、資料の収集はすでに1985年（1976年「四人組」の打倒から9年）からはじめたものであるため、政治問題を十分に考慮した上で、資料公開されたものと思われる。

そこで明らかにされたものは、主に宗教上の破壊行為があったこと、および回族が農村部に行かされたこと（下放）という程度である。

そこで、文革時代の瀋陽回回営の空白を埋めるため、筆者は当時の状況を経験した多くの回族および回回営内に在住した漢族にインタビューをして、一定の情報を得た。当時の状況を詳しく説明した人も少なからずいたが、殆どのインフォーマントは、その具体的な

内容の公表を了承してくれなかった。ここでは、筆者自身がインタビュー情報を混じえた状況をまとめて、概説してみる。

第一は、商人に対する批判である。中華人民共和国成立前の時代を探る時に述べたように、瀋陽回回営内の回族は、飲食店、牛と羊の販売、革の販売や小売業などの商業を生計の元とする傾向が非常に強かった。文革時代に、このような商人は資本家とされ、資本主義者として弾圧された。その主なプロセスとして、まず、いわゆる紅衛兵が彼らの家財を没収し、その後、彼らを資本主義者として公開批判し、最後に、周辺の農村に追い出す。当時の回回営では、いくつかの富裕な家族が以上のプロセスを経て、農村で病死したり、自殺したりしたケースは少なくなかった。

第二は、宗教に対する批判である。宗教と民族を分離することができない回族は、イスラームをはじめとする宗教信仰を消滅させなければならないと教条的に考える「紅衛兵」にとって、敵であった。瀋陽回回営の状況として、本稿ではすでに、イスラーム宗教教育者である張子文の被害事例(第1章参照)や北・東清真寺の破壊(本章第3節第2項参照)について述べた。そのほか、回族のイスラームへの意識を完全に消去するため、わざわざ清真寺で豚を飼ったことさえあった。

第三は知識人への批判である。文革時代に、知識人は批判対象となった。「紅衛兵」は知識人に対して、昼間は公然と批判活動を行い、夜は家畜小屋に寝かせたという話は多い。回回営の中の知識人も例外ではないが、ある意味で例外的な部分があった。文革中、毛沢東に忠誠心を示すために、「紅衛兵」各派閥は武装闘争を行った。瀋陽の場合、瀋陽市内はいくつかの紅衛兵の派閥勢力圏に分けられた。昼間、各派閥は文革運動を展開し、夜になると各派の縄張りの周辺で殺し合った。そのため、夜は家畜小屋に寝かせた知識人を見張る人手が不足になる。この問題に対処するため、瀋陽回回営附近の紅衛兵は、回回営内の若者を夜の監視人に任命した。しかし、回回営の若者はそのまま任務を果していなかった。彼らは、知識人に「夜は家で寝て、朝早く戻れば、それでいい」と告げた。地元では子供にたいして、宗教指導者と知識人を尊重しなければならないという一般的家庭教育があった。かつ、極めて独特で濃密な家族・親族地域(本章第3節第1項の3参照)であるため、監視人の若者と知識人は例外なく、ある種の親族だったのがある。

一般の民衆にとって文化大革命は、このような状況の中で終息と向かっていった。

### 3. 改革開放期

上述したように、『瀋陽回族志』の記述は文革時代の回回営について、非常に概略的であり、不明な部分が多かった。だが、改革開放期の回回営に関する記述の最初の部分には、文革時代に回回営の中で破壊・禁止されていたものの復元・再開されるということが書かれていることから、逆に当時の状況を逆に読み取ることもできる。

1976年の「四人組」打倒後、「三中全会」を経て、瀋陽回族の生活は少し回復するようになった。

「文革」中に「下放」された回族のうち、800人は瀋陽市に戻った。その後、回民小学、回民商店の名前も回復された。政府は清真寺の修理費用を与え、また、回民に公墓の土地を与えた。また、伊斯蘭教協会と清真寺管理委員会も回復された。1981年には、瀋陽で「瀋陽経学院」を成立させた。

1981年に、回民中学の名前は回復された。1985年1月に、中国共産党瀋陽市委員会の許可の下で、

瀋陽の回族知識人は、回族振興教育基金会を設立した。1986年に、回族振興教育基金会は、400人以上の子供を受け入れられる幼稚園をつくり、1988年に、同会は回民の私立小学校を設立した。

この記録から見ると、文革期には数知れない破壊と禁止のほかに、回民商店という回族の商業施設と、回民小学と回民中学という回族の教育機関も被害を受けたことがわかる。しかし文革後は、教育機関と宗教教育機関の復活や設立は早く、回回営の教育重視の傾向が伺われる。『瀋陽回族志』は回回営内に、集合的商業施設を建設する願望が強かったことを示している。

経済について、1983年に、瀋陽市民族委員会は、工商、衛生や税務などの機関と相談した上で、回民の家畜屠殺場を設立し、市内の200軒以上の回民の肉販売店や国営商店に肉を提供することになった。さらに、回回営内に回族市場を増設した。

また、回族市場の建設とともに1988年9月に、瀋陽市民族委員会は、「回族小区房屋開発公司」をつくり、六回に分けて回回営の住宅施設を開発した。第一、二期だけで117000平方メートル、1467戸を開発した。住宅地以外に、今回の土地開発では、回回営内に二層の「室内市場」を建設した。([『瀋陽回族志』 p. 151])

こうして見ると、改革開放政策の実施とともに、回回営の回族が最も重視する教育問題と商業問題は少しずつ改善される傾向があった。さらに、居住環境も同時に改善するようになった。この時点までの回回営に対する開発は、伝統的回回営の構造に影響を及ぼさなかった。これに対して、2000年からの「土地開発」は、回回営そのものを根本的に変化した。

#### 4. 2000年から現在

2000年から現在に至るまでの回回営は、主に2つの変化を顕著に見せている。

本章の第3節第1項で述べたように、2000年頃に、瀋陽の回回営に対して全面的な「土地開発」が行われた。そのため、かつての回回営の25町（胡同）の殆どは消えた。

1990年代半ばから重工業都市となった瀋陽は、国家の企業形態変化を求める意見に応じて整理が進み、約百万人がリストラされた。回回営の回族にはそれほど多くの工場・産業労働者がなかったが、瀋陽市全体は不景気な状態というイメージが強くなった。このような社会背景に対して、2000年前後の回回営の土地開発による旧住宅の買い取り金は、政府からの手当であり、多くの回族にとって転機でもあった。だが、この政府主導とそれに呼応した回族住民の反応について、近年のインタビュー調査から見ると、回回営に対する土地開発に関する回民の意見は変化しつつある。60歳代以上の何人かのインフォーマントは、回回営に対して、「現在の回回営は、既に回回営といえない。かつての回回営は、家の庭のような感じであったのに、現在の回回営は、なんともいえない感じのものである」と言う。その反面、殆どの人は「でも、この場所に帰りたし、できれば、ここへ引越したい。生活上の便利だけではなく、回回営が何とか再生したらいいと思う。責任があるような気がする。」という願望も述べる。さらに、「土地改造する時の小さな買い取り金は受け取らないほうがよかった。現在の生活水準から見れば、屁にもならない金だ。その屁にもな

らない金で家売ったとは、回回営の老回回（回族を指す）は皆馬鹿だった。」という激しい言葉もあった。

以上の例のように、かつて中国内に多く存在した小さな地域コミュニティは、時代、および政府の政策とともに、西洋風に「都市化」されていった。確かに、衛生などの居住環境は大幅に改善されたが、人々の繋がり、いわば「絆」は断絶していった。特に、回回営のような宗教、民族や血縁関係などの要素によって構築された地域コミュニティは、極端な違和感をもつはずである。もちろん、それでも急速に経済発展しつつある中国は、社会進化の標示として、都市化の方向へ歩んでいく。しかし、中華の伝統文化を持つ一方、多文化社会および多民族が形成する歴史が非常に長い中国は、そのまま西洋的近代化、あるいは都市化を受け入れることが正しいかどうか、簡単には言い難い。

2000 年以後の回回営の変化に戻ると、もう 1 つの大きな変化の契機は、2008 年の北京オリンピックである。瀋陽は中国東北地域の中で、最も影響力がある都市として、その変化も顕著である。その中で回回営は、瀋陽唯一の回族のコミュニティであるため、中国の他の地域のムスリムから注目をあびるだけではなく、瀋陽に観光、留学や仕事でやってくる外国ムスリムにとっても、行かなければならない場所となった。例えば、筆者によるフィールドワーク<sup>165</sup>によれば、現存する回回営内の飲食店街の経営者は回族中心だったのが、ウイグル族、サラール族やカザフ族などの飲食店が増えただけではなく、瀋陽戸籍の回族以外の中国ムスリムは増える一方である。また、毎週の金曜礼拝の時に、回回営の南清真寺で集団礼拝に参加するムスリムの外国人留学生が 100 人弱に達している。さらに、瀋陽で商業活動を行う東南アジアのムスリムの商人も多くなっている。特に、回回営と離れた場所で、飲食店を経営する中東からのムスリムも何人かいる。結果から見ると、回回営は既に、回族のコミュニティから中国ムスリムのコミュニティへ変化し、間もなく国際的なムスリムのコミュニティになる可能性がある。このように、多民族化社会が回回営の商業に刺激を与え、かつ国際化社会の影響は回回営に新しい栄養を注ぎ、教育していく。

## 第 6 項 近代における回回営の人口変化

以上の第 5 項の 1 から第 5 項の 4 までの検証と叙述で、瀋陽回回営の歴史変遷の流れを辿ってきた。最後に、瀋陽市内の回族の人口変化をまとめてみる。本項では、『瀋陽回族志』と『瀋陽宗教志』によって、瀋陽回族人口の流動を観測し、回回営内の人口数を把握してその変化を探りたい。

『瀋陽回族志』（1996）の編纂に当たって、瀋陽市宗教事務局は政府側の統計資料を多く利用しているが、その中で瀋陽市宗教事務の編纂委員会は、1910 年代から 1990 年代までの瀋陽回族人口の統計資料を掲載した。この資料の公開は、政府側の人口統計資料を簡単に見られない民間の研究者の立場から見ると、今後の瀋陽の回族研究を行う際に非常に重要な素材となるに違いない。また、同機関は、2013 年に『瀋陽宗教志』を出版し、近年の瀋陽における回族の人口データを更新した。満洲国成立直前の時代については、すでに紹介してきた日本側の満鉄資料である『満鉄調査資料 26』、あるいは「満洲における回々教」により、1924 年（大正 13 年）の瀋陽（当時奉天）の人口データを補足することができた。

<sup>165</sup> 2010 年 8 月から 2015 年 4 月の間に。

これらの資料は、参考資料1（本稿末尾参照）と参考資料2（本稿末尾参照）の部分で、すべてを整理し、提示したが、ここには結論のみを表示する。

まず、図10「1910年代から2011年までの瀋陽市回族人口変化図」は、1910年代から2011年までの瀋陽市の回族人口、および回回営を中心とする地域（すなわち現在の瀋河区にあたる地域）の回族人口をグラフ化したものである。この図表に対して、回回営を中心とする地域と瀋陽市のほかの地域の回族人口と比較する図11「1953年から2011年までの瀋陽市各区の回族人口の変化図」を作成し、瀋陽市回族人口の様子を観測してみる。

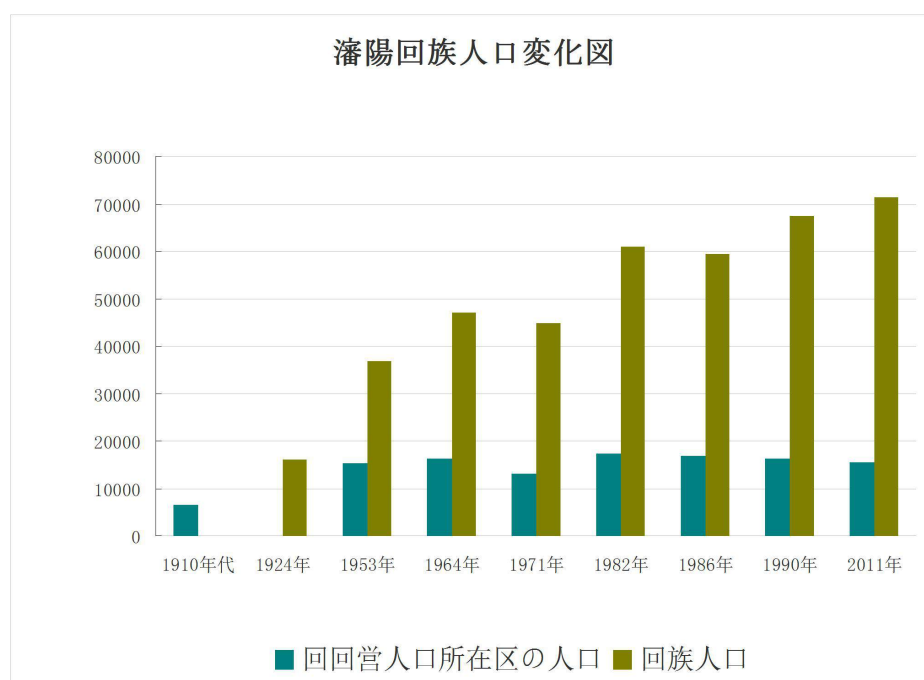


図10「1910年代から2011年までの瀋陽市回族人口変化図」（出典：『瀋陽回族志』、『満鉄調査資料26』と『瀋陽宗教志』<sup>166</sup>）

まず、図10について見る。図10の中、右側の棒グラフは、瀋陽における1953年から2011年までの回族人口を表している。一方、左側の棒グラフは1910年から2011年まで、回回営を中心とする地域の回族人口変化を示している。図10からすぐにわかることとして、1953年から2011年までに、瀋陽市の回族人口は倍になったが、瀋陽回回営の人口はそれほど変化はないということがある。しかし、改革開放以後と2000年前後の回回営の土地開発のことを踏まえてみると、回回営内の人口は殆ど変化しないが、回回営の地域面積が半分以下となったため、事実上は回回営地域の人口は成長しているのであり、回回営は周辺の回族人口全体を維持させたと考えられるであろう。

そこで、図11について、検討してみる。1953年から1964年の間に、瀋陽市の行政区分は変化し、回回営は現在の和平区から瀋河区に移転した。そのため、この2つの年代の2つの行政区で回族人口が逆転したように見える。しかし、この変化は単なる行政地域区分の変化であり、社会変動や人的変動でないことに留意すべきである。なお、第2章第2節図4「2016年瀋陽市行政区分図」の瀋陽市行政区分図と関連させてみると、瀋陽の回族

<sup>166</sup> 瀋陽市宗教事務局 2014。



は、主に瀋陽市の中心部に集中する傾向が見られる。

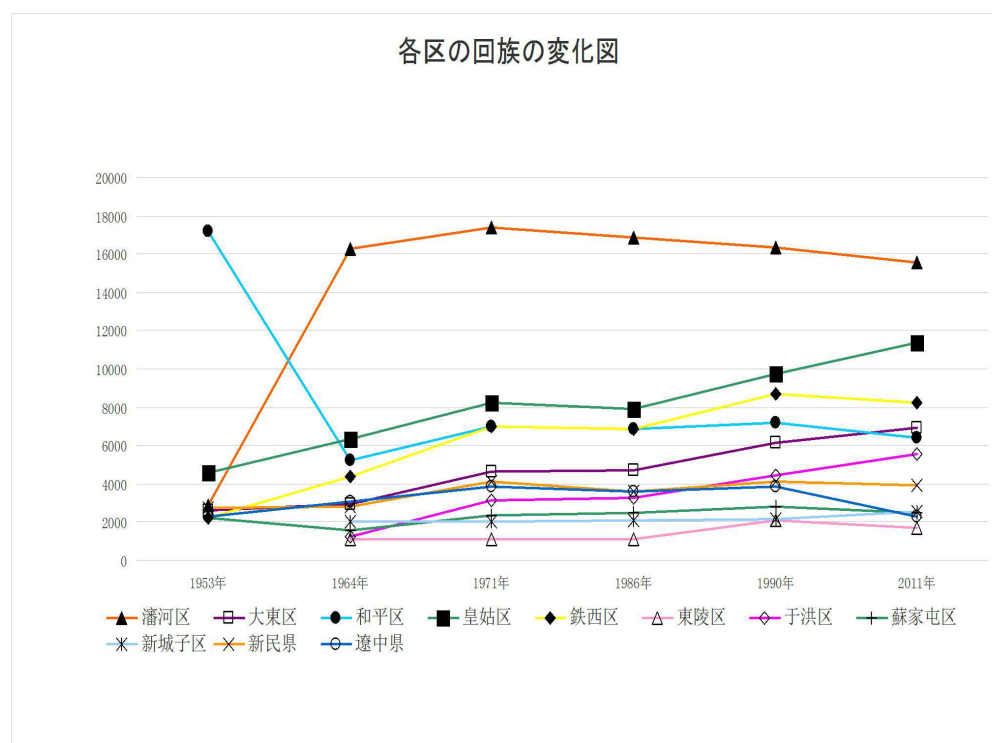


図 11 「1953 年から 2011 年までの瀋陽市各区の回族人口の変化図」(出典:『瀋陽回族志』、『満鉄調査資料 26』と『瀋陽宗教志』)

図 11 に戻ると、瀋陽市内の各行政区の中で、最も変化が顕著な地域は、回回営が所在する瀋河区と、回族が増加しつつある皇姑区である。1971 年の瀋河区(▲線)内の回族は、最も多かったが、その後から現在に至るまで、回族人口が減少し続けていると見られる。それに対して、■線で表示する皇姑区内の回族人口は、基本的に増加し続けているとみられる。図 10 の瀋陽市内における回族全体の人口変化も含めて、人口変化の速度から計算して見ると、瀋陽市内の回族人口が増加しつつある中で、2030 年以後には、皇姑区の回族人口が、回回営の所在区である瀋河区内の回族人口を上回ることとなるであろう。その時、瀋陽市における回族人口の流動性やコミュニティの存続などの状況については、瀋陽市政府と瀋陽市で生活する回族にとって、深刻な問題になるに違いない。例えば、将来直面しなければならない 1 つの予測問題として、100 年以上の歴史を持つ瀋陽回回営そのものは回族人口が多い行政区に移動するのか、あるいは吉林省吉林市のように、市内にいくつかの回族のコミュニティが出来上がるのか<sup>167</sup>、さらにそのまま回回営を拡大するのか、という選択問題となる。少数民族の発展を積極的に支持しようとしなない中国政府と漢族を中心とする中国社会が望む方向と、瀋陽の回族が望む方向とが一致することは、少なくとも現状では考えられない。いかなる発展方向が見出されるものは、これからの大きな課題になることであろう。

<sup>167</sup> 筆者は 2012 年 8 月のフィールドワークで、当時の吉林市市内に、2 つ以上の回族コミュニティが存在することを判明した。

## 章結

本章の目的は、瀋陽回族のコミュニティである瀋陽回回営の歴史について、検証を深めることであった。

第1節「回族の居住形態」は、中国国内において、回族の居住形態をみて、「大分散、小聚居（あるいは小集中）」という居住形態で生活する場合が多いという言説を確認した。これは本論で扱う瀋陽回回営を位置づけるために、言及しておかなければならない基本的かつ重要な観点である。

第2節「瀋陽について」では、瀋陽に関する基礎情報を概観した。現在における中国の経済、軍事、政治から見ると、瀋陽は中国東北地域にとって非常に重要な都市空間であり、また、古くから瀋陽は多民族社会の一面をもつため、少数民族を考察する際に、無視することのできない場所とも言える。要するに、瀋陽は、多民族国家中国の東北地域における少数民族の重要性を吟味すべき領域であり、都市であることが指摘できるのである。

第3節「瀋陽回回営」の前半では、瀋陽回回営における地域構造の変化を概観し、回回営内における伝統的で複雑で、しかし住民が自然に築いてきた胡同の風景を確認、再現した。さらに、独特の家族・親族関係が人的繋がりの基本にあることを指摘した。後半では、そうした街の構造と人の絆とが共に清真寺を結節点として成り立っているという言説を、歴史的な記録情報に加えて現地調査によって、瀋陽回回営の特色も含めて、実態として把握した。例えば、現地でのインタビュー<sup>168</sup>調査を通じて、北清真寺と南清真寺との関係の一部を明らかにした。清初期の瀋陽回回営の中に、回民の大家族が2つ存在する。1つは、明代の官僚・将軍であった馮一族であり、もう1つの家族は、明、清時代ともに官僚であった鉄一族である。民国時代および満洲国時代に、瀋陽回回営内の回民は清真寺を利用する際に、主に親族関係により、礼拝する清真寺を選択した。例えば、鉄一族と親族関係がある場合は、回回営の前街の南寺に行き、馮一族と親族関係がある場合は、回回営の後街の北清真寺に行く。この部分は、中国西北地域の回民の教派によって清真寺を分類するのとは違い、瀋陽回回営の1つの特徴ともいえることである。

第4節「瀋陽回回営の歴史」は、第3節と並んで本章の中心部分であり、主に元代から現在に至るまでの瀋陽の回回営の歴史変化を観察し、最後には1910年代から2011年までの人口変化図を作成して、今後の姿について問題提起を行った。

少し具体的に述べるならば、一連の歴史検証で、現在の回回営に関する最初の記録は1352年であるが、回回営形成は、南清真寺の成立が確認される1636年であると考えられ、回回営の発展期は、左宝貴時代（1876年）であることを論じた。瀋陽回回営の原点を探ろうとしたこの年代整理は、学術研究上で初めてのことである。

また、中華民国期から2000年代以後の現在までの回回営の歴史全体を見ると、回回営の根本であるイスラーム宗教教育（後に回族の民族教育）は、概して活発であった。その一方で回回営内の商業施設がコミュニティ全体の中できわめて重要な都市機能を果していることが改めて明らかになった。

最後の部分で、1910年から2011年までの回回営における人口変化グラフを作成した。

---

<sup>168</sup> 2013年3月に実施した。

人口数が減少しつつある回回営に対して、皇姑区に新しい回族地域の形成の可能性を検討し、今後の瀋陽市の回族社会の変化を考えさせる素材となると考えた。

本章の最後にあたって、本章で考察した回回営に関する主な歴史変遷を概観できるように影響があった事件を中心として、年表を提示しておきたい。

表4「瀋陽回回営の変化の年表（筆者作成）」

年代	事件	出典
1352 年（元朝至正 12 年）	現回回営地域内の回民存在に関する最初の記録。 （「本廟營造……東至回回五哥院牆」）	『瀋陽路城隍廟石碑陰文』（あるいは『瀋陽路城隍廟功德官員題名記』）
1387 年（明洪武十二年）	馮一族の移入	『馮氏家譜』
1636 年	鉄一族の南清真寺建設すなわち回回営形成開始	『瀋陽県志』、『奉天通志』や南清真寺内の清乾隆三十六年（1771 年）建立の石碑文など
1876 年	奉字軍翼長の左宝貴による回回営の安定と発展	『奉天同善堂要覧』と『瀋陽回族志』
1920 年代	興遊園と奉天第一商場成立	『瀋陽文史資料第八輯』や『瀋陽回族志』など
1948 年 11 月 2 日	回族代表に金堂祺、婦聯主任に顧海香を選出	『瀋陽回族志』とインタビュー調査
1973 年	北清真寺完全破壊	『瀋陽回族志』とインタビュー調査
1988 年 9 月	回民市場の建設、回回営「後街」の土地開発	『瀋陽文史資料第八輯』、『瀋陽回族志』やインタビュー調査など。
2000 年代	回回営「前街」の土地開発	インタビュー調査
2008 年	少数民族観光施設として清真美食街の確立、回民社区の設立	インタビュー調査

## 第Ⅱ部 瀋陽回回営における民族教育と商業施設

### 第3章 瀋陽における回族の教育

第1章「回族研究の意義」の先行研究の部分で、回族の教育は回営の存続と発展にとって、欠かせない要素であることと検討した。また、第2章「瀋陽の回回営の形成と発展」で述べたような回族の歴史を振り返る作業は、回族という民族が将来も継続して存在することを前提としていた。本稿は、民族の自己認識継承の鍵は教育にあるという観点から本章を設け、近代の瀋陽回営におけるイスラーム教育の展開を考察する。

具体的な方針として、第1節では、回族の伝統的な教育状況を把握するために、経堂教育という回族の伝統的教育を考察し、また、瀋陽の経堂教育を概観する。第2節から第4節までの考察は、回族小学、回民中学と瀋陽伊斯蘭教経学院という3つの回族の教育機関の歴史を検討し、瀋陽に現存する回民教育機関の沿革を探索する。最後の第5節では、中国におけるイスラーム教教育の将来性を展望する目的をもって、回族教育の新たな展開とも言えるイスラーム女学について概観し、その将来の可能性にふれたい。

資料としては、中国側の『文史資料』を中心として、瀋陽回営の教育史を整理し、また、歴史事実を検証するため、今まで使用されたことのない満鉄資料や自らのフィールドワークも援用し、資料批判を行う。

#### 第1節 経堂教育

本節ではまず、回族の独特な教育方法である「経堂教育」について概観する。『中国のムスリムを知るための60章』は「経堂教育」という語を次のように説明している。

「経堂教育」は、中国の清真寺（モスク）で伝統的に行われてきた、イスラーム諸学に関する教育を指す。この呼称自体は、中華民国時代から使われ始め、当時は「寺院教育」などの呼び方もあったが、現在は「経堂教育」の呼び名が定着している。その名は、清真寺の蔵書部屋である「経堂」が、しばしば教室となったことに由来する<sup>169</sup>。

また、経堂教育を形成する歴史の一説について、同資料は、以下のように記述している。

経堂教育は、一般にいわれるところによれば、イスラーム世界に古くから存在した教育施設「マドラサ」や中国の私塾における教育方式をモデルとして、胡登洲（1597年没）が陝西において開始したとされる。当時、中国ムスリムの間では、彼らの漢語化と並行してイスラームの知識が急速に失われつつあったが、胡登洲が経堂教育を創始してこの危機を救ったというのである。しかし、この物語は、胡登洲の学統への帰属を称することで自ら正統性を誇った後代の学者（アホン）たちの言説に出たものにすぎず、実際のところはよくわからない<sup>170</sup>。……

さらに、教師と学生の構成、教育施設の運営や教育などの経堂教育の実態に関しては、以下のように記述している。

<sup>169</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 157－161。

<sup>170</sup> 同前注。

経堂教育の教師は「アホン」(阿訇)と呼ばれる人々がつとめた。アホンはペルシア語で「学者」を意味する「アーホンド」がなまった言葉である。

.....

経堂教育では、コミュニティのメンバーの子弟にイスラーム教育が施された。それらの学生のなかには、イスラームの基礎知識やアラビア語の初歩を学んだだけで卒業する者もおれば、より高度な学問を授けられて次世代のアホンとして養成される者もいた。加えて、アホンの名声にひかれて遠路はるばるやってきた学究の徒や、赴任先を転々とする師につき従ってきた古参の弟子も、アホンになるための指導を受けた。彼らのようなアホン候補生は「ハリーファ」(アラビア語で「代理人」の意)や「マンラー」(「師」を意味するアラビア語の「マウラー」がなまったもの)と呼ばれた。彼らは、アホンとのあいだに強固な師弟関係を結び、ともに清真寺に寄宿してその職務を補佐しながら学問の研鑽を積んだ。

アホンの給料や寄宿学生の生活費をはじめとする経堂教育の諸経費は、アホンを招聘したコミュニティのメンバーによって賄われた。経堂教育の初期段階では、有志のアホンが私財をなげうって、あるいは商売などをしながら、自らの学堂を運営していたようであるが、やがてコミュニティのメンバーが、経堂教育の諸経費をザカート(喜捨)やサダカ(自発的義捐)などの名目で負担しあい、アホンを招聘するようになった。「義産」や「義田」と呼ばれる特定の店舗や田畑からの収入が、そうした経費にわり当てられることもあった。

経堂教育の学課についていえば、まずアラビア語文法、次いで修辞学や論理学を修め、そのうえでイスラームの神学や法学を修得することが、ひとまずの目標とされた。優秀な学徒は、さらにペルシア語の学習とペルシア語で書かれたイスラーム神秘主義文献の研究に進んだ。これらのイスラーム諸学の一部ないしすべてを十数年から20年前後かけて終了すれば、師アホンの認可のもとに、候補生は晴れて新アホンとなった。そのさい免許のしるしとして新アホンに外套が贈られたので、この卒業の儀式を「穿衣」という<sup>171</sup>。

最後に、中華人民共和国成立後の経堂教育においては、以下のように紹介している。

中華人民共和国の時代になると、新式学校の近代的ムスリム教育を引き継ぐものとして、イスラーム教経学院が北京ほか各地に設立された、加えて最近では臨夏外国語学校(臨夏中阿学校)をはじめとする私立アラビア語専門学校なども各地に現れてきている。これらの専門学校では、アラビア語教育を中心に、イスラームの知識のほか、教育学やコンピュータの知識なども教授されている。なかには金融・経済・貿易などに関する課程を設けるところもある。

以上の資料を通じて、経堂教育のだいたいの姿を把握することができる。まず、経堂教育は、清真寺内でイスラーム神学、法学やアラビア語などの宗教知識を伝承するイスラーム教育であり、その形成年代は、西暦1600年頃である。また、経堂教育の教師は、基本的に清真寺のアホンであり、経堂教育を運営する資金は、主に現地回民からの集金であるという経堂教育の特性も明らかになった。

このように、経堂教育という回族の伝統教育の主な歴史と設立のごく一般的な概要をお

---

<sup>171</sup> 同前注。

さえてみた。次に、瀋陽の経堂教育の実際の歴史について、概観を試みたい。『瀋陽回族志』の中で、瀋陽の経堂教育については、以下のように述べられている。

瀋陽回回営におけるイスラーム宗教教育は約 400 年以上の歴史を持つ。瀋陽の最初の経堂教育は、康熙九年（1662 年）に、南寺で最初にアホンに任命された余元山によって実施された。南寺の最初のイマームとなった鉄鴻基はそこで学習した。康熙九年（西暦 1662 年）に、南清真寺の初代の宗教指導者である余元山阿訇は、清真寺の創建者である鉄一族の人（鉄鴻基）を南清真寺の初代イマームとして育った。その後、瀋陽のイスラーム宗教教育は基本的に清真寺の中で実施された<sup>172</sup>。

すなわち、瀋陽の経堂教育の実施は 1660 年代からであり、瀋陽のイスラーム宗教教育は、400 年以上の歴史があることがわかる。また、最初の経堂教育は、南清真寺で実施されたし、南清真寺の創建者の一族である鉄一族との関係も深かった。ここからみると、瀋陽の清真寺の運営、または地域内の人間社会の構造は、経堂教育との間に深い関係を持っていたことがわかる。

瀋陽の経堂教育については、現段階までに『瀋陽回族志』のほかの資料は見当たらない。しかし次節で見るように、清末以後の回回営では、回族の伝統的なイスラーム宗教教育、すなわち経堂教育のほかに、漢語や算数などの社会教育も同時に実施する回族の教育機関も建設されるようになった。以下、瀋陽市におけるそうした最初の近代的な回族教育機関について、検討していこう。

## 第 2 節 回民小学

はじめに瀋陽市の少数民族学校の現状を概観しておく。瀋陽市民族事務委員会（瀋陽市宗教事務局）の公表資料<sup>173</sup>によると、瀋陽市の市内には、少数民族学校が 19 箇所あり、その内訳は、12 の朝鮮族学校<sup>174</sup>、2 つの満洲族学校<sup>175</sup>、3 つのシボ族学校<sup>176</sup>、2 つの回民学校<sup>177</sup>となっている。瀋陽市中心部にある少数民族学校は、瀋陽市和平区西塔朝鮮族小学、瀋陽市回民中学と瀋陽市回民小学の 3 校が数えられる。ここから見ると、瀋陽市の回族学校の数が多いが、瀋陽の回族の学校は、比較的に都市に集中していることがわかる。瀋陽の回族が都市に居住する傾向の強いことが再び証明されたといってもよい。

中華人民共和国成立後の瀋陽回回営内の回族にとって、緊密な家族・親族関係の以外で、

<sup>172</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 254-256。

<sup>173</sup> 瀋陽市民族事務委員会（瀋陽市宗教事務局）ホームページ：www. Symzzj. gov. cn（最終閲覧 2010 年 12 月）

<sup>174</sup> 沈阳市于洪区朝鲜族吴家荒小学、沈阳市苏家屯区城郊朝鲜族中心小学、沈阳市苏家屯区朝鲜族中心小学、沈阳市沈北新区朝鲜族学校、沈阳市浑南新区朝鲜族学校、沈阳市皇姑区和信朝鲜族小学、沈阳市和平区西塔朝鲜族小学、沈阳市东陵区满融朝鲜族实验小学、沈阳市朝鲜族第一中学、沈阳市朝鲜族第三中学、沈阳市朝鲜族第六中学、沈阳市朝鲜族第二中学

<sup>175</sup> 沈阳市满族中学、沈阳棋盘山开发区满堂满族学校。

<sup>176</sup> 沈阳市马三家镇锡伯族联合小学、沈北新区兴隆台锡伯族学校、沈北新区黄家锡伯族学校。

<sup>177</sup> 沈阳市回民中学、沈阳市回民小学。

現地の回族内部の絆を強める帯紐となっているのは、恐らく回民小学と言えるであろう。現地調査の結果によると、現在回回営内に住む各姓の家族の中には、どの世代にも少なくとも1人は回民小学に通った人がいる。本節では、回民小学の歴史を検討し、その回回営内での役割を探り出そうとするものである。

瀋陽の回民小学に関する中国側の資料となるのは、主に『瀋陽文史資料第八輯』（1985）と『瀋陽回族志』（1996）である。また、筆者は日本側の満鉄資料の検索により、これまで中国の回族研究で使われてこなかった『満鉄調査資料26』の「満洲における回々教」（1924）を掘り起こした。この資料の中には、満洲国成立以前の回民小学に関する記述が存在する。さらに、筆者は回民小学でフィールドワークを行い、近年の最新状況を把握した。

こうして、回民小学における考察方法は、主に3つに分けられる。まずは、文献資料とフィールドワーク調査を分ける。文献資料の部分を中心に、回民小学成立後から中華人民共和国成立までの私立学校期と、中華人民共和国成立後の公立学校期に分けて検討する。本節の第1項は、回民小学の私立期であり、第2項は、回民小学の公立期であり、第3部分は、フィールドワークで考察した現在の回民小学である。

ちなみに、小学校の校名はたびたび変化した。現地（回回営）の民衆は基本的に学校を「回民小学」と称す。現地を尊重するため、本稿は基本的に回民小学と呼ぶ。なお、回民小学は100年以上の歴史を持つため、現在の回族に対する呼び方も変化しつつけた。本論は、満洲国時代を除く、中華人民共和国成立以前の回族に対して、かつての回族を尊重し、回民と記録する。満洲国を中心とした時代に関する記録は、当時の満鉄調査の統計に従って、回教徒と記録し、中華人民共和国成立後の記録は、中華人民共和国の民族識別に従って、回族と記録する。

## 第1項 私立時代

1985年に出版された『瀋陽文史資料第八輯』<sup>178</sup>には、回民小学の創立過程が以下のように述べられている。

瀋陽市内に唯一の回族小学校は、瀋河区市政府大路の亜洲電影院（アジア映画館）の向こう側にある。現在に至るまで、70年以上の歴史を持つ。

清末民初、回族の地区に何十軒もの私学館があったが、教育水準や教育施設は既に時代に遅れていたものである。この状況を改善するため、「瀋陽清真女子学堂」が誕生した。

「瀋陽清真女子学堂」設立の提案者は、回族阿訇であった鉄榮久である。鉄氏は『醒時報』の主編である張子岐との関係が深かった。何回か商議した上で、鉄榮久と張子岐は、南清真寺、北清真寺と東清真寺の3つの清真寺の協力を得た。また、南清真寺代表の鉄子真、鉄濟舟、北清真寺代表の楊興元、馮啓徳、東清真寺代表の趙希珍、馬維民や馬維良などの協力の下で、学校の理事会が成立した。学校の理事長は鉄榮久であり、学校の校舎は北清真寺付近（現〔筆者注：1985年〕回民商店東胡同内路東）である。同時に、校長は閔文波（漢族）であり、教師は聘方文、楊雪尘、馮永政、趙方谷や陳芳久である。1911年春に、「瀋陽清真女子学堂」の校名で開校し、女子学生140名を募集した。1918年前後、「瀋陽清真学堂」に改名し、男子学生も募集するようになった。また、校舎は現

<sup>178</sup> 楊耀恩 1985, pp. 114–121。



在の回民小学の附近に移動した。しかし、学校の経費不足のため、校舎は非常に粗末であった。

それ以前の学校の運営は、当時の回民民衆の組織である牛羊公会（一度に牛羊商行に変称した）から寄付されていた。これらの店は一匹の牛、或いは羊を屠殺する度に、学校に5角の寄付をした。しかしこの寄付金では、学校の校舎を改善することができなかった。こうして、3つの清真寺は相談した上で、革商人である李恒久を天津に派遣し、回民京劇芸人である李吉瑞に義演（チャリティーショー）を依頼した。こうして1921年に、李吉瑞は奉天城内の慶豊茶園（現在の瀋陽大舞台）で義演した。義演からの費用と、いくつかの回族商人の援助によって、1924年の秋に、奉天第一商場付近に新しい校舎が建設された。また、学校は「奉天市私立清真小学校」に改名された。この時の学校は、高学年のクラスが2つであり、初等クラス8で、学生数は500人前後であった（回民学生と漢民学生の比率は、2:1）。また、校長は馮永政だった。

以上の記録を総括してみると、瀋陽市回民小学は1911年に「瀋陽女子清真学堂」として開校し、設立時には140人の女子学生を募集した。1918年、回回営の東部に移転し、男子学生も同時に募集するようになり、学校の名前も「瀋陽清真学堂」に改称した。また、学校設立の提案者は、清真寺の宗教指導者、いわゆるアホンであり、学校の運営および資金は、回回営内の回民商人の出資によるものであった。

その後、満洲国時代から中華人民共和国成立後の私立回民小学の変化について、『瀋陽文史資料第八輯』は以下のように述べている。

1931年の奉天は既に日本統治下の土地となった。南清真寺は日本当局の意志の下で、伊斯蘭教協会に組み込まれ、また、川村[筆者注:恐らく、この日本人は川村狂堂である]という隻腕の日本人に管理させた。こうして、南清真寺の管理下にある回民小学は伊斯蘭教協会の管理下となり、「奉天市私立伊斯蘭兩級小学」と改名された。1930年代中期に、日本人の山田と和合が副校長であった。1938年に、学校は「奉天市私立伊斯蘭国民学校」と改名された。1946年の瀋陽は国民党統治下の土地となった。学校の校名は「瀋陽市私立伊光小学校」に改名され、校長は白鳳聖であった。1947年は中国の内戦期となり、学校の一部は国民党の「後方病院」となった。また、校内で豚を調理したこともあった。1948年、瀋陽は国民党から解放された。人民政府は学校を管理し、学校は「瀋陽市北市区私立伊光小学」と改名され、校長は楊岱芳となった。学校の経費は相変わらず回民民衆の組織である牛羊公会の寄付金に依存し、学校のクラスは15個となり、学生数は500人以上であり、教師は30人以上であった。

以上の記録をまとめると、回民小学は、1931年以後、日本管理下の学校となり、校長は日本人の山田と和合となった。1946年から、回民小学校の一部は国民党政府により軍用病院として改造され、さらに学校内で豚を屠殺したという。1948年以降、回民小学校は中国共産党政府の管理のもとで、「瀋陽市北市区私立伊光小学校」と改称された。

ここまで、『瀋陽文史資料第八輯』からは、瀋陽回民小学校を創建する時の構想が、回民女子に向けたイスラーム宗教学校であったこと、また、学校は成立(1911年)から1952年まで、回回営内の回民の集金で私立学校として運営されたことが判明した。

以上の『瀋陽文史資料第八輯』の外に、1996年に出版された『瀋陽回族志』<sup>179</sup>では、回民小学校の創建過程およびその後の歴史について、以下のように記録されている。

現在（1996年）の瀋河区回民小学の前身は「瀋陽清真女子学堂」である。1910年、清真寺アホンである鉄栄久[アホンが鉄一族であるため、ここの清真寺は南清真寺だと推測される]と『醒時報』主編の張子岐との商議後、かつ南清真寺の鉄子真、鉄済舟、北清真寺の楊興元、馮啓徳、東清真寺の趙希珍、馬維良の支持のもとで、鉄栄久を中心とする学校の理事会が形成された。学校の場所は北清真寺付近であった。1911年に開校した。当時の校長は関文波であり、担任教師は方文、楊雪尘、馮永政、趙方谷[原文は趙方谷であるが、正式には趙方古である。漢字校正のミスと考えられる]と陳芳久である。140人の女子学生を募集し、甲、乙、丙の3組に分かれていた。当時、学校の名前は「瀋陽清真女子学堂」であった。

1918年、学校は回回堂の東部に移転し、男子学生も同時に募集するようになる。学校の名前は「瀋陽清真学堂」に変更された。学校の運営経費について、基本的に牛羊業公会は一匹の牛を屠ると、学校に5角を出すことになっていた。足りない部分は、回民の大企業家が援助した。しかし、学生の増加とともに、校舎は足りなくなった。学校の理事会は革商人李恒久を天津へ派遣し、京劇武生の李吉瑞に義演（チャリティーショー）依頼をした。その募金は、学校の建設費用を解決した。1924年秋、馮永政の管理のもとで、令聞街東寺北巷にハーフティンバーの2階建ての校舎を建成し、「奉天私立清真小学校」と改称した。高学年クラス2、初級クラスは8で、学生数は400～500人前後。校長は馮永政である。1931年の「9・18」事件以後、学校の名称は「奉天私立伊斯蘭小学校」となった。校長は日本人の山田と和合であった。1938年、学校の中高小クラスは全部転出し、学校の名称は「奉天私立伊斯蘭国民学校」となり、校長は鉄維恒となった。鉄維恒病死後、馬鳴珂が校長になった。1945年の日本敗戦後、学校の名称は「瀋陽市私立伊光小学校」に変更され、白奉聖が校長となった。しかし、国民党との内戦のため、学校は廃校寸前であった。1947年、学校は国民党政府により軍用病院として、改造された。さらに国民党の兵士は学校内で豚を屠殺し、回民のプライドを侵害した。

以上の記録は、『瀋陽文史資料第八輯』の瀋陽市回族小学の創建過程に関する記録と殆ど一致するし、小学の創建過程、運営方式や学校住所の移動などの具体的な内容についても食い違っていない。『瀋陽文史資料第八輯』と比べると、『瀋陽回族志』の利点としては、学校内のクラスの分け方について具体的に記述されていることである。これにより、かつての学校運営の実態を把握することができた。

総括してみると、『瀋陽文史資料第八輯』と『瀋陽回族志』は、回民小学の成立過程、学校の性格や運営方法を明示したが、両書共通の問題は、満洲国時代に関する記録が足りないという点にある。この問題は本稿の第1章で述べたように、中国国内と、満洲国に関する資料が少ないし、政治上も注意する点が多いため、研究者も遠慮が多かった。しかし、最大限に歴史の実態を復元するため、これまで、中国の回族研究を行う際に、利用されることがない満鉄資料を援用し、満洲国時代の回民小学の空白を埋めたい。また、本稿の第

<sup>179</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 260-261。

1 章で、既に「満洲における回々教」（『満鉄調査資料 26』）<sup>180</sup>という資料の性格を検討し、また、第 2 章の満洲国時代の回回營の歴史を考察する時にも、この資料を利用した。本節では、瀋陽回民小学と関連する部分である「在満洲回教徒の社會的地位及び職業」（pp. 21－24）の記録を利用し、回民小学を検討してみたい。その内容は、以下のようなものである。

イ、阿訇の学識

ロ、清真小学校

其の數字を見るに次の如し

表 5「満洲に於ける清真小学校の状況」（元データによる筆者図表化）

地名	校数	生徒数	地名	校数	生徒数	地名	校数	生徒数
熊岳	一所	四十人	營口	二所	六十人	海城	一所	二十五人
遼陽	一所	十人	十里河	一所	八人	奉天	三所	三百人
新台子	一所	十人	鐵嶺	一所	二十人	孫家台	一所	十人
開原	一所	二十人	長春	一所	五十人	吉林	三所	一百人
火連寨	一所	五人	本溪湖	一所	十人	鳳凰城	一所	十人
安東	二所	六十人						
合計	二十二所	七百三十八人						

以上の如く而もその學科時間割等に於ては全然一樣にはあらざるも大體に於て阿文一堂、漢文四堂に分る、一堂とは一次と云ふ如きもので必しも嚴格なる意味に於ける一時間でないのである。

而て小學部と高等部とに分れ、前者が四ヶ年、後者が三ヶ年で畢業することになつておる。

その教師の如きは主として阿訇及び教徒中より稍學識あるものが之に當る譯でその質に於て勝れたるものでなき事は明である。

勤怠表の如きは造りあらざるが故に統計的に確實に據可きものなきも、大體に於て學生の出勤も強制的のものにあらざる如く、従て雨天等の如きには缺席者多との事である。

之ヲ要するに其の外形組織上に於ては寺小屋學校より稍勝れるものにして近世の小學校制より見る時は取る可きものなしと雖も兎にも角くにも此の形を爲して進みつゝあるは今迄のものに比し稍々智的進歩を來しつゝあるは推知し得可き處である。

本資料では奉天を中心として、満洲地域内すべての回教徒の小學校数と學生数を整理し、學校の教育課程、学年の分け方や出席率などの情報も記した。また、資料内の図表上の具体的なデータをみると、1924 年（大正）13 年に、奉天市内には、3 つの回教徒學校が存在し、その學生数は 300 人前後となっている。しかし、この記録と、中国側資料である『瀋陽文史資料第八輯』と『瀋陽回族志』の中の記録とを総合的に考察してみると、一致しない部分がある。まず、「満洲における回々教」には「奉天内に 3 つの回教徒學校が存在する」と記録されているが、中国側の資料はそれの記録がなかった。また、1924 年に出版された「満洲における回々教」では「当時、奉天の回教徒の學生数は 300 人前後」という記録し

<sup>180</sup> 南満洲鐵道株式會社庶務部調査課編 1924（大正 13）。

ているが、中国側の記録では、同じ1924年に、回民小学だけでも400、500人の学生がいると主張し、両記録は食い違っている。

「3つの回教徒学校が存在した」という記録を検討するため、ここで、かつて回回営内に他の回民小学校が存在していたかどうかを探索し、また、視野を広げ、回回営から瀋陽市内のすべての回民小学校を探ってみた。

その結果、まず、『瀋陽回族志』によると、瀋陽市の回回営の中には、回民小学のほかに、もう1つの回族小学校があることが判った。『瀋陽回族志』<sup>181</sup>は以下のように、この学校について記録する。

回族教育を振興するために、瀋陽の回族教育家である李学盈（次節、元回民中学校校長）は1985年に、瀋陽市回族振興基金会という組織を提起した。同年5月、瀋陽市市委書記である李澤民と市長李長春は許可を与えた。基金会は1985年8月14日に成立した（瀋族発〔1985〕20号）。回族子弟の教育問題を解決するため、基金会は1988年8月に、元北清真寺の場所で、私立小学校である「瀋陽市回族振興教育基金会私立小学」を設立した。校長は林豊であった。1988年から、毎年1つのクラスを開設した。1991年までに、1年から3年まで、3つのクラスが存在した。教科書は、中国全国統一教学書を使用した。

以上の記録を見ると、「瀋陽市回族振興教育基金会私立小学」という小学校は、1988年に、瀋陽の回族教育家である李学盈を提起した私立小学校である。そうすると、1988年に成立したこの学校は、1924年に出版された「満洲における回々教」の中に記録されるはずもない。また、この「瀋陽市回族振興教育基金会私立小学」は既に現存せず、学校の住所や提起人などの関連者も、殆どにこの世にいなかった。本稿は、現地の老人の証言によって、学校の歴史を復元しようと試みた。

現地の何人かの老人の証言<sup>182</sup>から、2つの状況を把握した。まず、「この学校は、1990年代前後に、北寺で一時的に再開したものである」といい、「中国成立よりだいぶ前、それも満洲国より前に、北清真寺の中に小学校が1つあった。現在の回回営には、北寺すらも存在しないのだから、この学校についていえば、恐らく李学盈と林豊が、かつて北清真寺にあった学校を再興しようとしたのかもしれない」という。つまり、回民小学のほかに、北清真寺内にもう1つの小学校が存在したらしいのである。その学校の状況について、現段階では十分に確認できなかったが、かつての回回営には2つの小学校が存在した可能性がある。

そして最後に、1920年代の奉天に存在した3つ目の回教徒の小学校を検証するため、瀋陽市の周辺（すなわち行政的に瀋陽市に属する地域）にある回民小学校を考察してみよう。

『瀋陽回族志』によると、瀋陽市周辺地域には2つの回民小学校が存在し、その2つの学校について、以下のように述べている。

まずは、新民県にある「新民県回族小学」である。1908年に、新民県（当時は新民鎮）の何人か

<sup>181</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 262–264。

<sup>182</sup> 2010年の春のフィールドワークによる。

の回族が回民小学校を建設することを提案し、全鎮回族の募金で清真寺外の空地でいくつかの教室を建設した。当時の校名は「回民学堂」であり、男子学生しか募集しなかった。学生数は150人に達し、4つのクラスに分けた。1917年3月に女校部が設立され、1921年に「私立清真高級小学」に改名された。1922年に「回民小学第四校」に改名し、校長は趙萬俊であった。1951年に「新民県第四完全小学」に改名し、校長は劉名哲であった。文化大革命期、学校は「向陽小学」に改名した。文革後、学校は「前街小学」に改名した。1990年の春、学校は民族学校として回復され、校名は「新民県回族小学」となった。現在（1996年）、学校は新民鎮南街沿河委二組であり、学校面積は1万平方メートル以上である。学生数は4、500人で、全部で12クラス。

この「新民県回族小学」以外に、遼中県に「遼中県腰街子回族小学」という回族小学がある。遼中県腰街子は回族の集住村であり、多くの回族の子供の状況を考慮した上で、1984年8月に、「遼中県腰街子回族小学」は、遼中県の大樹林学校から独立し、回族学校として運営するようになった。

上の資料からは、1920年代に、瀋陽（当時奉天）に属する新民県で、「新民県回族小学」という回教徒の小学校が存在したことがわかる。行政的な観点では、この学校が、「奉天の回民小学校」であると言うことを否定することはできない。そうすると、「満洲における回々教」は、満洲地域内の回教徒の小学校に関して具体的な記録が少ないため、完全に正しいと言い切れないが、恐らく、最初に紹介した瀋陽回民小学校に加え、北清真寺に存在した瀋陽市回族振興教育基金会私立小学の前身と、「新民県回族小学」を挙げて、「満洲における回々教」の中の奉天に存在する3つの回教徒の小学校と数えたのではないだろうか。

また、「満洲における回々教」の中にある、「3つの小学校の学生数は300人である」という記録について、検証してみる。まず、『瀋陽回族志』によると、1920年代の回回営内にある瀋陽回民小学校だけで、その学生数は500人を超える。北清真寺にある瀋陽市回族振興教育基金会私立小学の前身の学生数を把握することができないが、「新民県回族小学」成立当時の1908年に、学生数は既に150人であったと記録されている。現地でのインタビュー調査でも、現地の老人が覚えていた学生数は曖昧であるし、確実な証拠にはならないが、どちらの数字に近いかというと、『瀋陽回族志』の記録のほうに近いものだった。

以上のように考察してみると、「満洲における回々教」は、回回営内にある回民小学校の検証に対して、決定的な証拠にはならないが、今のところ、20世紀初頭の満洲の瀋陽（当時奉天）の回教徒の小学校の概像を、補足することができる1次的資料であるといえる。

ここまで、『瀋陽文史資料第八輯』、『瀋陽回族志』と「満洲における回々教」に基づいて、私立学校の回民小学を考察した。次の部分は、中華人民共和国成立後に、公立の少数民族学校としての回民小学を考察してみる。

## 第2項 公立時代

『瀋陽文史資料第八輯』は、中華人民共和国成立後の回民小学について、以下のように述べている。

1952年に、中国中央政府は瀋陽を視察した。視察後、学校は正式に政府の管理下には入り、校名は「瀋陽市北市区伊光小学」に改名され、校長は賈雅琴となった。1958年、中国は「整風運動」を起こした。回民小学は「封建宗教色」の恐れがあるため、「北市区市府大路小学」に改名した。1966

年、中国全域は「文化大革命」を実施した。学校の穆斯林食は漢族食に変わり、その後、学校も中止された<sup>183</sup>。

要するに 1952 年の春から、中国政府によって回民小学は接收され、その管理下に置かれるようになった。また、1958 年の中国の「整風運動」と、文化大革命の影響で、回民小学校は「封建宗教色」があるため、「北市区市府大路小学」に改名されたし、学校の穆斯林食は、漢族食に変えられ、学校の運営も一時的に中止された。だが、以上の記録は、中華人民共和国成立から 1966 年までにとどまる。そう計算してみると、『瀋陽文史資料第八輯』が出版された 1985 年までに、回民小学の記述について、約 20 年以上の空白期が存在する。

歴史記述の空白を埋めるために、『瀋陽回族志』<sup>184</sup>で、中華人民共和国成立後の回民小学校に関する記録を検討してみる。

1948 年の中国共産党による瀋陽解放以降、人民政府は選挙を経て、楊曉光と楊岱芳を中心とする建校委員会を設立し、「瀋陽市北市区私立伊光小学校」として再運営された。クラス数は 13 クラスであり、学生数は 500 以上であった。学校は楊岱芳を中心とする理事会のもとで管理し、その運営経費は牛羊業公会から出された。1952 年、学校は人民政府の管理の下で、「瀋陽市北市区伊光小学」に改称した。1953 年に、政府は校舎を修復した。当時の校長は賈雅琴であった。1958 年、「回民整風」の時に、学校の名称は「左」思想の影響下、「北市区市府大路小学」に改称された。

十一届三中全会以後、1981 年 3 月に「瀋河区回民小学」は回復され、2 階建ての校舎を 3 階に増築した。クラス数は 18 個、学生数は約 700 人、教師数は 40 人以上。校長は陳徳然（回族）で、副校長は鉄執敏（回族）であった。1985 年 8 月、市府大路第二小学が回民小学に移入し、学校は 38 クラスになり、学生数は 1,248 人となった。1988 年、政府は新たな 4 階建ての校舎を増設した。学校は 32 クラス、学生数は 1,478 人、教師数は 277 人。校長は張凌貴（回族）であり、副校長は王志君（回族）である。1989 年、回民小学は 36 クラス、学生数は 1,775 人、党支部書記は張凌貴、副校長は王志君<sup>185</sup>。

以上の記録を見ると、『瀋陽回族志』は中華人民共和国成立後の回民小学に関する資料を整理する際に、『瀋陽文史資料第八輯』と比べて、教師の名前、学生数、教師数やクラス数など、学校内の具体的な情報が多い。また、文化大革命以後の 1981 年から 1989 年までの学校の歴史についても少し触れている。

一方、『瀋陽回族志』の前身ともいえる『瀋陽文史資料第八輯』では、中華人民共和国成立後の回民小学について述べる時に、「整風運動」や文化大革命などの政治運動からの影響をそのまま叙述していたが、『瀋陽回族志』では一連の政治運動および学校に対する破壊について、殆ど述べていない。また、両書とも、1960 年代から 1970 年代までの状況について、約 20 年の記録の空白期があった。この空白期は現段階でも結局、文献資料によっても、フィールドワークによっても埋めることができなかった。

<sup>183</sup> 楊耀恩 1985, pp. 121–123。

<sup>184</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 262。

<sup>185</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 260–261。

以上、『瀋陽文史資料第八輯』、『瀋陽回族志』と「満洲における回々教」に基づいて、回回営内の回民小学校の1910年代から1990年代頃までの歴史を振り返った。以下では、筆者が実施したフィールドワークによって、現在の回民小学校の様子を考察する。

### 第3項 現状

筆者は2009年から2015年までの間に、瀋陽回回営で約10回のフィールドワークを行った。そのうち、2010年9月と2015年の3月の調査は、瀋陽回民小学を中心としたものである。本稿の論証は、その2つのフィールドワークを中心としたものである。

本節の第1項「私立時代」と第2項「公立時代」で、回民小学の学校名がたびたび変更されたことを述べた。一方、2001年から最後の調査時の2015年までには、回民小学の校名は「瀋陽市回族小学校」という名称を使っていた。「瀋陽市回族小学校」という校名を使用する理由は、現在の校長自身の理解によると、かつての「回民小学」の中で「回民」という言葉の意味は、回族という言葉の規模と比べると、小さく思われるからであり、そのため、校長は校内の各教員に説明し、教育機関に「瀋陽市回族小学校」への改称を申請して新たな校名を使い始めたという。ここで、回民小学の校名が、校長個人の意志で変更されたことに留意すべきである。

現在の回民小学の実態を探ると、第2章第4節第5項で回回営の歴史を考察した部分で述べたように、2000年前後に、回回営の前街は完全に土地開発された。これまで回回営の「前街」で運営された回民小学は、2000年の土地開発以後も、「前街」で一時的に存続していたが、2007年に政府が建設を請け負って、現在の場所へ校舎を移設した。移設後の学校の様子について、学校の宣伝資料と2010年の校長へのインタビューによると、以下のようによまとめることができる。

移設後の学校総面積は約5000平方メートル、校舎面積が約4000平方メートルとなった。現在では18個の教室があり、そのほかに小会議室、大会議室、学生と教員のパソコン教室、音楽教室、ダンス教室、美術教室、書道教室、化学の実験室、図書館や学生と教員の閲覧室なども整備された。瀋陽市で外国語教育を実施する学校として、外国人教員も迎え入れている<sup>186</sup>。

学校の教育方針は「和（平和、調和）によって、学校を立て、和を励行する（以和立校、以和励行。出典：回族小学校の宣伝資料）」とされている。中心となる教学のためのビルは5階建て、階ごとに、独自の特色をもっている。1階は「芸術特長」を表現する「和之美」である。2階は「民族文化」を表現する「和之融」である。3階は「威風鑼鼓（威風堂々の銅鑼と太鼓）」を表現する「和之源」である。4階は「書画、撮影作品」を表現する「和之韻」である。5階は「特色資料」を展示す

<sup>186</sup> 『回族小学』（学校の資料）：沈阳市回族小学始建于1911年，为沈阳女子清真学堂，招收女学生140人，从1911年到1952年均为私立学校，直至1952年春，学校由政府接管，掀开了崭新的一页。建校至今易名数次。2001年正式更名为沈阳市回族小学。2007年由省级主管部门投资进行校舍改造，一所民族风格浓郁，现代化设施完备的现代化学校矗立在回族居住区。新校舍占地面积5000多平方米，建筑面积4000多平方米，校园环境优美，设施先进，拥有18个多功能齐全的标准教室，小会议室，大会议厅，还设有学生和教师微机室，音乐，舞蹈，美术，综合实践，书法，实验室，图书馆，学生和教师阅览室等专业教室。学校为沈阳市外语教学基地，聘请外籍教师上外教课，先进的教学设备为学生提供了良好的学习空间。

る「和之智」となっている。

現在、学校には5名の「国家級の優秀授業」の教員、6名の「省級の優勝授業」の教員、13名の「市級の優秀授業」の教員が在籍し<sup>187</sup>、総教員数は約40名で、外国籍の英語教員もその中に含まれている<sup>188</sup>。

実際の観察と比べても、以上で述べた近年の回民小学の様子は、ほぼそのままの回民小学の現状である。回民小学校の設備および教師の水準は、近隣の小学校の中でも高いものである。その理由は、2つあると推測される。まず、校長へのインタビューによると、学校は現在のところに移住する前に、約13,000平方メートルの面積があったが、現在の校舎は5000平方メートルになった。こうして、政府および土地開発の会社から多くの売却代が入ったわけである。回回営の範囲が限られたため、学校を拡大することができないので、土地の売却金で学校の設備および教師の水準を高めるしか学校を改善する方法はなかったのかもしれない。また、もう1つの理由は、2011年は学校の100周年記念日であり、校長は2010年に北京の清華大学の周年記念に見学し、そこで学んだことを瀋陽回民小学で活用するため、一時的に学校の質を上げようと考えたからである。

その後、筆者は学校の基礎データを更新するため、2015年に再び校長にインタビューした。その結果は、以下の表のようにまとめた。

表6「回民小学の基礎情報（2010年と2015年）」（筆者収集）

	2010年	2015年
生徒数	1000人未満	572人
民族構成	回族を中心として多民族化	漢族中心（回族数約190人）
教室数（クラス数）	18個	17個
外国籍教員	1人（アラビア語）	—

表6から見ると、中国社会が極めて急速に変化しているとはいえ、2010年から2015年までの5年間の回民小学の生徒数と民族構成の変化は極端である。しかし、フィールドワーク当時の実態を総合的に分析すると、あながち不思議なことともいえない。まず、2010年の調査時点で、学校は100年記念に向かって、学校見学者に学校をアピールしたいという願望が強かった。そこで、見学者に学校の実態を説明する時に、学生数を四捨五入し、多民族アイデンティティを主張したと考えられる。一方、2015年になると、一般の学校として緊迫した教育現場に戻った。例えば、見学者に対して、2010と2015年の態度は大きく変わった。筆者の実際の体験として、2010年当時の場合、見学者であるならば、門の管理人は積極的に接して、学校の案内および校長への連絡も協力した。2015年になると、同一人物は殆ど協力してくれなかったし、校長への連絡も積極的ではなく、筆者を-20℃の校門の前で4時間も待たせるという態度をとった。そこから見ると、2010年のデータは、

<sup>187</sup> 中国の教育局は小学校の先生のレベルを評価する時に、その先生に評価ではなく、先生の授業に対して評価する。そこで、授業のレベルと先生のレベルとほぼ同じである。

<sup>188</sup> 回族小学校の宣伝資料による。



主に学校を宣伝するためのものであり、2015 年の記録のほうが信憑性が比較的高いと考え  
る。

表 6 において、もう 1 つの変化に留意すべきである。それは外国籍教員を使用しなくな  
ったことである。瀋陽の一部分の小学校では、毎週授業日のある午後に、授業の代わりに、  
学校が各種サークルを開催している。回族小学校の場合は、毎週水曜日の午後に、サーク  
ル活動を開催する。サークル活動において、生徒の選択は、英語、音楽や美術などに偏る  
傾向が強いように見受けられた。2010 年時点では、回民小学のサークルの特徴ともいえる  
点としては、アラビア語のサークルがあった。このアラビア語サークルの教員は、外国籍  
の教員であった。2010 年当時のアラビア語サークルに参加する生徒は 10 人前後であり、  
生徒は、主に中国西北地域から出稼ぎにきているムスリムの子女であった。2010 年当時、  
アラビア語のサークルを開催するきっかけについて聞いてみると、学校側は、イスラーム  
文化は回族のアイデンティティの 1 つと考え、また、アラビア語も回族文化の一部であ  
ることから、アラビア語サークルを開催しようとしたと回答した。しかし 2015 年の調査で、  
このアラビア語のサークルは何年か前に中止された。2015 年のフィールドワークによって、  
中止された理由が 2 つ判明した。まず、中国の教育機関にとって、最も大切にしなければ  
ならないことは「親の希望」である。中国を代表する政策の 1 つは、「一人っ子政策」であ  
った。「一人っ子」の「出世」は、その家庭の「出世」であり、「一人っ子」を「出世」さ  
せるため、親たちはすべての希望、精力やお金を「一人っ子」に注ぎ、「一流の大学に入っ  
て、その後、一流の企業に入ることしかない」という認識を「一人っ子」に与えるのが一  
般的であった。こうして、アラビア語のように、宗教・民族を通じて精神的な満足を与え  
ることは、親にとっては重要ではないので、極論すれば教育を実施しなくてもいいという  
教育側の結論であった。

アラビア語などを重視しなくなったもう 1 つの理由は、中国の法律に従えば、公立学校  
で宗教を宣伝することは違法行為であるということにある。回族小学の教育実施側は「ア  
ラビア語のようなイスラームに関するものは、文化ではなく、宗教のほうの傾向が強かつ  
た。」と主張した。この意見に対して筆者は、「アラビア語は宗教ではなく、言語ではない  
のか。また、中華人民共和国成立後から中国では小学校から大学まで、教科書の中で仏教  
と道教のイデオロギーが強かったし、さらに、近年では中国の公立教育機関では、「弟子規」  
などの儒教の知識を直接に強く押し出している。このようなことから見ると、既に公立の  
教育現場で宗教を教えているといえるのではないのか」と小学校の教育側に質問した。す  
ると、「それは違う。上述したすべてのものは中国文化であり、すなわち中華民族の文化で  
あるから、それはいい。」と答えた。

このような、アラビア語のサークルをめぐる問題事例から見ると、中国の教育現場は受  
験や就職にはかることに対応していて、精神的な養成を後回しているという印象をまぬか  
れない。また、少数民族の学校であるにもかかわらず、自民族のアイデンティティおよび  
宗教文化よりも、中華文化、あるいは中華文化と密接している仏教、道教や儒教などの要  
素を優先する傾向にあることが明らかである。

ただ、ここで留意すべきことは、校名の改称も、また 2010 年に一時的に自民族アイデ  
ンティティをアピールしたことも、さらにアラビア語サークルを中止したことも、それぞれ  
当時の学校の最高管理者の意見に従って、変化したものである点である。回民小学の運営

側の管理者の交代によって、自民族文化にも大きな影響があったと考えるべきであろう。特に、回民小学は回回営内に存在し、学校の運営側と回回営の間には連動性があり、回回営の一部として、民族アイデンティティとイスラーム宗教文化は、回回営と回民小学の間に相互影響することがある。

本節では、回民小学を私立期と公立期の2つの時代に分けて考察し、また、現地で行ったフィールドワークに基づいて、現在の回民小学の状況を検討した。最後に、回民小学の年表を次のように示しておこう。

表7「回民小学年表」

年代	当時の校名	場所	回回営内地図の表示
1911	瀋陽清真女子学堂	北清真寺路東、回民商店胡同東	①
1918	瀋陽清真学堂	80、90 年代回民小学附近	②
1924	奉天市私立清真小学校	奉天第一商場付近、令聞街東寺北巷	③
1930	奉天市私立伊斯蘭兩級小学		
1938	奉天市私立伊斯蘭国民学校		
1946	瀋陽市私立伊光小学校		
1948	瀋陽市北市区私立伊光小学		
1952	瀋陽市北市区伊光小学		
1958	北市区市府大路小学		
1980	瀋河区回民小学	現道路	④
2001	瀋陽市回族小学	清真美食街東	⑤



図 12 「回民小学年表対応図」(Google map に基づき、筆者作成)

本節の内容を取りまとめてみると、回民小学の設立、あるいは創建当初の目的は、現地の回民の寄付で、回民の子供にイスラーム宗教知識を教える宗教教育施設であった。時代や社会の変遷とともに、校名や学校の所在地は、たびたび変更されてきた。また近年では、自民族の教育機関は自らアラビア語というイスラームと関連する言語が軽視されるように

までだったが、回民小学は回族の集住地である回回営の中に存在するため、回族学校の本質は動揺させられることはないし、民族性・宗教性が失われることもない。

### 第3節 回民中学

本節では、瀋陽市の回族中学の歴史を探る。この学校として、回回営から離れたところにあるとはいえ、瀋陽回族教育の一部である。結果から見ると、回民中学と回民小学との比較を通じて、瀋陽における回族教育の要素、あり方や将来性を掘り出すことが出来るであろう。

前節で見てきたように、中国の官撰資料である『瀋陽文史資料第八輯』には、回民小学の歴史が記録されていた。しかし、該書には、回民中学の歴史については、全く記録がない。

そこで、回民中学の成立経緯も含めて、中華人民共和国成立後の瀋陽瀋陽回族に関する初めての官撰資料の中で、回民中学という瀋陽市内重要な回族の教育機関について、全く記録がない理由について、回民中学を創始した張子文の息子である張巨齡の著書を通じて、以下のように検討してみる。

1983 年末から 1984 年初の間に、遼寧省瀋陽市政協文史組は、「回族人物輯」を編纂した。私[筆者注:張巨齡]にも張子文に関する編纂の依頼があった。だが、文章を審査する時に、誰かがある資料を持ってきた。その資料には、「川村狂堂は回奸[筆者注:原作者は具体的な文字を抜かしているが、恐らく張子文のこと]を連れて……」と書かれていた。こうして、張子文に関するすべての記録は撤回された。さらに、『瀋陽文史資料第 8 輯』の 31 篇、約 13 万字の文章の中でも、張子文と彼の学校に関する記録は全く存在しなくなった。

だが、瀋陽の編纂者には罪がない。宣伝資料のせい、問題になる可能性があるため、自ら張子文および回民中学に関する文章を撤回したのだから。

その後何年か、私は中国中央政府に張子文に関して訂正するようにと請求した。ついに 1989 年 5 月に、「1989 年（統信發）095 号文」[筆者注:中華人民共和國共產黨中央統一戰線工作部 1989 年第 95 号文件]で、「組織上では、張子文氏を「回奸」と定義する結論がなかった。誰かの本の中にある、彼を「回奸」とみなす評価は、組織の意見ではない」と公布した。確かに、中華人民共和国成立初期に、多くの分野でお互いを「裏切り者」と攻撃することが少なくなかった。だが、それらの攻撃はこれからの社会に大きな影響を与えることも確かである。特に、張子文を「回奸」と定義した人は、普通の学者ではないため、さらに注意する必要がある。

そこで、私はその編纂者[張子文を「回奸」と定義した人]に尋ね、彼に「張子文は回奸である」と証明する資料を求めた。彼は、「特に資料はなかった」と答えた。また彼は、「この件については、既に何十年も経過した。中国成立後、政府も彼のことを敵と思っていないし、仕事も与えたでしょう」と強調した<sup>189</sup>。

以上の叙述は明確に、『瀋陽文史資料第八輯』の中で回民中学が全く記録されなかった理由を説明している。『瀋陽文史資料第八輯』が編纂された当時、既定の計画では、回民中学

<sup>189</sup> 張巨齡 2001, pp. 141—156。

およびその創立者である張子文について紹介されることになっていた。しかし、編纂組の誰かが、「張子文は満洲国時代の売国者である」と記録した資料を編纂組に持ってきたため、編纂組は政治状況を考慮した上で、瀋陽回族にとって重要な宗教教育機関である瀋陽回民中学の歴史およびその創始者について、全く叙述しなかったのである。

ところで、「張子文は満洲国時代の売国者である」と記録した資料について、筆者は、「誰が」、「何のために書いた資料であるか」、「どうして、政府の編纂組の計画にまで影響力を持ったのか」という3つの疑問を解くために、張巨齡氏の『緑苑鉤沉—張巨齡回族史論選』(2001)を検討し、また、直接張氏にインタビューを行った。

まず、『緑苑鉤沉』では、「張子文は満洲国時代の売国者である」と主張した資料があったことに言及した。だが、主な内容について、張子文氏が無実であることを強調し、資料の書名については、『問題』という略称しか記述されなかった。『緑苑鉤沉』の発表から約15年後、張巨齡氏は遂に自分のブログ<sup>190</sup>の中で、その資料が『回回民族問題』(1941)<sup>191</sup>であることを初めて公表した。

書名が明らかになった以上、本稿による前述の3つの設問も解かれるであろう。『回回民族問題』は、近代・現代の回族研究について、最も有名な資料の1つである。またこの書物は、中華人民共和国成立後の中国における回族研究にとって、最も影響力を持つ資料の1つともいえる。なぜなら、『回回民族問題』の編纂組織である民族問題研究会は、中国共産党成立初期の最も重要な組織の1つだからである。中国の政治力学から見ると、『瀋陽文史資料第八輯』の編纂組である瀋陽文史資料委員会は、民族問題研究会の政治上の影響力にとっても及ぶことのできないものであり、後者の意見に逆らうことはできなかったに違いない。

一方、張巨齡氏は、自分の父である張子文の無実を明らかにしようと、『瀋陽文史資料第八輯』出版後から、様々な政府の研究機関と折衝し、「張子文は満洲国時代の売国者である」と記録した編集者に不満を訴えてきた。その結果、政府は、張子文氏の名誉を回復したが、張子文氏の名誉を損害した『回回民族問題』の個別の編集者について、「別にそこまで悪い影響を与えていなかったから、いいだろう」というような「助言」を与えた。

以上の状況を深く追求するために、2012年9月および2014年8月に、筆者は北京で張巨齡老人に、直接にインタビューを行った。張巨齡の見解は、「当時の満洲国は、現在の中国から見ると敵対地域であり、敵対地域に対して、その中のありとあらゆるものは敵視対象とされた。また、張子文の無実の罪は、その実例の1つにすぎなかった」と述べた。

資料の考察に戻ると、『瀋陽文史資料第八輯』(1985)は、回民中学について何も記述していなかったが、恐らく張巨齡氏の努力で、1996年に出版された『瀋陽回族志』には、回民中学の記録が掲載されているようになった。しかし、2014年に出版された『瀋陽宗教志』<sup>192</sup>では、回民中学について記述しているものの、その創始者である張子文氏について殆ど記録していない。

回民中学を検討する際には、学校の創設者である張子文氏が中国国内で特殊性を帯びさ

<sup>190</sup> [http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_48c282b20102v8ql.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_48c282b20102v8ql.html)

<sup>191</sup> 民族問題研究会(中国共産党西北工作委員会) 1941。

<sup>192</sup> 瀋陽市宗教事務局 2014。

せられていたことに留意しなければならない。そのため、本節は、張子文が望んだ回民中学（すなわち回民中学の成立目的と経緯）と、満洲国時代も含めて、実際に運営されてきた回民中学という2つの方面から、回民中学を検討していく。

## 第1項 張子文の回民中学

回民中学について書かれた中国側の最も詳細な記録は、『瀋陽回族志』である。該書では、瀋陽回民中学について、2つの時代に分けて記録している。第一部は、回民中学が成立した1936年から、日本が敗戦した1945年までの「奉天回教文化学院期」であり、第二部は、1946年から1984年まで（『瀋陽文史資料第八輯』の資料収集期）の中学教育期である。

『瀋陽回族志』に記載された「奉天回教文化学院期」の回民中学は、張子文が望んでいた回民中学であった。そこで、その内容を検討してみる。

### 奉天回教文化学院期

瀋陽市回民中学の前身は、奉天私立回教文化学院である。1936年5月に、瀋陽文化清真寺のイマームである張徳純（字子文）は、現地の回民有力者である楊進之、左叔倫や宗教指導者である趙銘周と相談した上で、「イスラームの学院を建設する」という構想を起こした。こうして、同年の8月に、「奉天回教文化学院」という名のイスラーム宗教学院を設立した。当時、募集した学生数は20人であり、校舎は当時の文化清真寺（現在の和平区和平大街四段八号）の二階である。授業内容はアラビア語、コーラン、トルコ語や中国語を中心とした。当時の院長は張徳純であり、教員は蕭慶利（中国語）と欧斯曼（トルコ語）であった。1938年、授業内容に国民道徳、日本語、簿記、珠算、算数、理化、国勢（満史と東北地理）や軍事訓練などの科目が追加された。また、学生は、毎週の金曜礼拝の時、北清真寺で礼拝に参加した。しかし、科目の変化とともに、当初の宗教人材を養成するための学校から職業教育所へと変化していった。当時の学校内の学生数は120人であり、クラスは2つである。1945年[筆者注:恐らくこの年代は印刷ミスである]に満洲回教文化促進委員会が成立された。会長は王殿忠（營口人、満洲陸軍上将）であり、副会長は左叔倫（実業家）と張徳純であり、顧問は濱田平（日本陸軍少将）であり、首席委員は金鏡華である。この協会の目的について、まずは、回民高等学校の設立であり、また、東北各地の回民小学を補助することであった。こうして、この時の文化学院の学生数は、一気に増えた。この問題を解決するため、協会は、1942年11月1日～10日に北京の京劇名人である馬連良に義演を請求した。馬連良は10日間の義演で、25万の満洲国幣を集めた。また、馬連良が個人名義で寄付した10万の援助金と、他の人からの援助金と合わせて、40万満洲国幣で、日本鍋山女子専門学校（現在の回民学校の住所）の校舎を買った。その後の1943年に、新しい校舎に移り、校名も「奉天私立回教文化学院」に変更した。当時の学生数は255人、クラス数は7クラス。学校の授業は当時の一般高校と同じであったが、毎日2コマのコーランの課程があった。校長は馬在山であったが、後に彼は離職し、金鏡華（字光複）となった。教員は蕭慶利、蕭国霖、常桂五、白夢慶、高逢源、白玉琢、蕭永泰、王教員（日本留学から帰国）や唐教員（日本留学から帰国）など。総務主任は索沛然である<sup>193</sup>。

以上、『瀋陽回族志』の記録を通じて、奉天回教文化学院期の回民中学の歴史経緯の一部

<sup>193</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 256-257。

分が把握できる。張子文を中心とする何人かの回民は、1936年8月に「奉天回教文化学院」という名前のイスラーム宗教学校を創建した。当時の学生数は20人前後であり、授業科目はアラビア語、コーラン、トルコ語や中国語など、イスラームを中心とした教育であった。1938年から、学生数は増えて120人になったが、授業科目は国民道徳、日本語、簿記、珠算、算数、理化、国勢（満史と東北地理）や軍事訓練などの科目を増加し、職業教育場所へ変化しつつあった。その後、満洲回教文化促進委員会の影響、かつ馬連良氏を中心とした集金で、学校は1943年に日本鍋山女子専門学校の校舎を買い、「奉天私立回教文化学院」という名前で再び開校した。当時の学生数は255人であり、学校の授業は2コマのコーランの授業以外では、一般の高校と殆ど変わらなかったという。

回民中学の創始者である張子文氏が望んだ学校について、『瀋陽回族志』のほかに、最も理解している証人は、彼の息子である張巨齡であろう。張巨齡氏自身は光明日報の記者でありながら、主に漢語の研究について関心が強いが、回族研究についても学術研究の立場から、宗教指導者である張子文氏の名誉回復を試みたのだった。回民中学の内部の関連者として、創建期の実話を記憶しているはずであると考えて、筆者は張巨齡氏の著作、インタビューを整理してみる。

「私立奉天回教文化学院」は上海、南京、さらに海外の支援の下で、創立したものである。また、チベットの九世パンチェンラマ（班禪）も学校に寄付金を与えたことがある。

満洲国時代の14年間に、張子文の名刺には、2つの職務が印刷されていた。1つは奉天文化清真寺教長であり、もう1つは私立奉天回教文化学院院長である<sup>194</sup>。

この記録から見ると、回民中学の前身である私立奉天回教文化学院の創建の資金は外国からのもので、現地とは全く関係がないことになる。また、張子文氏個人についても、満洲国との関わりでは、奉天文化清真寺教長と私立奉天回教文化学院院長のみであることを主張したいらしい。

そして、張巨齡氏は父親の創建した回民中学について、3つの段階に分けて説明している。まず、回民中学の創立過程について、以下のように述べている。

1935年から1945年の間で、この学校は主に3つの段階を分けることができる。

初創段階（1935年末－1939年末）

学校は「私立学校」であることを強調し、「回教教師を養成する」という目標を持つ。1931年に、張子文は北平[筆者注：現北京]の成達師範学校教務主任とアラビア語教師の職務を辞め、同年6月に瀋陽で「文化清真寺」第二期建設を完成した（第一期は1926年に完成した）。その後、彼は「文化学院」を建設するため、中国各地に資金を求めた。彼は日本人の援助金を受け入れたが、学校管理への介入を拒否する態度を取っている<sup>195</sup>。

同様のことは、この学校の卒業生の金声（元遼寧省鞍山市第二中学主任）も、『瀋陽市回

<sup>194</sup> 張巨齡 2001, p. 134。

<sup>195</sup> 張巨齡 2001, pp. 150－156。

民中学建校 60 周年記念冊』の中で述べている。

1936 年 5 月、奉天「回教文化師範学院」は成立した。当時はこうした学校を創立しようとする、満洲国内の日本勢力に学校への介入を受けることになるから、それを避けるため、学校は成立後間もなく「回教文化師範学院」から「私立奉天回教文化学院」へと改名した。<sup>196</sup>

以上の張氏の記録および卒業生の証言によると、回民中学が私立奉天回教文化学院という校名に改称する前に、学校の名前は「回教文化師範学院」といった。また、張子文氏は回民中学を創立する際に、満洲国と関係のある資金を拒否し、学校の建設金はどうしても他の地域から求めたかったということが判明した。その後の第 2 段階については、張巨齡は以下のように述べている。

#### 争闘段階（1940 年初－1942 年）

1940 年に、張子文の権力を縮小するため、日本側は「私立奉天回教文化学院」に平田勝重と金氏を副院長と教務主任として任命した。1942 年秋、学校の校舎を拡大するため、張子文は北京の京劇芸人である馬連良に、義演を依頼した。同年 11 月、馬連良は学校の資金のために、奉天で公演を行った。

しかし、中華人民共和国成立後、ある人は「馬連良の奉天公演は満洲国成立十周年のためであった」と強調し、馬連良を冤罪にした（張巨齡注：実際に計算すると、公演時期は満洲国の記念日より 2 ヶ月早かった。）

またその後、学校の方針は「回教教師を養成する」ことから、軍人養成などの目標に変化していった。

この部分の記録を概観してみると、1940 年からの回民中学の管理層では、権力闘争が厳化していたこと、また、馬連良氏を中心とする集金活動が確実にあったことが判明した。そして最後の第 3 段階は、次のように記録されている。

#### 突然の離職（1943 以後）

1943 年、満洲国内の日本勢力は完全に学校の管理層をコントロールするようになった。こうして、68 歳の彼[張子文]は、彼の教育目的と反するようになった学校を辞任した。

以上、張子文氏はイスラーム学校を作るために中国各地で集金し、1936 年に奉天で回教文化師範学院を開校したが、間もなく学校の権力構造が変化していき、同校は 1943 年から満洲国内の日本勢力に属する一般学校となったということがわかった。

回民中学を開校した時の校名が、回教文化師範学院であることも証明された。ほかの歴史事実は、『瀋陽回族志』の中の記録と、殆ど一致するものである。また、学校をイスラーム学校として維持することができなかった一要因も、上述の『瀋陽回族志』を中心とした部分で述べたように、この学校は自ら、回回営から孤立したからである。

<sup>196</sup> 『瀋陽市回民中学建校 60 周年記念冊』、1996 年 9 月、p. 191。

実は、日本側は、既に満洲国時代以前の大正 13 年（1924 年）から、張子文氏に注目するようになった。第 2 章でとりあげた『満鉄調査資料 26』の「満洲における回々教」<sup>197</sup>の中には、満洲各地域の清真寺（モスク）、宗教指導者（阿訇）、教徒数や、イスラーム学校以外の回教徒の「社会教育学校」を記録した表があった。

清真小學校及び生徒数は前章に記せしにより此處に記する社會教育學校は□全然別にして之には阿文の學課なし

表 8 「大正 13 年の満洲内の回教に関するデータ（筆者注）」

地名	清真寺	阿訇	教徒数	社會教育學校	學生
大連	一座	穆阿訇	六百人		
金州	一座	馬阿訇	二百人		
熊岳	一座	李阿訇	千百人		
蓋平	一座	石阿訇	千三百人		
營口	二座	張阿訇・劉阿訇	五千五百人	一所	百二十人
海城	一座	趙阿訇	一千人		
立山	一座	白阿訇	三百人		
沙河	一座	楊阿訇	二百人		
遼陽	一座	劉阿訇	四千二百人	一所	百五十人
十里河	一座	白阿訇	五百人		
奉天	三座	張阿訇・馬阿訇・鐵阿訇	一萬六千人	一所	四百人
新子	一座	王阿訇	五百人		
懿路	一座	陳阿訇	一百人		
鐵嶺	一座	藍阿訇	二千人	一所	八十人
山頭堡	一座	陳阿訇	百二十人		
孫家臺	一座	馬阿訇	二百人		
開原	一座	王阿訇	三千一百人	一所	百四十人
昌圖	一座	穆阿訇	一百人		
四平街			二十人		
公主嶺	一座	劉阿訇	三百人		
長春	一座	于阿訇	三千五百人	一所	一百人
吉林	三座		一千人		
火連寨	一座	張阿訇	一千八百人	一所	四十人
本溪湖	一座	王阿訇	三千二百人	一所	百二十人
鳳凰城	一座	趙阿訇	三千四百人	二所	百四十人
安東	二座	安阿訇・錢阿訇	三千六百人	一所	百二十人

<sup>197</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編 1924（大正 13）。



筆者は最初、この表の奉天部分で指している社會教育學校が、回民中学であると考えた。しかし、この資料の作成時期は1924年であり、張子文の奉天文化清真寺の成立したのが1926年、回民中学の前身である回教文化師範学院の成立したのが1936年であるので、時期が一致しない。

しかし同書には、以上の図表以外にも、張子文の名前を確実に挙げた箇所がある。その内容は、以下のように記録されている。

上海海洋社相談役佐久間貞次郎氏等により發起されたる中華回教俱樂部なるものと連絡し、又奉天の阿訇張德純氏の活躍により教徒間に新智識の輸入と勢力繁榮とが可成の成績を現はしつつある時に於てをやである。

この記録によると、1924年時点ですでに、日本側勢力は既に張子文（字德純）氏に注目するようになっていたことがわかる。そこまで早い時期に、日本勢力の目にひかれたことから見ると、満洲国内である限りにおいて、張子文氏が独自に宗教活動を行うことが政治勢力の影響を受けないはずはない。また回回營から離れては、イスラーム宗教知識を伝承する宗教学校である回民中学は、最初から成功することができなかったかもしれない。

以上、『瀋陽回族志』、張巨齡の記録および日本側の満鉄資料を通じて、張子文の望んだ回民中学、あるいは回民中学の創建過程について検討した。総括してみると、張子文が望んだ回民中学は、近代的なイスラーム宗教教育機関であったが、現地の回民のコミュニティ内での張氏の影響力は弱かった。日本側資料を見ると、張子文氏は学校建設初期から人本勢力に注目されたため、学校本来の目的を達成する可能性はむしろ低かったのではないかと考えられる。次項は、イスラーム学校から公立学校になった回民中学を検討してみる。

## 第2項 瀋陽市回民中学

『瀋陽回族志』は、奉天回教文化学院期における回民中学の中等教育について、以下のように記録している。

### 中学教育<sup>198</sup>

瀋陽市回民中学校の前身は、「奉天私立回教文化学院」であった。1946年4月に、学校は「私立東北中学」に改名し、同年8月に「私立伊光中学」に改名した。1949年5月に、瀋陽市第十一学校と合併し、「瀋陽市伊光中学」に改名した。また、1954年3月に、学校は「瀋陽市回民中学」に改名した。その後、1959年8月に「瀋陽市第二十九中学」に改名され、1981年10月に「瀋陽市回民中学」に回復された。

1945年に、学校は3回の衝撃を受けた。第一回、当時の社会が不安定のため、学校は強奪に遭った。第二回、学校の隣の日本神社の下で、地雷が爆発した。そのため、学校の一部が破壊された。第三回、何人かのソ連軍の服装を着た人が学校に来て、学校の設備を強奪した。

1946年に金鏡華が校長を辞め、張凌岐が校長を受け継ぎ、校名を「伊光中学」に変更した。一年も立たないうちに、校長として学校は李学盈（瀋陽市新民県出身、東北大学卒業）を召抱えた。学

<sup>198</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 267-269。

校の経費を管理する満洲回教文化促進委員会は解体されたため、伊光中学理事会が設立された。当時の社会は非常に不安定であったため、1946年には中学部が3クラス、高校は1クラスしかなかった。学生数は150人前後であった。その後の1947年に18クラスに増加したが、1948年には、中学部の11クラスしか残っていない。教師は30人前後になる。同年7月、国民党は校舎を占用し、学生は38人しかいなかった。

1948年に、国民党は中国内戦に負けた。学校は瀋陽市人民政府の管理となり、校名は私立から「公立伊光中学」に改名した。1949年5月5日に、瀋陽市文教局は、「公立伊光中学」と瀋陽市第十一中学校を合併し、「瀋陽市伊光中学」に改名した。十一中学校の副校長が回民中学の副校長となり、伊光中学の元副校長である李学盈が第二師範中学に派遣された。1950年5月26日、工農速成中学の教務である王連第が伊光中学の代理校長となった。1951年、瀋陽市合作総社副主任、瀋陽市民族事務委員会主任である馬世芬（回族）が校長となった。1953年5月、李学盈は再び「瀋陽市伊光中学」の副校長になり、1957年に、校長となった。1958年に李健秋が副校長となり、1963年に汪恩鐸が副校長となった。また、1954年に、「瀋陽市伊光中学」は「瀋陽市回民中学」に改名され、1959年8月に「瀋陽市第二十九中学」に改名された。1981年10月に「瀋陽市回民中学」の校名に回復された。現在（筆者注：1990年代）、回民中学の学生数は1234に達した（その中、回族学生は292人）。中学部と高校部は、それぞれに12クラスがある。また、現在の校長は李慶恵である。

現在、学校は瀋陽市和平区光榮街に存在する。回民中学校の総体面積は、27,639平方メートルで、建築面積は11,280平方メートルであった。また、教学ビル、実験ビル、辦公ビル、図書館、食堂ビル、学生寮や体育館がそれぞれ1つある。

回民中学は、1959年に瀋陽市重点中学に認定され、1962年に遼寧省重点中学に認定された。また、1964年に中国全国サッカー会議に参加した。文革を経て、学校は1991年にサッカーの伝統を復活した。

1984年以後、学校は北京、上海、西安、鄭州、蘭州や新疆昌吉などの回民中学と合作関係を確立した。回民中学は瀋陽市のすべての回族学生を募集するが、和平区の教育局に属したため、総学生数の30%が回族の学生であることを保証する。

以上の記述から、回民中学の校名は、日本敗戦後の国共内戦期まで、また内戦後から文革期まで、文革期から改革開放期まで、改称され続けたことがわかる。回民中学成立後から、校名の改称が多かった一要因として、学校の創建後からその地の社会と政治変化が大きかったことを挙げられよう。前項の考察も含めて『瀋陽回族志』の記録に従って、以下のような年表とまとめることができる。

表9「回民中学校名年表」

年代	当時の校名
1936年5月	奉天回教文化学院
1943年	奉天私立回教文化学院
1946年4月	私立東北中学
1946年8月	私立伊光中学
1948年	公立伊光中学

1949 年 5 月	瀋陽市伊光中学
1954 年 3 月	瀋陽市回民中学
1959 年 8 月	瀋陽市第二十九中学
1981 年 10 月	瀋陽市回民中学

『瀋陽回族志』はまた、一連の政治変化や文革の被害について叙述した後、現在の回民中学がかつて馬連良氏の集金で買った瀋陽市和平区光榮街の校舎で一般の公立学校として運営されていることを明らかにし、その校舎の総体面積が 27,639 平方メートル、建築面積は 11,280 平方メートルであると述べる。さらに、民族学校であるため、普通の公立学校と違って、学生数の 30%は回族学生から募集することがわかる。

『瀋陽回族志』の記述以外の情報を得るため、筆者は 2010 年から 2015 年まで、4 回のフィールドワークを実施し、近年の回民中学の実態について調査した。

まず、2010 年の 2 回の調査で、校長への聞き取りを行い<sup>199</sup>、以下について確認した。現在の回民中学校は総合ビル、教学ビル、実験ビル、体育館、人工芝生のサッカー場などの施設を有している。現在は 35 クラス、総学生数は約 1,800 人で、教師 154 人の中に、省、市級の優秀な教師が約 50 人含まれている。2009 年には、瀋陽市高校受験の偏差値ランキングで第 4 位に位置づけられた。

1970、80 年代の回民中学校では、体育が非常に重視されており、瀋陽市体育優良校の評価を得た。2001 年 5 月には、中国代表として出場した「世界中学生サッカー選手権大会」で優勝を飾った。

かつて回民中学には、中等部と高等部が存在していたが、2000 年の瀋陽市和平区の「学校合併」の政策によって、「回民中学」という名称のまま、中等部を廃止し、高等部だけが残されることとなった。瀋陽市教育局の学生の募集の基準では、30%の回族学生の比率が必要であることも確認できた。

その後、筆者は 1 日間、学生の授業に参加し、観察を行った。その結果として、本校は『回民中学』という民族学校の名義があるが、教育内容は一般的公立学校と同じであり、「応試教育」（試験のための教育）を中心とするということだった。少数民族言語を持っていない回族は、民族アイデンティティが希薄であるため、学校は回族の伝統文化の宣伝として、学校内で回族グッズや回族有名人の看板を展示している。しかし、比較として、現地の朝鮮族の民族学校の授業で実施されていた民族知識・言語教育と比較すると、学校での民族教育は遠く及ばないという印象を得た。

校長先生の紹介と、上の『瀋陽回族志』の記録によると、「この学校は全市に向けて、回族学生を募集する。ただし、和平区教育局に属するため、この区の行政政策として、ある程度の範囲の中から、学生を募集する任務がある。そして、学生を募集する時に、回族学生のためにある程度の定員を与える、その比率は 30%」<sup>200</sup>という問題の実態を知りたいと思った。だが、この比率は極めてデリケートな問題であり、調査を行うのが困難であった。

<sup>199</sup> 2010 年 3 月、9 月に実施した。

<sup>200</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 269. (「该校面向全市招收回族学生，但因隶属和平区教育局，承担该区一定范围的招生任务，因此在招生中为回族学生留出一一定的比例，约占 30%。」)

いくつかのクラスを観察した結果として、現段階までに言えることは、その比率は実際には30%に達していないようである。

その後の2012年に、筆者は個人関係を利用し、学校内の回民のハラール食堂について調査した。その結果、食堂を管理する教員はイスラーム教徒でも、回族でもない。それどころか事務室内に仏像の絵を貼るほどに、積極的に仏教を信じる人であった。食堂の食材、特に肉がハラールであるかどうかについて質問すると、「豚肉でない安い肉でさえあればいいでしょう」と答えた。

筆者による最後（4回目）の調査は、2015年3月に行ったものである。学校の変化は大きかった。筆者は事前に、「回民高校も瀋陽市内にある民族学校であることを標榜し、かつ政策上の疑問を緩めるため、若い回族の副校長を任命しようした」という情報を把握していた。この新しい副校長先生は、筆者の中学時代の生物担当教員であったため、聞き取り調査はスムーズにいき、これまでには入手できなかった具体的な数字を記録することができた。

2015年現時点では、学校の総学生数は1302人であり、そのうち回族学生数は約120人である（各学年に40人前後）。学校に在籍する教師は165人であり、各学年に10クラスがある（総計30クラス）。また、校内には17個のサークルが存在している。中華人民共和国成立後、学校はサッカーを中心として、バスケットボールやバレーボールなどのスポーツ活動に力を入れていた。2003年からはテコンドーのサークルが台頭、その後、2010年から今年まで、毎年の全国高校のテコンドー試合で毎年優勝している。

以上は、これまで近年の回民中学に対するフィールドワークによる情報である。主なデータをまとめると、以下のようになる。

表10 「2010年、2015年回民中学基礎情報」

年代	学生数	クラス数	回族学生数
2010	1800	35	—
2015	1302	30	120

（フィールドワークに基づき、筆者作成）

ところで筆者はフィールド調査を行う際に、回民中学の在学者、卒業者、および瀋陽市内の回族に「回民中学の初代校長は誰ですか」と聞くと、殆どの人は「馬連良である」と答えた。馬連良氏は近代中国で、最も有名な回族の芸術家の1人であった。文化大革命中に、馬連良氏が酷く批判された理由の1つも、満洲国時代に、回民中学のために奉天で公演を行ったことであった。

一方、張子文氏は瀋陽回族にとって、印象が非常に薄い。それほどまでに張子文氏は回回営内で影響力がなかった。また、張子文の無実の罪についても、回回営からの応援と保護がなかった。回民中学を創立した直後に、満洲国政府の意見によって、イスラームに関する授業の内容が変更されたし、学校の本来の目的と意識が伝承されなかったことも、回回営からの支持がなかった理由であろう。

本節の最初で述べたように、張子文氏は日本人川村狂堂との関係があったため、「回奸」という無実の罪を着せられた。このことに対して、張子文の息子である張巨齡氏は、張子

文氏は日本人の川村狂堂、および川村狂堂の「満洲伊斯蘭協会」との関係は殆どなかったことを証明するために、以下の証拠を列挙している<sup>201</sup>。

1934年2月20日長春『大同報』第7版は、『満洲伊斯蘭協会』の最終決定:会長は張仲三、副会長は常鳳閣と沙振剛、名誉会長は馬顕異」と掲載した。また、『満洲伊斯蘭協会』は、政治に参与しないと載った。

1934年7月5日『大同報』第7版は、「会長丁一青、副会長張仲三、鉄汝張、理事長韓集斎、常務理事長金慕周、監事王敬一、鉄弼臣」と掲載した。

1934年7月8日に「満洲伊斯蘭協会」は、「伊斯蘭協会は既に、新京で成立した。回教同士の親善と福祉のため、奉天に伊斯蘭協会奉天分会を設立しようとした。南、北清真寺準備を経て、近日中に成立式を開催する予定である」と宣言した。

以上の記録によれば、張子文と「満洲伊斯蘭協会」との関係は、殆ど存在しなかったし、ある資料の中で指摘された「川村狂堂は回教張子文を連れて……」ということは立証することができない。

張巨齡氏は当時の新聞を通じて、張子文氏と「満洲伊斯蘭協会」との関係がないことと、満洲国内の日本人川村との関係が浅いことを立証しようとした。だが、張子文氏は張巨齡氏の父であるため、張巨齡氏は、もう1つ重要なことに気づいていなかった。『大同報』が報道した「会長丁一青、副会長張仲三、鉄汝張、理事長韓集斎、常務理事長金慕周、監事王敬一、鉄弼臣」などの人物は、恐らくイスラーム宗教指導者ではなく、各地域の有力者である。例えば、筆者のフィールドワーク<sup>202</sup>によると、常務理事長金慕周は、元開原商会理事であり、開原でいくつかの大型工場を持つ者であった。満洲国時代の開原は、満鉄線路上でも重要な大豆の集散地であり、周辺地域は非常に繁栄していた。そのような地域の商会理事は、回民社会だけではなく、社会全体を左右する人物であった。

張巨齡氏は、「張子文氏は四ヶ国語を使用することができる素晴らしい宗教指導者・教育家である」と強調した。確かに、張子文氏は北京でも有名なイスラーム宗教指導者の1人であったが、当時の国民党が管理する中国にとって、満洲国は外国であり、社会の状況は違ったものだった。2009～2015年にフィールドワークを行った時に、瀋陽の回回営内の殆どの90歳代の老人は、「張子文」という人物について知らず、「德国張」という和平区の小さい清真寺の小さい阿訇ぐらいにしか覚えていなかった。現地での影響力の小ささを表している。満洲国時代には、瀋陽の回回営内の南清真寺を中心する地域では鉄一族の影響力が強く、北清真寺の周辺では楊と馮の両族の影響力が、そして東清真寺では趙と馬の両族の影響力が強かった。そのため、いくら北京の有名な宗教指導者と言っても、満洲国の奉天の回回営の有力者にとって、「本溪という田舎から来た小さい阿訇」としか考えられていなかったのだ。

ただ、筆者は張子文氏を過小評価したいわけではない。清廉なイスラーム宗教者である張子文氏は、回族集住地の勢力に巻き込まれただけかもしれないし、宗教教育

<sup>201</sup> 張巨齡 2001, pp. 167–182。

<sup>202</sup> 1998年、開原老城で実施した。

の発展だけに力を尽くそうと考えたのかもしれない。

しかし、どの時代においても、回族（かつての回民）は、中国にとってマイノリティであることに違いない。マイノリティとしての自民族の発展には、民族内部の団結が重要な要素となる。回民中学創立後の一連の変化、および学校の発展の方向から見ると、瀋陽の回族の宗教教育を向上させようとする際に、中国の回族の立場、および生活スタイルを考えずに、回回営という回族のコミュニティから離れた場所で展開することは、実現性が低かったと思われる。張子文の回民中学の経験から見ると、瀋陽のような漢族を中心とする中国東北部、あるいは東部地域は、イスラーム教育を実施する際に、回族のコミュニティとの連携が必要である。張子文の行動は成功していたとは言えないが、今後、中国の漢族を中心とする地域で少数民族の教育を実施する際に、有効な経験となるかもしれない。

以上、本節は、回民中学の成立過程と、成立後の一連の諸変化を考察した。以上の資料から、主に2つの問題を取り上げることができた。

まず、中国側の資料は、主観性が強かったこと、また、満洲国時代のことを記述する際に、編纂者は遠慮することが多かった。さらに、中国側の民族、および宗教に関する研究を行う際に、「愛国」を優先しなければならないことがある。例えば、張巨齡氏は、回族研究の愛国について、1つの事例をあげている<sup>203</sup>。張氏は「中国四大阿訇」について、王孟揚（回族教育家、『四大阿訇伝記及事略』の編纂者）の弟子に聞いた。王孟揚の殆どの文章を読んだ彼の弟子は、王先生が書いたのは「中国四大抗戦阿訇」であったが、発表された時には「中国四大阿訇」となった。

「四大阿訇」は、多くの研究者が中国で回族研究を行う際に、普通に使用する定義や言葉である。また、中国の公立教育で、回族の歴史を言及する際に、必ず「四大阿訇」が出てくる。だが、約1400年の歴史を持つ中国の回教社会にとって、近代の4人の宗教指導者しか議論しないことはありえないことである。だが、「愛国主義」を実施しつつある中国社会では、恐らく今後もこの言葉は、使用され続けるであろう。

しかし、一民族の歴史を収集・整理・検討する時には、最大限に歴史事実のままに資料を収集し、また、客観的な方法論で資料を整理・検討しなければならない。政治に左右される文章と、誰かを喜ばせる文章は、間違いなく今後の研究に悪い影響を与えるだろう。

もう1つの問題としては、本節で考察した回民中学と、第2節で検討した回民小学と比べると、回回営という存在が大きかったことがあげられる。回民中学、回民小学とも、イスラーム宗教教育を実施するために成立した宗教学校である。しかし、回民中学は開校後間もなく、宗教知識を教えなくなった。逆に回回営内にある回民小学は、成立から現在に至るまでの100年以上の歴史を相対的に見ると、時には民族アイデンティティおよび宗教文化教育を実施することができなかったが、イスラームと関連する知識を途切れ途切れにでも伝承し続けている。無論、両学校の学生の年齢などの要素も存在するが、同じく中国の義務教育であるので、間違いなく回回営という存在が大きく反映されているのであろう。

以下第4節では、中国の東北地域で唯一存在するイスラーム宗教機関である瀋陽伊斯蘭教経学院について、考察する。

---

<sup>203</sup> 張巨齡 2001, pp. 257–262。

#### 第4節 瀋陽伊斯蘭教経学院

中国国内に、中国政府が許可したイスラーム教教育機関は9つある。これらのイスラーム教教育機関を具体的に言うと、北京市には中国伊斯蘭教経学院と北京伊斯蘭教経学院、寧夏回族自治区銀川市には寧夏伊斯蘭教経学院、甘肅省蘭州市には蘭州伊斯蘭教経学院、青海省西寧市には青海伊斯蘭教経学院、河南省鄭州市には鄭州伊斯蘭教経学院、新疆ウイグル自治区ウルムチ市には新疆伊斯蘭教経学院、雲南省昆明市には昆明伊斯蘭教経学院、そして遼寧省瀋陽市には瀋陽伊斯蘭教経学院がある。

以上の伊斯蘭教経学院の地域分布から見ると、主に中国の中部と西北部にある。中国の東部で、伊斯蘭教経学院がある都市としては、北京と瀋陽市のみである。しかし、北京は、多民族国家である中国の首都を示すために、伊斯蘭教経学院を設置しなければならないのは当然である。それに対して、中国東北地域で唯一のイスラーム教教育機関である瀋陽伊斯蘭教経学院は、ある意味で、中国東部唯一の伊斯蘭教経学院と考えられる。本節は、この瀋陽伊斯蘭教経学院を中心として、学院の歴史およびその意義について考察する。

瀋陽伊斯蘭教経学院に関する資料はそれほど多くはない。また、以上に挙げた他の伊斯蘭教経学院の殆どは、ホームページをもっているが、瀋陽伊斯蘭教経学院は唯一、現段階まで公式資料が公表されていない学院である。

瀋陽伊斯蘭教経学院に関する唯一の公的な記録は、『瀋陽回族志』の中の記述である。また、瀋陽伊斯蘭教経学院に関する民間資料および研究も、基本的に存在しない。その理由は、中華人民共和国の機関に対する中国人研究者の研究が極めて少ないうえに、民族や宗教などに関する機関を研究すること自体が、中国の研究者にとって非常識とされていることを挙げなければならない。

こうして、本節は主に『瀋陽回族志』を中心として、瀋陽伊斯蘭教経学院を考察し、その後、フィールドワークの結果を補足資料として、現在の状況を検討してみる。

瀋陽伊斯蘭教経学院の成立、および政治背景は、『瀋陽回族志』<sup>204</sup>の中で、以下のように記録されている。

1982年4月16日、遼寧省宗教事務局は「中発(1982)19号文件」と同年3月の「全国第9次宗教工作会議」の提案に基づき、かつ「計画的に、若い世代の愛国宗教指導者を育成する」という目的を達成するため、遼寧省政府の上級部門に提議をした。同年4月に、キリスト教のカトリック、プロテスタント、イスラーム教のそれぞれ3つの宗教教育機関を開設するため、遼寧省の宗教事務局は、吉林省と黒竜江省の宗教部門に相談した。5月上旬に、東北三省の宗教機関は、「これから瀋陽で、キリスト教のカトリック、プロテスタントとイスラーム教のそれぞれの愛国宗教教育学院を設立し、その管理は遼寧省宗教部門に任せる」という提案に合意した。こうして、遼寧省宗教事務局は、国務院宗教事務局に『關於東北三省聯合開辦宗教院校的請示報告』を提出した。6月1日に、国務院宗教事務局は「(82)宗教字193号文」という文件で、「遼寧省で3つの宗教院校の開設を許可し、積極的に準備して、できるだけ9月1日に開学するように」と返事した。その後7月12日に、遼寧省宗教事務局は、遼寧省政府に宗教院校の開設に関する伺い書を提出した。同年9月13日に、

<sup>204</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 257—260。

「国務院の（1982）60 号文件」の中で、チベット、新疆、上海、北京、武漢、瀋陽などの地域に 22 の宗教学校の建設許可が出された。

この記述からみると、1982 年に遼寧省宗教事務処は遼寧省内に、キリスト教のカトリック、プロテスタントとイスラーム教のために、それぞれの愛国宗教教育学院を設立することを提案したことがわかる。

その具体的な人員調達と成立経費については、以下のように記述されている。

人員編成に関しては、7 月 27 日の「遼編発(82) 54 号」という文件で、3 つの宗教院校事業に 18 人を編入し、これらの人員は遼寧省民族委員会（宗教処）に配属された。

経営経費に関しては、「国務院の（1982）60 号文件」の精神に応じて、宗教組織の募金と政府援助とのコンビネーションという方法で解決する。政府の補助について、中央政府は 40%を補助する義務があり、地方政府はこれに対して、60%を補助する義務がある。7 月 22 日、遼寧省財政庁は 7.5 万元の補助金を提供し、11 月 17 日、中国国務院宗教局は「（82）宗辦字 479 号通知」に基づき、5 万元の補助金の他に、さらに 8.5 万元の補助金を与えた。

以上の記録によると、瀋陽伊斯蘭教経学院の創設に関わる資金は、地方政府からの 7.5 万元と、国家宗教機関からの 13.5 万、合計 21 万であった。

さらに『瀋陽回族志』は具体的に、瀋陽伊斯蘭教経学院の運営事項について、このように述べている。

瀋陽伊斯蘭教経学院の実際の運営について、10 月 5 日に、遼寧省、吉林省と黒竜江省の 3 つのイスラーム教協会は瀋陽に人を派遣し、瀋陽で「瀋陽伊斯蘭教経学院董事会」の成立会議に参加した。会議上で、選挙を通じて、鄭隆慧などの 7 人（遼寧 3 人、吉林 2 人、黒竜江 2 人）の董事（理事）を選んだ。鄭隆慧アホンは董事長に選ばれた。李鴻賓、馬延増アホンが副董事、また、李鴻賓は院長と兼ねる。会議での決定事項は以下の通りである。

- 1、学院名は瀋陽伊斯蘭教経学院である。
- 2、学院の所在地は南寺と元北寺の一部分の部屋である（約 23 部屋）。
- 3、学院を作る主旨は、政治的に愛国、党の指導と社会主義の制度を支持し、ある程度の文化知識と高い宗教造詣を持つ若いイスラーム教職業人員の育成である。
- 4、学院の管理機関は遼寧省イスラーム教協会である。
- 5、学生募集要項と各省の定員数を決定した。試験科目は語文（中国語）、政治、アラビア語、宗教常識、歴史や地理などの 6 科目である。試験方法は、統一命題（統一的にテーマを出す）、統一試験、個人試験（個別試験）、採点、総合評価である。
- 6、文化、政治、アラビア語および宗教の講師を募集することを決めた。
- 7、経費は学生数によって、分担する。
- 8、11 月に、瀋陽で 1 ヶ月の在職アホン養成クラスを開催することを決めた。



- 9、遼寧省イスラーム教協会に依頼して、教育指導要綱、教育計画、学生規範および管理制度などを定めた<sup>205</sup>。

この部分は、瀋陽伊斯蘭教経学院の運営機関、教育目的や教育科目などに関する具体的な内容である。瀋陽伊斯蘭教経学院は、遼寧省を中心とする東北三省（遼寧、吉林、黒竜江各省）の伊斯蘭教経学院であり、また、学院の目的は、イスラーム教職業人員の育成であり、教育科目は中国語、政治、アラビア語、宗教常識、歴史や地理などの6科目であることが記されている。

学院の実際の運営については、以下のように記録されている。

そして、1983年1月21、22日の試験を通じて、57名の学生が合格した。その内訳は、遼寧省出身者が28人（修士2人を含む）、吉林省が12人、黒竜江省が17人であった。1983年3月17日に、学院は瀋陽南清真寺で開学式典を開いた。1989年7月まで、2期、合計80人の新入生を募集した。さらに、3期（約60人）の在職アホン訓練班を開催した。

要するに、1983年から1989年までに、瀋陽伊斯蘭教経学院は計3期の学生を養成したのである。学校の運営方についても、『瀋陽回族志』は非常に具体的に記録している。

瀋陽伊斯蘭教経学院董事会の具体的な人員構成は以下の通りである。

1982年10月15日成立当時は7人であったが、1987年に8人にまで増えた。

董事長は哈吉（ハッジ）鄭隆慧であり、彼は黒竜江省イスラーム教協会主任、ハルビン市清真寺アホンである。

副董事長は哈吉（ハッジ）馬延増であり、彼は吉林省イスラーム教協会主任、長春市清真寺アホンである。

もう一人の副董事長は哈吉（ハッジ）李鴻賓であり、彼は遼寧省イスラーム教協会主任、瀋陽市南清真寺アホンである。

董事楊果英は、元黒竜江省宗教事務處處長と、黒竜江省イスラーム教協会副主任である。

董事哈吉（ハッジ）楊冠英は、遼寧省イスラーム教協会副主任、瀋陽市南清真寺アホンである。

董事滿敬恒は、吉林省イスラーム教協会副主任、長春清真寺アホンである。

董事楊福瑞は、遼寧省イスラーム教協会常務委員である。

---

<sup>205</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 258–259。(10月5日辽宁, 吉林, 黑龙江三省伊斯兰教协会派来沈阳参加了沈阳伊斯兰教经学院董事会成立会议。在会议上选举郑隆慧等7人组成董事会, 推举郑隆慧为董事长, 李鸿宾, 马延增阿訇为副董事长, 李鸿宾阿訇兼院长。第一次董事会决定: 1, 学院定名为沈阳伊斯兰教经学院; 2, 院址暂设南寺和原北寺两院内的部分房舍共23间; 3, 办学宗旨是培养政治上爱国, 拥护党的领导和社会主义制度, 具有相当文化知识和较高的宗教造诣的年轻的伊斯兰教职人员; 4, 正式决定学院由辽宁省伊斯兰教协会代管; 5, 通过了招生简章和各省名额分配。商定了考试科目为: 语文, 政治, 阿文, 宗教常识及历史, 地理等六科; 考试方法为统一命题, 统一答卷, 分头考试, 评分, 综合平衡录取。6, 聘任文化, 政治, 阿语及宗教课教师; 7, 商定经费按学生人数分担; 8, 于11月份在沈阳办一起为期一个月的在职阿訇培养班; 9, 委托辽宁省伊协协助制定教学大纲, 教学计划, 学生守则及管理制度等。)

董事趙永成は、遼寧省宗教事務局の退職幹部であり、瀋陽伊斯蘭教経学院成立後は顧問となった。

瀋陽伊斯蘭教経学院院務会は、瀋陽伊斯蘭教経学院董事会の閉会期間の管理機関である。その人員は院長、副院長と教務長とで構成される。

院長は李鴻賓であり、副院長は楊福瑞、楊冠英（1983 年－1985 年間）、趙宗仁（1985 年 10 月－1987 年 2 月）である。

瀋陽伊斯蘭教経学院を実際に運営する人員状況については、以下となる。

総人員は 14 人である。そのうち、6 人は編制内の人員であり、副院長 1 人、出納 1 人、教師 4 人、退職職員 8 人である。授業を実行する先生は、副院長の楊福瑞（宗教課程教員、1983 年 3 月－1989 年）、趙波（宗教課程教員、1987 年 10 月－1989 年）、趙康偉（宗教課程教員、1983 年 3 月－1989 年）、王洋（アラビア語課程教員、1987 年 10 月－1989 年）、齊小曇（アラビア語課程教員、1987 年 10 月－1989 年）や外部の 30 人の教師である。

以上は『瀋陽回族志』の中の瀋陽伊斯蘭教経学院に関するすべての記述である。瀋陽伊斯蘭教経学院の成立過程について、『瀋陽回族志』は、かなり詳細に記録していることになろう。この記録から汲み取れることとして、瀋陽伊斯蘭教経学院の成立は、回族自らが、イスラーム教育を実施しようとした回民小学と回民中学と違って、文化大革命以後の改革開放期に、中国における宗教全体の復興、あるいは宗教的自由を示す行動の 1 つとして、政府主導で設立されてものともいえる。

また、瀋陽伊斯蘭教経学院の場合、名前は瀋陽であるが、学校自体は東北三省のムスリムのために創立された宗教学校である。瀋陽に伊斯蘭教経学院を設立した理由について、公式的な発表は存在しなかった。しかし、1 つの推理として、瀋陽は中国東北三省の中で、政治、経済や軍事などの側面から見て、最も重要な都市の 1 つであり、また回族のコミュニティも存在していることが、設立の一要因となったと考えられる。

本節の最初に述べたように、現在の中国国内では 9 個の伊斯蘭教経学院が運営されている。これらの伊斯蘭教経学院は、基本的に、ムスリムコミュニティと関連する地域の中に設立されている。瀋陽伊斯蘭教経学院も設立当時、東北三省各省の省会（省の行政機関の所在地）の中に、遼寧省瀋陽市の「西関」回回営と吉林省長春市の長通路にある回族コミュニティという 2 つの回族コミュニティが存在した。だが、長春市ではなく、瀋陽市が選択された理由は、政治、経済や軍事以外の理由があるだろう。まず、かつての吉林省吉林市は、吉林地域の中心であったが、満洲国時代に新京が建設され、また 1954 年に中国吉林省が成立して以降、長春が吉林省の政治の中心となった。ここで、この地域の歴史全体を見ると、吉林市は吉林地域の中心となった時代が長かった。そのため、大都市に集住する傾向が強い回族も、吉林市の生活史が長かった。筆者は 2012 年に京都大学との共同調査で吉林市を調査した時に、当時の吉林市の中に 2 つの回族コミュニティが存在していることを確認した。確かに長春市には、かつて長通路に小さい回族のコミュニティが存在したが、調査当時には、土地開発のため、そのコミュニティはすでに瓦解していた。以上の状況から見ると、回族のコミュニティの存続は、瀋陽に伊斯蘭教経学院を設立することによって、1 つの必要条件だったと考えられる。

このように、『瀋陽回族志』は、瀋陽伊斯蘭教経学院の成立過程、および 80 年代の運営の一部分について記述しているが、1990 年代から現在に至るまでの状況については、空白

となっている。また、上述したように、瀋陽の伊斯蘭教経学院は、独自のホームページをもっていないし、中国伊斯蘭教経学院の総合ホームページには、瀋陽の伊斯蘭教経学院について、『瀋陽回族志』の記述の一部分しか引用されていないし、近年の学校に関する実質的な情報についても、記録されていない。

現在の瀋陽伊斯蘭教経学院の実態を検討するために、筆者は2010年3月、同年9月の2回、および2013年8月と2015年4月に瀋陽伊斯蘭教経学院を訪ねた。しかし、場所は判明したものの、そこに人の気配はなく、その場所で、どの建物が瀋陽伊斯蘭教経学院であるのかということすらも判らなかった。

それでも、回回営で収集した情報によると、現在の瀋陽伊斯蘭教経学院は、廃寺となった東寺の隣にあるかもしれないということであった。だがその場を訪ねると、そこにあったのは、漢族が経営する四川料理店であった。料理店の裏側には、瀋陽伊斯蘭教経学院と書かれた小さな看板が掛かった建物があった。筆者はその日、何度もこの建物を訪ねたが、学生も教員も誰一人としていなかった。こうして、現時点では、瀋陽伊斯蘭教経学院の近年の様子について、不明な点が多く残されたままである。

瀋陽伊斯蘭教経学院という政府の「公式的な」宗教学校の以外に、近年では南清真寺の中の女寺に、女性の郷老を中心とするイスラーム女学が存在している。次節は、この女学について、探してみる。

## 第5節 回族の女学

まず、回族の女学一般について、検討しておきたい。『中国のムスリムを知るための60章』の中で、近年の中国東部地域の回族の女学について多く研究されている松本ますみ氏は、以下のように説明している。<sup>206</sup>

イスラームはその教えのなかで男女隔離をうたう。地域のウラマー（イスラーム法学者）の解釈により、どのような場所で男女隔離をすべきかが決定される。……世界中でモスクやマドラサの多くからムスリマは排除されている。モスクには男性専用が多いからである。また、モスクでムスリム/ムスリマに対して説教ができるハティーブ（説教師）は男性に限られている。女性の礼拝が許されているモスクでも、女性はカーテンで仕切った狭い領域に押し込められるか、ハティーブの姿を遠くから臨むことしかできない二階の女性専用礼拝殿を割り当てられているケースが多い。モスクで女性の礼拝が禁止されている地域では、女性は家のなかのみで礼拝する。その理由として「イスラームの教えによれば、女性の重要な仕事は家事、育児、介護だ。家庭に目配りしなければならない以上、家のなかでの礼拝が一番合理的」といった説明がよくなされる。しかし、モスクは、仲間と会って情報交換をし、宗教心を高め、仲間意識を培う場でもある。女性が宗教活動すらも禁止され、家のなかに留め置かれるならば、彼女たちはどのように仲間を作るのか？あるいは、宗教知識をどのように獲得し子どもたちに伝えるのか。このような潜在的悩みを世界中の敬虔なムスリマたちはもち、女性専用のモスクやマドラサを持つことを望んでいる。

以上の記述のように、男女隔離をすべきイスラーム社会の中で、女性のためのモスクと

<sup>206</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 168—172。

いう発想が生じた。その中国の状況を松本氏は次のように述べる。<sup>207</sup>

中国には歴史的に女性専用のモスクやマドラサが存在する。それが、清真女寺と女学（中阿女学、清真女学、イスラーム女学、女校なども呼ばれる）である。清真女寺は、河南、河北、山東などのジャマアを中心に清代中期からつくられ始め、ムスリマのみが集う場所として現在に至っている。マリア・ジャショックと水鏡君はこのような世界史的にも稀有な現象が中国で起こった理由について、次のように述べる。第一に劉智が『天方典礼』に「婦道」を書き込み、イスラーム的女性観をつくったこと。第二に、中国のムスリムが中華世界で圧倒的な少数者であるゆえに、女性の手で宗教知識が家庭内に入り、その結果家人がモスクに通って宗教振興することを男性が期待したこと。第三に、仏教、道教など多文化多宗教が交差する社会環境にあったこと、である。

このような清真女寺は、現在でも多くが女性のみで運営される。女性が礼拝で宗教心を確かめる場、アラビア語と漢語の識字や宗教知識を得る場であるとともに、女同士のおしゃべりで悩みを打ち明けたり励ましあったりする「居場所」といった複合的な役割を持っている。現在、世俗化の波は中国の回族社会でも深刻である。女寺や女学で宗教知識を学んだ女性は家庭で家族にムスリムとしていかに生きるべきかを伝えることができる。すなわち、女性の宗教教育とは家族、ジャマアの宗教教育、ひいては宗教的エスニシティである回族の存続ともつながっていると考えているムスリムは多い。だからこそ、家人は女寺や女学に家庭の主婦が通うことを勧めるのである。

以上の叙述からわかるのは、中東、中亜と違って、中国という特別の社会で、女性だけに向けられているイスラーム社会の形成が、回族存続そのものに関わり、非常に重要な役割を女学が果たしつつあるという研究成果である。さらに、現在の中国東部・沿海部で、ムスリマは以下のように、イスラームの女性社会を展開しているという。<sup>208</sup>

清真女寺も女学も、女性が男性の目を気にせず沐浴し礼拝し、ともに学ぶ場所、という点からすれば共通している。西北や西南ではまだまだ清真女寺の数は少ないが、しかし、その代替場所として女学がある。いずれも、女性の能動性を高める場所、神が女性という属性を与えた恩寵を確かめ、ムスリマとして生きる意義を確認しあう場所という意義がある。神が預言者に啓示を下した言語であるアラビア語はムスリム/ムスリマであれば必ず学ぶべきというのがイスラームの考え方である。その学んだアラビア語能力がたまたま「世界工場」となった中国で通商業務に実利的に役に立つということがわかり、彼女たちはアラビア語通訳をやっている。しかし、イスラームを学んだ彼女たちは金銭的なことよりも、やはり精神的なことに重きを置きたいという思いが強い。従って、たとえば通商業務で一定の安定した収入を得ていても、それを捨ててムスリムらしさを育てる幼稚園をつくったり、女性のためのアラビア語学習班をつくったりという人たちが出ている。食欲でない資本主義のありかたや女性のエンパワーメントを考えるうえで、清真女寺と女学で礼拝し倫理性とともに実利をもたらすアラビア語とイスラームを学ぶムスリマたちは世界史的にも重要な位置にいるといえよう。

<sup>207</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 168—172。

<sup>208</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 168—172。

以上、松本氏の考察を通じて、中国におけるムスリマ社会の構造、およびその一部分の重要性を認識することができる。現在の中国のムスリマは、イスラーム教育とアラビア語を通じて、経済的に自己達成し、中国のイスラームを伝承する役割も同時に果しているという、大変示唆的な指摘であると考える。

それでは、瀋陽の回回宮の中で、このようなイスラーム女学はどのように機能しているのか。この問題意識を筆者自身も早くから持っており、2010年3月、9月に、瀋陽の南清真寺内に存在する女性を対象としたアラビア語の学習クラスでフィールドワークを行った。

調査の結果として、当時、このクラスは、毎週土曜日に授業を実施していることがわかった。クラスの教師を務めているのは、西北地域出身の1人の女性アホンと内モンゴル出身の1人の伝教士であった。学生は、10数名で、50代以上の女性を中心としていた。筆者は男性であるため、直接に授業を受けることが出来なかったが、後に参加者へのインタビューを行って、いくつかのことが判明した。まず、このクラスは主に、アラビア語を中心とするクラスであり、宗教知識を少し教えることもあるという。また、アラビア語の教師は、南清真寺の女性アホンであり、宗教知識を教えているのは、内モンゴルから来た回族の伝教士である。さらに、この授業は南清真寺とは直接の関係がなく、基本的に南清真寺で礼拝する女性による、自発的なクラスであり、無論、授業料なども一切にない。しかし、授業の内容について、学生の多くは、50歳代以上の人であるため、アラビア語の学習が非常に大変である。一方、イスラーム宗教知識の学習は、主に身近な生活との関わりが緊密であるため、非常に役に立つようであった。

2010年のフィールドワーク後に、このクラスに様々な変動があったと、後の調査の時に聞き込んだため、2015年3月20日に、再びこのクラスに対して調査を行った。丁度その日は、そのクラスの新しい学期の始業式であった。その当時の内容について、筆者は以下のように記録した。

#### 2015年イスラーム基礎知識「勉強組」開学典礼

司会者 朱アホン

1. 最初に、趙アホンと馬アホンは、Dua（祈り）を行った。

2. 清真寺管理委员会主任の祝辞

3. 時間の変更 以前（金）14:00～15:30

以後（土）13:30～15:00

4. 講師について

朱アホン、趙アホン、馬アホン、李アホン（女性）

5. 馬アホンの授業の方向

馬アホンの授業は、イスラーム家庭教育を中心とする。

6. 趙アホンの授業の方向

趙アホンの授業は、礼拝などのことを中心とする。

7. 李アホンの授業の方向

李アホンの授業は、クルアーン、アラビア語アルファベットや礼拝のやり方などを中心とする。

また、李アホンは、このクラス以外に、火曜日の13:00から、女子だけのクラスも実施する。

8. 朱アホンの授業の方向と教科書の説明

朱アホンの授業は、イスラームの道徳を中心とする。このクラスが使う教科書は、トルコと中国宗教局が共同編纂したものである。

以上の観察を通じて、瀋陽における女学の新たな状況について、一層深く考察することができた。まず、注目すべきことに、2010年当時の女学クラスは、土曜日の男女共同のクラスと火曜日の女性だけのクラスという2つのクラスへ発展していた。また、かつての授業は、女性の李アホンだけに頼っていたが、現在は、南清真寺の男性のアホンも協力するようになった。さらに、正式な教科書も使えるようになった。

こうして、松本ますみ氏が調査された中国東部・沿海部のムスリマの学校が、家族から地域へと影響を広めつつあることと比べて、瀋陽のムスリマの女学は、そこまで影響力はないものの、クラスの発展から見ると、少しずつでも瀋陽回回営のイスラーム学習に影響していくであろう。また、前節で考察した瀋陽伊斯蘭教経学院という極めて「神秘的な存在」と違って、瀋陽のムスリマの女学は、民間の一般人も受け入れるため、教育組織、あるいは教育機関として、その役目を積極的に果している。

このように、女学はもはや一隅のムスリマのためのものにとどまらず、男性、一般信徒、そして地域全体に、またそれを通じて各家庭にも影響を及ぼしていく姿をみることができるのである。

## 章結

まず、本章第1節「経堂教育」は、かつての回民教育である「経堂教育」の概像について考察し、そこから、瀋陽の経堂教育の歴史を整理した。

第2節「回民小学」では、『瀋陽文史資料第八輯』、『瀋陽回族志』、および『満鉄調査資料26』の「満洲における回々教」などの歴史資料を利用し、またフィールドワークを援用することで、瀋陽回回営内に現存する回民小学について考察した。

第3節「回民中学」では、『瀋陽回族志』を中心に利用し、また、瀋陽の回民中学創立者である張子文氏の息子張巨齡の記述と証言も援用し、瀋陽に現存する回民中学について考察した。

第2節と第3節では、瀋陽市内に現存する2つの回族学校の歴史と現状を検証した結果として、まず、イスラーム宗教教育や回民文化を伝承するために、回族学校の創立には回民の具体的な協力や優秀な教育家などが必要であったことが確認された。また、両学校の比較を通じて、現地の回族の協力は極めて重要であり、回回営との連動性も必要であることが明らかになった。さらに、満洲国時代における満洲地域の研究を行う際に、日本側の資料を用いることの必要性を確認した。実際、今回の考察で使用した満鉄資料は、瀋陽における回族研究に初めて応用され、それによって満洲国時代を中心とする回族コミュニティにおける研究の空白を埋めることができた。

第4節「瀋陽伊斯蘭教経学院」は、中国政府によって許可された9つのイスラーム教教育機関の中の1つ、中国東北地域で唯一のイスラーム教教育機関である瀋陽伊斯蘭経学院の歴史と現状を考察した。その結果、瀋陽伊斯蘭経学院の設立過程は判明したが、様々な政治状況の下で、現状については非常に不明確な部分が多く残されたままである。

最後の第5節「回族の女学」は、イスラーム女性教育を中心として、これまでに考察さ

れた公的教育機関と違って、民間あるいは家庭教育のような宗教・民族の教育を考察した。結果として、瀋陽市で実施されている回族の女学は、中国の東部、沿海部や西北部の女学と比べると、水準や安定性が不足であるが、これからの回回営にとって、回族アイデンティティ、伝統と文化の伝承、および家庭・社会におけるイスラーム教育に対して、無視することができない影響を持つことが明らかとなった。

本章では、回回営を中心として、瀋陽の回族教育の変容を考察した。第1章と第2章で検討したように、瀋陽の回回営にとって、最も重要な要素は、民族の教育と並んで、商業施設である。次章は、瀋陽回回営の回族の商業施設について、考察する。

## 第4章 瀋陽市回回営の商業

回民、とりわけ瀋陽の回民にとって欠かすことのできない伝統的な生業が商業であることは、本稿の第2章「瀋陽の回回営の形成と発展」で瀋陽回回営内の歴史を振り返ることによっても明らかとなった。そこで本章では、中華民国期以降における回回営内の商業施設の歴史と運営実態を解明し、これらの商業施設が現在の回回営に対して持つ意義を掘り起こしたい。

### 第1節 瀋陽回回営の商業活動

回族だけではなく、中国のムスリムの商業は、個人的なネットワークをもって運営されるのが一般的である。瀋陽の回回営内の商業概像を考察する前に、中国ムスリムのネットワークの構造を検討してみる。まず、『中国のムスリムを知るための60章』は、中国ムスリムのネットワークについて、以下のように紹介している。

清真寺をむすぶネットワーク<sup>209</sup>

中国各地にちらばる清真寺やメスチトはそれぞれが独立した関係にあるとされている。中国ムスリムの慣例として、あるモスクがほかのモスクの年中行事や人事異動に干渉することはない。中国の宗教政策においても相互不干渉の原則が提唱されている。ところが、実際には、私たち外部者には見えづらい個人的ネットワークがモスクのあいだに張りめぐらされている。つまり、一見したところ、相互に無関係に見えるモスクは、宗教指導者や寄宿学生が清真寺内外に形成する師弟関係や友人関係などの個人的ネットワークによって結びつけられている。……

中国ムスリム全体を見ると、清真寺を結びつける個人的ネットワークは、個人間の二者関係の連鎖によって形成されるため、必ずしも強固で持続的なものであるとはかぎらない。つまり、個人を媒介としたネットワークは、個々人が共通の属性（たとえば、出身地、年齢、教派など）や利害関係を契機としてごく簡単に形成される一方、個人間のささいな矛盾や衝突をきっかけとしてすぐさま解消されやすい。たとえば、宗教指導者の場合、大多数が清真寺の外部から招聘される「よそ者」であり、清真寺の中の地位・役割関係では意外にも不安定な立場にある。現在、都市部の場合、清真寺に寄宿しようとする若者が非常に少なく、清真寺では地元出身の宗教指導者をなかなか輩出できない状態にある。こうした傾向が宗教指導者の「異人性」を際立たせることになっている。ここまで紹介したように宗教指導者や寄宿学生がつむぎだす個人的ネットワークは、清真寺間の絶え間ない移動に伴って伸縮自在に拡大する一方、個人的な利害や事情によっていとも簡単に切断されることもある。こうした相反する特徴を備えながらも、宗教指導者と寄宿学生は中国各地に個人ネットワークを張り巡らし、かつ、ジャマアを相互に結びつけているのである。

以上は、中国のムスリムの宗教的ネットワークの基本状況を紹介している。実際に、中国のムスリム社会は、以上のようなネットワークを通じて、商業活動を活発に行っていると考えられる。その例を現在の上海に見よう。

筆者は上海の回族の社会構造を知りたいと考えて、2009年から2012年の間に毎年2回上海にて参与調査を行った。その結果、調査当時の上海市には、外から見えるような回族

<sup>209</sup> 中国ムスリム研究会編 2012, pp. 322—326。



のコミュニティは存在しなかったが、複雑な内的ネットワークが存在していることは明らかだった。上海市内に生活する回族は、主に福佑路清真寺、小桃園清真寺、清真女寺、滬西清真寺、江湾清真寺や浦東清真寺などの清真寺（モスク）を利用している。その中には、上海戸籍の回族もいるが、殆どの回族は、上海以外の地域からの出稼ぎ労働者であった。そのため上海市市内の回族のネットワークは、非常に複雑である。同じ出身地の回族で結成されたネットワークがあり、中国イスラームの各教派の回族で結成されたネットワークがあり、よく利用する清真寺で結成されたネットワークもある。また、中国国内のほかのイスラーム系の少数民族との間に形成されたネットワークと、国際的な大都市である上海で生活している外国ムスリムとの間に形成されたネットワークがある。さらに、それぞれのネットワーク間の繋がりによって、更なる莫大なネットワークが形成されている。上海という商業都市の中で、ムスリム社会の本来の姿でもあるこうした人的なネットワークは、宗教生活の他に、多くの商業活動に利用されていることは疑いのないところである。

筆者はまた、瀋陽でも2009年から2015年までの間に回回営内の商業活動を調査し、回族の人的・民族的・宗教的・商業的なネットワークについて考察を行った。その結果をまとめて見ると、瀋陽回回営内の人的ネットワークは、遼寧省外部には広がっておらず、回回営に居住する回族の社会的結合の原理は、主に親族の間で構成されていた。また、回回営内の各イスラーム系の中国少数民族の間には、独自のネットワークが存在するが、ほかの民族との交流は極めて少ない。例えば、瀋陽で生活するウイグル族の間に、ウイグル族のネットワークがあり、サラル族の間に、サラル族のネットワークがある。しかし現時点では、回族、ウイグル族とサラル族は、他の民族のネットワークを利用することが少なく、殆ど自民族のネットワークを利用して宗教的、商業的な活動をする。

瀋陽回回営と関連する宗教的ネットワークも、瀋陽市内にのみ留まっている。筆者は2012年8月に、瀋陽市と隣接する本溪市火連寨の清真寺や、瀋陽市から少し離れたかつて満鉄最大の大豆倉庫があった開原の老城清真寺など、いくつかの清真寺でフィールドワークを実施した結果、これらの清真寺は瀋陽市と同じ遼寧省伊斯蘭教協会（イスラーム教協会）に属するが、瀋陽回回営の清真寺（南清真寺）との間に、殆ど往来がない状況であることを確認した。

ついで、瀋陽回回営の商業的ネットワークについて見てみよう。中華人民共和国成立の前に、回回営の人は、内モンゴルの海拉爾（ハイラル）地域から牛羊を買取ることがあり、時が進んで改革開放後にも、海拉爾、開原や西豊などの地域との牛羊売買が続いた。だが、近年は衛生管理のため、瀋陽回回営内で販売される肉は瀋陽市に属する清真肉（ハラール肉）の工場から入荷しなければならないことになり、そのため、回回営とほかの地域との商業的ネットワークは、殆ど存在しなくなった。人の動きをみると、2000年以後、中国の急速な発展とともに、瀋陽回族は、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区や雲南などの地域の清真寺へ、見学に行くようになった（中国のムスリムは他の地域のムスリムコミュニティを見学することを「出ジャマーアティ」という。すなわち、自分のジャマーアティから出て、他の地域に見学することである）。だがその内実は観光目的が中心であり、ネットワーク形成というレベルには達していない。実際の回回営の宗教活動や商業活動などの広がりとはそれほど活発ではなかった。

中国の他地域の回族ネットワークと違って、中華人民共和国成立前から瀋陽回回営の商

業の生命線は、基本的に現地での商業活動に頼るしかないものであったと言えよう。『瀋陽回族志』は、1910年から中華人民共和国の初期までの瀋陽回回営の商業活動について、以下のように記録している。

宣統二年（1910年）の統計資料によると、瀋陽回民の小売業等の自営業人口は1704人であり、職を持つ回民人口の89%を占め、工人は2.6%しかない。中華人民共和国成立初期、企業に就職する人口は回族総人口の13%を占め、小売業を経営する人は74%であった<sup>210</sup>。

以上の記録で、瀋陽回族の経済生活の状況がわかる。瀋陽の回族は、基本的に小売業で生計を立てて来たことは間違いのないところである。

また、『瀋陽回族志』（1996年）の「民族経済」という章では、瀋陽回族の経済を「農業経済」と「都市経済」とに分けて記録している。まず、瀋陽の農業経済については、以下のように書かれている。

#### 農業経済<sup>211</sup>

瀋陽回族のうち、約2万人前後は、瀋陽市外の2県（新民県と遼中県）と4区（蘇家屯区、東陵区、新城子区と于洪区）に居住している。牛羊販売という商業活動を中心とした回族は、現地の農民より少し豊かであったが、「文革」の影響で、すぐに貧しくなった。例えば、遼中県老達房郷の腰街、老観、老達房と古城子の4つの回族村の回族は、1986年の平均収入が44、25、12と0元であった。4つの村の426戸の回族の中で、20戸のみ借金がなかった。その他の406戸の半分以上の借金で、500元から2000元であった。「文革」後の中国共産党第十一届中央委員会第三次全体会議を経て、農村の回族の生活水準は改善しつつある。その中で、農村の回族を料理人として育成し、その後、都市へ送り、都市の労働力とするのが1つの方法である。

以上、瀋陽周辺の農村で生活する回族の経済生活の記録から見ると、彼らの経済活動は「農業経済」とは言い難く、牛羊を販売する商業活動という傾向が強かった。また、個人の商業活動が絶対的に禁止された文革期に、瀋陽周辺の農村で生活する回族の収入の最小が0元であることから見ると、現地の回族は、殆ど農業を生業としない傾向があったか、あるいは自給自足的な生活さえあったと考えられる。

一方、瀋陽の回族の「都市経済」については、以下のように記録されている。

#### 都市経済<sup>212</sup>

中華人民共和国成立前に、瀋陽市内に在住する回族は、瀋陽市回族総人口の2/3を占めた。その経済活動は、殆ど牛羊販売を中心とした。

『瀋陽回族志』の中に記録されている当時の有名な店、および店に関する主な情報を整

<sup>210</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 172。

<sup>211</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 153—154。

<sup>212</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 154—158。

理してみると、表 11 のようになる。

表 11「中華人民共和国成立以前の瀋陽回回営の牛羊に関する産業の有名店一覧表」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

店舗名	経営者	経営項目
吉興東	馬龍香	牛の飼養・販売
吉盛東	馬維良	牛の飼養・販売
宝利祥	楊建国	牛の飼養・販売
米家店	米禄豊	牛の飼養・販売
興順園	朱紹義	牛の飼養・販売
	李佐林	肉の卸売り
	楊隆興	肉の卸売り
	郭啓金	肉の卸売り
	馮遠祥	肉の卸売り
	張洪恩	牛革業
	王樹文	牛革業
	張守宏	牛革業
	張守本	牛革業
	張恩久	牛革業
永順徳	張明恵	牛革業（店持ち）
		牛骨膠業
	胡家	牛骨膠業
二合成	金家	牛骨膠業
洪泰祥骨膠場		牛骨膠業
	馬家	石鹼場（場所：転神廟）
	馮子澤	製皮工場
	索家	弓屋
	黒家	鞭屋
	楊発威	馬具屋

同じ資料によると、中華人民共和国成立前において、瀋陽の回族の大半は、市内に居住し、彼らの生計は、主に牛羊と関連する産業であった。また、表 11 からわかるように、当時の回族にあっては、牛販売、牛革、牛羊肉や牛骨膠などの商業活動が目立つ。

また、『瀋陽回族志』は牛羊関連以外の中小型商業を記録している。それを、以下の表 12 にまとめた。

表 12「中華人民共和国成立以前の瀋陽回回営の牛羊産業以外の中小型商業一覧表」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

店舗名	経営者	経営項目
-----	-----	------

華盛東	經理:劉盛田、王興洲	菓子工場:飴(軟性飴、ピーナツ飴)と干し果物を中心として、名物はビーフジャーキー
運來興		文具屋(印刷品や文具などの販売):店の前の部分は販売店であり、文具屋の後部は工場である。
華光印刷場	經理:楊岱芳	印刷品
王蜡鋪	王全順	家庭用蠟
林記茶莊	白全林	茶
義和興香油坊	白金林	ごま油
広順興	經理:楊沛凱	清光緒年間起業、中華人民共和国成立まで営業。経営範囲:ごま油、回族菓子。
信一百貨商店	楊進之	奉天第一商場内、百貨。
大陸水果店	經理:王君璽	氷菓子、電化設備で製造
大有水果店	經理:脱朝有	氷菓子、電化設備で製造
園龍水果店	經理:馮永孚	氷菓子、電化設備で製造

『瀋陽回族志』は、回回営の中に回民の大型企業も存在していたことを記録している。

以上の商業以外に、当時の中国社会には、回民の大型企業も存在した。

瀋陽の回回営の中に、銭湯がいくつか存在した。まず、成立年代が最も早いのは、脏庵胡同の「莫家塘子」という銭湯である。後に、馬家の「益中華」という銭湯も、小西門の中で開業した。しかし、回回営の中で最も有名なのは、馮一族の「馮家塘子」という銭湯である。「馮家塘子」は清光緒十年(1891年)に、回民馮起功がはじめた。牛革業で起業した馮起功は、後に「広」という頭文字を使った8つの商号(現地で通称「八大広」)を経営するようになった。彼の店の興隆とともに、瀋陽以外から来る客も多くなり、この状況に対応するために、南清真寺の向こう側に、「馮家塘子」を建造した。同時に、彼の息子である馮永彩、馮永銘を「馮家塘子」の經理として任命した。この銭湯は、シャワー室と風呂場のほかに、回民のためのシャワー室も備えていた。この「馮家塘子」は、周辺の民衆にとって、重要な生活要素であっただけではなく、リラックスするための空間にもなった。こうして、市の行政部門はこの街路を、「馮家塘子胡同」と命名した。ちなみに、この銭湯は1920年代までに経営された。

「馮家塘子」の他、劉化南兄弟の振興鉄工場も回回営にとって、重要な企業であった。劉化南の原籍は、河南省霸県である。1936年に、彼は瀋陽(当時奉天)の軽工業型の私営企業で、3年間の学生生活を送った。その後の1941年に、彼は兄弟3人の資金で、振興鉄工場を創建した。1942年に、工人を雇用し、様々な中型生産設備を製造するようになった。1956年まで経営し、その後、工場は国有化された。

以上のように、瀋陽の回回営には、多様な中小型企業があったし、また、町の名前にまで影響する大型企業もあった。満洲国時代に、鉄を製造する工場まで出来上がっていたのである。しかし、有名な牛羊業、中小型企業や大型企業施設などの存在にもかかわらず、瀋陽回回営内の商業活動は、主に小売業と飲食店業を中心としていたことに変わりはない。

った。

以下、『瀋陽回族志』にもとづいて、回回営内の主要な小売業の売店を検討する。

表 13「中華人民共和国成立以前の瀋陽回回営の小売業一部分一覧表」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

売店名	経営者	経営項目
潤記	哈家	飴、京糕（お菓子の一種）
哈記		韭菜花（ニラの調味料）
	馮氏	入丹糖
	脱家	切糕（餡入り餅）
	于鳳閣	切糕
蜂糕楊家		蜂糕（餅の一種）
楊餅子鋪		ナンの一種
劉焼餅鋪		ナンの一種
	姜富財	ごみ処理
	朱紹元	ごみ処理
	頤家	米
	于家	米
	王家	蠟
	王家	野菜販売
	索家	野菜販売
	鉄家	野菜販売
	趙家	野菜販売
	劉家	野菜販売
	楊家	野菜販売
	于家	野菜販売
	左家	野菜販売
	石家	野菜販売
	張家 1	野菜販売
	張家 2	野菜販売

また、以上の小売店以外の飲食店は次のようにまとめられる。

表 14「中華人民共和国成立以前の瀋陽回回営の飲食店<sup>213</sup>一覧表」(『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成)

店舗名	経営者	主な経営項目
馬家焼麦	馬氏	焼麦
王家餃子館	王氏	餃子
于家攪面餡餅館	于氏	餡餅
林家包子鋪	林氏	包子
鉄家館	鉄氏	炖牛肉
慶仙樓		八宝飯
双發館		焼羊尾
恩徳園		爆肚、扒肉条
二酉軒		全羊席
平心館		羊湯、花卷
清真館		炖肉
	米家	油茶面
	楊家	大餅
	鉄家	煎餅果子
	王家	片粉
	王景文	碗坨
	劉家	切糕
	馮家	五花糕
	李家	冰糕
	楊家	麻醬焼餅
	楊家	蜂糕
	楊家	秫米面餅子
	王玉凱	抻面
	張家	油揚糕
	白鳳鳴	羊肚羊肝
	馬三	元宵
	楊胖子	漿汁果子
	王家	涼糕
	李家	豆腐腦
	金家	豆包
	楊家	蜜果
	于家	牛蹄筋
	王徳瑞	鮮貨床
京糕王		京糕
	銭家	牛肉干

<sup>213</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 158—165。

表 13 と表 14 から見ると、中華人民共和国成立以前の瀋陽回回営内の小売業と飲食店について、種類が多く存在し、特に、飲食業が非常に盛んであったことがわかれると見られる。しかし、多くの店は、店名もないところから見ると、恐らく多くの店の規模が小さく、回回営内に散在していたものと想像される。

以上のような店の存在形態に対して、回回営では商業活動の可能性を探索し、回回営の存続を支える集団化した商店街、あるいは大型商業施設を形成するようになっていく。そのような商業施設について、『瀋陽回族志』は、以下のように記している。

清末道光の末期、奉天城の西城門外に、多くの手工業の小さい作業場が集まった。その南側は大道芸人や生活雑用品の市場である。そのあたりは、「雑巴地」と呼ばれた。また、奉天城は、城内の城壁を「順城」と呼び、城外の部分は「門臉」と呼ぶ。こうして、この場所の別称は、「西門臉雑巴地」という。ここで最も有名な店は「白茶館」という所である。

白茶館：白氏の祖先は、山東済陽県であり、清末に山海関に移住した。その後、第三代の白宝忱は清の中期に、瀋陽に移住し、「西門臉」でお茶屋（当時は屋台）を経営し始めた。当時、漢民は回民、あるいは清真教門人を「老表」や「大把」と呼んだので、「西門臉」周辺の住民や常連客は、白茶館の主人を「白老表」、「白三把」と呼んだ。当時、白茶館の主人は、常に周辺の貧しい人を救済し、様々な問題を解決したため、民衆は白茶館に「難舎難離的西門臉、救苦救難の白茶館（離れられないのは西門臉、苦難を救う白茶館）」という褒める言葉で賞賛した。屋台から店を構えることになるのは、光緒年間である。その時の茶館の主人は、白家四世の白祺三である。「西のメッカに向く」ために、店の入り口は東側にある。また、当時の社会状況は非常に不安定であり、時折チンピラなどの危険人物や悪質な警察官などが、「西門臉」で「慰謝料」を強要した。しかし、白祺三は武術の達人であり、回民だけではなく、周辺の殆どの貧しい民衆を守ろうとした。こうして、一時的に安定した「西門臉雑巴地」はさらに商売人を集めるようになった。例えば、今も瀋陽に存在する（筆者注：瀋陽市の非物質文化遺産の 1 つである）馬家焼麦は其の 1 つである。

しかし、1925 年に、奉天市政府は大規模な土地改造を行った。「西門臉雑巴地」はその取り締まる対象の 1 つとなり、多くの貧しい小売業者は失業した。

その後、回民馬汝林は回民の生計を解決するために、回回営内、「西門臉雑巴地」とあまり離れない自分の土地に、「興遊園」という商業施設を設立した。

上の記録によると、清末の時に、奉天城の西側に「西門臉雑巴地」という小売業や飲食店業を中心とする商業地域、あるいは商業集団が形成されつつあったが、1925 年の政府の都市開発で、「西門臉雑巴地」は終焉を迎えた。その後、回回営の回民馬汝林は、回民の生計を解決するため、「西門臉雑巴地」と隣接する自分の土地に、「興遊園」という商業施設を創建した。

当時の興遊園内にあった主な商店について、『瀋陽回族志』は、以下のように記録している。

表 15 「興遊園内の店一覧」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

店舗名	経営者	主な経営項目
-----	-----	--------

林家包子	林柏松	起摺包子
張記饅饅		饅饅
	白国珍	抻面
	王玉凱	抻面
	王景文（王羅鍋）	碗坨（西門臉から来た）
	楊發林	碗坨（西門臉から来た）
	王景元	涼粉、悶子
	鉄有恒（父）鉄玉久（子）	煎餅果子（西門臉から来た）
	王景龍	片粉（場所、王記餃子館前）
	劉氏	切糕
	馮永明	五花糕（場所、王記餃子館西）
楊家焼餅舗	楊家	焼餅
	劉家	火勺
	黒家	火勺
	楊景文	肉鹵大餅
	張六	肉鹵大餅
	周鳳金	筋餅、豆腐腦
	王記	素烩煎餅
	楊氏	蜂糕
	馮家	卷切糕、涼糕
	脱二黒	油揚糕
	馬三	元宵
	楊家	蜜果
	金家	豆包
	馬家	散頭
	頤家	糖合面
	李家	冰糕（手巻）、冰碗、冰酪

こうして、回回営の商店は、興遊園という狭い地域に集中し、すなわち集団化する傾向が強くなった。しかし、以下の表 16 で示すように、回回営内では逆に、興遊園以外の店が激減した。

表 16 「回回営内、興遊園以外の回民菓子屋」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

店名	経営者	場所
義和興	楊克振	小西関街上
広順興	楊家	南清真寺東側
瑞華興	趙家	東街電車道
張家果鮮舗	張	東清真寺胡同



以上のような小型商店とは別に、大型飲食店を見てみると、それは奉天城内部のほか、城外の回回営や興遊園にも築かれていったことがわかる。

表 17「興遊園成立初期の奉天城内および城外回回営周辺の大型飲食店リスト」（『瀋陽回族志』のデータにより筆者作成）

店名	経営者	場所	成立年代	事件
慶仙楼	李氏（通称「李二爺」）	奉天城内、鼓楼南軍属大街路南（連奉浴池対過）	清代	張作霖はこの常連客である。また、彼は此处で、綏遠都統馬福祥（回民）を招待することがあった。
恩徳園	投資者は賈氏（通称「賈二爺」）であり、管理者は胡萬閣である。	奉天城内西華門北路東、二階の建物。	1940 年	投資者である賈氏は自動車を経営したが、あまり営業がよくなかったため、慶仙楼の徒弟であった胡萬閣を雇用した。後に、賈氏はかつての慶仙楼の料理人などの人員を雇用した。
二酉軒	投資者：紀曉嵐	奉天城内西華門北路東	乾隆年間	紀曉嵐は清朝で有名な学者であり、礼部尚書、協辦大学士、加太子太保や四庫全書の総纂官を同時に務めた。一時的に瀋陽で生活し、瀋陽から離れる時に、自分の住宅管理人に 500 両の銀を与えた。年数を経て、管理費が殆どなくなった時に、管理人（回民）は資金再生のために、「二酉軒」という店を創業した。「二酉軒」は紀曉嵐の書齋の名に因む。この店の閉店年代は不祥。
二酉軒回民飯荘	初代：任立山 二代：楊榮昇	二酉軒旧址の近く	1913 年	慶仙楼の徒弟であった任立山は、二酉軒の物語に従って、同地で、二酉軒回民飯荘を創建した。同時に、彼はこの店の料理長であった。後に、彼は慶仙楼の徒弟であった楊登福と石岩松を雇用した。こうして、二酉軒回民飯荘と慶仙楼の料理の流派は同じであり、味も近い。創建初期は平層の店舗であったが、後に二階建になった。  1943 年に、任立山は店を店の徒弟であった楊榮昇に譲った。楊榮昇は、かつての三倍の面積まで店を拡大した。
義和園	于和齋	奉天城外西門臉雜巴地	清末民初	1925 年に、「于家館」に改名した。

于家館	于鳳祥（店長） 于鳳瑞（副店長）	奉天城外興遊園 （白茶館南、園内中央部分）	1926 年	店の料理長は于鳳祥であり、点心の料理師は于鳳瑞である。店の規模は 7 テーブル席前後。店員は哈氏である。
馬家焼麦	初代：馬春 二代：馬広元	初期：奉天城内（屋台）、中期：小西城門欄馬牆、奉天城外興遊園など、現在：瀋陽市内	清嘉慶元年（1796 年）	初代の馬春は、奉天城内で 30 年間経営。清道光八年（1882 年）に、二代店主の馬広元（馬春の息子）は、城内の小西城門欄馬牆で店として経営するようになった。清光緒時代に、奉天総兵である左宝貴は奉天城改造の責任者となった。馬家焼麦の店はその改造対象である。こうして、左宝貴はこの技術を伝承するために、近隣の土地を馬家焼麦に与えた。
王家餃子館	王永財・王永慶	奉天城外興遊園	1926 年	1926 年に、王永財（兄）、王永慶（弟）兄弟が興遊園内で王家餃子館を創業した。中華人民共和国成立後、弟がなくなり、兄である王永財は 1980 年までに経営し続けた。1980 年以後、彼は店を長子の王振江と長孫の王巖に与えた。

これまでの記録を取りまとめてみると、中華人民共和国成立以前の回回営では、表 11～表 14 から伺えるように商業活動は拡散していたようだが、興遊園の設立以降くらいから、回回営の中の商業活動は集中化、集団化する傾向が強くなったといえる。

中華人民共和国成立後から改革開放政策を実施するまでの間、中国の経済政策は計画経済であり、そのため、基本的に私営企業は認められなかった。瀋陽回回営の回族は、私有商業活動を行う慣習や伝統があったものの、国家政策に逆らうことはできない。こうして『瀋陽回族志』は、中華人民共和国成立後から改革開放政策を実施するまでの回回営、および回回営周辺の回族飲食店について、以下のように記録している。<sup>214</sup>

中華人民共和国成立後、瀋陽市内の回族飲食店は、殆ど国営化された。その結果、文化大革命までに、恵工飯店、馬焼麦、勝記号、北洋飯店、瀋陽飯店の回民部、二合永、三盛軒と北行飯店などの回族の飲食店しか残されていなかった。

まず、国営化された代表的な飲食店としては、「馬家焼麦」が挙げられる。1956 年 7 月 4 日に、瀋陽市政府は、かつて奉天城小北城門里の「馬焼麦」を「回族独特風味馬焼麦」と考え、店を運営しはじめた。同時に、「馬家焼麦」の四代目「店主」である馬洪芸と彼の弟である馬銘卿を雇用した。改革開放後に、瀋陽市政府は「馬家焼麦」の五代目「店主」である馬繼庭を雇用した。

また、中華人民共和国が成立する前、鉄西区（当時は「新地号」と呼ばれた）で、鄭玉田と金玉柱は各自の回民料理店を持った。中華人民共和国成立後、2 人は鉄西区興順街小六路に「二合永回民

<sup>214</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 165－172。

飯店」という回民飲食店を開いた。「二合永」の意味は、「鄭玉田と金玉柱の2人は永遠に合作しつつある」という願望である。だが1956年に、「二合永回民飯店」の名のままで「公私合営（半公有化）」された。

さらに、瀋陽の和平区政府は、現地の回民料理店をまとめて、「味里郷回民飯店」という1つの国営の店を開店した。

一方、改革解放後になると、少数民族の生活状況は回復され、回族の飲食も少しずつ自由になり、多くの回族は自民族の飲食業を再生するために、料理店を回復するようになった。

まず、回族飲食の回復を代表する事例としては、瀋陽飯店の回民部が挙げられる。1976年に、瀋陽の南駅[筆者注:満洲国時代の奉天駅]の国営飲食店である瀋陽飯店は、瀋陽以外の地域から来た回族の飲食問題を解決するために、「瀋陽飯店回民部」を設置するようになった。

また、中華人民共和国が成立する前、奉天城の北口で、尹氏、朱氏と李氏がそれぞれ自分の回民料理店を営んでいた。1956年に、以上の飲食店は、「餃子王」という名の店に合併され、さらに国営化された。1988年に、「三盛軒回民飯店」に変身し、瀋陽市内の中大型飯店の1つとなった。ちなみに、店の法人代表は程文閣、経理は陳光（回族）である

さらに、1990年代以後から、回族の飲食店の資本が少し多くなり、中型以上の規模の飲食店は輩出ようになる。例えば、1990年に開業した「穆斯林餐厅」、1992年創設された「穆斯林水上樂園」や、皇姑区の「麦加美食城」や「鉄西穆斯林餐厅」などがあった。

以上を見ると、中華人民共和国成立後から改革開放期までの瀋陽回族の飲食業は、国営化されたが、改革開放直後に、回回営の回族は小売業や飲食業などを再興するように努力した。

一方、改革開放期を迎えるまで、回民の商業は上述のように国営化された他に、瀋陽市政府は、回回営の中に、いくつかの国営企業を設立した。例えば、1963年開設の瀋陽市国営回民食品廠はその1つである。

1963年7月1日に、政府は回回営で瀋陽市国営回民食品廠を設立した。土地使用面積は2,758平方メートル、建築面積は3,571平方メートル、生産工場の面積は2,170平方メートル。生産項目は、菓子、クッキー、飴や氷菓子など。年生産3,800トン、従業員226人、固定資産154万元。

また、改革開放後の1980年に、政府は回回営で「西関回民市場」を設立し、回族は間もなくここで商業活動を始めた。

1980年に、政府は回回営の中で、回族農貿市場を創建した。一時的に失った瀋陽回族の伝統的風味である王家餃子、林家包子、楊家大餅や金家餡餅なども復興することができるようになった。

ここまで、『瀋陽回族志』を主な情報源として、瀋陽回回営の商業の主な構造を考察した。その結果として明らかになったのは、1)中華人民共和国成立前に、瀋陽市、および瀋陽市周辺の回族は、牛羊と関連する商業を中心としたこと、2)かつての商業活動は、回回営地域を中心とする地域の中で散在したが、興遊園の成立前後から、回回営の商業活動の集合性が強くなったこと、3)中華人民共和国成立後に、回族の商業は一時的に国営化されたが、

改革開放後に回回営の商業も再開し、さらに、1980年代から再び集団化するようになったこと、である。

以上の資料からわかる事情を踏まえた上で、回回営の商業施設の歴史、構造や実態を一層具体的に解明するために、筆者は2015年に、近代の回回営内に存在していた商業施設、および商業団体の概略の像を求めた現地考察を試みた。インフォーマント（インフォーマントリスト<sup>215</sup>）からの聞き取り調査によると、近代の瀋陽回回営にあった商業施設と、現存する商業施設の総計は8つであり、これらの商業施設については、以下のように概述することができる。

### 1. 興遊園

興遊園の成立は、1925年前後であり、回回営に現存していない。かつての興遊園が存在した地域は、80年代までに「遊園里」という回民コミュニティ内の地名になった。（李氏1と哈氏の証言）

### 2. 奉天第一商場

奉天第一商場の成立年代は1926年前後であり、回回営に現存しない。商場の運営システムは現在の中国のスーパーの構造と似ている。（金氏1の証言）

### 3. 回民商店

回民商店の成立年代は1950年代であり、回回営に現存していない。瀋陽回回営の左一族、馮一族と楊一族のサダカ（喜捨）で、「回民合作社」を設立し、後に回民商店として運営するようになった。

215

名前	性別	年齢	仕事
李氏1	女性	83歳	街道管理職（工社）
哈氏	女性	66歳	毛糸場檔案管理員
馬氏1	男性	43歳	清真美食街内の店の経営者
馬氏2	女性	77歳	
王氏	男性	59歳	清真美食街内の店の経営者
楊氏	男性	61歳	工人
朱氏	男性		アホン
馬氏3	男性	83歳	興遊園内経営者（満洲国）、瀋陽市交通局（定年まで）
馬氏4	男性	72歳	荷役工（満洲国）、肉販売（現在）
お婆さんグループ	女性		注：西関回民市場前
李氏2	女性		回民社区書記（現在）
金氏1	男性	88歳	日本憲兵隊隊員（満洲国）
金氏2	男性	61歳	出版社の編集者、瀋陽市人民代表大会代表
喬氏	男性	30歳	デザイン会社社長
お爺さんグループ	男性		注：南清真寺前
劉氏	女性		回族小学校校長
白氏	男性		回民高校校長（教育専務）
馬氏5	男性		回民料理店店長

中華人民共和国成立後、政府が接収した。(金氏 1 の証言と『中国回族大辞典』)

#### 4. 二店 (回民商店二店)

二店の成立年代は 1950 年代であり、現存していない。店の場所は瀋陽回回営の東清真寺の周辺であり、店、回民劉孝豪のサダカで成立した。(複数インフォーマントの証言、80 年代の写真で証明)

#### 5. 職工商店

店の成立年代と場所は、不詳であり、回回営に現存していない。インタビューによると、3 つの説があった。清代か、ソ連か、日本人かの地下施設を利用し、店として運営されたという。

#### 6. 南寺商店

南寺商店の成立年代は民国 20 年 (1931 年) 前後であり、回回営に現存していない。(馬氏 3 の証言)

#### 7. 西関回民市場

西関回民市場は 1980 年代に「小西関回民市場」という名前の露天市場として成立し、1990 年前後、「西関回民市場」という室内の商店街に変身した。市場は現存している。

#### 8. 清真美食街

清真美食街の成立年代は 1993 年であり、旧東寺胡同で、回回営の回遷で形成された。美食街は、現存している。

以上のように、中華民国、満洲国、中国内戦や中華人民共和国といった一連の政治・社会の変化とともに、瀋陽回回営内の商業施設の概況を把握した。

以下においては、これら 8 つの商業施設を、興遊園 (および奉天第一商場)、「回民商店」 (および「二店」、「職工商店」、「南寺商店」) と、西関回民市場 (および清真美食街) という 3 つのまとまりとして、それらが時代を区分もしているという想定のもとで、各商業施設の歴史について、具体的に検討していきたい。

## 第 2 節 興遊園と奉天第一商場

### 第 1 項 研究の背景

筆者は 2015 年に、日本のイスラーム学術誌である『イスラーム世界』に、興遊園と奉天第一商場の成立年代および形成過程を検討し、「旧満洲国奉天市回回営の商業施設の形成過程：興遊園と奉天第一商場の事例分析」<sup>216</sup>というタイトルの査読論文を発表した。この論文の主な成果は、瀋陽回回営の商業活動の淵源である興遊園と奉天第一商場の歴史を掘り起こし、両商業施設の成立過程から、ムスリムの集住地区としての回回営の独自性を指摘できたことである。本節はその論文の中心的な部分を、必要な補綴を加えながら再述する。

### 第 2 項 奉天回回営内における商業施設の実像

これまでのところ、満洲国期のイスラーム研究に関して、中国で実施された研究は見当たらないが、日本では近年、少し展開を見せている。例えば、田島大輔<sup>217</sup>や澤井充生<sup>218</sup>な

<sup>216</sup> 金博諒 2015。

<sup>217</sup> 田島大輔 2009, pp. 63–85。

<sup>218</sup> 澤井充生 2013, pp. 55–86。澤井充生 2014, pp. 69–107。

どの研究を中心に、展開を見せている。これらの研究は、満洲国を中心とする満鉄、満蒙研究の中の回民研究とも言える。そこには、日本側の満鉄資料が豊富に利用されているという特色がある。一方、満洲国時代の回民の生活実態という、ごく基礎的な研究については、記録が乏しいため、極めて立ち遅れた状況にある。現在のところ、満鉄調査資料第26篇『支那回教徒の研究』の中の「満洲に於ける回回教」（1924）には、中国イスラームの伝来のほかに、満洲国成立直前の満洲に設立されたいくつかの清真小学校の記録がある。しかし、それは満洲内のイスラームの記録であるという意味で資料的価値が高いが、回民の集住地区の構造、宗教生活や商業生活などの実像に迫る記録はまったくといってよいほど手薄なのである。

旧満洲に、奉天の回回営における商業活動および商業施設はどのような実態におかれていたのかという設問にこたえるため、様々な側面から満鉄資料を探索してきた中で、筆者は『奉天経済事情』と『奉天産業経済事情』という2つの資料にたどり着いた。本章は、この2つの一次資料を参照しながら、それらが淡々と描写する1940年～1942年の奉天（瀋陽）ムスリム地区、すなわち回回営の商業活動状況を考察してみたい。

## 1. 『奉天経済事情』（1940）と『奉天産業経済事情』（1942）について

まず、両書の構成・内容を確認しておきたい。両書の「序言」によると、これらの書物は、1940年（日本の「紀元二千六百年」）当時の「満洲における商工業の心臓部たる」奉天（瀋陽）の「経済動向」を記録した「統計資料」であるという。また、前者の改訂版が後者である。特に、当時の在満の日本人および日本社会、日本企業の経済・工業・商業の統計資料については非常に詳細である。しかし、現地中国人の民間経済活動に関する調査や記録は乏しい。例えば、下の図13に見えるような奉天西部の日本人居住区（現「和平区」に当たる地区）に関する記述は多いが、東部の奉天城周辺を含む地区の商業、経済活動に関する実状調査や記録は極めて少ないのである。ただし、奉天城城内に関する商業活動の概況は詳細であり、日本人居住区から見た「周縁地区」に言及した数少ない資料であるため、当時の奉天社会の把握にとって有効な資料であることは疑いない。



図13 「1932年奉天市街図」 出典：『満洲国旅行案内』（昭和7年8月5日）新光社（筆者が記入した部分のうち、☆印は本論文で述べている回回営を指す）

## 2. 奉天第一商場の記録

1940年に出版された『奉天経済事情』の第6章「経済団体及主要商工機関」の第2部であ

る「取引所、市場、消費組合及百貨店」の「(ロ) 市場」のうち、第 (5) 「日用雑貨小売市場」に、奉天の回回営内の商場を含む一連の商場が次のように記録されている。

満人側に於ては市街構成、其他商業上の傳統的慣習によって日本側に見るやうな確然たる小賣商店街の形成を見受けないが其代り勸商場式の日用雑貨小賣市場が極めて有力な地位を占めてゐる、其主なるものを次に掲げる。<sup>219</sup>

掲げられているのが次の表 18 である。

表 18 「奉天の日用雑貨小売市場」

市場名稱	店舗数	資本金総額	康德五年賣上高	地址
同善商場 <sup>220</sup>	二四	三、四〇〇	七、八〇〇	小西關大街
公和商場	七八	二三、二〇〇	一七四、二〇〇	二十九緯路
民生商場	一二	三、五〇〇	二四、五〇〇	北市場一八經路東
北市商場	九六	一八、二〇〇	三四五、六二〇	北市場
中原商場	八四	一五、五〇〇	三八六、〇〇〇	大西門内
利民商場	八三	七、〇二〇	一八五、二〇〇	城内中街
第一商場	九八	二一、二〇〇	四一〇、二〇〇	小西關電車路
		圓	圓	

出典：『奉天經濟事情』（1940） p. 95

まず、表 18、市場名称欄最下の「第一商場」の「地址」にある「小西関電車路」は回回営に関する現地（瀋陽）の老人たちの記憶につながる<sup>221</sup>。すなわち、「西関（すなわち回回営）の回民と周辺の漢民は、電車路にある第一商場を利用した。正式には奉天第一商場といい、第一商場は略称である。奉天第一商場は現在の言葉で言うと、大型スーパーマーケットのような 1 建物内の商業施設である」という。また、表 18 の上の説明にあるとおり、これらの「商場」は、当時「勸商場式の日用雑貨小賣市場」と呼ばれた。「勸商場」と「勸工場」とは同じ意味であり、「勸工場」<sup>222</sup>の意味は、現代風に平たく言えば、「一種の古いタイプの百貨商店」とみなすことができる。すなわち、1 つの建物内で百貨を販売する商業施設である。この一次資料と現地での聞き取り調査から、旧満洲国奉天の回回営に「勸

<sup>219</sup> 奉天商工公会 1940, p. 95。

<sup>220</sup> 「小西関大街」にある「同善商場」は回民コミュニティと隣接していた。また、同善商場は、福祉機関である同善堂と関連する商業施設である。さらに、同善堂の創立者は清代の回民將軍左宝贵である。しかし、同善堂に関する資料『奉天同善堂調査報告』満鉄庶務部社会課〔編〕1927 年 2 月、『奉天同善堂要覧』編者不明 1936—1939。〕から見ると当時の同善堂は回民との関係が薄かった。同善堂は本論のテーマである興遊園と奉天第一商場との関連性が少ないため、ここではそれについて検討しない。

<sup>221</sup> 聞き取り調査実施日：2012 年 3 月と 7 月、2013 年 3 月。調査対象：70 歳代～90 歳代の男性老人グループ、本資料の提供者はその中の 3 人（90 歳代）。

<sup>222</sup> 『大辞林第三版』2006 三省堂、『世界大百科事典 第 2 版』2007 平凡社、『日本大百科全書』1984 小学館。

商場」という商業施設が存在し、回民によって運営されていたことがまず明らかになった。

しかし、上述表 18 の各商場の場所について、当時（1940 年代）以降の行政区画の変更が多かったため、聞き取り調査（2012 年、2013 年）によって明らかにできたのは、表 18 の中の中原商場と利民商場は奉天城城内にあり、それ以外の商場は、奉天城と日本人区の間にあるというところまでである。奉天第一商場の場所も電車路に面しているということ以外には、今のところわからない。

### 3. 興遊園と「第一商場市場（第一露天市場）」

『奉天経済事情』の「日用雑貨小売市場」の勸商場に関する記述の後に、まず、「日用雑貨の露天市場としては日本側商店街の夜店と満人側の夜店、朝市等が挙げられるが就中小北門裡の曉市（朝市）は雑貨類の早朝取引市場として特異な存在を示し有名である。」<sup>223</sup>と前置きしたあと以下の表19のように一連の露天市場が記録されている。

表19「奉天の日用雑貨露天市場」

市場名稱	店舗数	資本金額	康德五年賣上高	備考
春日町夜市	二五一	—	—	日本側夜店
小北門裡曉市	三五一	二五、四〇〇	三一四、〇〇〇	日用雑貨、洋雑貨批發
城内中街夜市	一九七	一〇、五〇〇	七五、五〇〇	日用品、洋雑貨類
興遊園露天市場	四四	一二、三〇〇	三二、四〇〇	娯楽場、飲食店、日用
第一商場市場	一四	九五〇	三、九五〇	雜品
		圓	圓	

出典：『奉天経済事情』（1940） p. 96

この表19で記録されている市場について、上から順にみると、まず紹介されているのは日本人区にある「春日町夜市（現太原街）」である。この露天市場にあたる場所は、現在、改革開放後の瀋陽市内で最も繁栄する商店街の1つになっている（図13、筆者書き入れの「本」字のあたり）。満洲国時代の商業的基盤整備の影響があったかもしれない。次に記されているのは、奉天城城内にある小北門裡曉市と城内中街夜市である。実際に両商店街の場所は隣接<sup>224</sup>して存続し、改革開放後の現在、この2つの商店街は合併された。

最後に注目すべき露天市場は、表19の最下部の興遊園露天市場と第一商場市場である。筆者は前項で見た表18の奉天第一商場と同じく聞き取り調査<sup>225</sup>を実施したところ、興遊園露天市場は、かつて現地で興遊園と呼ばれ、奉天第一商場が成立する前に、回回営内に成立した露天商業施設であるという結果を得た。しかし、表19の「第一商場市場」という露天市場については、どのインフォーマントも知っておらず、これから第3章でとりあげる文献資料『瀋陽文史資料第八輯』と『瀋陽回族志』の中にもこの施設に関する記録はまった

<sup>223</sup> 奉天商工公会 1940, p. 96。

<sup>224</sup> 現地老人からの聞き取り（2014 年 11 月）によると、この 2 つの商店街ははっきりと相並んでいた。

<sup>225</sup> 聞き取り調査実施日：2012 年 3 月と 7 月、2013 年 3 月。調査対象：70 歳代～90 歳代の男性老人グループ、本資料の提供者はその中の 3 人（90 歳代）。





彼らの記憶に基づく限り、この図 14 の左（西）半分が奉天第一商場であり、右（東）半分が「興遊園」と表現される。『奉天産業経済事情』に見えた「第一商業東院工業区」（【表 20】）にある「第一露天市場」は——『奉天経済事情』によれば「第一商場市場」である——、80、90 歳代の彼らの記憶では、図 14 の興遊園内の西側、×にあたる部分になる。「第一商場市場（第一露天市場）」の店舗数は、14 店舗と記録されていた（【表 19】、【表 20】）。現地老人の記憶復元に基づく図 14 の×の部分において、奉天第一商場と接触する左（西）端の店を除けば、右（東）側の小さい広場には確かに約 14 軒の常設店が記憶されている。しかし、なぜ現地の回民の記憶にある「興遊園」という露天市場が、日本の第一次資料の中で「興遊園露天市場」と「第一商場市場（第一露天市場）」という 2 つの商業施設として記録されたのかという疑問が出てくる。現段階では、この問題について最終的な結論を下すことができないが、図 14 の作成を担ってくれた老人の話によると、「現地の人は日本の調査員を困らせてやろうとして、事実を言わなかった」か、あるいは、「日本の調査員としては 1 施設を 2 つと記録すると、税金を多く徴収できる」からという可能性が示唆された。不明な点が残るが、興遊園と奉天第一商場の具体像はここにほぼ明らかにされたものと考ええる。

本項では、一次資料である『奉天経済事情』と『奉天産業経済事情』を通じて、現在の瀋陽回回営と同じように、旧満洲国時代の奉天回民も小売業を生業として商業施設を設け、回回営の経済基盤を維持したことを証明した。さらに、当時の商業経営は単調なものではなく、少なくとも「勸商場」と「露天市場」という経営形態の区別があったことも明らかになった。これらの商業施設の形成過程と形成年代が次の解くべき課題となる。

### 第 3 項 興遊園と奉天第一商場の成立過程

かつて筆者は、1990 年代前後に中国政府の政策によって瀋陽文史資料編纂委員会<sup>226</sup>が編纂した『瀋陽文史資料第八輯』（1985）と『瀋陽回族志』（1996）について資料批判を行った<sup>227</sup>。その結果、両書は、中華人民共和国成立後から 1990 年代までの瀋陽回回営に関する政府の公的歴史資料であり、少数民族地区にとって重要な統計資料であるが、同時に政治的な制約のため、矛盾する部分も少なからず存在していることを指摘した。ここで両書から利用可能な記述を選別しながら、奉天の回民商業施設の成立過程について考察したい。資料の中から浮かび上がってくる具体的な商業施設は、前項でも焦点をあてることとなった興遊園と奉天第一商場の 2 つである。資料の限界から、当面はこの 2 つの商業施設にしばらくすることにする。

興遊園と奉天第一商場については、両書のほかにいくつかの記録も見つかるが、両資料

<sup>226</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 383。（瀋陽民族事務委員会の「瀋委発[1983]21 号文件」によると、民族志編纂辦公室が設置されたのは 1983 年 5 月である。同時に、この機関は『瀋陽満族志』、『瀋陽回族志』、『瀋陽朝鮮志』、『瀋陽錫伯族志』、『瀋陽蒙古族志』という 5 冊を編纂することを決定した。1984 年から編纂が始まり、1985 年に『瀋陽文史資料』（第八輯——瀋陽回回民族專輯）が出版された。その後、文献は新たに整理され、フィールドワークが実施された上で、1990 年に『瀋陽回族志』の初期製作が完成した。1991 年 12 月に再び修正され、最後に『瀋陽回族志』の初版が 1996 年に出版された。）

<sup>227</sup> 金博諒 2013, pp. 19–34。

からそのまま引用した記録のほかに、実証的な利用価値を持つものはほとんどない。例えば、2010年1月27日の『遼瀋晩報』の「興遊園当年瀋陽最好玩的地方」<sup>228</sup>という記事や、2008年に出版された『瀋陽歴史文化叢書』<sup>229</sup>があるが、いずれも伝聞や感想の類といえ、信頼性が低い。ただ、1987年に瀋陽市瀋河区三集成編纂委員会が編纂した『中国民間文学集成—瀋陽瀋河資料本』の回族編は、体裁上は学術出版物といえるが、内容は伝説の文学集であり、本稿には利用できない。こうして、本項では『瀋陽文史資料第八輯』と『瀋陽回族志』を中心として、聞き取り調査と日本側の地図資料を援用し、興遊園と奉天第一商場の成立過程解明を試みたい。

## 1. 1915年成立説

興遊園と奉天第一商場の成立年代について、両資料からは2つの説、すなわち1915年説と1925年説を見だすことができる。まず、1915年成立説については、①『瀋陽文史資料第八輯』、②『瀋陽回族志』の第九章と、『瀋陽回族志』に参考資料として挙げられている③「大事件」（年表）の部分に記録されたものである。

最初に見るのは、①『瀋陽文史資料第八輯』の「記奉天第一商場」という節で、興遊園と奉天第一商場は、以下のように記述されている。ちなみに、この記録は中華人民共和国成立後、両商業施設に関する初めての記録である。

〈回族人民企業の発足〉

辛亥革命後、中華民国が成立。奉天も都市開発に直面することとなる。1915年(民国4年)の春、奉天政府は都市開発をして、電車を建設するため、奉天城周辺の小売業や娯楽業の運営に禁止令を発した。

その後、小西関〔引用者注：瀋陽の回回営を指す〕の回民馬如麟(字趾祥)は回民の失業を憂えていた。彼は清真北寺の土地と隣接する自分の野菜畑を出散〔引用者注：中国語のサダカ(喜捨)〕し、商売しようとする民衆はこの地区を露天広場という形に改造した。この施設は政府の禁令に反していないため、露天市場として開業した。

なぜ「興遊園」という名前となったのか？それは、この場所(園)に大衆を遊びに誘い、面白がって帰り、また訪れるようにしたいということで、興遊園と雅称することにした。

興遊園成立後、周辺の回民だけではなく、奉天城周辺の小売人もここに集まったため、興遊園の場所は足りなくなった。

---

<sup>228</sup> 電子版サイト [http://news.lnd.com.cn/htm/2010-01/27/content\\_1045034.htm](http://news.lnd.com.cn/htm/2010-01/27/content_1045034.htm) (この記事の内容から見ると、興遊園という一商業施設に関する「記事」とは言い難い。興遊園について、『瀋陽回族志』を読んだ感想文に近い文書である。しかも、この新聞はテレビ番組を調べる為のものであり、もともと社会の情報などは少なく、この記事も責任あるものかどうか疑問が残る。)

<sup>229</sup> この書物は、瀋陽回民のコミュニティ内の商業施設について、「第一商場、興遊園」、「話説第一商場」と「雑芸群集興遊園」という3つの記録を載せているが、内容としては漢族である編纂者(50歳代)が幼い時に自分の叔父から聞いたものの回想である。編纂者が漢族であるため、本稿におけるインフォーマントと比べると、客観性があると思われるかもしれないが、肝心の情報源である彼の叔父について、何の特定もなく、かつ、本人自身も確定できないとする内容が多い。

〈奉天第一商場の誕生〉

興遊園の隣には、清真北寺の野菜畑があった。興遊園の馬氏「引用者注：馬如麟のこと」は清真寺の長老達と興遊園拡大の問題を相談し、清真北寺野菜畑を商場に改造することを決めた。……

清真北寺は、「興遊園」という名前は不適切とした。奉天城内には、山東、蓬萊、黄県の人による「大絲房(現在の百貨商店)」があるが、商場という施設はなかった。今回の回民の商場は奉天にとって、最初の商場である。そのため、「奉天第一商場」という名前が与えられた。

……

1915 年中秋がこの奉天第一商場最初の開店日である。……1921 年の春に、筆者〔引用者注：楊程遠〕は奉天第一商場の経理科を見学した。そこで、奉天第一商場の創立の歴史を探ることができたのである。<sup>230</sup>

要するに、都市開発によって営業の場を失った小売業や娯楽業の回民のために、馬如麟という回民が 1915 年に自らサダカ(喜捨)した土地で興遊園を創立した。間もなく、馬如麟は北清真寺の管理人とともに奉天第一商場を創立し、経営をし始めたのである。この資料の編纂者は「楊程遠」と記載されているが、現地で筆者が多くの聞き取り調査を行っても、名前以外の情報は何も得られていない。また、上記の馬如麟についてもこれ以上の資料は見つかっていない。しかし、楊程遠による記述をさらに詳細に見ると、2つの商業施設の経営様式や内部組織に関する記録が多いし、興遊園内では有名な飲食店の場所と経営様式を紹介している。例えば、「白茶館」や「馬家焼賣」(現存)など。これらの飲食「名店」の常設地の具体的な場所は、前項の「興遊園と奉天第一商場復原図」(図 14)の○印を付けた店にあたる。このように、この資料の示す内容は具体的であるが、どの程度の信頼性があるのかを検証してみなければならない。

そこで、②『瀋陽回族志』第九章の「奉天第一商場(興遊園)」<sup>231</sup>をみると、興遊園と奉天第一商場の成立過程と成立年代は、前述の『瀋陽文史資料第八輯』の記録と一致している。しかしそれは単なる引用ではなく、独自の见解によるものといえる。なぜなら、『瀋陽回族志』第九章の書き手は文化娯楽場として興遊園にある多くの「演芸・見世物小屋」を記録するというように、『瀋陽文史資料第八輯』の文章にはない情報を記録しているからである<sup>232</sup>。これらの芸人の常設地の具体的な場所は、前項の「興遊園と奉天第一商場復原図」(図 14)の△印にあたる。

最後に、③『瀋陽回族志』の最終部分には、瀋陽の回民社会に関する「大事件」<sup>233</sup>(年表)があり、「1915 年春、回民馬如麟は自分の野菜畑で露天商場である『興遊園』を創立した」と記述されており、また、「1915 年秋、回民は興遊園から興して、奉天第一商場を

<sup>230</sup> 楊耀恩 1985, pp. 99-111。

<sup>231</sup> 楊耀恩 1985, pp. 192-194。

<sup>232</sup> 『瀋陽文史資料第八輯』の文は、中華民国期の漢文と現地回民の方言を混用して文章を作成しているように、より当時の現場に近い視点を持つ。これに対して『瀋陽回族志』第九章の文章は一貫した現代文であり、回民の方言も使っておらず、どこまで現地の情報に通じていたかは評価できない側面もあるのだが、なんらかの情報源をもっていたと考えるべきであろう。

<sup>233</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 377。

開業した。経理は楊晋之、副経理は馬如麟と楊立川」と記述されている。いずれの記事においても、2つの商業施設が1915年に成立したと判断されている。

編纂者の異なる以上3つの記録からみるかぎりにおいては、2つの商業施設の成立過程はほぼ同じで、成立年代は1915年とするのが自然ということになるだろう。

## 2. 興遊園 1925 年（および奉天第一商場 1926 年）成立説

ところが、以上の1915年説に対して、『瀋陽回族志』（1996年）の④第七章第四節「軍閥統治時期的瀋陽回族」は興遊園 1925 年・奉天第一商場 1926 年説を紹介している。

1924年、張作霖政権の下で、奉天市市長である曾有翼は都市開発のため、奉天城西側の小売業を追い出した。

1925年の冬、革商人である李恒久、清末武官の劉冠青、奉系軍旅長の楊沛然と王相若、王福庭などの回民は、回民の失業に苦悩していた。そこで、彼らは馬如麟氏に説明した。馬氏は自分の野菜畑を出散（サダカ）し、現地の民衆はそこを露天市場に改造した。……この場所（園）に大衆を遊びに誘い、面白がって帰り、また訪れるようにしたいということで、興遊園と雅称することにした。

興遊園の西から北までは、北清真寺の野菜畑である。興遊園の理事は北清真寺の長老達と相談した上で、北清真寺の野菜畑を改造し、奉天第一商場を建設した。1926年から、奉天第一商場は開業し始めた。<sup>234</sup>

興遊園と奉天第一商場の成立過程は、年代の相違を除けば、上の第3項の1の部分でみた説とほとんど変わりはない。特に興遊園の名称について紹介する中国文、「招引客人、到园一游、使其乘興而来、乘興而返、顧名思義、尋味不止、故曰興游园。」は、①『瀋陽文史資料第八輯』と全く同じ文章である。

次に、同じく『瀋陽回族志』⑤第八章第二節の「城市発展」<sup>235</sup>の部分に見える興遊園と奉天第一商場に関する記録をまとめると、「1925年、奉天政府は電車の鉄道を建設するため、奉天城周辺で都市開発を行った」、「1926年、回民・馬汝林は張光田、李恒文、白祺三と相談した上で、自分の野菜畑を出散し、興遊園を創立した」という。この記録内容も年代以外は1915年説の資料と一致する。

興遊園と奉天第一商場の成立を記録した資料は、同じ政府の文史資料編纂組にもかかわらず、両節に食い違っていたのである。では、どちらかが誤っていたのだろうか。二三十年経った現在、当時の編纂者のほとんどはこの世にいない。つまり、編纂組が利用した資料をたどることはできなくなっているのだが、出典と年代を表にすると、以下のように整理できる。

表 21 「興遊園と奉天第一商場成立年代に関する記録」

出典	成立年代	
	興遊園	奉天第一商場

<sup>234</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 136—137。

<sup>235</sup> 楊耀恩・王俊 1996, pp. 159—165。

①『瀋陽文史資料第八輯』「記奉天第一商場」	1915 年	
④『瀋陽回族志』第七章第四節「軍閥統治時期的瀋陽回族」	1925 年	1926 年
⑤『瀋陽回族志』第八章第二節「城市發展」	1925 年	1926 年
②『瀋陽回族志』第九章第一節「奉天第一商場（興遊園）」	1915 年	
③『瀋陽回族志』參考資料「大事件」	1915 年	

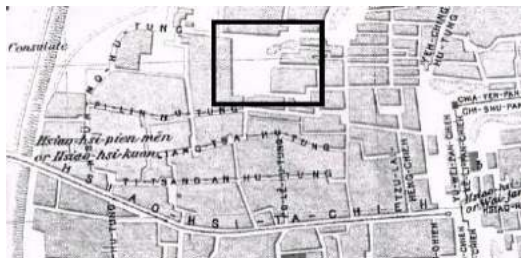
(筆者作成)

以上の資料から見るかぎり、1915 年か、1925 年（1926 年）のどちらかに成立年代を確定することはできなかったが、成立過程については、資料の上での違いはなかった。その理由として、本稿は以下のように考える。前述のように、筆者は両書について資料批判を行った（注 19）。その結果、当時の編纂組は文革の影響で研究水準が非常に低かったこと、編纂組内部に権力闘争があったため、出版する前に最終訂正を行わなかったという問題を指摘した。かつ、「公式資料の作成」という名目で資料を大量に原則もなく収集したため、十分に処理することができなかった。そこで、現地の編纂者は、成立年代という「細かい問題」より、成立過程という「大きな、根本的な問題」の正確性を重視したという可能性があるのではないか。次項では、両商業施設の成立年代をさらに考察してみる。

### 3. 興遊園と奉天第一商場の成立年代

前述したように、『瀋陽文史史料第八輯』と『瀋陽回族志』以外には、両商業施設に関する情報は少ない。しかし、1993 年に出版された『中国回族大辞典』<sup>236</sup>は寧夏回族自治区政府を中心として、中国政府が企画したものである。ここには、「興遊園」についての項目・記事はないが、「奉天第一商場」の成立年代に関しては、「1925 年 2 月 21 日に、奉天市市長は奉天第一商場に営業許可を与えた」、「1929 年に、奉天第一商場の 1 人の大株主の李氏は、自分の株を楊氏に渡した」という。この 2 つの詳細な記録は、『瀋陽文史史料第八輯』と『瀋陽回族志』には見えない、全く新しい記録である。編纂過程などについては明らかなにならないものの、この辞典の内容自体は興遊園 1925 年・奉天第一商場 1926 年説の補強となる可能性がある。

次に、両商業施設の成立年代をさらに検証するため、日本側の地図資料を利用する。旧満洲国時代の奉天について、中国側の地図資料は極めて少ない。かつ、資料が存在したとしても、内部資料と扱われて利用できないことが多い。こうして、筆者は日本の国会図書館で公開されている旧満洲地域の奉天に関する 1913 年～1939 年の地図資料を検索した。奉天の回回営にあたる部分は以下の図 15～図 20 となる。



<sup>236</sup> 楊惠曇 1993, p. 658.



図 15『近代アジア・アフリカ都市地図集成』 15  
(1:20,000) 1913 年刊、柏書房

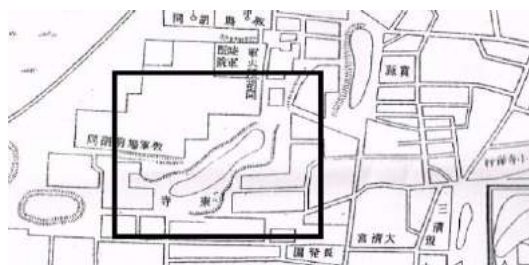


図 17『最新奉天市街圖』  
(1:15,000) 1920.2、山陽堂書店



図 19「奉天附属地番地入図」(1:10,000) 1934、  
『近代中国都市地図集成』:18、1986.5、柏書房

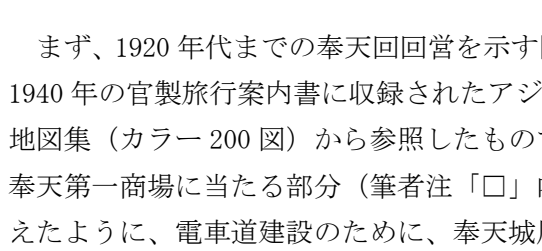


図 16『近代アジア・アフリカ都市地図集成』 16  
(1:20,000) 1920 年刊、柏書房

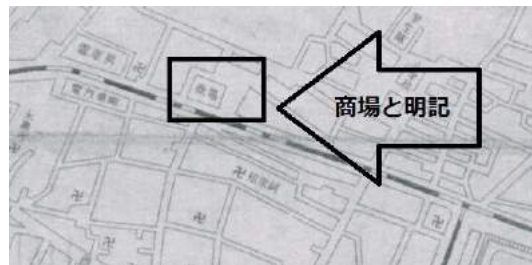
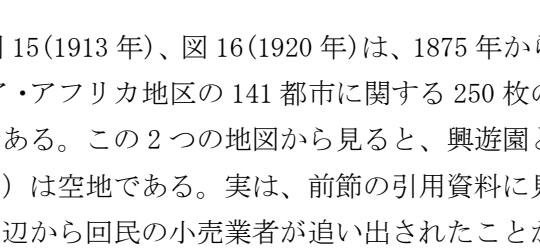


図 18『奉天市街全図』  
(1:15,000) 1931.7、大阪屋号書店



図 20『大奉天新區劃明細地図』(1:15,000) 1939.2  
、満洲日日新聞社:弘文堂書店 (發賣)



まず、1920 年代までの奉天回回営を示す図 15(1913 年)、図 16(1920 年)は、1875 年から 1940 年の官製旅行案内書に収録されたアジア・アフリカ地区の 141 都市に関する 250 枚の地図集 (カラー 200 図) から参照したものである。この 2 つの地図から見ると、興遊園と奉天第一商場に当たる部分 (筆者注「□」内) は空地である。実は、前節の引用資料に見えたように、電車道建設のために、奉天城周辺から回民の小売業者が追い出されたことが興遊園形成の大きな要因であった (本章第 1 節)。しかし、地図からみると、その電車道は 1920 年までには存在しなかった。また、同年代の図 17(1920 年)は少し詳細であり、東清真寺に当たる部分を「東寺」と明記し、かつて馬如麟の野菜畑であった興遊園に当たる場所は、「菜園」の図例と表示されている。この 3 つの地図資料から見ると、20 年までに、この地区に興遊園と奉天第一商場はまだ存在していなかった。

これに対して、1930 年代以後を表す図 18、図 19、図 20 を見ると、まず、満洲国建国直前の奉天の旧城内、商埠地、満鉄附属地を記す図 18 は、「張作霖の電車道路」が記録されており、奉天第一商場に当たる地区に「商場」を明記している。図 19 は奉天第一商場に当たる地区に「商場」を明記していないが、図 18 の「商場」に該当する場所には建物が記録されており、「電車路」も示されている。次に奉天市公署都邑計画科が鑑修した図 20 は、これまでで奉天に関する最も詳しい地図資料である。この資料は図 18 と同じく、商場と明記し、特にその地区の地区番号まで表記している。これらの地図資料は、「奉天第一商場は 1930 年代にはここに誕生していた」ことを証明している。結局、この一連の地図資料から見ると、1920 年代から 1930 年代の間に、奉天第一商場は誕生したと考えられる。つまり、これらの資料は、興遊園 1925 年・奉天第一商場 1926 年説を補強するもう 1 つの有力な間接

証拠となる。

ついで、筆者は2012年3月、8月、2013年4月、9月と2015年3月に、瀋陽回回営において、聞き取り調査も含むフィールドワークを実施した。興遊園と第一商場の成立年代について、直接に両商業施設を経験した、あるいは回回営で長く生活した情報提供者の話から、4つほど紹介する。

#### 事例1（李氏1、哈氏）

政府機関と国有企業の人事情報の管理職であった李氏と哈氏の記憶によると、2人は物心がついた頃から、両商業施設はすでに存在した。興遊園は文革時代に一時閉園した。改革開放後、2、3軒の店しか復活しなかった。90年代の回回営の土地開発前まで、その地区は現地の回民から「遊園里（興遊園の中、あるいはその場所を意味する）」という地区名と呼ばれた。

#### 事例2（馬氏3）

馬氏は、これまでの情報提供者のなかで、最も興遊園と直接に関係がある人物である。彼の家族は、興遊園で32年間「馬家館」という餃子店を経営した。交通局の公務員であった彼の話によると、彼は興遊園成立後に生まれたが、彼の両親から「1920年代から1930年代までの間」と聞いたという。また、実際に体験した興遊園の商業活動は、「正直に言えば、うちの店は日本人が来る前には経営困難であったが、日本人が来てから少し景気がよくなった。」とか、「景気がよすぎて、食材が足りなくなる時もあった。そういう時は、日本人の管理者に賄賂を送り、多くの食材を入荷した」という。最後に彼は、「奉天第一商場はあまり行ったことがないが、レンガ建築と記憶している。何回も火事があった。最も大きかったのは1946年の秋の火事である。19時頃から、40分ぐらい焼け続けた大火事であった。」と奉天第一商場を振り返った。

#### 事例3（馬氏4）

「西関回民市場」の肉屋で働いている旧満洲国時代に荷役工である馬氏は日本語で、「興遊園は食品を売る市場、58年頃からだめになる。第一商場は布、靴や服を売る百貨商場、40年代に大きな火事があった。」と両商業施設を説明した。

#### 事例4（金氏1）

旧満洲国時代の日本憲兵隊隊員であった金氏は、「1930年代以前、馬姓の回民が北寺東側の自分の野菜畑を「出散（サダカ・喜捨）」した。その後、ここで出店したい商人はここに多くの木製屋台（防水フェルト付）を建設した。最後に興遊園という露天市場を集成した。第一商場は興遊園運営から2年目に建設した『磚瓦房（レンガ建築）』であった。商場内の構造は、現在の中国のスーパーと似ていた。」という。

最後に、南清真寺周辺の高齢（80歳代以上）男性グループの証言を整理すると、「第一商場は20年代末期に成立した」という話におちついた。以上の聞き取り結果を要するに、「両商業施設は1920年から1930年までの間に成立した。興遊園は、馬姓の回民がサダカ（喜捨）した土地で、防水フェルト付の木製屋台を中心とする露天市場であった。文革時代に中断、終息したが、その場所は90年代まで「遊園里」という地名のみが残された。一方、レンガ建築である奉天第一商場は布、靴や服などの生活用品を売る百貨商店であり、火事が多い施設だった」ということになる。防水フェルト付の木製屋台の露天市場と、レンガ建築の百貨商店という情報は興遊園と奉天第一商場の施設構造を具体的に補足することとなる



だけではなく、両商業施設は1920年から1930年までの間に成立したという情報は、やはり興遊園1925年・奉天第一商場1926年説を補強する有力な証拠となる。

本項における2種類の情報（地図、インフォーマント情報）とも、興遊園1925年・奉天第一商場1926年成立説の補強となった。現段階までで、両商業施設の精密な成立年代を確定することはできないが、これまで矛盾や問題点が多かった中国の公式資料を検証し、今後の旧満洲国時代の奉天の回回営に関する研究に有益な証拠を提供することができた。なお、この2つの商業施設は永続しなかった。上述したような現地での聞き取り記録によると、興遊園は文革を経て、1990年代まで地名のみが残った。その場所を現在の地図におとし込んでみると、ほぼ図21のようになる。一方、奉天第一商場は『瀋陽文史史料第八輯』、『瀋陽回族志』と『中国回族大辞典』の記録および現地での聞き取りの結果をまとめると、1943年か1945年に焼け落ちたが、興遊園の西隣にあったこと（図14）、また図18と図20に基づき、現在の地図（図21）に示すことができる。



図21 「現在の地図上に復元できる諸施設の場所」（google mapに基づき筆者作成）

#### 第4項 まとめ

この第2節では、近代における瀋陽回回営の商業活動の淵源がどこにあるのかを、歴史的に探ろうとし、また、文献資料と聞き取りによる調査を実施した結果、次のことが明らかになった。

まず、奉天回民の小売業を中心とする商業施設の成立の契機は、馬如麟（字趾祥）という回民が、張作霖政府の土地開発に影響されて失業した奉天城周辺の回民小売業者のために、自分の野菜畑をサダカ（喜捨）し、『興遊園』という露天市場を開業したところにあった。後に、馬氏は、当時存在した北清真寺と相談し、興遊園と接する北清真寺の野菜畑に『奉天第一商場』という勸商場を開業した。この2つの市場が文献資料には、錯綜して現れていたが結局人々がより集う娯楽空間をかねた露天市場と、もっぱら小売業の集合体という性格を持つ「商場」とが、一体化した商業施設として記憶されていたのであり、記憶と文献に基づく復原図（図14）は今のところ最も実状に近いものと筆者は考える。その成立年代についても、資料は一元化されていないが、やはり文献と聞き取り調査を傍証をまじえて総合すると、1925・1926年成立説が1915年説より有力であると判断される。

次に、興遊園と奉天第一商場の成立過程を見れば、ムスリムの集住地区としての回回営の活力、自律性が見て取れる。その中で、特に注目されるのは、サダカ(喜捨)というムスリムとしての基本的な行為が当時、回回営に大きく機能していたことである。第2章清真寺の歴史を考察した部分で述べたように、瀋陽の東清真寺は馬成遠という人物のサダカ(喜捨)によって成立した。それだけではなく、中華人民共和国成立前後に成立した「回民合作社」(後に「回民商店」)は瀋陽回回営の左一族、馮一族、楊一族のサダカ(喜捨)した建物で成立したものであるし、同時期に成立した回民商店二店(別名:東寺商店)は同じく劉孝豪という現地の回民のサダカ(喜捨)した建物にできたものともいわれる<sup>237</sup>。すなわち、当時の瀋陽(奉天)の街では回回営は、ムスリムの生活原則に基づいて息づいていたといえることができる。

興遊園と奉天第一商場という両商業施設は、イスラーム宗教振興の義務に沿いつつ、近代回回営の商業活動のモデルとなった。この成立時期以降、「回民商店」などの回民商店、あるいは「回族のスーパー」が出現するようになったのである。

次節は、「回民商店」、および同時期に運営された3つの商店を考察してみる。

### 第3節 「回民商店」、「二店」、「職工商店」、「南寺商店」

本節は、回回営における商業活動がわかる商店を取りあげる。「回民商店」、および同時期に運営された「二店」、「職工商店」、「南寺商店」という3つの商店である。この4つの商業施設は、かつて回回営内に存在したが、既に現存しない。本節の第1部分は、文字資料を中心として、「回民商店」の歴史を考察し、第2部分は、「回民商店」およびほかの3つの商店の状況について、インタビュー調査の結果から検討する。

#### 第1項 「回民商店」に関する記録

中国の各地で、回民の経営する様々な商店が回民商店と呼ばれて存在している。本稿では、瀋陽回回営のものを「回民商店」と括弧をつけて示す。

「回民商店」について、現段階までに、中国側資料の中で筆者が、掘り出せる最も古い記録は、『中国回族大辞典』(1993)という中国の回族に関する百科事典からの記述である。その内容は、非常に概括的ではあるが、以下のごとくである。

回民商店の前身は、1949年に成立した瀋陽市回民消費合作社である。その後、1952年に、回民商店に改称された。また、1984年に、回民商店は、瀋陽市瀋河区回民総店に改称し、さらに、1988年に、瀋陽市回民綜合商場という名になった。<sup>238</sup>

この記録からみると、瀋陽における「回民商店」は、一般的な商店が集団化されたところから始まったように見受けられる。その後、詳細はここでは不明であるが、名称の変遷から見て、1つの集合化された回民の商業施設として、整備・拡大されていったというおおよその流れを見ることができるだろう。

<sup>237</sup> 2015年3月、4月に実施した聞き取り調査による。

<sup>238</sup> 楊惠曇編 1993。

ところで、『中国回族大辞典』の外に、『瀋陽回族志』（1996）も「回民商店」について、主に3つの事件を断片的に記録している。

まず、中華人民共和国成立後の瀋陽回族に関する部分で、「1958年の『整風運動』の中、『反特殊』という名義で、回民商店は改称された。」<sup>239</sup>と見える。瀋陽市回民消費合作社は、1952年に回民商店に改称されて（『中国回族大辞典』）間もなく、再び改称されたことになるが、その新しい呼称は不明である。

また、「宗教信仰」という章内の文化大革命時代の瀋陽回族に関する部分で、「文化大革命時代に、紅衛兵は回民商店に対して、『豚肉を販売すべき』という看板を貼った。」<sup>240</sup>とある。「回民商店」（1952年から1958年の名称）は、恐らく別の名称のもとで、文化大革命時代（1967年—1977年）に運営されていたこと、しかしまた、その時代の回回営内の回族は、商店という一般日常の生活の場で差別されたことも明らかになる。

『瀋陽回族志』において、「回民商店」に関する3つ目の記録は、「1986年に、回民商店という店名が、名誉回復された。その年の売り上げは、1100万元であった。」<sup>241</sup>という記述である。1952年からの名称「回民商店」（あるいは1958年からの新名称—文革期を通じて、この名称は不明—）は、『中国回族大辞典』によると既に1984年に、「瀋陽市瀋河区回民総店」と改称されたはずである。しかし、ここでは2年後の1986年に「名誉回復」して「回民商店」の名称に戻ったという。「回民」という言葉を使うことについて、少し考えをめぐらしてみたい。『瀋陽回族志』の編纂組は、1986年当時の「回民商店」の具体的な営業額を「1100万元」と掌握していたほどに「回民商店」の営業に関する内部資料を見ることができたはずである。そうした編纂資料としての背景・信頼性を考えると、1986年に「回民商店」の名が名誉回復された、とするのに解釈の矛盾はおこらない。一方で、2年前に「回民総店」の名が出てくるにあたっては、回回営内の回族の願望が反映されているのではないだろうか。「回民」の名誉回復の可能性を当局に確かめるような動きを想定できないだろうか。

いずれにしても、回民商店の売り上げ1100万元という売上額は、1986年の瀋陽の1つの商店として、莫大なものであり、回回営の商業の中心、あるいは回回営内の回族の消費の中枢とも言えるであろうが、詳細について記録はない。

以上、『中国回族大辞典』と『瀋陽回族志』の記録から、次の年表を作成することができる。

表 21 「回民商店年表」

年代	名称	出所
1949 年	瀋陽市回民消費合作社	『中国回族大辞典』
1952 年	「回民商店」	『中国回族大辞典』
1958 年	「回民商店」から改称	『瀋陽回族志』
1984 年	瀋陽市瀋河区回民総店	『中国回族大辞典』

<sup>239</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 149。

<sup>240</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 120。

<sup>241</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 150。

1986 年	「回民商店」	『瀋陽回族志』
1988 年	瀋陽市回民綜合商場	『中国回族大辞典』

この年表から見ると、両資料において、それぞれの内容の確実性が検証されたものとは言い難いが、内容上の矛盾が存在しない。ただ、1958 年から 1984 年までの商店の名称は不明である。次の部分では、フィールドワークを活用して、「回民商店」の歴史と実態を探ってみる。

## 第 2 項 「回民商店」、「二店」、「職工商店」、「南寺商店」の実状

この部分の内容は、主に筆者が 2015 年 3 月に瀋陽回回営で、商業施設を検討するために実施したフィールドワークの成果内容である。実際に多くのインタビュー調査を実施したが、「回民商店」の成立時代および、その後の一連の政治変動は、回回営の回族にとって非常に敏感な一面があるため、積極的にあるいは正確に説明してくれるインフォーマントばかりではなかった。その点を除けば、インフォーマントはすべて瀋陽の回回営内に長く居住し、各商業施設を利用した経験があり、さらに、現地の回族から人柄を信頼されている回族である。（本論の最初にある注 2 のインフォーマントリストと一致する。）

### (1) 聞き取り調査 1

李氏 1（女、83 歳）街道管理職

哈氏（女、66 歳）糸工場事務管理職

「回民商店」と呼ばれるようになったのは、中華人民共和国成立後の 1950 年代である。商店の 1 階は、布、服や食べ物などを販売し、2 階は、回民商店の事務室である。

「二店」の場所は、東清真寺の西側にある。その土地は、回民である劉孝豪の喜捨であり、成立年代は、中華人民共和国成立前の 1948 年頃である。店の営業面積は、6、7 部屋の大きさであり、主に、肉や野菜などの食べ物を販売する。

「職工商店」の場所は「地印子胡同」である。この商店は、地下施設であり、日本人によって、建設されたものという説があった。

定年<sup>242</sup>となる頃に、李氏は政府機関の管理職であり、哈氏も大型工場の管理職であった。2 人とも、資料を管理する職であったため、記憶力がある。現在、2 人は、南清真寺内の女寺を生活の中心とし、清真寺内に、尊敬された女性郷老である。

両者の情報をまとめると、「回民商店」は、1950 年頃からそう呼ばれるようになった商業施設であり、「二店」は、1948 年頃に、回民劉孝豪の喜捨で成立した商店であり、また、「二店」の場所は、東清真寺の西側にある。さらに、「職工商店」は、かつての地下施設を改造された商業施設であり、その場所は、地印子胡同である。

### (2) 聞き取り調査 2

<sup>242</sup> 『国务院關於安置老弱病殘干部的暫行辦法』と『国务院關於工人退休、退職的暫行辦法』（国発(1978)104 号)によると、現在中国の定年の年代について、男性は 60 歳であり、女性は 50 歳である。

馬氏 1（現清真美食街、飲食店経営者）（男、43 歳）

「回民商店」の成立年代は、1950 年代頃である。

清真美食街の成立年代は、1993 年頃であり（1993 年土地開発後により形成）、その場所は、東清真寺胡同である。

馬氏 1 は、現在の回回営内の「清真美食街」で、飲食店を経営している。彼の出身地は、瀋陽ではないが、幼児期から、回回営に居住する祖父のところで育てられた。そのため、戸籍を除けば、回回営の人であることに間違いない。また、彼は祖父から、多くの回回営に関する物語、歴史、人物志などを聞き覚えてきたので、彼の同年齢の人と比べると、回回営の状況についての知識は、少し詳細である。

インタビューによると、彼にとって「回民商店」は、美味しい食べ物、玩具や服装など生活用品を販売する場所であり、最も身近な存在である。彼は「幼い頃に、お爺さんから聞いて以来、その成立年代は忘れられないものとなった」と 1950 年代であることを保証した。また、1993 年の土地開発後に、彼は、回回営から離れたと思ったことはなく、回回営で生活し続けたい願望もあって、東清真寺胡同（現「清真美食街」）で、自営業し始めた。

### （3）聞き取り調査 3

王氏（男、59 歳）（現清真美食街、飲食店経営者）

「回民商店」の成立年代は、1950 年代前後である。

「清真美食街」の形成年代は、1990 年代である。

王氏は、回回営で生まれ、回回営で育てられ、その後、回回営で自営業を営み続けている。王氏と、調査対象(2)の馬氏 1 の人生の軌跡は、殆ど同じである。王氏によると、「回民商店」の具体的な成立年は覚えがないが、1950 年代で成立したことは間違いないとのことである。

### （4）聞き取り調査 4

楊氏（男、61 歳）工人

回回営の中と周辺には、主に「南清真寺商店（南寺商店）」、「職工商店」、「回民商店」、「二聯回民商店（後に一馬路商店）」と「二店」という 5 つの商店がある。その中、「二聯回民商店」の歴史は、少し複雑であった。最初の頃、「二聯回民商店」は、回民の商店であったが、文化大革命で、一馬路商店に改称され、「漢民」の商店となった。

楊氏は、回回営で生まれ、育ち、結婚した。2000 年前後の土地開発のせいで、現在、彼は瀋陽市から離れた場所で住んでいるが、毎日のように回回営の南清真寺に来て、礼拝に参加する。楊氏は、回回営内の各商業施設の成立年代をはっきり覚えていないが、初めて筆者に「回民商店」以外の「職工商店」、「南清真寺商店」と「二店」という商店の存在を紹介した人物である。さらに、楊氏は、「回民商店」と比べると、回回営内のほかの商店の規模は小さいことを強調した。「回民商店」という名前は、回民の商店であることを特に表しているため、回回営内に存在する意義の大きさを主張した。

#### (5) 聞き取り調査 5

馬氏 3 (男、83 歳) (1940 年回民小学、51 年第三運輸公司、交通局)

「南寺商店」は民国 20 年 (1931 年) 前後、「回民商店」は (1950 年代に成立)

馬氏 3 は、1940 年に回民小学に入学し、1951 年に第三運輸公司に就職し、その後、定年まで、政府の交通局で働いた。馬氏の経歴から見ると、回回営の中では少数のエリートの一人である。現在、彼は南清真寺を生活の場の中心としている。

馬氏の家族は、前節で考察した興遊園で、「馬家館」という店を経営した。彼は、前節で述べた満洲国時代の興遊園の実態について、多くの情報を提供してくれた。

彼の家は回回営の「後街」(本稿第 2 章に参照)であるため、「前街」にある「回民商店」の具体的な成立年代をはっきり覚えていない。彼の記憶の中では、回回営の「後街」にとって重要な商業施設は、民国 20 年 (1931 年) 前後に成立した「南寺商店」である。しかし、「南寺商店」は、規模が小さくて、現在の便利店 (コンビニエンスストア) のような店であった。中華人民共和国成立後にできた「回民商店」は「前街」にあるが、規模が大きかったため、間もなく回回営の生活の中心となった。

#### (6) 聞き取り調査 6

馬氏 4 (男、72 歳)

「回民商店」の成立年代は、1955 年前後。「二店」の場所は、東清真寺周辺であり、その道路の向こう側 (北側) は「職工商店」である。

現在、馬氏 4 は、次に紹介する「西関回民市場」の中で、ハラール肉の肉屋を経営している。今や歴史的なものとなった糧票 (食糧配給切符) の実施は、健啖だった馬氏 4 にとって困ったことであった。そのため、瀋陽で糧票が実施された 1959 年の 10 月は、彼にとって、忘れられないことであり、また、その日から何年前ということ、およそ 1955 年以前に「回民商店」という美味しいものを販売する店ができていたことも多少覚えている。

「二店」と「職工商店」の成立年代について、馬氏 4 は覚えがないが、「二店」の場所は東清真寺周辺と、「二店」の北側は「職工商店」であることとはっきり覚えている。

#### (7) 聞き取り調査 7

金氏 1 (男、88 歳)

「回民商店」、中華人民共和国成立後、政府の「回民合作社」(株式会社)。「回民商店」の土地は、私有地 (左家、馮家、楊家) であった。

「二店」は「回民商店」の支店である。「南寺商店」は小売店である。

金氏 1 は、第 2 章で紹介した中華人民共和国成立後の最初の回族リーダーである金堂祺氏の 2 番目の弟の金堂賓氏であり、前節の興遊園と奉天第一商場の地図作成に力を尽くしてくれた人物である。

金堂賓氏は、「回民商店」の成立年代について、はっきり覚えがないが、その具体的な成立

過程について情報を提供してくれた。彼の説明によると、中華人民共和国成立後、政府は、左家、馮家、楊家を説得し、彼らの所有地で「回民合作社」を設立した。「回民合作社」の運営は、株式会社のような構造である。「回民合作社」で出店したい人、あるいは「回民合作社」の運営に参加したい人は、「回民合作社」の株を買って、出店するか、あるいは利子をとるかという選択肢があった。

この金氏の説明から考えて見ると、「回民合作社」創建資金は、回回営の回民から集めたものであるが、設立後ほどなく、国営の「回民商店」となったことは留意する必要がある。

また、金堂賓氏によると、「二店」という店は、「回民商店」の支店であり、この「二店」と「南寺商店」とも、小さい売店であるため、回回営に影響力はなかった。一方、実際に、回回営の回民にとって、なくてはならない商業施設といえば、興遊園と奉天第一商場、「回民商店」、「西関回民市場」と現在の東寺胡同（「清真美食街」）であることを主張した。

以上は、かつて回回営内に存在した「回民商店」、「二店」、「職工商店」と「南寺商店」という4つの商業施設の成立過程に関する7つのインタビュー調査であり、主に2つのことが明らかになった。

まず1つ目は、「回民商店」の成立過程がほぼ判明したことである。中華人民共和国成立後に、政府は、回民から集金で「回民合作社」を設立し、1950年代後半に、これを国営化し、「回民商店」という名へ改称させた。また、インタビュー調査で得た情報は、『中国回族大辞典』と『瀋陽回族志』による「回民商店」の成立年代と食い違ってないし、文献資料とインタビュー調査お互いに補足できる。

2つ目の発見は、「二店」という商店は、中華人民共和国成立後に、回民劉孝豪の喜捨した土地で成立した店で、「回民商店」の支店となったもので、東清真寺の西側にある。また、「二店」の北側の「地印子胡同」には、かつての地下施設を利用して運営された「職工商場」という商業施設があった。最後に、中華人民共和国成立前に、南清真寺周辺に、「南寺商場」という小さい売店があった。

筆者はさらに中国成立後の回回営の商業施設の状況を追求するうちに、回族リーダーであった金堂祺の遺品の中から、「二店」を示す写真資料を発見した。その写真資料は、以下のようである。



写真 44 「二店」（撮影者：金堂祺）

金堂祺氏の家族によると、この写真を撮影したのは、1980年代末期である。回回営内の老人の証言で筆者が検証したところ、上の写真の口内にある建物が、かつての二店であることと判明した。また、その後側にある建物は、東清真寺であり、本項の以上のインタビュー情報をあわせて見ると、さらに、信憑性が高くなるのである。

以上、「回民商店」、および同時期回回営に存在した3つの商業施設を中心に検討し、中華人民共和国成立直後から、改革開放初期までに、回回営内にわりあい小規模な商業施設が存在したという実態の一部分を明らかにした。次節は、改革開放以後から、現在に至るまで、回回営内に現存する2つの比較的大規模な商業施設を考察する。

#### 第4節 「西関回民市場」と「清真美食街」

本章の第一節で触れたように、現在の回回営の中には、2つの回族の商業施設が存在している。1つは、「西関回民市場」という主に回回営内の回族の生活に向けた商業施設であり、もう1つは、瀋陽市の多民族性を表すとともに、瀋陽の回族自身のアイデンティティをアピールするために機能している「清真美食街」である。まずは、「西関回民市場」について考察する。

##### 第1項 「西関回民市場」

『瀋陽回族志』の中で、改革開放以後における瀋陽回族の状況を叙述する部分に、以下のような記録がある。

文化大革命後、少数民族の回復の一措置として、1983年に、回回営の中で生活している回族のために、食品市場を設置するようになった。<sup>243</sup>

この記録が「西関回民市場」を指しているかどうか明確ではないが、筆者は本章最初の部分で述べた2015年フィールドワークの時に、「1980年代に、回回営の中で開設された市場は、西関回民市場だけである。」ということを明らかにした。つまり、叙述された食品市場は「西関回民市場」であるのだが、『瀋陽回族志』の中に、もう1つの「西関回民市場」に関する記録では、異なった文言がある。

1980年に、回回営の中で、回族の「農貿市場」が建設された。この「農貿市場」で、かつての回回営の中に存在した王家餃子、林家包子、楊家大餅、金家餡餅等の名店は、再開され、清炖牛肉、肉火勺、抻面、餛飩、芝麻燒餅、羊湯、片粉や燒麦などの伝統食品の作り方も復活した。後に、回回営の中の住宅地における土地開発が進むとともに、この露天市場は、「回民市場大厅（大広間）」に変更された。<sup>244</sup>

中国語の「農貿市場」は、辞書<sup>245</sup>によると「自由市場、あるいは、定期的または不定期

<sup>243</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 150。

<sup>244</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 157。

<sup>245</sup> 伊地智善継 2002。



に開かれる主に副業製品や農産物を扱う個人の露店市場」と解釈されている。「西関回民市場」が設立された初期には、副業製品や農産物を扱う個人の露店市場であったが、様々な飲食店も同時に存在していたらしい。この露天市場は、土地開発とともに、「回民市場大厅」という室内の商店街になったことが示されている。

しかし問題は設立年代の相違であり、1983 年と 1980 年という 2 説が記録されているのである。さらに、『瀋陽回族志』には、西関回民市場に関する 3 つ目の記録が存在する。この部分は、西関回民市場に関する最も詳細的な記録である。

回民小区の土地開発とともに、かつての上崗胡同の市場のところで、閉鎖型の「西関回民市場」を建設した。その総体の面積は 3393 平方メートル、建築面積は 67863 平方メートル、南北の長さは 99 メートル、東西の広さは 34 メートルである。また、建築はイスラーム式であり、天井はガラス窓である。市場内に、67 間の部屋があり、各室の面積は 60 平方メートルから 100 平方メートルである。さらに、市場内に、暖房、ガス、上下水道や消毒室などを設置している。市場の回廊には、130 個の屋台も設置している。これらの屋台で、ハラール肉、野菜、鳥、魚や卵などの生鮮食料を販売している。<sup>246</sup>

この 3 つ目の記録は、土地開発された後の「西関回民市場」を詳細に説明している。しかし、以上の『瀋陽回族志』の中で、市場の成立年代と、土地開発された後に再開する年代については、「1980 年代以後」であることしかわからない。だが、第 2 章の回回営の歴史に関する考察では、回回営の土地開発は 1988 年であることを検証した。これを援用すれば、この西関回民市場が、室内の商店街として再開された年代は、1988 に決められよう。

この市場の成立年代は、現時点（2016 年）から見ると、およそ 35 年から 40 年前のことであり、現在の回回営の中で、その当時の成立状況を経験した人も多く存在していると考え、以上の『瀋陽回族志』の中の記録検討も含めて、筆者はフィールドワーク<sup>247</sup>を通じて、以下のように情報をまとめた。

現在の「西関回民市場」の前身は、「小西回民市場」という露天市場である。この小西回民市場は、1980 年代初期に、回回営内で成立した回民の市場である。その後、1980 年代末期の回回営の土地開発とともに、この小西回民市場は露天市場から、室内の商店街となった。現在に至るまで運営され続けた西関回民市場内の両側は、ハラールレストランや肉屋であり、市場の真ん中の回廊は、野菜、魚や卵などの生ものを販売している。また、この市場を利用する人は、主に回回営内の回族と、市内各地の回族であり、漢族や他のイスラーム系の民族はあまり利用しないが、最近、外国のイスラーム留学生の利用が多くなりつつある。

「西関回民市場」の前身である「小西回民市場」の成立年代だけ、疑問が残されている。多くのインフォーマントの間では、80 年代初期であると記憶されているが、その具体的な年は、1980 年、1981 年、1982 年と 1983 年の 4 つの説があって、今のところ決定する手立

<sup>246</sup> 楊耀恩・王俊 1996, p. 171。

<sup>247</sup> 最後の検証は、2015 年 3 月に実施された。

てはない。

筆者は、関連する資料として、金堂祺氏の遺品の中から、「西関回民市場」（写真 46）の前身である「小西回民市場」（写真 45）の運営当時の写真を入手した。



写真 45 「1980 年代の小西回民市場」



写真 46 「西関回民市場」（2014 年 12 月）

写真 45 からは、この「小西回民市場」の 1980 年代の賑わいを実感することができる。1980 年代の「小西回民市場」と比較するために、筆者は写真 45 の撮影場所と殆ど一致する場所で、現在の「西関回民市場」を示す写真 46 を撮影したので、ここに提示しておく。

現在の西関回民市場の実態を比較検討するために、2013 年 8 月と 2015 年 3 月のフィールドワークで、「西関回民市場」の実態を示す 2 つの鳥瞰図を作成した。その具体的な状況は、以下のようである。

1F	2F	北門（正門）	2F	1F
回民食品有限公司	辽宁回族饭店	辽宁省回族企业家协会 （辽宁清月清真合作社）		清真牛肉肠专卖
清雅轩				恩顺号鲜牛羊铺
				西关羊肉
				西关风味铁家锅烙
翔来顺	爱穆创意婚礼庆典	田园莊		鲜牛羊肉铺
				振生牛羊肉铺
杨记鲜牛羊肉铺				铁家肉铺
西关茶庄（階段）				階段
西关羊肉	（未使用）	西域楼（餐厅）		西关牛羊肉铺
刘记牛羊肉铺				铁家锅烙
（未使用）				回记包子铺
沈河副食清真牛肉店				德记公牛羊肉店
大松鹤园	大松鹤园 2 F			小西牛羊肉门市部

			西关牛羊肉部
		会宾园（饺子馆）	大贺牛羊肉店
			大国牛羊肉下货部
松鹤园	张大中（家）		李家牛羊肉下货活鸡
			回民茶叶食品
清真烧鸡			（未使用）
（未使用）			铁家牛羊肉铺
回民商店茶庄			冯家串店

南門

图 22 「2013 年西關回民市場鳥瞰図」（2013 年 8 月 10 日筆者作成）

1F		2F		北門（正門）		2F		1F	
楼梯（回民食品有限公司）					楼梯（清真牛肉肠专卖）				
清雅轩		辽宁旬真饭店			辽宁清月清真农产品专业合作社X辽宁旬真国际贸易有限公司		鼎溢西关羊肉		
							西关鲜羊肉		
翔来顺					田园莊		铁家锅烙		
							鲜牛羊肉铺		
杨记鲜牛羊肉铺		爱穆创意婚礼庆典					振生牛羊肉铺		
					铁家肉铺				
（西关茶庄）楼梯					楼梯				
西关羊肉		空			西域楼		西关牛羊肉部		
刘记牛羊肉铺							铁家锅烙		
废业							回记包子铺		
沈河副食清真牛肉店							德记公牛羊肉店		
大松鹤园		大松鹤园 2F			会宾园饺子馆		小西牛羊肉门市部		
							西关牛羊肉部		
松鹤园		？					大贺牛羊肉店		
							大国牛羊肉下货部		
		张大中			李家牛羊肉下货活鸡				
马阿旬白条鸡					回民茶叶食品小义羊肉				
清真骨头房					杨家清真牛小肉骨头房				
回民商场茶庄					西关冯家串店				
楼梯（市场办公室）					楼梯				

図 23 「2015 年西関回民市場鳥瞰図」(2015 年 3 月 25 日筆者作成)

以上の 2 つの鳥瞰図からみると、1 階の両側の店は、主に飲食店と肉屋であり、2 階の店の殆ども飲食店であり、『瀋陽回族志』の中の記述と一致する。また、両図を比較すると、2013 年と 2015 年と比べて、西関回民市場の中の変化は大きくないことが確認できるだろう。ただ、この市場の中で、商業以外の施設も存在することに注目しておきたい。それは、西関回民市場南門の 2 階にある張大中の家である。張大中氏について、張氏本人および張氏のことをよく知っている南清真寺の郷老によると、現在の張氏の職業は、肉屋や小売店などを経営している。一方で、宗教生活において、張氏はイスラーム宗教の発展に非常に熱心で、何年も前から、内モンゴルなどの地域のジャマーアティで、イスラーム宗教知識を学んだ。この西関回民市場南門の 2 階の「物件」の主旨について、張氏本人は以下のように筆者に説明した。

瀋陽の都市化とともに、各地域からムスリムが瀋陽に来るわけであり、その中、瀋陽と比べると消費水準が低い西北地域や内モンゴル等の地域から来たムスリムも多くなるであろう。私は、ここを借りて、以上のようなムスリムが、ここで一時的に住めるし、礼拝することもできるし、自分で調理することも可能である(ような施設を作っておきたい)。もちろん、それも神の教えである。

以上、本節の 1 の部分においては、現存する西関回民市場の成立過程と具体的成立年代および現状を検討した。その結果、西関回民市場の前身は、小西回民市場であり、その成立年代は 1980 年代初期であることが確認された。また、西関回民市場の成立年代は、1988 年であることを確認した。

現在、回回営の中で、西関回民市場の他に、もう 1 つの商業施設、あるいは商店街(飲食店街)が存在し、第 2 章で述べたように、その商店街の名前は「清真美食街」である。次の部分で、この「清真美食街」を概観してみる。

## 第 2 項 清真美食街

現段階まで、特に「清真美食街」に集約された文献資料は、発見されていない。本章の最初の部分で、回回営内の回民社区の書記へのインタビューと、前節のフィールドワーク成果から、清真美食街の部分を抽出して整理すると、以下のようにまとめることができる。

1990 年代には、中国は全土で大型工場を改革し、多くの労働者がリストラされ、工業都市であった瀋陽市も非常に大きな影響を受けた。その中で、リストラされた回回営の回族は、自民族集住地区で飲食店を経営し始め、後に、飲食店街が形成された。

また、2008 年の北京オリンピックと、2013 年の第十二回中華人民共和国全国運動会に向け、瀋陽の多民族性を持つ観光地域として、清真美食街が整頓され、商店街の真西側に、『清真美食街』を標示する 13.52 メートルのアーチが立てられた。13.52 メートルは、1352 年から回民がここに住み始めたことを象徴している。

これまで検討した回回営の中の商業施設と比べると、「清真美食街」の歴史は浅いし、文献記録も少ない。また、2015年までのフィールドワークの経験として、清真美食街は、急速に変化する傾向がある。例えば、かつての清真美食街は、単純な飲食店街であったが、近年、薬屋やコンビニなど人々の需要に応えるための店も多くなりつつある。

だが、本論文を作成する時点で、瀋陽の清真美食街は、大きな転換があった。瀋陽市民族事務委員会（瀋陽市宗教事務局）の記事<sup>248</sup>によると、清真美食街が所在する瀋陽市瀋河区区委および区政府は、区の経済を活性化するために、7ヶ月に渡って、清真美食街を再開発し、ついに2016年10月21日に、「西関美食街」として、「開街」したという。新しい「西関美食街」の街全体は大きく改造され、殆どの店は改装されたとも報じられた。

以上の記事を見た筆者は、瀋陽市政府、瀋陽市瀋河区政府や瀋陽の民族（宗教）事務局は、この民族的な特色を持つ商店街に将来どのような方向を与えようとしているのか、また、清真寺はこの自民族の伝統的な商店街について、どのように発展させたいのか、さらに、商店街の運営者達はこの変換を、どのように理解しているのかなどの問題を解くために、フィールドワーク<sup>249</sup>を実施した。

まず、「西関美食街」の改造に関する政府側の政策について、回民社区の書記は以下のよう

に筆者に説明した<sup>250</sup>。

今回の「西関美食街」の改造・改装工事を主導する機関は、瀋陽市瀋河区政府であり、その目的は、少数民族の特色をもつ観光地の建設である。また、この改装工事は、少数民族や宗教などの事項を管理する瀋陽市民族事務委員会とは、全く関係がない。

改装された飲食店は38軒であり、「西関美食街」の道路の改装の費用は、瀋河区の政府が負担している。しかし、各店舗の前面および店内の改装費は、自費であり、その金額は店の規模によって3、5、7、8万人民币に分かれる。

今回の改装を総括していうと、政府が資金を使い、回民社区の管理人は体力を消費し、そして店の経営者は利益を得た、ということになる。

ちなみに、この改装工事は、瀋河区政府の「二街一場」という改造計画の一部分である。「二街一場」というものは、三年以内に、回回営を観光地化するため、地域内の「西関美食街」、南清真寺前の商店街と「西関回民市場」に対しておこなう予定の、総体的な改造・改装工事である。

以上のことから、今回の工事は行政区の政府が主導するものであり、「二街一場」という回回営に対する三年計画の最初の一步であるということがわかった。ここから見ると、少数民族やイスラーム宗教を強調する「清真美食街」という飲食店街から、地域経済を向上するための観光地である「西関美食街」へと性格が変化していく過程が始まっていることになるのだろう。

しかし、以上の変化について、民族・宗教機関はどのように見ているのかを知るために、

---

<sup>248</sup> <http://www.symzzj.gov.cn/symzzj/xwzx/jcgz/content/2c9080b458237c9b015823a296a6001f.html>（最終閲覧:2016年11月16日）

<sup>249</sup> 2016年12月に実行。

<sup>250</sup> 2016年12月5日に実施。

清真寺の宗教指導者に聞いたところ<sup>251</sup>、「美食街の改装について、民族や宗教機関は全く関与しておらず、意見交換もなかった」と簡潔な説明であった。以上の状況から見ると、民族や宗教機関は、意見交換がなかったことについて少し不満があったが、結果から見れば、行政区の政府は、民族や宗教機関を管理する地域（回回営）を簡単に左右できるという政治力学が現存するといつてよい。

最後に、改装後の経営実態を見るために、美食街内のいくつかの飲食店の経営者にインタビューを行った。店主はすべて回族というのが、この街の決まりである。

1. A 店（24 時間営業。2016 年 12 月 3 日深夜にインタビュー実施）

筆者：店の改装代は誰から払いますか？その金額は大体いくらになりますか？

経営者（40 代、女性）：店の前の改装費も、店内の改装費も自費だよ。その金額は、約 5 万から 8 万（人民元）ぐらい。半年の売り上げは殆ど改装費になっちゃった、「パー」だよ。実際には援助金があるはずでしょう！〔未確認〕恐らく政府の管理者が横領したんでしょう！〔未確認〕

筆者：改装しなくてもいいでしょう？

経営者：改装しなければ、開店禁止だよ。瀋河区政府の指示だよ。しかも、その改装の様式は決まっているよ。

筆者：改装後に、売り上げはよくなったでしょう？

経営者：そんなことはない。悪くなった気がする。改装後、この街は「歩行街（歩行者天国）」となったんだが、現在の人は怠惰で、自動車が入れないということで、客も激減した。

2. B（2016 年 12 月 4 日午後）

筆者：店の改装代は誰が払いますか？

経営者（40 代、男性）：自費だが、その金は政府の役人の懐に入ってしまったにちがいない。

3. C（2016 年 12 月 10 日昼）

筆者：店の改装代は誰が払いますか？

経営者（60 代、男性）：それは自費ですよ。

筆者：改装後に、売り上げはよくなりましたか？

経営者：はあ（溜息）、自動車が入れないと、客も激減し、これからの前途はあまりよくないよ。

以上の調査から見ると、美食街内の飲食店の経営者は、今回の「地域経済を振興する」という名義の改装活動に対して、あまり積極的な姿勢をとっていないことは明らかなようだ。彼らにとって、最も気になるのは、次の 2 つのことである。

第一に、飲食店街の経営者は改装費の「補助金」に対して不満がある。本項の最初に示したように、回民社区の書記は、「飲食店街の改造資金は政府から出すものであり、店自体の改装費は自費である」とインタビューに答えたが、上述の経営者 A と B は、必ず補助金が存在すると考えている。一方、経営者 C は今回の改装費について「それは自費ですよ」という言葉の意味を吟味すると、「そもそも政府はお金を出す可能性がない」という理解だ

---

<sup>251</sup> 2016 年 12 月 5 日に実施。

ったようである。なぜ経営者は補助金に2種の考えをもつのか、筆者は以下のように推測した。生活および社会経験が多い経営者Cは、補助金がないことに大きな抵抗もなく、そのまま受け入れた。それに対して、年齢が若く、社会経験も浅い経営者AとBは、今回の強制的な改装を受け入れたくないという単純な心理状態があり、「補助金がある」という一種の希望的な観測をしておきたかったわけである。

第二の問題は、自動車が入れないことで、客が激減することである。回民社区の書記は、「政府が資金を使い、回民社区の管理人は体力を消費し、そして店の経営者は利益を得た」と主張したが、経営者から見ると、実態は真逆な方向に進んでいる。飲食店街が歩行者天国化され、自動車が入れなくなるため、客も利益も激減するのは確かなことである。

このように、改装費用が自費であるため、経営者は不満があったことに留意すべきであり、また、「経済向上活動」のための回回営の観光地化とはいえ、現状から見ると、そこまで効果はあがっていない。さらに、「二街一場」の名のもとで今後おこなわれる予定の政府主導の改造・改装が、どのような方向に発展するのか、商店街の経営者達は、どのように対応してきくのかなどことは、今後の調査課題として、長期的な参与観察、整理や分析を行う価値と必要がある。

本項の最後に、これまでの美食街に関する基礎資料の補足として、2016年12月の西関美食街の実態に基づき、「西関美食街」を示す鳥瞰図を以下のように作成した。

東		
伊道焼肉	↑ 道             路	←道 路→
合家樂超市		
牛街骨頭館		
回味包子		
米六火鍋		希来順清真牛肉餡餅
蘇萊曼面館		金家餡餅
李記牛羊批發		王家餃子燒麥
双盛園清真館		新疆塔里木燒烤
都市貨郎（雜貨）		蘭州牛肉拉麵
小骨頭館		鉄家風味鷄架
楊老大爆肚羊湯		三潮水乾洗店
大門（看板：回民社区）		小山羊
		寺北王家餡餅
羚犴羊（首府店、2016年12月2日開店）		爆肚燒麥羊湯館（小漁村）
西関開口餡餅		大門（看板：回民社区）
米記		名煙名酒
		西関王記餃子館

西関開口餡餅	↓	馬家一口酥火勺
松鶴園		栄記焼餅
		回頭館
林包子鋪百年老店		家記大個蒸餃焼麦館
西関楊家餡餅		天利園特色焼麦餃子
九頭牛炖肉餡餅		十頭牛小骨頭羊雜館(24 時間営業)
阿麗香飯店(ウイグル族経営)		新疆阿麗香飯店(ウイグル族経営)

## 西

図 24 「2016 年西関美食街鳥瞰図」(2016 年 12 月 2 日筆者作成)

本節は、回回営内に現存している 2 つの商業施設を紹介した。ここまでで、1990 年代から現在(2016 年)に至る、瀋陽回回営内の殆どの商業施設を考察したことになる。

### 章結

本章の第 1 節では、一般的に回族が様々なネットワークを駆使して、商業活動を展開するという特色を指摘した。そうした傾向の中で、瀋陽回回営内の回族は、各種のネットワークより、とりわけ瀋陽という地域内の商業施設を依存する傾向が強いことを見出した。

第 2 節では、中華人民共和国成立以前、瀋陽回回営内の商業施設である興遊園と奉天第一商場を丹念に考察し、その結果として、いくつかの重要な歴史的事実を明らかにするとともに、これらの商業施設は、単になる生計維持の場ではなく、あくまでもイスラーム宗教および回民的特色に密着した展開をし、それらをアピールする場へと変換しつつあったことを跡付けた。例えば、これらの回民商業施設の中には、イスラーム宗教行為である「サダカ(非義務的喜捨)」により、設立の契機となったものが含まれているのである。

第 3 節では、中華人民共和国が成立する頃における、回回営内の商店の存在を詳細に辿りつつ、特に、社会主義国家である中華人民共和国成立後にもかかわらず、事実として、回回営の中の回族は、自分たちの集金によって商業施設を設立していた例をいくつか確認できた。

最後の第 4 節では、瀋陽回回営内に現存している 2 つの中心的な商業施設を紹介し、これらの商業施設は、これまでの経験と技術を伝承し、イスラームおよび回族の特色を表現し続けていることについて明らかにした。同時に、中国の社会と経済の急激な変化とともに、回回営の商業施設の形態も激しく変化しているという状況を把握した。

このように改めて、概観して見ると、回回営という回族のコミュニティの実体が継承される限りにおいて、国家の激しい変化のエネルギーから自己を維持あるいは、自力救済することができると言えるであろう。すくなくとも歴史はそう教えている。しかし、近年の社会変動の規模の大きさから見て、回回営生存の可能性は、従来になく危機に瀕しているといってもよいし、そのことは回族コミュニティにとって今後の重大な課題となるであろう。

本節の最後に、『瀋陽回族志』の中のデータおよび、近年の回民社区の調査の資料に基づ



いて、図表を作成し、そのデータから、瀋陽回回営の商業変化を再び検討し、今後の回回営の商業発展の可能性を検討してみたい。

まず、『瀋陽回族志』の中で収集された「瀋陽市集体回族飯店」（参考資料 4）と「瀋陽市市内五区の私営回族飯店」（参考資料 5）という 2 つのデータで、以下のような比較図を作成した。ちなみに、このデータを示す時間について、『瀋陽回族志』の中で、全く言及されていなかったが、『瀋陽回族志』の資料収集（1985 年）の時から出版当時（1996 年）の時までに限定することができる。

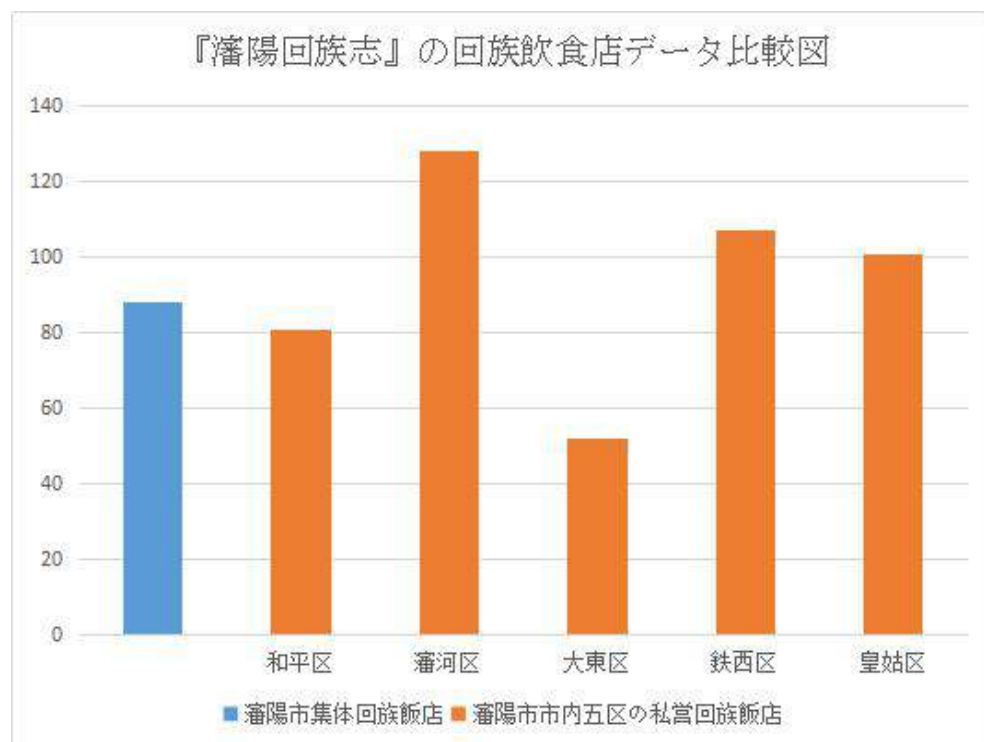


図 25 「回族飲食店データ比較図」（出典：『瀋陽回族志』の中の「瀋陽市集体回族飯店」[参考資料 4]と「瀋陽市市内五区の私営回族飯店」[参考資料 5]に基づき、筆者作成）

以上の図 25 から見ると、『瀋陽回族志』の資料収集から出版までの 1980 年代～1990 年代の間に、瀋陽市内の回族私営の飲食店が圧倒的に多いし、その中、回回営の所在地である瀋河区内の回族飲食店は瀋陽市内のほかの区と比べると、最も多かった。この状況は、瀋陽市の回族の商業性を再び証明し、さらに、回回営は瀋陽市における回族の商業中心であることも再検討することができた。

また、筆者は 2015 年に、回回営内の「回民社区」（第 2 章参照）所在地内の中小型生産経営企業を統計した（参考資料 3）。その資料を通じて、図 26 のように、「回民社区」内のムスリムを経営している企業数と、ムスリム以外の民族を経営している企業を比較した。

回回営店舗数比率(2015収集)

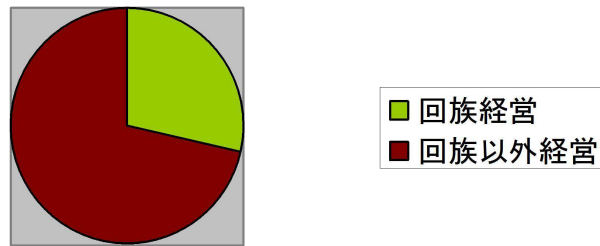


図 26 「回民社区内の飲食店の民族別比較」(出典:フィールドワークに基づき、筆者作成)

以上の図表から見えるように、回民社区内の回族の店は、地域内の店全体の四分の一しか超えていなかった。しかし、実際に参考資料 3 の各店の住所から見ると、回民社区は、回回営の 1 部分しか管理していないし、管理する地域の半分以上は、回回営の外である。

最後に、資料 3 の中で収集された回回営に属する回族の店数と、『瀋陽回族志』の中で整理された「瀋陽市集体回族飯店」(参考資料 4) の中の回回営に属する回族の店数と比べると、以下の図 27 となる。

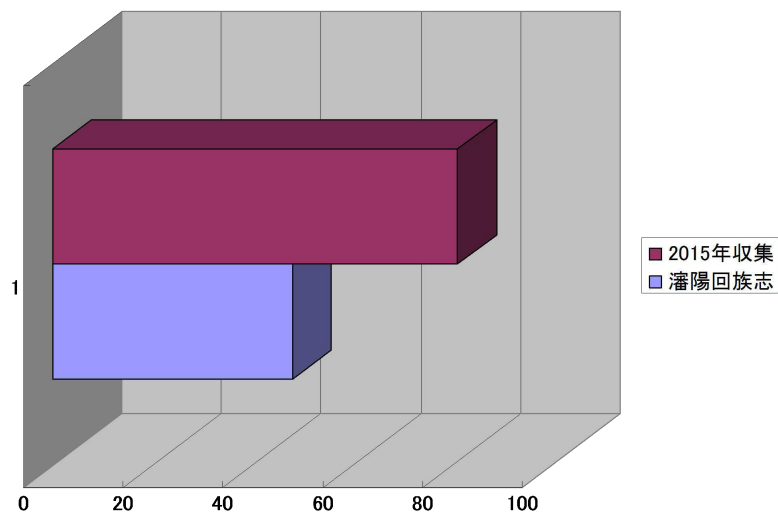


図 27 「回回営内の回族店数の比較図 (1980～1990 年代と 2010 年代)」(出典:『瀋陽回族志』の中の「瀋陽市集体回族飯店」[参考資料 4]の不完全統計に基づき、筆者作成)

図 27 のデータは不完全であるが、回回営内の回族の店の成長に関して、その主な様子を概観することができる。1980 年代から 2010 年代の現在までに、瀋陽回回営の店数は、倍に増加したことを明らかにした。

この最後の 3 つの考察を通じて、本章の考察を再び検証することができた。

## おわりに

本論は、第1部「近代回族研究と瀋陽回回営の歴史」と、第2部「瀋陽回回営における民族教育と商業施設」という2つの部分に分けて、中国東北地域の中心都市である瀋陽市の中の回族のコミュニティ——回回営を、歴史学および民族学、社会学の方法論を応用しながら考察したものである。本論の第I部である近代回族研究と瀋陽回回営の歴史という部分は、現在の回族研究に関する主な理論を整理して回族研究の方向性を確認し、また、瀋陽回回営の歴史に関する文献資料を考察して地域の変遷過程を明らかにした。第II部の瀋陽回回営における民族教育と商業施設という部分は、イスラーム教宗教教育を含む瀋陽における回族の教育、および瀋陽回回営内におけるムスリム商業施設の歴史と現状を中心として検討し、瀋陽回回営の形成要素と意義を探索した。

本論における考察により、現代都市における回族（回民）コミュニティの存続にかかわる要点が浮かび上がってきたと筆者は考える。

### 〈第I部の考察〉

本論の第I部「近代回族研究と瀋陽回回営の歴史」は、現在の回族研究に関する主な理論を整理して回族研究の方向性を確認し、また、瀋陽回回営の歴史に関する文献資料を検討して地域の変遷過程を考察するものであった。

第I部の第1章「回族研究の意義」では、まず第1節で、中国における少数民族研究の基礎理論を把握するため、基本政策としての「民族識別工作」を概観し、中華人民共和国における少数民族という概念の形成を跡づけた。回族も当然その概念の中に位置づけられている。

次の第2節「回族をめぐる解釈と定義」では、「1949年から文化大革命終了まで」と、「改革開放期」の2つの時代における中国の回族研究、そして日本における回族研究という3つの研究枠組みから回族をめぐる解釈と定義を検討し、本論における回族の定義を確定した。要するに、回族は「中国各地に散居し、イスラーム教を信仰し、漢語を日常語とし、外来民族の子孫を中核としつつ歴史的に形成された民族である」という従来からの一般的な定義があるにもかかわらず、現在の中国の政治・社会状況では、その意味が希薄となり、むしろ「身分証明書の民族欄記入の必要を満たすための種別的一种」といった少数民族共通の符号付けにすぎなくなっているのではないかという見解に至る。こうして、あらためて回族のアイデンティティ探索の必要性を確信し、回回営の地理的構造および人的構成の解明と回回営の歴史の変遷から、回回営を考察する意義を導き出した。

ついで第3節では、先行研究を概観してみた結果、現在の中国における回族研究の新傾向は、回族のコミュニティ、いわゆるジャマーアティに集中することが明らかになったと判断し、その研究総論と個別研究という2つの部分に分けて、回族のコミュニティに関する研究を論じた。先行研究のなかでは文化人類学者馬強（陝西師範大学）による広東省広州市および陝西省西安市のジャマーアティに関する研究が詳細かつ緻密なものであり、この馬強の研究方法を筆者の調査・研究に援用し、本論文の重要な支柱の一つとすることが

できると考え、本論の先行研究の研究総論として特に注目した。また、個別研究として中国、欧米および日本における回族研究を振り返って、回族のコミュニティ研究の動向を検討した。第3節の最後の部分では、本論において瀋陽回回営を考察する際の基礎文献である『瀋陽文史資料第八輯』、『瀋陽回族志』、および『満鉄調査資料（第26編）』と『満州建築協会雑誌』の中の回教に関する部分（「奉天の回教寺（上）（満洲回教寺建築の研究七）」、「奉天の回教寺（下）（満洲回教寺建築の研究八）」と、「満洲回教寺建築史の研究」）という4つの資料の内容と信頼性を確認し、書誌情報を明確にした。

以上のように第1章では、少数民族である回族のコミュニティ問題を、確実な資料にもとづいて考察する本論の主旨を論じた。

第I部の第2章「瀋陽回回営の形成と発展」では、まず、回族の居住形態と瀋陽の社会状況を把握するために、第1節の「回族の居住形態」と第2節の「瀋陽について」を置いた。ここにおいて、「大分散、小集中」という回族の歴史的な背景をもつ居住形態と、本論が具体的な調査研究対象とする瀋陽が、中国国内において地理的・社会的に重要な位置にあることを明示した。

その一般論をふまえて、第3節から本格的に瀋陽の回回営を検討していくが、まず、第1項では、既存の文献資料および現地で収集した写真資料を参照し、中華民国期から改革开放期にいたるまでの回回営の形成過程や地理的範囲の変容を明らかにした。さらに、回回営内の人的構造として、緊密な家族・親族関係が形成されており、それがコミュニティの中核的構造として機能していることを明らかにした。例えば親族・姻族の関係にない者に対して擬制的親族名称を使用する慣習などがみられる。以上の考察に加えて、第2項では瀋陽回回営の中核を形づくる清真寺の状況を詳細に検討した。その結果、まずは澤井の定義に基づき、清真寺の社会階層を「宗教指導者」、「寄宿学生」、「管理委員会」、「一般信徒」に区分し、かれらが相互に形成する互酬的な社会関係の特徴を述べた。また、中国の文献資料と日本の満鉄資料を効果的に利用することによって、これまで詳細に検討されていなかった南清真寺、北清真寺と東清真寺の三清真寺の歴史や遺構の事実を掘り起こすことができた。これらの清真寺こそは瀋陽回回営を結成させたものであり、地域の地理的な構造を定め、ムスリム社会の人的な関係とともに瀋陽回回営の根幹にあると考えてよいことが裏づけられた。すなわち、それぞれの清真寺の周囲に集住した回民の人びとが回回営の形成・拡大をもたらした歴史的事実をふまえ、清真寺が回回営の根幹をなしていることが明らかになったと考える。

第2章のもう1つの中心部分である第4節「瀋陽回回営の歴史」では、元代から清末まで、中華民国期、満洲国期、内戦期と中華人民共和国期という5つの時代に分けて、従来の研究では系統的に整理、分析、検証されてこなかった瀋陽回回営の歴史を正面から検証した。その結果、現在の瀋陽回回営における最初の回民の存在は、元朝の至正十二年（1352年）に遡ることを明らかにした。また、回回営が形成され始めた時期は、明末清初の時代であり、回回営の発展期は、清朝末期（左宝貴の時代）であると推論した。第2章の最後に、発展期をすぎて近代から現在に至る都市全体の繁栄の中における回回営内の回族の人口像を把握するために、回回営の人口変化図を作成して、今後の研究のための基礎資料とした。

## 〈第Ⅰ部の研究成果〉

以上は、本論の第Ⅰ部の考察過程であるが、主に2つの成果を挙げることができる。第一の成果は、現在における瀋陽、あるいは中国東北地域の回族研究の方向性を模索しようとする中で、この地域の回族研究の基礎を固めることができたことである。これまでの中国における回族研究は、主に西北地区に集中し、歴史学や民族研究などの分野を中心に進んできた。逆に、東北地域は、西北地区に比べて回民が集住する場の数や人口が少ないし、また、中国研究者にとって、中国近代史上の不名誉な満洲国時代と地域の研究を敬遠する傾向が強い。そのため、瀋陽、あるいは中国東北地域における回族研究は、殆どに展開してこなかった。しかし、中国東北地域の回族に関する学術研究を、中国におけるイスラーム研究の一環であるにとらえれば、研究の空白を補足する必要があることは当然であり、また、多民族国家である中国を定義する際にも、東北地域、その中心である瀋陽の回族は、不可欠な要素の1つである。以上の問題意識の元で、本論は、東北地域の回族研究の基盤を確定するため、先行研究から、近代における回族研究の有効かつ意義ある研究動向は、回族のコミュニティ研究であると認識しことを把握し、回回営という瀋陽の回族コミュニティに着眼して基礎理論の証拠を整理した。特に、瀋陽の回回営にとって重要な要素は、教育と商業であることを明示した。

また、本論の第Ⅰ部における第二の成果は、瀋陽回回営の実際の歴史を詳細化したことである。中国東北地域の回族に関する理論資料、および歴史文献資料が乏しいという問題がある。それは、文化大革命時代を経て、多くの歴史文献資料、宗教関連資料や歴史文化財などの書誌と文化遺産が消滅したところに大きな原因の1つがある。本論の考察から見ると、現段階までの瀋陽の回回営に関する最も全面的な中国側資料は、『瀋陽回族志』である。しかし、現在から見ると、該書は1990年当時の時代を背景とした編纂者の限界をもつものであり、また、原則的な問題として言えば、民族誌は、民族の存在に対してなによりも事実にもとづく客観的な歴史を提供するという原点に立つことが必要であり、さらに、人類学的方法論を利用し、インタビュー調査によって十分に吟味されたライフヒストリーなども活用すべきである。そうして見ると、『瀋陽回族志』における記述上の方法にも改善する余地がある。ところで、中国東北地域の回族研究を窮境から抜け出す方法の1つとして考えなければならないのは、日本側の満洲国時代の調査研究と民間資料を活発に利用することである。こうして、本論の第2章は、系統的に検証されたこなかった瀋陽回回営の歴史を整理・検討し、また、民間資料で近代における回回営の実像を再建・検証し、さらに、満鉄資料の援用で、すでに中国側資料で復元することができない瀋陽回回営内の清真寺を再生することができた。こうした、現地調査や資料の再発掘という方法をとることによって、民族の教育と商業施設は瀋陽回回営の発展や伝承にとって、最も重要な要素であることを新たな観点から再び立証することができたと考える。

以上、第Ⅰ部は、瀋陽回回営を中心とする先行研究の総覧と歴史の検証で、回回営における主な変遷過程を把握し、瀋陽回回営の存在について、民族の教育と商業施設は重要な要素であることを明らかにした。

## 〈第Ⅱ部の考察〉

第Ⅱ部は、標題どおり「瀋陽回回営における民族教育と商業施設」をテーマとして、イスラーム宗教教育を含む回族の教育、およびムスリム商業施設の歴史と現状を検討し、瀋陽回回営の歴史民族誌を描くものである。

第Ⅱ部第3章「瀋陽における回族の教育」の第1節は、近代の瀋陽におけるイスラーム教育の原点を探るために、経堂教育という回族の伝統的なイスラーム教育システム一般について概観した後、近代の瀋陽における経堂教育の歴史を考察した。その結果、瀋陽における経堂教育の実施は、1660年代からであることが明らかになった。

近代の瀋陽における回族教育の原点を検討するために、第2節は私立時代、公立時代と現状という3つの区分で、瀋陽の回回営内に存在する回民小学の歴史を考察した。現在の回民小学は、100年以上前にイスラーム宗教学校として開校されたが、現代中国になって一般的な公立小学校として運営されている。その歴史の中で、断続的にせよ、イスラームあるいは回族文化を伝承する傾向があることが明らかになった。その最も大きな理由は、回民小学が回回営の中に存在し続けたためであると考えられる。

第3節は、回民小学と比較する意味も含め、瀋陽市内に存在するが回回営からかなり離れた場所にあるもう1つの回族教育機関、回民中学をとりあげた。回民中学は、張子文というイスラーム宗教指導者がイスラーム宗教教育を実施するために設立した近代的な宗教学校であるが、開校から現在に至るまで、殆ど本来の教育目的を達成しえなかったことが明らかになった。回民中学は現地の回族のコミュニティである回回営との連動性が弱かったことが、イスラーム宗教教育の理念から離れた理由の1つであっただろう。

第4節では、現在の中国東北地域内で、唯一政府が公認したイスラーム宗教教育機関である瀋陽伊斯蘭教経学院の成立過程を検討し、現在の実態の一部を現地で観察した。だが、特殊な教育機関であるため、調査上の制約があり、現段階まで、該機関の詳細な運営実態を解明することが出来なかった。しかし、その現実的な役割は極めて限定的なものであることは確実である。

第5節では、瀋陽における回族の宗教教育機関として、1つの新たな展開である瀋陽回族女学の現状を現地で把握し、瀋陽回回営内において今後のイスラームおよび回族の文化を伝承する最も有効な場になる可能性を指摘した。

第Ⅱ部の第4章「瀋陽市回回営の商業」は、瀋陽回回営の存立に大きく関わるもう1つの重要な要素、瀋陽回民の商業を考察した。

まず、瀋陽回回営内の商業の全体像の掌握を図り、第1節では、瀋陽回回営内の商業施設は、集団・集約化して経営される傾向が強いことを明らかにした。

その商業施設の実態および商業全体の変遷の歴史を検討するために、第2節からは、近代の回回営内に存在した興遊園・奉天第一商場と、「回民商店」・「二店」・「職工商店」・「南寺商店」と、現存する西関回民商場および清真美食街という8つの商業施設を、3つのまとまりとして関連付け、各商業施設の歴史的変遷と現状を明らかにした。

第2節では、近代における瀋陽回回営の商業活動の淵源を考察した。その結果、張作霖政府の土地開発に影響されて失業した奉天城周辺の回民小売業者のために、回民馬如麟が自分の野菜畑に設立した露天市場の興遊園であることが明らかとなった。また、後に馬氏は、北清真寺と相談し、興遊園と接する北清真寺の野菜畑に奉天第一商場という勸商場を

開業したことも明らかとなった。この2つの商業施設が、近代における回回営の商業基盤となったことも検証できた。

第3節では、中華人民共和国成立以後になると、「回民商店」、「二店」、「職工商店」と「南寺商店」という4つの商業施設が、回回営内に存在する重要な商業施設となったことを明らかにした。その中で、「二店」、「職工商店」と「南寺商店」は、小規模の商業施設であった一方、「回民商店」は、中華人民共和国成立後から2000年の回回営の土地開発まで、回回営の商業・生活中心となり、現地の回民経済を担っていたことも明らかになった。

ついで、第4節では現在の状況を検討した。その中で、回回営内に現存する回族の商業施設である西関回民商場と清真美食街の成立過程の一部分を立証し、現在の回回営にとって、清真寺以外の中心的な施設は、西関回民商場と清真美食街と看做されると結論した。

第4章の成果をまとめるならば、中華人民共和国建国の前に成立した興遊園、奉天第一商場や「回民商店」などの商業施設の成立過程から、回回営の活力と自律性が見て取れた。特に注目されるのは、サダカ(喜捨)というムスリムとしての基本的な行為が回回営成立と存続に大きく機能していたことである。また、回回営の民族教育機関と違って、回回営の商業施設は、一方的に回回営に依存するのではなく、回回営と相互依存する存在であったと考えられる。

## 〈第II部の研究成果〉

第II部も2つの課題を明らかにした。まず、第3章の回回営の民族教育への考察は、回民小学と回民中学の形成過程と運営状況を比較し、両校とも、回族にイスラーム宗教教育、および民族教育を教授・伝承する目的で開校されたものであるが、学校は時代の変化や行政政策の変換に左右されることが多いため、回回営、すなわち現地の回族のコミュニティとの連動が、学校の本来の目的達成に大きな影響があることを明らかにした。簡単に言い換えれば、イスラームおよび回族教育を伝承するための回族の民族学校は、運営資金や民衆の支持などの要素が必要であり、すなわち回回営のような回族のコミュニティに依存しなければならないことが立証できたと考える。

また、第4章における回回営の商業施設への考察を通じて、中華人民共和国が成立する前に成立した興遊園、奉天第一商場や「回民商店」などの商業施設の成立過程から見れば、回回営の活力と自律性が見て取れた。特に注目されるのは、サダカ(喜捨)というムスリムとしての基本的な行為が回回営に大きく機能していたことである。また、回回営の民族教育機関と違って、回回営の商業施設は、一方的に回回営に依存するのではなく、回回営と相互依存する存在であると言える。

## 〈結論と展望〉

本論は、瀋陽回回営のもつ意味、研究の意義と現在の動態を明らかにするため、関連する幅広い分野の先行研究を総覧し、回回営の地理的構造、人的構造およびそれらの特色と歴史的な変遷過程を解明したものであり、また、そこから瀋陽回回営が継承してきた民族誌の要素において、伝統としてのイスラーム系民族(回民)の「教育」の存在と、生業形態としての商業施設のあり方を明らかにしたものである。

また、本論は従来の研究を補い、中国イスラーム研究、また世界におけるイスラーム研

究に寄与したいという願いから、文化の多様性の実際のあり方を追求したものであり、瀋陽という場における1つの事例であるが、民族誌の叙述という形式で中国社会におけるイスラーム地域文化の具体像を示しえたことによって、異文化間の齟齬を鎮める有効な視座の構築に、いささかでも貢献できたとすれば幸いである。

なお、本研究は瀋陽回回営に関する初めての基礎研究であり、今後の研究にとっては、必要不可欠の土台となることを願っている。しかし、本論で徹底的に実質内容を検討することができなかった問題が2つあり、それらは今後の課題として残しておかざるを得ない。以下に記して次への問題提起ともしておきたい。

まず、1つ目の問題は、回族における民族教育問題を広い視野から見ようとする点である。瀋陽のような急速発展している中国の都市に住む回族、すなわち現在の回回営の住民をみると、彼らはグローバル社会とともにイスラームへ復帰するのか、中国社会の漢族に同化（イスラームから離脱）するのか、イスラーム原理と中国文化をさらに融合させるのかなどの選択肢に直面するに違いない。どの道を選択しようとしても、回族は自分を再認識、あるいは自己を定義しなければならない。そうなれば、回族自身が自己認識を深めるために、回族の民族学校が必要である。中華人民共和国の憲法の中に、中国の特徴の1つは「多民族国家」であると述べている。すなわち、回族のアイデンティティであるイスラームを伝承・学習すること自体は、多民族国家という特徴を維持し、憲法を守る表現に全く矛盾しないのである。一方、現段階の中華人民共和国は、マルクス・レーニン主義を国是とする社会主義国家だということであり、つまり、現在の中国は唯物論を信奉する国家である。このような政治的環境のもとでは、イスラーム知識をシステムティックに学習し、なおかつ唯心論を公の場で主張することは決して容易なことではない。

官制学校において、これから、回民中学および回族小学のような少数民族学校は、名目だけの少数民族学校ではなく、どのようにイスラームを中心とする回族の文化伝統を伝承・展開していくかということに着眼し、中国国内の他の地域の回族学校、東北地域の他の民族の少数民族学校と比較しながら、瀋陽の回族の学校を考察、整理し、そして将来は有効な方策、道筋を提案したいと考えている。

民間のイスラーム教育に関して、本論第3章で挙げた南清真寺内のイスラーム女学の「学習組」は、現在の瀋陽の中で唯一イスラーム、あるいは回族の知識を学ぶ教育施設である。現段階までの調査からみると、「学習組」に参加する回回営内の回族は、イスラーム文化やアラビア語を学習するとともに、自己を再認識することも達成したように見える。今後、このような民間のイスラーム教育施設が、どの方向へ成長するのか、また、政府側はどのようにこれらの教育施設を誘導するのかなどの問題について、長期的な観察をする必要があり、さらに、中国国内の各地域との比較もすべき問題である。

本論の考察で、もう1つ残された課題は、回回営の形成から現在に至るまで、時代変遷と政権交代とともに、回回営内の権力構造のあり方を解明することである。

ここまで本稿の考察から見ると、清代以後の回回営の形成初期から、この地域の発展に伴い、その内部の権力構造が大きく変化し続けていることを様々な側面から読み取ることが出来た。回回営成立初期、地域の権力構造の中心は清の朝廷の他に、地方勢力とも言える地元有力な回族の大家族（例えば鉄一族、馮一族など）であった。中華民国期になると、国民党政府や張作霖の奉系（奉天派）軍閥などの政治勢力だけではなく、「闖關東（19世



紀後半から、山東半島を中心とする中国人の、山海関の東への移動を指す)」で関里（山海関の西）からの流民の中の回民も、回回営の社会構造に大きな衝撃を与えた<sup>252</sup>。さらに、満洲国期になると、日本軍や満洲国政府などが介入してくることによって、回回営内の権力構造はさらに錯綜状況になる<sup>253</sup>。現在の中華人民共和国成立からはじまる一連の社会主義諸改革も、回回営に大きな転換を強いた。その最たる現象は、回回営に対する文化大革命の影響といってよいだろう（第2章第4節第5項を参照）。

回回営をめぐる、以上のような権力構造の変遷は、表面的に見れば、時代および政権の変換と連動したものであるが、実際には、従来からの固有の大家族、一時的な政治勢力およびそれらを陰から財力で支えた個人や家族、各清真寺の宗教指導者を形成した小さな宗教グループ、外来の教派、民族・宗教教育の振興者や商業施設の経営者など、あらゆる集団の影響もあり、回回営の権力構造は非常に多様にして複雑なのが実態である。今後は、国内外のムスリム集団の影響も想定され、回回営の社会構造はますます多様化していくであろう。回回営の社会実態を探るためには、こうした多くの研究テーマが存在している。今後、それらを系統的に考察・整理・検討していくためにも、まずは本研究のような回回営に関する基礎研究を必要不可欠の土台としていきたい。

---

<sup>252</sup> 例えば興遊園の東側にあった「雑八地」と呼ばれた市場に、そうした回民が入り込んで商売を始めて新興勢力となった。

<sup>253</sup> 例えば、第3章の第3節で紹介したように、張子文が回民中学を興して宗教教育に尽力したが、政治勢力に翻弄されて期待した成果をあげることができなかった。

## 參考資料（文獻部分）

### 書籍（出版年順）

#### 中國語部分：

- 趙恭寅 1917 『瀋陽縣志（第十三卷）』（民國六年排印本），出版不祥。
- 民族問題研究会（中國共產黨西北工作委員會） 1941 『回回民族問題』，延安解放出版社。
- 白壽彝 1951 『回回民族底新生』，上海東方書社。
- 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局 1953 『斯大林全書（第一版第二卷）』，人民出版社。
- 白壽彝 1982 『中國伊斯蘭史存稿』，寧夏人民出版社。
- 楊耀恩 1985 『瀋陽文史資料第八輯』，政協瀋陽市委員會文史資料研究委員會編。
- 瀋陽市民委族志編纂辦公室 1988 『瀋陽錫伯族志』，遼寧民族出版社。
- 瀋陽市民委族志編纂辦公室 1989 『瀋陽朝鮮族志』，遼寧民族出版社。
- 費孝通 1989 『中華民族多元一體格局』，中央民族學院出版社。
- 丁世良·趙放 1989 『中國地方志民俗資料匯編』，北京圖書館出版社。
- 馬鴻超·田志和 1989 『吉林回族』，吉林教育出版社。
- 王正偉 1991 『回族民俗學概論』，寧夏人民出版社。
- 劉侗 1992 『遼寧回族家譜選編』，天津古籍出版社。
- 中國伊斯蘭百科全書編輯委員會 1994 『中國伊斯蘭百科全書』，四川辭書出版社。
- 馬平 1995 『中國穆斯林民居文化』，寧夏人民出版社。
- 黃光學 1995 『中國的民族識別』，民族出版社。
- 楊耀恩·王俊 1996 『瀋陽回族志』，遼寧民族出版社。
- 邱樹森編 1996 『中國回族史』，寧夏人民出版社。
- 張巨齡 2001 『綠苑鈎沉—張巨齡回族史論選』，民族出版社。
- 束錫紅 2004 『西北回族社區現代化實踐的新探索』，商務印書館。
- 馬強 2006 『流動的精神社區—人類學視野下的廣州穆斯林哲瑪提研究』，中國社會科學院出版社。
- 良警宇 2006 『牛街：一個城市回族社區的變遷』，中央民族大學出版社。
- 馬兆政著 楊豐陌編 2009 『回說遼寧少數民族叢書：回族』，遼寧民族出版社。
- 馬強 2011 『回坊內外：城市現代化進程中的西安伊斯蘭教研究』（西北民族研究叢書），中國社會科學出版社。
- 瀋陽市伊斯蘭教志編寫小組 2012 『瀋陽伊斯蘭教志（徵求意見稿）』，瀋陽市伊斯蘭教協會。
- 瀋陽市宗教事務局 2014 『瀋陽宗教志』，遼寧民族出版社。

#### 日本語部分（出版年順）：

- 奉天商工公會 1940 『奉天經濟事情』，奉天商工公會。
- 奉天商工公會 1942 『奉天產業經濟事情』，奉天商工公會。

- 岩村忍 1949 『中国回教社会の構造(上)』, 日本評論社。  
 1950 『中国回教社会の構造(下)』, 日本評論社。  
 スターリン全集刊行会 1952 『スターリン全集 (第二卷)』, 大月書店。  
 田坂興道 1964 『中国における回教の伝来とその弘通』, 東洋文庫。  
 中田吉信 1971 『回回民族の諸問題』, アジア経済研究所。  
 今永清二 1992 『東方のイスラーム』, 風響社。  
 山本武利・田中耕司・杉山伸也・末廣昭・山室信一・岸本美緒・藤井省三・酒井哲哉編集 2006  
 『岩波講座「帝国」日本の学知』, 岩波書店。  
 費孝通編西澤治彦訳 2008 『中華民族の多元一体構造』, 風響社。  
 松本光太郎編 2008 『中国ムスリム宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究』, 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書。  
 松本ますみ 2010 『イスラームへの回帰—中国のムスリマたち』, 山川出版社。  
 梅村坦・新免康 2011 『中央ユーラシアの文化と社会』, 中央大学出版部。  
 中国ムスリム研究会編 2012 『中国ムスリムを知るための60章』, 明石書店。  
 殖民地文化学会編 2014 『近代日本と満州国』, 不二出版。

#### 英語部分 (出版年順) :

- Dudley L. Poston, Jr. Shujing 1992 “*The Demographic and Socioeconomic Composition of China’s Ethnic Minorities*” *The Population of Modern China*, Springer US.  
 Dru Gladney 1998 “*Ethnic Identity in China : The Making of a Muslim Minority Nationalism*”, Florida : USA  
 Abdul Wahid Hamid 1999 “*Islam: The Natural Way*”, Kuala Lumpur Malaysia.  
 Gillette, Maris Boyd 2000 “*Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption Among Urban Chinese Muslims*” California: Stanford University Press.  
 Dru Gladney 2004 “*Dislocating China : Reflections on Muslims, Minorities, and Other Subaltern Subject*”, The University of Chicago Press.

#### 論文

##### 中国語部分 (出版年順) :

- 孟国祥 1996 「日本利用宗教侵華之剖析」『民国档案 (第一期)』, 中国第二歴史檔案館。  
 周伝斌・馬雪峰 2004 「都市回族社会结构的范式问题探讨—以北京回族社区的结构变迁为例」『回族研究 (2004 年第三期)』, 寧夏社会科学院。  
 張鴻雁・白友涛 2004 「大城市回族社区的社会文化功能—南京七家湾回族社区研究」『民族研究 (第四期)』, 中国社会科学院民族研究所。  
 張成・米寿江 2006 「南京回族社区的消失与回族文化传承的思考」『回族研究 (2006 年第 4 期)』, 寧夏社会科学院。  
 楊文炯 2006 「明清時期国家与社会關係轉型境遇下的回族社区—以歷史上西安回族社区文化變遷為視點」『黑竜江民族丛刊 (2006 年第五期)』, 黑竜江省民族事務委員会。

- 張巨齡 2006 「清末民初的回族報刊与丁宝臣等五大報人」『曇夢學刊』，湖南理工學院。
- 高占福 2007 「大都市回族社區的歷史變遷—北京牛街今昔談」『回族研究（2007 年第 2 期）』，寧夏社會科學院。
- 白友濤・李曉雨 2009 「我國城市流動穆斯林社會適應問題研究—以南京和西安為例」『青海民族學院學報（2009 年第一期）』，青海民族大學。
- 白凱 2009 「城市民族旅遊社區的外部認同研究—以西安回坊伊斯蘭傳統社區為例」『中國人口・資源與環境（2009 年第 19 卷第 3 期）』，中國可持續發展研究會。
- 李健彪 2010 「民族歷史街區保護的意義和價值—以西安『回坊』改造為例」『城市問題（2010 年第 5 期）』，北京市社會科學院。

#### 日本語部分（出版年順）：

- 村田治郎 1928 「奉天の回教寺（上）滿洲回教寺の研究（七）」『滿洲建築協會雜誌』（第八卷第七號），滿洲建築協會發行，pp. 22—33（＋挿入圖版）。
- 村田治郎 1928 「奉天の回教寺（下）滿洲回教寺の研究（八）」『滿洲建築協會雜誌』（第八卷第八號），滿洲建築協會發行，pp. 28—46（＋挿入圖版）。
- 村田治郎 1930 「滿洲回教寺建築史の研究」『滿洲建築協會雜誌（第十卷第七號）』，滿洲建築協會發行。
- 片岡一忠 1993 「咸豐・同治期貴州省西南部における回族の反乱について」『歴史研究（21 卷）』，大阪教育大學リポジトリ。
- 新保教子 1996 「少数民族地域における女兒未就學問題—寧夏回族自治区をめぐって」『中國研究月報（1996 年 07・08 号）』，一般社団法人中國研究所。
- 澤井充生 2002 「中國の宗教政策と回族清真寺管理運営制度—寧夏回族自治区銀川市の事例から」『イスラム世界（59 号）』，日本イスラム協會。
- 王建新・新免康 2005 「中國ムスリムの女性教育」『イスラーム地域研究叢書 6——イスラームの性と文化』，東京大學出版會。
- 澤井充生 2009 『中國西北部における清真寺と住民自治—回族のジャマーアティの民族誌』，2008 年度東京都立大學大學院社會科學研究科社會人類學博士論文。
- 田島大輔 2009 「『滿洲国』における回民墓地遷移問題」『立命館東洋史學（第 32 号）』，立命館東洋史學會。
- 澤井充生 2013 「日本の回教工作と民族調査——戦前・戦中期の内モンゴルを中心として」『人文学報（第 468 号）』，東京都立大學人文学會。
- 金博諒 2013 「瀋陽回族コミュニティ（ジャマーアティ）研究序論—『瀋陽回族志』をめぐって—」『大學院研究年報 総合政策研究科篇（第 17 号）』，中央大學大學院。
- 澤井充生 2014 「日本の回教工作と清真寺の管理統制——蒙疆政權下の回民社會の事例から」『人文学報（第 483 号）』，東京都立大學人文学會。
- 金博諒 2015 「旧滿洲国奉天市回回營の商業施設の形成過程：興遊園と奉天第一商場の事例分析」『イスラム世界（84 号）』，日本イスラム協會。

#### 辞書・辞典類（出版年順）：

- 上海辞書出版社 1979 『辞海（1979 年版）』，上海辞書出版社。

楊惠曇 1993 『中国回族大辞典』, 上海辞書出版社發行所。  
佐藤次高 (監修)・嶋田襄平・板垣雄三・日本イスラム協会 2002 『新イスラム事典』, 平凡社。  
伊地智善継 2002 『白水社中国語辞典』, 白水社。  
黎巴嫩貝魯特 (レバノン・ベイルート) 東方出版社 2003 『穆吉德』 (Al-munjid) 黎巴嫩貝魯特東方出版社。  
王培文 2003 『新アラ伯語漢語大辞典』, 商務印書。  
国家統計局人口和就業統計司・国家民族事務委員会經濟發展司 (編) 2013 『中国 2010 年人口普查分民族人口資料 (上)』, 民族出版社。

#### インターネット書誌 (出版年順) :

南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編 1924 (大正 13) 『満鉄調査資料 (第 26 編)』「満洲における回々教」, 支那回教徒の研究。日本国立図書館近代デジタルライブラリー URL (<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/976522>)。  
奉天通志館 1934 (昭和 9) 『奉天通志 (卷九十九)』, 奉天通志館。日本国立図書館近代デジタルライブラリー URL (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1912681>)。  
奉天同善堂 1939 『奉天同善堂要覧』, 奉天同善堂。日本国立図書館近代デジタルライブラリー URL (<http://dl.ndl.go.jp/titleThumb/info:ndljp/pid/1454144>)。  
中華人民共和国国务院新聞辦公室 2009 年 9 月『中国的民族政策与各民族共同繁荣發展白皮書』 From : 新華社  
([http://news.xinhuanet.com/politics/2009-09/27/content\\_12117333.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2009-09/27/content_12117333.htm))

## 参考資料（付録部分）

〈参考資料 1〉（出典：『瀋陽回族志』（第 2 章第 4 節第 6 項の根拠）

**1910 年代瀋陽市内および周辺の回民人口：**

市内家庭数は 1013 戸、周辺 190 戸。市内回民男性人口は 3971 人、周辺 397 人。市内回民女性人口は 2662 人、周辺 327 人。

**1953 年（中華人民共和国第一次人口調査）瀋陽市内および周辺の回民人口：**

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 36797 人。

市内回族総人口は 29380 人。（其中、鉄西区 2239 人、皇姑区 4551 人、南市区 1913 人、和平区 1941 人、北市区 15262 人、大東区 949 人、北関区 1077 人、瀋河区 961 人、蘇家屯区 487 人。）

周辺地域回族総人口は 2406 人。（其中、東郊区 43 人、西郊区 1062 人、南郊区 697 人、北郊区 604 人。）

周辺両県回族総人口は 5011 人。（其中、新民県 2729 人、遼中県 2282 人。）

**1964 年（中華人民共和国第二次人口調査）瀋陽市内および周辺の回民人口：**

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 47018 人。

市内回族総人口は 35235 人。（其中、瀋河区 16307 人、大東区 2924 人、和平区 5256 人、皇姑区 6370 人、鉄西区 4378 人。）

周辺地域回族総人口は 5888 人。（其中、東陵区 1087 人、于洪区 1220 人、蘇家屯区 1575 人、新城子区 2006 人。）

周辺両県回族総人口は 5895 人。（其中、新民県 2791 人、遼中県 3104 人。）

瀋陽市内各派出所（交番派出所）の回族人口統計表：（単位：人）

瀋河区	16307				
大西辺門派出所	237	一経街派出所	747	二経街派出所	159
大西街派出所	257	風雨坛派出所	199	洋楼街派出所	230
小南辺門派出所	117	大南辺門派出所	134	濱河街派出所	169
朝陽街派出所	147	中央路派出所	141	正陽街派出所	119
小西街派出所	6410	朱剪炉派出所	5040	惠工街派出所	362
令聞街派出所	372	団結路派出所	1200	山東廟派出所	267
大東区	2924				
東横派出所	264	大北城門派出所	215	小北辺門派出所	263
遼瀋路派出所	364	洮昌路派出所	70	毛君屯派出所	59
二台子派出所	108	新生派出所	4	小津橋派出所	144
小東城門派出所	221	小東辺門派出所	113	珠林派出所	153

興民派出所	391	大東城門派出所	116	大東邊門派出所	95
管城派出所	73	長安派出所	271		
和平區	5256				
北市場街派出所	406	西塔派出所	155	北道口派出所	295
吳淞派出所	151	遂川街派出所	187	中山元路派出所	160
八經街派出所	282	曇集街派出所	239	十四緯路派出所	201
馬路灣派出所	278	南站街派出所	384	太原街派出所	237
中華路派出所	238	民主路派出所	181	勝利街派出所	194
南七馬路派出所	201	新華路派出所	291	勝民街派出所	146
集賢街派出所	142	新興街派出所	286	長白街派出所	231
北站街派出所	371				
皇姑區	6370				
西明派出所	337	雪耻派出所	299	皇姑站派出所	255
寿泉派出所	134	塔灣派出所	286	三洞橋派出所	593
安民派出所	1390	克儉派出所	192	文化路派出所	303
誠信派出所	388	崇礼派出所	689	維德派出所	413
三台子派出所	388	明廉派出所	492	重義派出所	211
鉄西區	4378				
齊虹路派出所	283	東馬壯街派出所	329	甘露街派出所	335
衛工街派出所	232	启工街派出所	121	興齊街派出所	231
興順街派出所	219	西馬壯街派出所	284	保工街派出所	140
艳粉街派出所	134	光明街派出所	204	工人村派出所	425
貴和街派出所	328	路官街派出所	172	齊賢街派出所	570
興華街派出所	221	篤工街派出所	150		
東陵區	1087				
東陵派出所	111	凌曇派出所	31	桃仙派出所	30
深井子派出所	21	旧站派出所	165	白塔堡派出所	176
渾河站派出所	81	古城子派出所	8	汪家派出所	29
五三派出所	118	輝山派出所	21	文官屯派出所	296
于洪區	1220				
大潘派出所	25	陵西派出所	73	光輝派出所	345
沙嶺堡派出所	401	柳条湖派出所	111	馬三家派出所	37
楊士屯派出所	20	于洪屯派出所	88	造化派出所	7
馬三家教養院派出所	64	中朝友誼派出所	30	新生紅磚廠派出所	19
蘇家屯區	1575				
民主路派出所	513	鮮放街派出所	162	鉄友街派出所	80
中興街派出所	98	陳相屯派出所	269	姚千戶派出所	275
十里河派出所	102	八一派出所	51	王綱堡派出所	16

祝家屯派出所	9				
新城子区	2006				
新城子派出所	444	虎石台派出所	172	清水台派出所	149
蒲河派出所	7	建設派出所	40	瀋北礦区派出所	320
馬剛派出所	0	腰中派出所	18	財落堡派出所	57
石佛寺派出所	36	平羅堡派出所	749	新農派出所	14

**1971 年（瀋陽市統計）瀋陽市内および周辺の回民人口：**

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 44924 人。

市内回族総人口は 30223 人。（其中、瀋河区 13125 人、大東区 2775 人、和平区 4230 人、皇姑区 5626 人、鉄西区 4467 人。）

周辺地域回族総人口は 6900 人。（其中、東陵区 944 人、于洪区 2430 人、蘇家屯区 1997 人、新城子区 1529 人。）

周辺両県回族総人口は 7801 人。（其中、新民県 4033 人、遼中県 3768 人。）

**1982 年（中華人民共和国第三次人口調査）瀋陽市内および周辺の回民人口：**

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 60882 人。

市内回族総人口は 44287 人。（其中、和平区 6986 人、瀋河区 17411 人、大東区 4661 人、皇姑区 8211 人、鉄西区 7018 人。）

周辺地域回族総人口は 8663 人。（其中、蘇家屯区 2371 人、東陵区 1125 人、新城子区 2029 人、于洪区 3138 人。）

周辺両県回族総人口は 7932 人。（其中、新民県 4092 人、遼中県 3840 人。）

瀋陽市内各街道（街道辦事處、政府行政機関の一種）の回族人口統計表： （単位：人）

和平区	6986				
新華街道	294	砂山街道	292	南七街道	273
勝利街道	210	民主街道	328	南站街道	341
吳淞街道	198	西塔街道	261	北市街道	455
北道口街道	273	北站街道	312	遂川街道	366
園路街道	219	八経街道	355	曇集街道	270
中華街道	233	太原街道	278	馬路湾街道	374
集賢街道	265	新興街道	474	南湖街道	644
十四緯路街道	271				
瀋河区	17411				
団結路街道	1069	恵工街道	942	朱剪炉街道	4841
一経街道	956	二経街道	438	小西街道	6074
大西街道	386	正陽街道	308	中街街道	282
山東廟街道	306	風雨坛街道	501	小南街道	298
濱河街道	262	万蓮街道	131	大南街道	270
文化路街道	347				



大東区	4661				
萬泉街道	307	管城街道	111	長安街道	341
珠林街道	282	小東街道	450	小津橋街道	261
大北街道	510	小北街道	395	遼瀋街道	290
洮昌街道	179	東站街道	202	二台子街道	242
東塔街道	441	新東街道	314	文官街道	242
公安局集体戶	94				
皇姑区	8211				
三台子街道	331	陵北街道	456	遼河街道	339
黑竜江街道	405	泰山街道	478	崇山街道	272
黄河街道	607	長江街道	527	昆山街道	1284
三洞橋街道	543	克儉街道	152	亜明街道	609
華山街道	275	寿泉街道	188	怒江街道	454
塔湾街道	376	明廉街道	614	向工街道	301
鉄西区	7018				
十二路街道	329	衛工街道	457	工人村街道	356
輕工街道	215	七路街道	346	重工街道	372
启工街道	307	路官街道	472	興齊街道	250
保工街道	233	馬壯街道	458	興順街道	288
齊賢街道	550	篤工街道	222	艳粉街道	153
興華街道	351	曇峰街道	308	貴和街道	278
興工街道	421	光明街道	241	齊虹街道	411
蘇家屯区	2371				
解放街道	278	鉄友街道	116	民主街道	348
臨湖街道	221	中興街道	94	姚千戶街道	423
陳相屯街道	80	林盛街道	39	紅菱街道	103
陳相屯鄉	1	沙河鄉	27	十里河鄉	164
大沟鄉	24	八一鄉	52	紅菱鄉	5
林盛鄉	9	永樂鄉	27	王鋼鄉	38
大淑鄉	3	城郊鄉	15	姚千戶鄉	1
白清寨鄉	8	佟沟鄉	266	塔山畜牧場	29
東陵区	1125				
五三街道	90	東陵街道	131	東陵鄉	18
前進鄉	103	英達鄉	153	高坎鄉	39
滿堂鄉	9	五三鄉	97	汪家鄉	36
深井子鄉	37	古城子鄉	1	長白鄉	33
渾河站鄉	94	白塔堡鄉	218	桃仙鄉	48
祝家屯鄉	2	王濱鄉	—	李相鄉	1

輝山畜牧場	15				
新城子区	2029				
新城子街道	137	虎石台街道	158	清水台街道	626
新城子郷	515	黄家郷	38	石佛寺郷	40
興隆台郷	14	尹家郷	28	道義郷	60
財落堡郷	79	虎石台郷	146	蒲河郷	1
望濱郷	1	馬剛郷	9	清水台郷	173
育新農場	4				
于洪区	3138				
于洪街道	93	楊士街道	43	北陵街道	158
于洪郷	76	楊士郷	10	北陵郷	76
陵東郷	131	造化郷	29	中朝郷	19
沙嶺郷	635	大興郷	12	馬三家郷	58
翟家郷	7	大潘郷	12	彰驛郷	11
高花郷	18	平羅郷	1083	老辺郷	567
解放郷	11	馬三家教養院	98		
新民県	4092				
新民鎮	1614	鎮郊郷	24	高台子郷	20
柳河沟郷	4	金五台子郷	199	紅旗郷	7
大紅旗郷	519	芦家屯郷	3	梁山郷	39
姚堡郷	3	周蛇子郷	5	大柳屯郷	13
于家堡郷	14	新農村郷	—	公主屯郷	270
東蛇山子郷	6	陶家屯郷	99	羅家房郷	104
三道崗子郷	47	興隆郷	33	興隆堡郷	17
大喇嘛郷	6	張家屯郷	—	胡名郷	54
法哈牛郷	9	前当堡郷	3	大民屯郷	980
遼中県	3840				
遼中鎮	278	鎮郊郷	1	六間房郷	9
烏伯平郷	661	于家房郷	24	朱家房郷	18
冷子堡郷	13	養士堡郷	11	劉二堡郷	—
潘家堡郷	14	楊士崗郷	35	茨子坨郷	38
老観坨郷	—	肖寨門郷	99	四方台郷	3
長灘郷	4	老達房郷	1796	大黒崗子郷	222
満都戸郷	252	牛心坨郷	1		

(注:回族以外に、瀋陽市戸籍を持つイスラーム系少数民族は17人であり、其の民族構成について、すべてはウイグル族である。彼らは瀋河区、大東区、皇姑区、鉄西区、蘇家屯区、東陵区と于洪区に在住し、皇姑区は最も人数が多い(9人)、それ以外の区は1-2人しかない。)

### 1986 年（瀋陽市統計）瀋陽市内および周辺の回民人口：

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 59357 人。

市内回族総人口は 43267 人。（其中、和平区 6842 人、瀋河区 16893 人、大東区 4734 人、皇姑区 7903 人、鉄西区 6895 人。）

周辺地域回族総人口は 8907 人。（其中、蘇家屯区 2470 人、東陵区 1127 人、新城子区 2067 人、于洪区 3243 人。）

周辺両県回族総人口は 7183 人。（其中、新民県 3616 人、遼中県 3567 人。）

注：1988 年の瀋陽市統計による、瀋陽市に属する回族村（回族人口数は村総人口の 30% を超える村）は以下のなる。

東陵区汪家郷養竹村	557 人、村内総人口数の 32% を占める。
東陵区英達郷趙家沟	335 人、村内総人口数の 43% を占める。
于洪区平羅郷白辛台村	359 人、村内総人口数の 42% を占める。
于洪区平羅郷平羅一村	856 人、村内総人口数の 41% を占める。
蘇家屯区佟沟郷劉後地村	312 人、村内総人口数の 43% を占める。
新民県大民屯郷二村	648 人、村内総人口数の 32% を占める。
新民県新民鎮南営子村	431 人、村内総人口数の 45% を占める。
遼中県老達房郷腰截村	1112 人、村内総人口数の 92% を占める。
遼中県老達房郷老観村	413 人、村内総人口数の 30% を占める。
遼中県新民屯鎮中村	360 人、村内総人口数の 43% を占める。

### 1990 年（中華人民共和國第四次人口調査）瀋陽市内および周辺の回民人口：

瀋陽市内および周辺の回族総人口は 67474 人。

市内および周辺地域回族総人口は 59619 人。（其中、和平区 7199 人、瀋河区 16335 人、大東区 6138 人、皇姑区 9733 人、鉄西区 8666 人、蘇家屯区 2839 人、東陵区 2095 人、新城子区 2138 人、于洪区 4476 人。）

周辺両県回族総人口は 7855 人。（其中、新民県 4092 人、遼中県 3840 人。）

瀋陽市内各街道（街道辦事處、政府行政機関の一種）の回族人口統計表： （単位：人）

和平区	7199				
新華街道	338	砂山街道	485	勝利街道	371
民主街道	297	南站街道	364	吳淞街道	190
西塔街道	288	北市街道	370	北道口街道	218
北站街道	317	遂川街道	411	園路街道	214
八経街道	320	曇集街道	251	中華路街道	171
馬路湾街道	395	集賢街道	417	新興街道	508
南湖街道	890	十四緯路街道	384		
瀋河区	16335				
団結路街道	699	恵工街道	892	朱剪炉街道	4291
一経街道	615	二経街道	315	小西街道	5284
大西街道	430	正陽街道	339	中街街道	251

山東廟街道	386	風雨坛街道	582	小南街道	515
濱河街道	306	万蓮街道	328	大南街道	588
文化路街道	514				
大東区	6138				
萬泉街道	375	管城街道	137	長安街道	510
珠林街道	369	小東街道	419	小津橋街道	250
大北街道	562	小北街道	494	遼瀋街道	319
洮昌街道	256	東站街道	408	二台子街道	659
東塔街道	460	新東街道	482	文官街道	313
司法局集体戶	125				
皇姑区	9733				
三台子街道	491	陵北街道	401	遼河街道	573
黑竜江街道	551	泰山街道	700	崇山街道	324
黄河街道	720	長江街道	596	昆山街道	951
三洞橋街道	504	克儉街道	162	亜明街道	594
華山街道	304	寿泉街道	171	怒江街道	494
塔湾街道	442	明廉街道	678	向工街道	275
太平街道	534	新樂街道	268		
鉄西区	8666				
十二路街道	627	衛工街道	563	工人村街道	242
輕工街道	599	七路街道	725	重工街道	419
启工街道	521	路官街道	578	興齐街道	358
保工街道	233	興順街道	347	齐賢街道	649
篤工街道	519	艳粉街道	187	興華街道	390
曇峰街道	264	貴和街道	271	興工街道	463
齐虹街道	480	凌空街道	231		
蘇家屯区	2839				
解放街道	233	鉄友街道	129	民主街道	297
臨湖街道	228	中興街道	146	湖西街道	211
大沟鄉	20	永樂鄉	24	王鋼鄉	26
大淑堡鄉	2	白清寨鄉	18	佟沟鄉	265
陳相屯鎮	112	十里河鎮	140	紅菱堡鎮	168
林盛堡鎮	363	姚千戶屯鎮	381	沙河鋪鎮	27
八一鎮	49				
東陵区	2095				
南塔街道	295	東陵街道	145	馬官橋街道	98
輝山街道	15	泉園街道	452	豐樂街道	184
前進鄉	172	英達鄉	114	滿堂滿族鄉	2

五三郷	98	汪家郷	70	古城子郷	—
長白郷	63	渾河站朝鮮族郷	100	桃仙郷	37
王濱沟郷	—	李相郷	3	高坎鎮	42
深井子鎮	12	白塔堡鎮	12	祝家屯鎮	1
新城子区	2138				
新城子街道	187	清水台街道	574	新城子郷	507
黄家錫伯族郷	22	石佛寺郷	23	尹家郷	35
道義郷	71	財落堡郷	86	望濱郷	—
馬剛郷	4	興隆台錫伯族鎮	5	蒲河鎮	8
清水台鎮	180	虎石台鎮	436		
于洪区	4476				
于洪街道	287	楊士街道	216	北陵街道	370
陵東街道	454	于洪郷	111	楊士郷	109
北陵郷	87	陵東郷	262	造化屯郷	74
大青中朝友誼郷	38	大興朝鮮族郷	15	翟家郷	10
彰驛站郷	19	高花郷	4	老辺郷	556
解放郷	7	沙嶺郷	616	馬三家鎮	78
大潘鎮	11	平羅鎮	1108	馬三家教養院	44
新民県	4045				
新民鎮	1813	大紅旗鎮	464	梁山鎮	11
公主屯鎮	281	興隆鎮	31	前当堡鎮	1
大民屯鎮	931	鎮郊鎮	14	高台子郷	1
柳河沟郷	5	金五台子郷	178	紅旗郷	3
盧家屯郷	1	姚堡郷	1	周坨子郷	4
大柳屯郷	14	于家窩堡郷	10	新農村郷	—
東蛇山子郷	8	陶家屯郷	79	羅家房郷	93
三道崗子郷	44	興隆堡郷	22	大喇嘛郷	4
張家屯郷	4	胡台郷	21	法哈牛郷	7
遼中県	3810				
遼中鎮	455	于家房鎮	11	朱家房鎮	15
冷子堡鎮	6	劉二堡鎮	3	茨榆坨鎮	89
新民屯鎮	323	満都戸鎮	219	楊士崗鎮	13
肖寨門鎮	60	長灘鎮	7	鎮郊郷	12
老達房郷	1624	大黒崗子郷	185	牛心坨郷	—
六間房郷	12	烏伯牛郷	755	養士堡郷	1
潘家堡郷	9	老観坨郷	4	四方台郷	7

（注：瀋陽市総人口数は 5, 827, 089 人、少数民族人口数は 509, 179 人（総人口の 8. 74%）、回族人口数は 67, 474 人（少数民族人口の 13. 25%）。集住地域は、瀋河区の小西街道、朱剪炉街道、于洪区の平羅鎮、新民県の新民鎮、大民屯鎮、遼中県の老達房郷。）

〈参考資料 2〉（出典：『瀋陽宗教志』（第 2 章第 4 節第 6 項の根拠）

# 2011 年第六次全国人口調査

## 瀋陽地区回族人口数

地区	百分比（人口比率）	人口数	男	女
総計	100	71403	35588	35815
和平区	9. 01	6433	3154	3279
瀋河区	21. 81	15575	7636	7939
大東区	9. 69	6919	3356	3563
皇姑区	15. 95	11387	5569	5818
鉄西区	11. 54	8241	4094	4147
蘇家屯区	3. 46	2473	1289	1184
東陵区	2. 37	1694	851	843
瀋北新区 <sup>254</sup>	3. 55	2537	1326	1211
于洪区	7. 80	5572	2883	2689
遼中県	3. 89	2779	1438	1341
康平県	0. 15	110	65	45
法庫県	4. 52	3228	1661	1567
新民市	5. 51	3933	1999	1934
瀋陽経済技術開発区	0. 61	432	220	212
棋盤山開発区	0. 13	90	47	43

## 瀋陽地区回族以外のイスラーム系少数民族人口数

民族名称	人数（人口数）	分布地区	その他
ウイグル族	538	瀋陽経済技術開発区と棋盤山開発区の以外に、瀋陽市内のすべての地区に分散して居住する。	和平区内の在住人口が最も多く、272 人に達している。
カザフ族	244	大東区、蘇家屯区、于洪区、遼中県、法庫県と棋盤山開発区の以外に、瀋陽市内のすべての地区に分散して居住する。	瀋河区内の在住人口が最も多く、135 人に達している。
東郷族	17	和平区、瀋河区、皇姑区、鉄西区、于洪区に居住している。	皇姑区内の在住人口が最も多い（7 人）。
クルグズ族	26	和平区、鉄西区、東陵区、于洪区、遼中県、法庫県と新民市に居住している。	新民市の在住人口が最も多い（13 人）。

<sup>254</sup> 2006 年 10 月、元の新城子区と瀋陽輝山農業高新技术開発区を統合し、瀋北新区が形成された。

サラル族	45	蘇家屯区、遼中県、法庫県と瀋陽経済技術開発区の以外に、瀋陽市内のすべての地区に分散して居住する。	瀋河区内の在住人口が最も多い（16人）。
タジク族	5	和平区、瀋北新区、于洪区に居住している。	和平内の在住人口が最も多い（3人）。
ウズベク族	0		
保安族	2	瀋河区と棋盤山開発区に居住している。	
タタール族	2	瀋北新区と新民市に居住している。	

〈参考資料3〉（資料由来：フィールドワーク収集）（第4章 章結の根拠）

回民社区生産経営単位

番号	企業名称	住所	その他
1	瀋陽星星家政服務有限公司	瀋河区清真路 29 号	
2	瀋陽墨道図文設計有限公司	瀋河区清真路 29 号	
3	美髪美甲設計中心	瀋河区清真路 29 号	美容院
4	鑫増鑫汽車美容	瀋河区小西路 84 号	汽車修理
5	吉利串店	瀋河区小西路 84 号	飲食店
6	永慶篩網	瀋河区小西路 84 号	
7	新天地超市	瀋河区小西路 84 号	小売店
8	超越達篩網	瀋河区小西路 84 号	
9	範紅岩煙店	瀋河区小西路 84 号	小売店
10	湘江春洗浴	小西路 82 号	
11	広発証券小西路経営部	小西路 82 号	
12	老董禿子能量醬骨	小西路 82 号	飲食店
13	茗香居	小西路 82 号	飲食店
14	南子撮影	小西路 76 甲 8 号	
15	S一造型	小西路 76 甲 7 号	
16	隆泰教育	小西路 76 甲 6 号	
17	宝之貝兒童撮影	小西路 76 甲 5 号	
18	満仁飲品店	小西路 76 号	飲食店
19	恩恩撮影工作室	小西路 76 号	
20	遼寧光維撮影印務中心	小西路 76 号	
21	瀋陽市酷楽宝兒童撮影	小西路 76 号	
22	瀋陽世貿人材培訓中心	小西路 76 号	
23	瀋陽市韓城宝兒童撮影	小西路 74 号	

24	瀋陽中大全篩網廠	小西路 74 号	
25	過橋米線飯店	小西路 74 号	
26	東南亞零食	小西路 74 号	
27	瀋陽耐跑輪胎銷售有限公司	南清真路 23 号門市	汽車修理
28	專業補胎電瓶	南清真路 23 号門市	汽車修理
29	爾丹尼調料店	南清真路 23 号門市	
30	順意超市	南清真路 23 号門市	小売店 (回族經營)
31	南市糕点烘培坊	南清真路 23 号門市	(回族經營)
32	鉄家童子鷄	南清真路 23 号門市	(回族經營)
33	米粒貨倉	小西路 74 号	
34	紅霞服装	小西路 74 号	
35	重慶酸辣粉	小西路 74 号	
36	花開盛市	小西路 74 号	
37	每之購超市	小西路 74 号	小売店
38	紅日出口成衣	小西路 74 号	
39	川香人家	小西路 74 号	
40	奇強汽車美容保養有限公司	奉天街 254 号	汽車修理
41	順風車港汽車裝飾維護中心	南清真路 23 号	汽車修理
42	清雅軒	市府大路 383 (回民大庁)	飲食店 (回族經營)
43	名仕髮廊	清真路 86 号	
44	民生糧油	清真路 86 号	
45	佩杰小吃	清真路 86 号	
46	香酥牛肉火勺	清真路 86 号清真路 86 号	飲食店 (回族經營)
47	馮記餃子館	清真路 86 号	飲食店 (回族經營)
48	龍騰小吃	清真路 86 号	
49	東陽麻辣燙	清真路 86 号	
50	楊家燒餅店	清真路 93 号	飲食店 (回族經營)
51	斌卿食雜店	清真路 93 号	小売店
52	米家小吃	清真路 91-1 号	飲食店 (回族經營)
53	清真骨頭房	市府大路 383 (回民大庁)	肉屋 (回族經營)
54	清真燒鷄	市府大路 383 (回民大庁)	焼き鳥 (回族經營)
55	松鶴園	市府大路 383 (回民大庁)	飲食店 (回族經營)
56	大松鶴園	市府大路 383 (回民大庁)	飲食店 (回族經營)
57	瀋河副食清真牛肉店	市府大路 383 (回民大庁)	肉屋 (回族經營)
58	劉記牛羊肉鋪	市府大路 383 (回民大庁)	肉屋 (回族經營)
59	西関羊肉	市府大路 383 (回民大庁)	肉屋 (回族經營)
60	楊記鮮牛羊肉鋪	市府大路 383 (回民大庁)	肉屋 (回族經營)
61	翔来順	市府大路 383 (回民大庁)	飲食店 (回族經營)



62	伊聖回味燒雞熟食	清真路 50 号 513	燒き鳥（回族經營）
63	楊阿訇清真肉鋪	清真路 50 号 111	肉屋（回族經營）
64	百世匯通	清真路 50 号 512	
65	楊家燜餅店	清真路 50 号 412	飲食店（回族經營）
66	中医推拿	清真路 50 号 211	
67	金廊美髮工作室	清真路 50 号 113	
68	瀋河盲人按摩	清真路 48 号 312	
69	美辰西点	清真路 48 号 212	（回族經營）
70	馬家快餐	清真路 48 号 112	飲食店（回族經營）
71	東陽糧油土特產	清真路 48 号 111	
72	馬家燒餅鋪	清真路 46 号 111	（回族經營）
73	新月穆斯林精品屋	清真路 46 号 112	ムスリムグッズ
74	清真小吃	清真路 46 号 112	飲食店（回族經營）
75	杰成天得汽車音響	清真路 46 号 113	
76	老韓頭連鎖店	清真路 46 号 213	（回族經營）
77	中医眼科	清真路 46 号 311	
78	瀋陽鑫世回民食品有限公司	清真路 46 号 312	（回族經營）
79	穆斯林用品大全	清真路 46 号 313	ムスリムグッズ
80	新疆阿里香超市	清真路 46 号 411	
81	張記包子鋪	清真路 46 号 412	
82	首佳開鎖	清真路 46 号 411	
83	伊斯美火鍋	奉天街 270 号	飲食店（回族經營）
84	芸華鮮花婚紗慶典	清真路 91 号	
85	欣祥和駕校	清真路 91 号	
86	金鋒榛子蘑菇	奉天街 274 号	
87	国大藥房	清真路 91 号	
88	回民商場茶莊	清真路 86 号	
89	瀋陽市回族幼稚園	南清真路 48-2 号	
90	西関茶莊	市府大路 383（大庁）	
91	小吃部（張富仁）	瀋河区清真路 84 号	
92	鉄家小吃部	瀋河区清真路 91 号	
93	日日紅五金建材商店	瀋河区清真路 84 号	
94	清真食雜店	瀋河区清真路 84 号	
95	左右時尚髮芸	瀋河区清真路 84 号	
96	精品図文	瀋河区清真路 84 号	
97	粒粒香榛子	瀋河区清真路 84 号	
98	和客便利店	瀋河区清真路 84 号	
99	奉天泊朗咖啡店	市府大路 387-1 号	

100	西関炖菜	市府大路 387-1 号	
101	周浩蓄電池	市府大路 387-1 号	
102	吉隆餡餅店	市府大路 387-1 号	
103	恒隆興煙酒經銷处	市府大路 387 号	
104	遼寧越佳律師事務所	市府大路 373 号	
105	遼寧人民律師事務所	市府大路 373 号	
106	瀋陽市技術開發基金辦	市府大路 373 号	
107	遼寧乾開律師事務所	市府大路 375 号	
108	鹿品堂	市府大路 375 号	
109	冠維律師事務所	市府大路 375 号	
110	遼寧金陽律師事務所	市府大路 375 号	
111	遼寧中宇智博律師事務所	市府大路 377 号	
112	蘭州牛肉面	市府大路 377 号	
113	法典書店	市府大路 377 号	
114	御龍閣賓館	市府大路 371 号	
115	瀋陽市利宏基物業有限公司	市府大路 373 号	
116	紅日音像	瀋河区清真路 91 号	
117	瀋陽市海馨龍宮餐飲有限公司	市府大路 387 号	飲食店(回族經營)
118	鼎溢西関羊肉	回民大庁	
119	西関鮮羊肉	回民大庁	
120	鮮牛羊肉鋪	回民大庁	
121	振生牛羊肉鋪	回民大庁	
122	西関牛羊肉鋪	回民大庁	
123	德記公牛羊肉店	回民大庁	
124	鉄家牛羊肉店	回民大庁	
125	西域楼餐庁	回民大庁	
126	祥順超市	瀋河区清真路 91 号	
127	遼寧省百貨有限公司	市府大路 387 号	
128	老北里回民九大碗	清真路 63 号	
129	新疆維吾爾美食	清真路 63 号	
130	十頭牛小吃	清真路 63 号	
131	天利園燒麦	清真路 63 号	
132	家記大個蒸餃	清真路 63 号	
133	春城清真餃子	清真路 63 号	
134	榮記燒餅鋪	清真路 63 号	
135	馬家一口酥牛肉火勺	清真路 63 号	
136	西関王記餃子館	清真路 63 号	
137	名煙名店	清真路 63 号	

138	西關小漁村	清真路 63 号	
139	王記餃子	清真路 63 号	
140	金家餡餅	清真路 63 号	
141	希來順清真牛肉餡餅	清真路 63 号	
142	鑫格調精剪坊	清真路 63 号	
143	新家橋房產仲介	清真路 63 号	
144	鴻晟斷橋鋁塑門窗廠	清真路 63 号	
145	博髮專業染燙	清真路 63 号	
146	燕賀食雜店	清真路 63 号	
147	楊興瀾小吃部	清真路 70 号	
148	都市貨郎	清真路 70 号	
149	双盛園	清真路 70 号	
150	潮水干洗店	清真路 70 号	
151	回味包子	清真路 70 号	
152	牛街湯包	清真路 70 号	
153	合家樂超市	清真路 70 号	
154	藍香齋	清真路 70 号	
155	綠莊園牛肉食品批發部	清真路 70-1 号	
156	阿英美髮	清真路 70-2 号	
157	久久便利店	清真路 72-2 号	
158	兄弟部落	清真路 72-2 号	
159	回民糕點	清真路 72-2 号	
160	阿美髮厅	清真路 72-2 号	
161	新美池图文	清真路 72-2 号	
162	瀋陽伽瓦俐服装公司	瀋河区奉天街 291 号	
163	瀋河区回夢旅館	瀋河区奉天街 289	
164	瀋河区 68 度五糧液	瀋河区奉天街 289	
165	瀋河区老鬼海鮮串吧	瀋河区奉天街 289 号	
166	瑤芳清顏專業祛痘	瀋河区奉天街 275 号	
167	熱潮服装店	瀋河区奉天街 275 号	
168	星馬汽服	奉天街 271-1	
169	承億澤寄賣行	奉天街 276	
170	蟹天蟹地	奉天街 261 号	
171	順達汽車裝飾	奉天街 261 号	
172	瀋陽市瀋河区九方雕刻裝飾部	瀋河区奉天街 257 号	
173	芭儷站木子服装店	瀋河区奉天街 255 号	
174	瀋陽合泰寄賣有限公司	瀋河区奉天街 251 号	
175	遼寧龍途行投資管理有限公司	瀋河区奉天街 251 号	

176	瀋河区吃不够開口餡餅	瀋河区小西路 66 号甲	
177	天使之城兒童攝影	瀋河区小西路 66 号 3 甲	
178	曹永剛醫療美容診所	瀋河区小西路 66 号甲	
179	瀋河天宇友惠電線電纜銷售有限公司	瀋陽市瀋河区小西路	
180	遼寧撫纜有限公司	瀋陽市瀋河区小西路	
181	瀋陽市索菲亞數碼沖印	瀋陽市瀋河区小西路	
182	M. M 服飾	小西路 64 号	
183	羊湯館	小西路 64 号 3 甲	
184	英惠哲服飾店	小西路 64 号	
185	大娟美容院	小西路 64-3	
186	新疆特味樓	小西路 64-3	
187	佑安藥房有限公司	小西路 64-6	
188	瀋陽高潔汽車清洗保養有限公司	奉天街 279	
189	瀋陽市熱力辦公室	小西路 64 号	
190	瀋陽方森印刷有限公司	小西路 64-6 号	
191	瀋陽凱美欣電線電纜有限公司	小西路 66 号甲 5 号	
192	瀋陽民族房屋開發公司	奉天街 251 号	
193	瀋陽那得利人材服務有限公司	奉天街 251 号	
194	瀋陽省盛欣物業管理有限公司	奉天街 251 号	
195	遼寧天緣人力資源服務公司	小西路 64-3 号	
196	瀋陽鍋爐房服務中心	小西路 64 号甲	
197	遼寧普維律師事務所	奉天街 251 号	
198	瀋陽市技術改造實業總公司	小西路 64 号甲	
199	瀋陽寶隆典當行	瀋河区小西路 87-1 号	
200	遼寧泰康國際旅行社	瀋河区小西路 87-1 号	
201	信合典當	瀋河区小西路 87-1 号	
202	智慧園便利店	瀋河区小西路 87-2 号	
203	男人幫	瀋河区小西路 87-2 号	
204	智彩美術廣告	瀋河区小西路 87-2 号	
205	興隆快餐店	中山路斗姆宮 23 号 20	
206	益民房產	中山路斗姆宮 23 号 18	
207	福全鮮水果店	中山路斗姆宮 23 号 10	
208	川味飯店	中山路斗姆宮 23 号 8	
209	京西煤炭	中山路斗姆宮 23 号 17	
210	紫竹苑框芸	中山路斗姆宮 23 号 14	
211	吉順烤場	中山路斗姆宮 23 号 13	
212	每日欣超市	中山路斗姆宮 23 号 12	
213	山城家常菜館	中山路 312 号 114	

214	蘭州牛肉拉面	中山路 312 号 113	
215	老好吃大春餅	中山路 312 号 212	
216	手机平価超市	中山路 312 号 213	
217	姊妹餃子鋪	中山路 312 号 214	
218	楓髮芸	中山路 312 号 211	
219	中国移动營業厅	中山路 312 号 211	
220	福源隆超市	中山路 312 号 311	
221	新易達文化用品、図文店	中山路 312 号 411	
222	一尚優品鮮花	中山路 312 号 412	
223	大図晒図刻章電動車修理	中山路 312 号 413	
224	盛興美術	中山路 312 号 414	
225	聯発図文刻章	中山路 312 号 414	
226	中成專業減肥	中山路 312 号 511	
227	選潔	中山路 312 号 512	
228	友誠	中山路 312 号 513	
229	美爆潮品	中山路 312 号 611	
230	好隣居便利店	中山路 312 号 612	
231	好運捷汽車代駕	中山路 312 号 613	
232	小辮子軟性裝飾設計	中山路斗姆宮巷 52	
233	美妮高質洗衣店	中山路斗姆宮巷 52	
234	小四川家常菜	中山路斗姆宮巷 52	
235	莉萍高級干洗店	中山路斗姆宮巷 52	
236	暢達通訊	中山路斗姆宮巷 52	
237	日用品商店	中山路斗姆宮巷 52	
238	東大物業	小西路 87 号	
239	順鑫快餐	中山路 312 号	
240	老李大盤子	中山路斗姆宮巷 52	
241	渝味道家常菜	中山路斗姆宮巷 52	
242	新春譚肉館	中山路斗姆宮巷 52	
243	重慶風味家常菜	中山路斗姆宮巷 52	
244	政通和篩網	中山路 328 号 811	
245	安平絲網經銷部	中山路 328 号 812	
246	瀋興攪欄、篩網廠	中山路 328 号 813	
247	福星篩網銷售部	中山路 328 号 814	
248	原興達篩網經銷部	中山路 328 号 713	
249	方圓篩網廠	中山路 328 号 612	
250	小豆現磨豆浆	中山路 328 号 613	
251	快好電腦	中山路 328 号 614	

252	樹超絲網銷售部	中山路 328 号 614	
253	隋心小厨	中山路 328 号 514	
254	億桶好飯	中山路 328 号 513	
255	蒸食惠早点	中山路 328 号 512	
256	隆興面館	中山路 328 号 511	
257	美格髮型設計	中山路 328 号 511	
258	中国体育彩票	中山路 328 号 414	
259	移動通訊	中山路 328 号 514	
260	瀋河盲人按摩	中山路 328 号 414	
261	貼心衣厨	中山路 328 号 413	
262	寓果緣	中山路 328 号 412	
263	外貿童装	中山路 328 号 411	
264	童翼繪本屋	中山路 328 号 314	
265	外貿原单	中山路 328 号 312	
266	一方写真攝影	中山路 328 号 311	
267	新芸橋房產	中山路 328 号 214	
268	卓芸美術	中山路 328 号 213	
269	櫻之花寿司	中山路 328 号 212	
270	LY	中山路 328 号 211	
271	食雜店	中山路 328 号 114	
272	華盛美、印刷設計	中山路 328 号 113	
273	吉祥餛飩	中山路 328 号 111	
274	李憲举中医	中山路 326 号 10	
275	洋河藍色經典	中山路 326 号 8	
276	鉄曇武術健身俱樂部	中山路 326 号 6	
277	祥康百年養生堂	中山路 326 号 5	
278	小西寶館	中山路 326 号 4	
279	萬帮大藥房	中山路 326 号 3	
280	碧海藍天網吧	中山路 326 号 2	
281	完美有限公司遼寧分公司	小西路 85 号 10	
282	金諾安康保險代理有限公司	小西路 85 号 8	
283	瀋陽市小西永嘉口腔門新診	小西路 85 号 7	

〈参考資料 4〉（出典：『瀋陽回族志』）（第 4 章 章結の根拠）

瀋陽市集体回族飯店

飯店商号	經理	場所	飯店商号	經理	場所
木蘭回民燒麦館	王守剛	環城路	寿泉回民飯店	楊春香	皇姑区華山路
回民大飯店	王敏	北陵門前	春曉飯店	胡佩娟	遼河街七号

民族風味飯店	崔秀杰	華山路 492 号	一品香蒸餃館	王紹芝	華山路六段
西關風味館	李儒明	寧山路 64-1	新樂回民餐庁	王玉財	黃河北大街
清真小吃部	劉曉春	龍江街 34 号	沁園春飯莊	王慶利	昆山中路 131 号
古蘭餐庁	康鳳志	寧山路	星月齋飯店	王岐	岐山路東路
老彝彝飯店	白亜男	珠江街	穆斯林餐庁	洪翠霞	崇山西路
平川虎居飯莊	馬麗敏	保工街	回味餐館	程金	北二中路
回族飯店	馬樹超	南六中路	清真回民飯店	王中義	北二中路
永園德回民飯莊	楊彥斌	重工南街	清真餃子館	白文玉	北四東路
新味回民飯店	王秀清	重工十馬路	伊斯蘭康樂餐館	馬馳	応昌街
清真餃子館	李広義	北四路	小北燒麦館	白淨潔	聯合路
大北辺門飯店	信召曇	大北関街	清真小吃部	劉占立	辺牆里 5 号
北運河回民餐庁	姜鉄成	望花街	三香園飯店	賀新	滂江街
意合餃子館	蔡恩林	黎明八街	龍鳳齋燒麦館	洪家華	珠林路
龍海燒麦館	張海霞	珠林路	清真高級豆腐館	趙旺	小東路
味香小吃部	張宝榮	小津橋路	金家燒麦館	馬朝有	小北街
特品香回民飯店	劉耀光	珠林路	馬家餃子館	王学勤	瀋撫路
小風帆飯店	王顔秋	東陵西路	樓外房飯店	張英梅	東陵西路
傻子餡餅店	丁強	東陵西路	耀君回民飯店	馬立英	東陵西路
周家燒麦館	周宝霞	東陵西路	清真包子館	夏紅革	東陵西路
四毛抻面館	鉄広全	珠林路	美食佳飯店	麻然潑	聯合路
厨師班飯店	梁恩宇	小河沿	民航小吃部	常士軍	民航西街
懷海餃子館	馮懷海	東站街	東站包子鋪	楊里恩	東北大馬路
大三元飯店	張奎敏	東站前街	青年回民餐庁	趙志勇	瀋陽路
大西回民飯店	趙執立	瀋陽路	回民飯店	劉海軍	大南街
奔馳飯店	蔡志偉	大南街	清真風味館	韓秀芝	十三緯路
風味香回民飯店	楊力	小南大街	盛軒燒餅鋪	鄭宝蘭	小南大街
瀋開回民餐庁	何俊安	小北街	宮後回民飯店	楊光敏	鼓樓南
宮後包子鋪	王英偉	鼓樓南里	穆斯林飯店	王風	小津橋路
魁星飯店	高永貴	魁星樓路	步步高餐庁	楊春福	熱鬧路
桃源飯店	李作奇	大西路	馨鑫包子鋪	李維文	小南路
治安回民飯店	王学文	熱鬧路	新星回民飯店	黃貴舟	小南路
風味回民飯店	孫曉宇	小南路	天意園飯店	孫瑞清	文芸路
蘭州抻面館	郭素賢	五里河	回民燒麦館	劉希国	新北站
国興飯店	齐国興	新北站西	新北回民飯店	路玉霞	新北站南
馬家燒麦館	鉄大義	新北站西	快而香餐庁	奂姪娜	大南街
龍源回民飯店	李廷華	大舞台南	順利餃子館	楊永斉	惠工広場
回味香飯店	張連発	明廉路	回民燒麦部	張占恩	華山路
一心回民飯店	張賛恩	華山路	寿泉回民飯店	楊春香	淮河路

口味香回民飯店	張連發	明廉路	明廉肉餅店	劉士榮	明廉路
三星回民飯店	楊子華	寧山路	新興飯店	張双印	昆山中路
春曉飯店	胡佩娟	岐山東路	一品香蒸餃館	王紹芝	華山路
穆斯林飯莊	石潤福	珠江路	月明春回民飯店	白洪俊	巴山中路

〈参考資料 5〉（出典：『瀋陽回族志』（第 4 章 章結の根拠）

瀋陽市市内五区の私営回族飯店

和平区：

飯店商号	所有者	場所	飯店商号	所有者	場所
恵好飯店	劉翠松	北三馬路	利鳳小吃部	王宝貴	桂林街
榮昇園飯店	米素蘭	南京街	華明飯店	王立	北市場
味香餃子館	梅程業	北市場	馬家燒麦	寶紅軍	北市場
橋頭飯店	樊桂榮	北市場	大陸飯店	馬煥德	民主路
楊家小吃部	樊守蘭	南二馬路	回味香飯店	寶桂芳	南一馬路
義春園回民飯店	計長銀	南京街七馬路	麦加清真飯莊	郭仲	南京街六段
依瑪尼餐庁	郭連挙	南京街	北二回民小吃部	聞国棟	北二馬路
味里香回民飯店	芦鳳蘭	和平大街	北市清真斎	王秀華	市府大路
味香回民飯店	那穎	民主路	振興清真飯店	馬振坡	勝利街
昼夜回民小吃部	胡素蘭	勝利大街	群英回民小吃部	任毅榮	勝利大街
利和餐庁	高燕	勝利大街	李家燒麦館	王玉亭	民族街
鉄園小吃部	胡鳳鳴	民族街	風華園飯店	遲成高	
慶繁飯店	魏東	北三馬路	楊明小吃部	張長菊	太原街三段
得意回民飯店	王庭甫	民族街	一品香餃子館	王世鐸	重慶北街
王鐸園小吃部	王登滿	北市場	清真飯店	趙玉芝	同澤街
回民小吃部	李子英	民族街	回民燒麦館	張薇	民族街
瀋京燒麦館	回憶	大西路	可心飯店	海峰福	南京街
華園清真館	徐貴来	南京北街	西域春小吃部	馬玉臣	集紅街
中發清真館	高永庫	北三經街	双益飯店	馮雅曇	北三經街
東来順飯莊	楊保章	北市場	馮家餃子館	馮麗杰	皇寺路
新興小吃部	楊華	皇寺路	南洋燒麦館	張順功	太原街
趙家燒麦館	趙宝库	太原街	清真小吃部	楊順杰	太原街
王家燒麦館	王雅秋	南三經街	春華園飯店	馬秀春	太原街
民主餐庁	左占英	三經街	李家餃子館	李紹紅	北市場
楊家餃子館	馬雅平	北市場	馬家餃子館	張玉蘭	北市場
左家餃子館	王耀榮	北市場永宜里	新北回民飯莊	曹国發	北市場
穆斯林飯莊	李春陽	市府大路	楊記飯店	楊濤	中山路
芦家回民飯店	尹雪芹	北市場作頌里	北安飯店	張殿成	北市場街
建華燒麦館	周建	西塔街	月中園餐庁	楊素惠	拉薩街



青春園燒麥館	莫廷有	新華廣場	林香居飯店	張德林	勝利大街
蘭屋燒麥館	胡里訪	太原街	清真軒餃子館	高明會	勝利大街三段
利園飯店	馬志敏	勝利大街五段	回民餐館	張廣普	北二馬路
香園回民餐館	張中華	市府大路四段	海龍清真飯店	張淑娟	南京街三段
清真餃子館	白平	南京街五里	清真小吃部	回達萊	皇寺路三段
伊光園回民飯店	鉄執林	五里河二段	永興飯店	張玉芬	八經街
路灣回民飯店	孔亮霞	八經街	回民燒麥部	張微	民族街四段
田園飯店	石波	和平大街三段	艷華飯店	艷華	遂川十里
西關風味包子鋪	馮繼環	北市場作頌里	風味餃子館	李素芬	皇寺路新玉里
南湖清真飯店	劉志榮	三好街	曇集回民飯店	王玉蘭	太原街一段
回民小吃部	丁有強	太原街四段	天津餡餅	劉振有	同津街
清真餃子館	趙玉芝	同澤街	園利號燒麥館	王長占	天津北街
清真小吃部	張榮	太原街三段			

**瀋河区：**

飯店商号	所有者	場所	飯店商号	所有者	場所
站前回民飯店	蔣順平	新北站	王家燒麥館	楊靜珍	市府大路
品品香飯店	張桂清	團結路	楊家燒麥館	陳福昌	大西路
英海園回民飯店	楊海蛟	五經街	胡家燒麥	胡寶森	十三緯路
盛興園回民飯店	楊龍達	十三緯路	興華回民飯店	武俊義	中山路
自立成小吃部	馬文革	東順城內街	清真燒麥館	李向陽	瀋陽路
香園清真飯店	賽艷茹	瀋陽路	馬記回民小吃部	馬麗君	一經街
恩德園飯店	邱維武	鼓樓南里	盛發園飯店	王岩	文芸路
黑家燒麥館	黑大海	大南街	馬家燒麥館	馬達	大南街
玉香齋肉餅店	姚晶賢	大南街	環城餐館	李壽先	大南街
民族風味餃子館	王岩	大南三段	回民小吃部	王家亮	市府大路
紅英燒麥館	洪英	大西路	風味包子鋪	石桂芹	大西路
強盛飯店	劉國強	望雲寺路	福來順飯店	回文利	瀋陽路
同心餡餅店	劉寶森	大南邊門	回民小吃部	金玉蘭	大南街
馬家燒麥館	張彩曇	文芸路	一盛軒餃子館	金淑環	洮昌路
黑家肉餅店	杜學勤	洮昌路	回味香回民餐館	馬洪卓	瀋陽路
楠楠清真館	楊楠	中央路	回回肉餅店	楊龍宇	中央路
聚興園	劉凱	銅仔巷	向楊回民小吃部	孫蘇婷	團結路
福盛東飯莊	張曉晶	正陽街	小北包子鋪	李麗微	正陽街
小北第一餡餅店	劉正奇	正陽街	第一香餃子鋪	馬炳仁	小南街
香濱飯店	逢煥君	風雨壇	東民飯店	潘東民	熱鬧路
蘭海園飯店	陳淑琴	大西路	味香回民飯店	房師傅	大南街
楊家回民餃子館	楊春安	大南街	王家燒麥	王宏	熱鬧路
迎賓風味包子鋪	石光輝	熱鬧路	清人小吃部	張翰清	熱鬧路

馬家清真大餅店	馬君	熱鬧路	西關清真館	劉洋	大西路
胡記包子鋪	郭鳳菊	十三緯路	李家回民飯店	李瑞英	小南大街
馬家燒麥館	房師傅	五愛市場	新建回民小吃部	劉福芹	風雨壇
順通回民飯店	康景鈞	順通小区	永盛園回民飯店	白桂芹	大南街
老鉄回回館	劉書林	大西菜行	麥加回民館	蒼建国	朝陽街
張記小吃部	楊俊桂	大南街	興樂園餃子館	馮岩	小南街
尹記清真燒麥館	尹祺偉	小南街	霞瑞回民飯店	傅秀娟	大南街
莉岑餃子館	楊莉岑	小西路	麥加城飯莊	李澤	小西路
馮家燒麥館	馮偉艷	小北街	李家餃子館	鉄維莉	惠工街
亜洲回民飯店	王世君	市府大路	馬家燒麥館	馬闢	一經街
王記餅子館	崔麗娟	大西菜行	肉餅店	金長凱	菜行北里
蘭香閣餐庁	朱玉華	青年大街	小西回民飯店	王殿珍	小西路
犇犇蠡	楊日東	大南街	絲路回民飯店	楊路	広宜街
黑家包子館	黑桂香	小西路	一來順清真館	王秀勤	小西路
星月飯店	陳桂珍	惠工街	東來順飯店	鄧延臣	大南街
馬家小吃部	馬素琴	小西路	會賓餃子館	楊龍賢	一經街
宏麗餐庁	回秀珍	惠工街	昌凶包子鋪	李立新	団結路
白露餐庁	岳立樹	一經街	清真餃子館	張淑珍	同澤街
田園飯店	石波	和平大街	老王記餃子館	王威	東寺巷
寶石便民小吃部	馬素芹	寶石南里	王餃子館	張玉瑩	東寺里
義利餃子館	王英菊	寶石里	東寺便民燒餅鋪	米常芹	東寺里
小霞餡餅鋪	張天霞	東寺里	王記餃子館	王玉霞	寶石南里
寺北王家餡餅	王宏杰	伊光里	回記包子鋪	楊書英	伊光里
金記餡餅鋪	金洪礼	北寺里	李家清真館	張静芝	北寺中巷
林記風味小吃	張光	北寺東里	回記包子鋪	回巨林	伊光里
天利和飯店	馬寧	市府大路	回頭客餃子館	左学蘭	市府大路
風味清真館	楊書菊	市府大路	林包子鋪	林連貴	市府大路
楊家抻面館	楊華	市府大路	吉隆餡餅店	閻繼文	市府大路
米老大餡餅鋪	王雅軍	北寺里	金家餡餅店	金成祥	伊光里
聚友民族飯店	陳宝玉	市府路	四合小吃部	索鳳曇	于進士里
馮家清真館	王殿真	于進士里	楊家清真館	郝宏斌	寶石里
向陽飯店	張向陽	寶石里	翠琴燒麥館	李翠琴	東寺里
一心餡餅店	朱連堯	寶石里	春城清真館	張素蘭	百花里
松鶴園	鄭鳳	百花里	長發園清真館	馬有維	百花里
楊家大餅店	楊宝单	百花里	恩發園餃子館	馬曇蘭	市府大路
回民小吃部	劉福英	芥星里	春來順飯店	馬英光	一經街
興盛餃子館	李明路	惠工街	得利園飯店	劉素芝	遊園里
香來園飯店	萬宝峰	市府路	馬家燒麥館	馬增運	遊園里

王家餃子館	劉杰	遊園里	阿晨餐庁	張美令	市府路
王記餃子館	王世臣	北寺里	曉雪飯店	韓雪	澤工南里
全堂香飯店	馮全堂	花園里	回記包子鋪	回巨清	花園里
張樓清真館	馬志方	伊光里	多味餐庁	鉄淑蘭	伊光東里

**大東区:**

飯店商号	所有者	場所	飯店商号	所有者	場所
蘭州抻面	何秋梅	珠林路	三毛抻面館	常生燕	珠林路
盛三軒餃子館	張立英	北海街	香宇飯店	王国良	老瓜堡
回回宮肉餅	王桂芝	広宜街	盛京回民飯店	陳香義	新津橋路
溢香餃子館	王連義	北順城路	伊斯蘭餐庁	金公武	望花橋東
王記餃子館	李鳳武	望花橋北	思楊燒麦館	楊樹林	南卡子門
長安清真小吃部	王世平	魁星樓路	利君回民飯店	展超	大東路
犇犇蠡飯店	楊世強	大東什字街	馬家餃子	劉穎濤	東順城路內街
白記餃子館	白麗	珠林路	北海清真館	曹玉	北海街
馬家餃子館	龔秀英	東北大馬路	馬家餃子館	黃慶国	竹林路
馬家餃子館	白杰	瀋鐵路	西関餃子館	張奎敏	瀋鐵路
風味包子鋪	曹桂芳	瀋鐵路	傻子肉餅	鉄広力	瀋鉄公路
独一処餃子館	馮広遠	瀋鐵路	園籠燒麦館	孫桂蘭	小二台子
三盛軒牛肉館	袁鳳英	小二台子	開通餃子館	常玉菜	洮昌街
清真飯店	高連芳	洮昌街	風味豆菜館	李成堅	洮昌街
王記餃子館	王振華	梨樹里	鑫声包子鋪	韓鳳莉	洮昌街
鉄家餃子館	鉄吉玉	聯合路	吉祥清真館	于貴新	吉祥市場
盛香園餃子館		遼瀋街	穆斯林飯店	韓艷	營口街
鉄家餃子館	鉄広慶	十四中学西	回記包子鋪	李俊英	十四中学西
双盛軒飯店	孫敬双	東北大馬路	張家餃子館	楊芝香	清泉路
回民餡餅鋪	劉啓斌	大東體育場	體育場回民餐庁	劉伯軍	八王寺西巷
馬家燒麦館	馬汝良	清泉路	西関餃子館	常玉菜	洮昌街
東宝飯店	石水	広宜街	順義燒餅鋪	馬忠義	東順城街
西関肉餅店	吳穎	紹糖巷	特品香回民飯店	劉耀光	珠林路
三香園飯店	賀新	滂江街	又一香肉餅店	李香娟	魁星里
黑家肉餅店	黑克敏	四德里	馬家燒麦館	馬桂香	四德里
王記餃子館	王素蘭	四德里	西関餃子館	張奎敏	東北大馬路
新樂園飯店	戴曇霞	東陵西路	清真飯店	劉英	201 市場

**鉄西区:**

飯店商号	所有者	場所	飯店商号	所有者	場所
西站回民飯店	王淑清	重工南街	林包子鋪	張連福	
楊家清真館	楊耀安	遼瀋中路	馬家清真館	金殿武	路官街
橋頭回民飯店	楊淑清	路官街	西來順回回館	楊保芝	程工街

民族餐庁	張玉平	保工街	興工大餅店	何英	興工北街
金星回民飯店	于香蓮	興工北街	麦加城飯店	馮岩	北四東路
民族飯店	張奎敏	興順街	園箆餃子館	馬維榮	工人村十二路
回香牛肉大餅店	陳士英	工人村	十里香餃子館	洪菊芳	六路
一心回民飯店	王淑平	啓工街北一路	回民小吃部	閻国棟	北二馬路
天然居回民飯店	張曉菊	興工街	如意回民飯店	于洪生	興工街
穆斯林飯店	邢玉芳	興工北街	春宝香餃子館	王志剛	興工街
独一处餃子館	張常宏	興工興明里	風味餃子館	劉玉鳳	工人村十二路
清真風味燒麦館	鉄大志	工人村	陳家牛肉大餅	陳愛英	工人村
張家燒麦館	張福山	工人村	清真牛肉大餅	李景陽	勞働公園北
金星燒麦館	馬向林	興工街	清真餃子館	劉杰	興工街三段
奇味飯店	郝淑芹	啓工街	啓工回民飯店	楊宏	重工北街
清真燒麦館	韓鳳英	零公里处	清華餃子館	劉平	重工街
独一处回民飯店	許麗	零公里处	馬家燒麦館	高雅華	重工街
回民大餐厅	馬俊芝	新華街	西域餐厅	韓兆蘭	北四馬路
回回營包子鋪	米志永	新華街	独一处餅子館	楊俊国	七馬路
穆斯林餐厅	馬宝力	曇峰街	偉英回味館	田偉	曇峰街
金山餃子館	戈金山	曇峰街	桂杰清真飯店	温学光	景星街
百肴飯店	王敏清	北二路	北二抻面	張淑蘭	北二路
犇蠡燒麦館	劉存生	北二路	留恋飯店	金鵬	景星街
風味飯店	金魁	景星街	清軒真飯店	金宝山	景星街
榮玉飯店	常曇霞	建設大路	景林餃子館	符景林	建設大路
馬家燒麦	馬克曇	光明街	犇犇蠡燒麦館	趙秋鳳	光明街公益里
大光明燒麦館	張鳳霞	光明街前巷里	西関城餐厅	張玉榮	光明街 4-1 号
清真回民館	房德超	光明街	回民小吃部	李中偉	光明街北中路
馬家飯店	郭平	光明街 100 号	銘銘清真小吃部	白双福	光明街
独一处飯店	傅春燕	保工街	犇犇蠡燒麦館	宋士慶	景星南街
清真燒麦館	楊翠珍	保工街五段	香香燒麦館	陳克文	曇峰街
強勝回民飯店	劉強	珠江橋南	北一路飯店	張維漢	虹橋路
齊賢餃子館	李素蘭	齊賢街	蔡家飯店	蔡松柏	興順街
伊斯蘭燒麦館	錢文利	北二路	金英清真飯店	金愛英	北二路
回回營餃子館	鄭鳳莉	北四路	清香燒麦館	陳中学	景星街
星月燒麦館	張秀梅	十馬路	清真馬家燒麦館	張海珍	北四中路
星月燒麦	白海	北二路	回民飯店	王玉鵬	啓工街
西域齋飯莊	白宝熟	重工街	回香齋飯店	王虹	啓工街
天合園飯莊	張淑芳	重工街	民族回民飯店	王福顯	愛工街
偉英回味飯店	偉英	曇峰街	清真餃子館	李晶	北四路
伊斯蘭餐厅	李海龍	北四路貴和街	回味齋飯莊	白国貴	重工南街

新味回民飯店	王秀香	十馬路	清真飯店	鏡尚林	衛工街
晶川回民飯店	王海志	興工街	清真餃子館	白文玉	北四東路
北四回民餐館	王孝欽	北四路	公交飯店	梁繼中	興華街
陳家燒麥	陳澤林	保工街	鉄池清真館	鉄繼艷	馬壯市場
陳家回民小吃	陳中志	景星街	日味齋燒麥	陳賓	七馬路
天成園飯店	劉瑞林	齊賢街	馬記清真包子鋪	馬炳義	興工北街
民族餐館	楊文中	南十東路	回民餃子館	王靜	貴合街
穆斯林飯店	戴學峰	北四路	西關燒麥館	楊楷	輕工街
清真餃子館	劉淑清	重工街	白玉燒麥館	王淑岩	南六西路
老白玉燒麥館	王耀武	中六路	燒麥餃子館	朱洪珍	齊賢街
振興牛肉大餅	陳愛英	齊賢街	楊家大餅店	郭乃新	齊賢街
順意小吃部	唐文革	保工市場	白東風味餐庁	白宗雨	保工街
清真回民飯店	庄娟	鄭家洼子	穆斯林餐庁	梅冬	羊吉衛
張家燒麥館	張樹清	重工街			

#### 皇姑区：

飯店商号	所有者	場所	飯店商号	所有者	場所
馬家燒麥館	馬丁	白龍江街	生隆燒麥館	生隆	皇姑劇場對面
昆山小吃部	李延清	淮河街工段	一心回民飯店		華山路六段
清真燒麥館	邵桂蘭	昆山中路	德盛園飯莊	馬維佳	香山路新樂區
香園飯店	崔迎賢	天山路	恒祥春飯店	黃福記	明廉路 13 号
星月回民餐庁	馬東光	後塔街 75 号	犇犇蠡飯店	張紹仁	後塔 17-2 号
回民包子鋪	鉄玉茹	昆山西路一段	馬家燒麥館	王群	怒江北街
雅清齋回民飯店	錢素芝	昆山白樓市場	守杰燒麥部	左祿偉	泰山路三段
順發園飯店	張占斌	香炉山路	獨一処包子鋪	石儒明	寧山路
高記清真小吃部	劉瑞環	長江街	晨光小吃部	王莉	長江街
又一村回民飯店	王信堂	北行東門外	麥加回民飯店	李志剛	長江街南區
楊家清真館	段統東	淮南市場	一品香蒸餃館	陳素鐸	華山路
北行回民飯店	高秀蘭	北行西門	北行回民燒麥部	王國亮	北行西門
盛友回民飯店	楊長纓	華山路	木蘭回民燒麥館	王守剛	環城西路
清真飯莊	陳學勝	寧山路	興樂園飯店	程丹	昆山西路
馬家燒麥館	王永庫	怒江街	英杰飯店	馬杰	華山路
壽山回民風味店	左樹森	怒江街	和順居飯店	許莉	後塔里
二七肉餅店	鉄威	淮河街	西關清真餃子館	白鉄寧	怒江街
西關清真燒麥館	馬麗	怒江街	德林回民小吃部	顧海琴	寧山路
犇犇蠡飯店	傅曉菊	怒江街	清真小吃部	張贊茂	華山路
雅軒餐庁	王印樹	珠江街	龍江居回民飯店	孫長乙	珠江街
伊光餃子館	隋世家	珠江街	風味回民包子鋪	李明訓	龍江街
昆山回民小吃部	丁國仁	昆山西路	振祥肉餅店	劉淑珍	明廉市場

明君園飯店	胡立君	龍江街	義蘭軒燒麥部	張文才	昆山中路
犇犇蠡燒麥館	陳寶剛	向工街	馬記回民小吃部	馬彩曇	明廉市場
向工回民飯店	劉素芹	明義北里	尤四福老肉餅店	吳俊杰	通站東里
生隆回民燒麥館	白玉清	前塔五里	香園回民飯店	楊秀芹	天山路
于家燒麥館	于洋	天山路	德龍清真館	王紹德	北行北
愉園回民小吃部	楊常平	北行輕工市場	米家燒麥館	米國義	黃河大街
環西燒麥館	王赫	淮河街	回民餡餅鋪	夏玉英	明廉路
東方穆斯林飯店	米桂蘭	向工東路	獨一處包子鋪	姚玲	寧山路
恩順路	穆瑞欽	長江街	王家餃子館	王洪兵	北陵大街
雅齋清真飯店	姜紅萍	昆山東路	李家餡餅鋪	李桂英	黃河大街
犇蠡餃子館	趙麗茹	黃河大街	純西關餃子館	劉品吉	黃河大街
西關馬家餃子館	王太玉	華山路	順利餃子館	穆瑞敏	華山路
福合永回民燒麥	馬鐸曇	華山路	伊斯蘭小吃部	韓文芹	怒江街
福翁在回民飯店	馬恩族	華山路	獨一處燒麥館	李萍	華山路
西關餃子館	展宏吉	華山路	清真小吃部	張玉榮	華山路
長盛小吃部	瀋洪太	華山路	西關回民餃子館	展宏閣	珠江街
金彪回民燒麥館	李鳳義	珠江街	恩盛永燒麥館	馬天偉	珠江街
天香回民飯店	馮景遲	珠江街	回民小吃部	楊雅芹	北行東門
又一村	王信堂	北行東門	複興園飯莊	石潤達	北行東門
麥加回民飯店	李志剛	碧塘公園西門	松陵市場飯店	顧海泉	三台子
美食佳清真館	吉軍	三台子	王家包子鋪	丁麗坤	華山路
回香春飯店	張紹芝	華山路	華興回民小吃部	楊登鳳	華山路
明亮小吃部	高士清	華山路	楊明回民飯店	馬德有	華山路
三盛軒燒麥館	馮維政	黃河大街	三友回民飯店	王殿俠	北陵大街
馬家燒麥館	馬金林	北陵南門	四友回民飯店	王永順	北陵南門
曙光飯店	張慶利	北陵南門	可口香餃子館	李俊魁	昆山西路
清真館	馬桂芹	寧山東路	盛發園飯店	劉岩	北陵大街
聚賓飯店	馮克	北陵大街	西關肉味館	李儒明	寧山路
馬家餃子館	王太玉	昆山西路	興隆燒麥館	沙文勝	華山路
清真肉味包子	劉忠恒	怒江街			